

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 190

津島遺跡 6

岡山県総合グラウンド新体育館建設工事に伴う発掘調査

2005

岡山県教育委員会



1 調査区全景（西から）



2 調査状況（南西から）

巻頭図版 2



3 KN区・KS区と移転後の偕行社（東から）



4 O区 西壁土層断面（北東から）



5 M区 土壙12 (北から)



6 O区 井戸1 (東から)



7 弥生時代中期の土器



8 古墳時代前期の土器

序

この報告書は、平成17年に第60回国民体育大会が開催される県総合グラウンド内に所在する新岡山県立体育館の改築に伴い、平成14・15年度に発掘調査を実施した津島遺跡の発掘調査報告書です。

津島遺跡は、岡山平野の中央部に位置し、戦前から弥生時代の集落遺跡であることが知られていましたが、昭和37年に岡山で行われた第17回国民体育大会開催に向けての総合グラウンド内整備に伴って北池・南池が発掘調査され、そのおびたしい遺構と遺物の出土によってあらためてその重要性が認識されました。また、昭和43年には武道館建設問題をきっかけとして、津島遺跡の保存問題が occurred。それを機にして、昭和46年に遺跡の一部が国の史跡に指定され、今日に至っています。

このたび、第60回国体会場の一つ、新体育館の建設にあたりましては、「津島遺跡総合評価」をもとに史跡から離れた場所を候補地とし、確認調査を実施して最終的に建設地が決定されました。その設計に際しましては、埋蔵文化財に配慮した工法を採用し、発掘調査の対象を建物の基礎部分を中心とした最小限の範囲に留めています。

調査の結果、当初から想定されていた弥生時代前期の水田の拡がりや古代の条里遺構に伴う郷境の溝が発見され、さらに弥生時代中期の集落の一部が明らかになるなど、数多くの成果をあげることができました。

これらの調査成果を記録したこの報告書が、岡山平野の歴史や文化を解明する資料として、また遺跡の保護・保存のために活用いただければ、幸いに存じます。

発掘調査の実施、報告書の作成にあたりましては、「津島遺跡検討委員会」委員並びに同顧問の先生方に多大な御指導を賜りました。また、県岡山地方振興局建設部をはじめ、県土木部都市計画課、県総合グラウンド事務所などの関係諸機関には、温かい御理解と御協力をいただきました。関係各位に深く感謝の意を表する次第です。

平成17年2月

岡山県古代吉備文化財センター

所長 正岡睦夫

例 言

- 1 本書は、岡山県立体育館建設事業に伴い、岡山県教育委員会が岡山県岡山地方振興局建設部の依頼を受け、岡山県古代吉備文化財センターが発掘調査を実施した、津島遺跡の調査報告書である。
- 2 津島遺跡は、岡山県岡山市いずみ町の岡山県総合グラウンド内に所在する。
- 3 発掘調査は、平成14年度に岡山県古代吉備文化財センター職員 光永真一・物部茂樹・福井優、平成15年度に島崎東・亀山行雄・澤山孝之・尾崎光徳・岡本泰典・團奈歩が担当して実施した。総面積は、2,635㎡である。
- 4 発掘調査および報告書作成に際しては、「津島遺跡検討委員会」を設け、次の方々に顧問および委員を委嘱した。検討委員会顧問および委員各位からは、終始有益な御指導と御助言をいただいた。記して深く感謝の意を表する次第である。

顧 問

佐原 眞（元国立歴史民俗博物館館長、平成14年7月逝去）
田中 琢（元奈良国立文化財研究所所長）
坪井清足（元興寺文化財研究所所長）

委 員

稲田孝司（岡山大学教授） 西川 宏（岡山理科大学非常勤講師）
亀田修一（岡山理科大学教授） 間壁忠彦（倉敷考古館館長）
小林博昭（岡山理科大学教授） 松木武彦（岡山大学助教授）
新納 泉（岡山大学教授） 山本悦世（岡山大学理蔵文化財調査研究センター助教授）

- 5 発掘調査および報告書作成に際しては、岡山大学名誉教授 近藤義郎氏、岡山県文化財保護審議会委員 高橋 護氏、文化庁文化財調査官 禰宜田佳男氏から、多大なる御指導、御助言をいただいた。記して深く感謝の意を表する次第である。
- 6 本報告書の作成は、平成15年度に岡山県古代吉備文化財センター津島事務所にて島崎・岡本・團が担当して行い、構成は第1章・第3章第3・4・8節・第5章を岡本が、第2章・第3章第1・2・5～7節・第4章を團が当たり、全体の編集は團が担当した。
- 7 本報告書の執筆は調査担当者で分担し、節あるいは項末に文責を明記した。
- 8 遺跡の環境や遺物などに関する分析・鑑定については、次の方々および機関に依頼し、有益な御教示と報告文をいただいた。記して感謝の意を表する次第である。

自然科学分析 株式会社古環境研究所
放射性炭素年代測定 株式会社古環境研究所
出土種実の同定 株式会社パリノ・サーヴェイ
土器の胎土分析 白石 純（岡山理科大学）
ガラス滓の分析 木戸 一博（株式会社ニコン）

- 9 遺物写真については江尻泰幸氏の協力と援助を得た。
- 10 本報告書に関連する出土遺物および図面・写真・マイクロフィルム等は、すべて岡山県古代吉備文化財センター（岡山市西花尻1325-3）に保管している。

凡 例

- 1 本報告書で用いた高度値は海拔高であり、方位は平面直角第Ⅴ座標系（日本測地系）の座標北である。また、抄録に記載した経緯度は日本測地系に依拠する。
- 2 本報告書掲載の遺構および遺物実測図の縮尺は、一部の例外を除いて以下のように統一し、各図にも明記している。

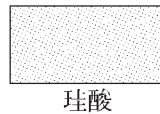
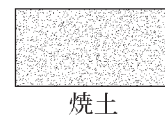
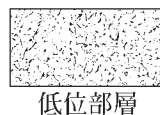
遺 構

竪穴住居・掘立柱建物：1/60 土壙墓・井戸・土壙・溝断面：1/30

遺 物

土器：1/4 土製品：1/2・1/3 石器・石製品：1/2・1/3 金属器：1/2

- 3 本報告書の各調査区平面図に記した遺構名のうち、「住」は竪穴住居、「建」は掘立柱建物、「井」は井戸、「墓」は土壙墓、「土」は土壙、「焼」は焼土面、「柱」は柱穴をそれぞれ省略したものである。
- 4 本報告書に掲載した遺物番号は、土器、土製品、石器・石製品、木器、金属器に分けて通し番号を付け、土器以外については下記の略号を番号の前に付けている。
土製品：C 石器・石製品：S 木器：W 金属器：M 瓦：R
- 5 土器実測図で表現する中軸線左右の白抜きは、口縁部の残存率が1/6以下のため径の復元に不確実性のあることを示す。
- 6 遺構平面図・遺物にスクリーントーンで示した内容については、特に断りのない限りは以下のとおりである。各調査区土層断面の凡例については本文中に示す。



- 7 本報告書における土層の色調については、『新版 標準土色帖』（農林水産省農林技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色票監修）によっている。
- 8 本報告書第2図「周辺遺跡分布図」は、国土交通省国土地理院発行の1/25,000地形図「岡山北部」・「岡山南部」を複製・加筆したものである。また、同図における各遺跡の範囲・名称は、『岡山県遺跡地図 第6分冊』（岡山県教育委員会 2002）に基づく。
- 9 本報告書に用いた遺構・遺物の時期表記は、弥生時代から古墳時代前期にかけては津寺遺跡における編年に準拠し、それ以降は各執筆担当者の意向に沿っている。

本文目次

巻頭図版

序

例言

凡例

目次

第1章 地理的・歴史的環境	1
第2章 発掘調査および報告書作成の経緯と経過	5
第1節 発掘調査の経緯	5
第2節 発掘調査の体制	9
第3節 発掘調査の経過	10
第4節 日誌抄	11
第5節 報告書作成の体制と経過	12
第3章 発掘調査の概要	13
第1節 調査区の概要	13
第2節 基本層序	15
第3節 弥生時代前期の遺構・遺物	24
1 弥生時代前期の概要	24
2 水田	24
3 溝	28
4 低位部層	29
5 河道	33
6 遺構に伴わない遺物	33
第4節 弥生時代中期の遺構・遺物	34
1 弥生時代中期の概要	34
2 竪穴住居	34
3 土壙墓	41
4 土壙	44
5 溝	59
6 焼土面	62
7 河道	63
8 遺構に伴わない遺物	65
第5節 弥生時代後期の遺構・遺物	76
1 弥生時代後期の概要	76
2 土器棺墓	76
3 土壙	78
4 土器溜まり	79

第6節	古墳時代の遺構・遺物	82
1	古墳時代の概要	82
2	竪穴住居	82
3	井戸	84
4	上墳	96
5	溝	97
6	水田	99
7	その他の遺構	99
第7節	古代・中世の遺構・遺物	100
1	古代・中世の概要	100
2	掘立柱建物	100
3	溝	103
4	遺構に伴わない遺物	103
第8節	近世・近代の遺構・遺物	106
1	近世・近代の概要	106
2	溝	106
3	その他の遺構	109
第4章	まとめ	111
第1節	発掘調査の成果	111
第2節	津島遺跡をとりまく自然環境と集落の変遷	113
第3節	弥生時代前期の水田について	117
第4節	弥生時代前期試料の放射性炭素年代測定について	121
第5節	弥生土器について	123
第6節	古墳時代の土器について	129
第5章	補遺編	137
1	武道館建設当初予定地出土の弥生中期土器	137
2	南池地点出土の鉄器	138
自然科学分野における分析・鑑定		141
津島遺跡の自然科学分析 (株)古環境研究所		143
津島遺跡出土試料の放射性炭素年代測定 (株)古環境研究所		157
津島遺跡井戸内埋積物中の種実の種類 (株)パリノ・サーヴェイ		159
津島遺跡出土土器の胎土分析 (白石 純)		168
津島遺跡出土ガラス滓の分析 (木戸一博)		174
遺構一覧表		182
遺物観察表		184
遺構名称新旧対照表		192
図版		
報告書抄録		
奥付		

巻頭図版目次

巻頭図版 1	1	調査区全景（西から）	巻頭図版 3	5	M区 土壇12（北から）
	2	調査状況（南西から）		6	O区 井戸 1（東から）
巻頭図版 2	3	KN区・KS区と移転後の偕行社 （東から）	巻頭図版 4	7	弥生時代中期の土器
	4	O区 西壁土層断面（北東から）		8	古墳時代前期の土器

目 次

第1図	遺跡の位置（罫印）（1/15方）	1	第26図	N区西壁土層断面図（縦1/100・横1/300）	22
第2図	調査区周辺の地形と主要遺跡分布（1/25,000）	2	第27図	O区西壁土層断面図（縦1/100・横1/300）	22
第3図	新体育館平面図（1/1,200）	5	第28図	P区西壁土層断面図（縦1/100・横1/300）	22
第4図	総合グラウンド内全調査区配置図（1/3,000）	7・8	第29図	弥生時代前期遺構全体図（1/700）	25
第5図	調査区配置図（1/1,500）	13	第30図	弥生時代前期遺構配置図①（1/400）	26
第6図	弥生時代前期～近代遺構全体図（1/700）	14	第31図	水田 1 出土遺物（1/4）	27
第7図	E区・H区基本土層断面図（1/30）	15	第32図	弥生時代前期遺構配置図②（1/400）	27
第8図	M区・O区基本土層断面図（1/30）	16	第33図	水田 1 畦畔断面図（1/30）	27
第9図	A区西壁土層断面図（縦1/100・横1/300）	17	第34図	溝 1～3（1/30）	28
第10図	B区北壁土層断面図（縦1/100・横1/300）	17	第35図	溝 4～7（1/30）・溝 7 出土遺物（1/3）	29
第11図	C区南壁土層断面図（縦1/100・横1/300）	17	第36図	低位部層出土遺物①（1/4）	29
第12図	D区北壁土層断面図（縦1/100・横1/300）	17	第37図	低位部層出土遺物②（1/4）	30
第13図	E区北壁土層断面図（縦1/100・横1/300）	18	第38図	低位部層出土遺物③（1/4）	31
第14図	F区北壁土層断面図（縦1/100・横1/300）	18	第39図	低位部層出土遺物④（1/4・1/2・1/3）	32
第15図	G区北壁土層断面図（縦1/100・横1/300）	18	第40図	遺構に伴わない遺物（1/4）	33
第16図	H区北壁土層断面図（縦1/100・横1/300）	18	第41図	弥生時代中期遺構全体図（1/700）	35
第17図	I区西壁土層断面図（縦1/100・横1/300）	19	第42図	弥生時代中期遺構配置図①（1/400）	36
第18図	J区西壁土層断面図（縦1/100・横1/300）	19	第43図	弥生時代中期遺構配置図②（1/400）	37
第19図	KN区(東)北壁土層断面図（縦1/100・横1/300）	19	第44図	竪穴住居 1～4（1/60）・出土遺物（1/4・1/2）	38
第20図	KN区(西)北壁土層断面図（縦1/100・横1/300）	20	第45図	竪穴住居 4（1/60）	39
第21図	KS区(東)北壁土層断面図（縦1/100・横1/300）	20	第46図	竪穴住居 5（1/60）	39
第22図	KS区(西)北壁土層断面図（縦1/100・横1/300）	20	第47図	竪穴住居 5 出土遺物（1/4・1/2）	40
第23図	L区(西)北壁土層断面図（縦1/100・横1/300）	21	第48図	竪穴住居 6（1/60）	40
第24図	L区(東)北壁土層断面図（縦1/100・横1/300）	21	第49図	竪穴住居 7（1/60）	40
第25図	M区北壁土層断面図（縦1/100・横1/300）	21	第50図	竪穴住居 8（1/60）・出土遺物（1/4・1/2）	41
			第51図	土壇墓 1（1/30）	41
			第52図	土壇墓 2（1/30）	42
			第53図	土壇墓 3（1/30）	42

第54図	土壙墓4 (1/30)	42	第92図	溝8 (1/30) ・出土遺物 (1/4)	59
第55図	土壙墓5 (1/30)	42	第93図	溝9・10 (1/30)	60
第56図	土壙墓6 (1/30)	43	第94図	溝11 (1/30) ・出土遺物 (1/4・1/2)	60
第57図	土壙墓7 (1/30)	43	第95図	溝12~16 (1/30)	61
第58図	土壙墓8 (1/30)	43	第96図	溝17~21 (1/30・1/60) ・溝21出土遺物 (1/4)	62
第59図	土壙墓9 (1/30)	43	第97図	溝23 (1/30)	62
第60図	土壙1・2 (1/30) ・土壙2出土遺物 (1/4・1/2)	44	第98図	溝24 (1/30)	62
第61図	土壙3 (1/30) ・出土遺物 (1/4)	45	第99図	焼上面1~5 (1/20)	63
第62図	土壙4出土遺物 (1/4)	45	第100図	河道2出土遺物 (1/4)	64
第63図	土壙5 (1/30) ・出土遺物 (1/4)	45	第101図	遺構に伴わない遺物① (1/4)	65
第64図	土壙6 (1/30) ・出土遺物 (1/4・1/2)	46	第102図	遺構に伴わない遺物② (1/4)	66
第65図	土壙7 (1/30) ・出土遺物① (1/4)	47	第103図	遺構に伴わない遺物③ (1/4)	67
第66図	土壙7出土遺物② (1/4・1/2)	48	第104図	遺構に伴わない遺物④ (1/4・1/3)	68
第67図	土壙8 (1/30)	48	第105図	遺構に伴わない遺物⑤ (1/2)	69
第68図	土壙9 (1/30) ・出土遺物 (1/4)	49	第106図	遺構に伴わない遺物⑥ (1/2)	70
第69図	土壙10出土遺物 (1/4・1/2)	49	第107図	遺構に伴わない遺物⑦ (1/2)	71
第70図	土壙11出土遺物 (1/4)	49	第108図	遺構に伴わない遺物⑧ (1/2)	72
第71図	土壙12 (1/30) ・出土遺物 (1/4)	50	第109図	遺構に伴わない遺物⑨ (1/3)	73
第72図	土壙13 (1/30) ・出土遺物 (1/4)	51	第110図	遺構に伴わない遺物⑩ (1/2)	74
第73図	土壙14 (1/30) ・出土遺物 (1/4・1/2)	52	第111図	遺構に伴わない遺物⑪ (1/2)	75
第74図	土壙15 (1/30) ・出土遺物 (1/4・1/2・1/3)	53	第112図	土器棺墓1 (1/20) ・出土遺物 (1/4)	76
第75図	土壙16 (1/30) ・出土遺物 (1/4)	54	第113図	弥生時代後期遺構全体図 (1/700)	77
第76図	土壙17 (1/30) ・出土遺物 (1/4)	54	第114図	弥生時代後期遺構配置図 (1/400)	78
第77図	土壙18 (1/30) ・出土遺物 (1/4)	55	第115図	土壙32~34 (1/30)	78
第78図	土壙19 (1/30) ・出土遺物 (1/4)	55	第116図	土器溜まり1 (1/40)	79
第79図	土壙20 (1/30) ・出土遺物 (1/4)	55	第117図	土器溜まり1出土遺物① (1/4)	80
第80図	土壙21 (1/30)	55	第118図	土器溜まり1出土遺物② (1/4)	81
第81図	土壙22 (1/30) ・出土遺物 (1/4)	56	第119図	竪穴住居9 (1/60) ・出土遺物 (1/4・1/3)	82
第82図	土壙23 (1/30)	56	第120図	古墳時代遺構全体図 (1/700)	83
第83図	土壙24 (1/30)	56	第121図	古墳時代遺構配置図①・② (1/400)	84
第84図	土壙25 (1/30) ・出土遺物 (1/4)	57	第122図	井戸1 (1/30) ・出土遺物① (1/4)	85
第85図	土壙26 (1/30)	57	第123図	井戸1出土遺物② (1/4・1/6)	86
第86図	土壙27 (1/30)	57	第124図	井戸1出土遺物③ (1/2)	87
第87図	土壙28 (1/30)	58	第125図	井戸2 (1/30) ・出土遺物① (1/4)	87
第88図	土壙29 (1/30)	58	第126図	井戸2出土遺物② (1/4)	88
第89図	土壙29出土遺物 (1/4)	59	第127図	井戸3 (1/30) ・出土遺物① (1/4)	89
第90図	土壙30 (1/30)	59	第128図	井戸3出土遺物② (1/4)	90
第91図	土壙31 (1/30) ・出土遺物 (1/4)	59	第129図	井戸3出土遺物③ (1/4)	91

第130図	井戸3出土遺物④ (1/4) ……………	92	第148図	近世・近代遺構全体図 (1/700) ……………	107
第131図	井戸3出土遺物⑤ (1/4) ……………	93	第149図	近世・近代遺構配置図①・② (1/400) ……	108
第132図	井戸3出土遺物⑥ (1/4) ……………	94	第150図	溝39出土遺物 (1/4) ……………	109
第133図	井戸3出土遺物⑦ (1/4) ……………	95	第151図	溝40 (1/60) ……………	109
第134図	土塋35～37 (1/30) ・土塋35出土遺物 (1/4) ……………	96	第152図	旭川右岸微地形および遺跡位置図 (1/35,000) ……………	113
第135図	溝25～28 (1/30) ……………	97	第153図	津島遺跡周辺弥生時代地形推定図 (1/20,000) ……………	114
第136図	溝29～31 (1/30) ・溝29・30出土遺物 (1/4) ……………	98	第154図	時代別集落変遷図 (1/10,000) ……………	115
第137図	溝32～34 (1/30) ……………	99	第155図	弥生土器の変遷① (1/12) ……………	125
第138図	水田2出土遺物 (1/4・1/2) ……………	99	第156図	弥生土器の変遷② (1/12) ……………	126
第139図	柱穴1出土遺物 (1/2) ……………	99	第157図	弥生土器の変遷③ (1/12) ……………	127
第140図	掘立柱建物1 (1/60・1/30) ……………	100	第158図	弥生土器の変遷④ (1/12) ……………	128
第141図	古代・中世遺構全体図 (1/700) ……………	101	第159図	古墳時代の土器① (1/10) ……………	130
第142図	古代・中世遺構配置図①・②・③ (1/400) ……………	102	第160図	古墳時代の土器② (1/10) ……………	131
第143図	溝35 (1/30) ……………	103	第161図	古墳時代の土器③ (1/10) ……………	132
第144図	溝36・37 (1/60・1/80) ・溝36・37出土遺物 (1/4) ……………	104	第162図	古墳時代の土器④ (1/10) ……………	133
第145図	溝38 (1/60) ……………	105	第163図	武道館建設当初予定地出土 の弥生中期土器 (1/4) ……………	137
第146図	遺構に伴わない遺物 (1/4・1/3) ……………	105	第164図	南池 竪穴住居6 (1/60) ……………	138
第147図	溝39 (1/60) ……………	106	第165図	南池 竪穴住居6出土鉄器 (1/2) ……………	139

図版目次

図版1	1 A区 完掘状況 (南東から)		図版5	1 I区 溝36・37 (南東から)	
	2 B区 弥生時代中期の遺構 (西から)			2 I区 竪穴住居6 (南西から)	
	3 B区 土塋墓5・6 (北西から)			3 I区 土塋墓1 (南東から)	
	4 B区 土塋墓5 木棺痕跡 (北東から)			4 I区 水田1 (南から)	
図版2	1 C区 土塋25 (北西から)		図版6	1 I区 溝38 (南から)	
	2 C区 土塋墓3 (南東から)			2 I区 西壁土層断面 (南東から)	
	3 C区 北壁土層断面 (南西から)			3 J区 溝3 (北から)	
	4 C区 弥生時代中期の遺構 (西から)			4 J区 溝36・37 (南から)	
図版3	1 D区 北壁土層断面 (南西から)		図版7	1 K S区 (西) 完掘状況 (西から)	
	2 D区 溝5 (西から)			2 K S区 (西) 井戸3 (南から)	
	3 E区 水田1畦畔 (西から)			3 K S区 (西) 古墳時代の遺構 (南西から)	
	4 F区 完掘状況 (西から)		図版8	1 K S区 (西) 北壁土層断面 (南西から)	
図版4	1 G区 水田1畦畔痕跡 (西から)			2 K S区 (東) 土塋23 (東から)	
	2 G区 北壁土層断面 (南から)			3 K S区 (東) 溝36・37土層断面 (南東から)	
	3 H区 完掘状況 (西から)				

図版9	1	K S区(東)	北壁土層断面(南西から)	2	O区	弥生時代中期の遺構(南西から)	
	2	KN区(東)	完掘状況(西から)	3	N区	完掘状況(北から)	
	3	KN区(西)	弥生時代前期および 中期の遺構(北西から)	図版15	1	O区	掘立柱建物1(南東から)
図版10	1	KN区(西)	竪穴住居5(北西から)	2	O区	竪穴住居1~4(南東から)	
	2	KN区(西)	竪穴住居5 遺物出土状況 (南から)	3	O区	土壇7(南西から)	
	3	KN区(西)	北壁土層断面(南西から)	図版16	1	O区	溝25(北から)
図版11	1	L区(西)	溝1(北から)	2	P区	弥生時代中期の遺構(西から)	
	2	L区(西)	土器溜まり1(西から)	3	P区	西壁土層断面(南東から)	
	3	L区(西)	溝25(北から)	図版17	低位部層出土遺物		
	4	L区(東)	水田1(東から)	図版18	低位部層出土遺物・遺構に伴わない遺物 ・竪穴住居1~4・5・8・土壇7・14出土遺物		
図版12	1	L区	北壁土層断面	図版19	土壇12・15・25・溝11出土遺物		
	2	M区	水田1(北西から)	図版20	河道2出土遺物・遺構に伴わない遺物		
	3	M区	土器棺墓1(西から)	図版21	遺構に伴わない遺物		
	4	M区	土壇12土器出土状況(北西から)	図版22	遺構に伴わない遺物・土器溜まり1出土遺物		
図版13	1	M区	北壁土層断面(南西から)	図版23	土器溜まり1出土遺物		
	2	N区	井戸2(東から)	図版24	井戸1・2出土遺物		
	3	N区南拡張部	(南から)	図版25	井戸2・3出土遺物		
図版14	1	N区	西壁土層断面(南東から)	図版26	井戸3・柱穴1出土遺物		

表 目 次

遺構一覧表	182	遺構名称新旧対照表	192
遺物観察表	184		

第1章 地理的・歴史的環境

津島遺跡は、岡山県岡山市いずみ町の県総合グラウンドを中心に北東から南西に細長く伸びる微高地上に立地する、弥生時代前期から近代までの複合遺跡である。地形的には、岡山県三大河川の一つである旭川西岸の沖積平野に立地し、遺跡の内容としては集落および水田が主体をなす。

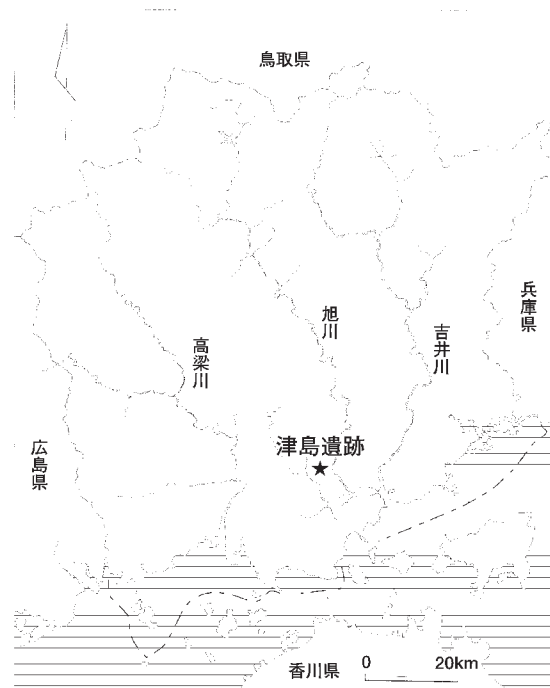
海水面が現在よりも最大で100m以上も低かった旧石器時代には、瀬戸内海は完全な陸地であった。岡山平野も例外ではなく、ボーリング調査の成果によると、旭川下流域では現地表下約17mに当時の地表面に相当する更新世の砂礫層が認められるという（註1）。その後、いわゆる縄文海進の開始に伴って陸地は海没し、縄文前期の海進最大時には現在の吉備高原南端部まで海岸線が入り込んだと考えられている。そこへ、吉備高原を流下してきた旭川を始めとする大小の河川が流れ込み、吐き出される土砂は海底に堆積し、現在の岡山平野を形成していった。

また、近世以降は農地拡大を目的に干拓事業が推進され、平野はさらに南へと拡大していく。現在の広大な岡山平野のうち、市街地南東部に位置する操山山塊よりも南側の部分は、こうした干拓事業によって出現した人工的な平野である。したがって、中世以前の生活の舞台は操山よりも北側の地域であり、時代を遡るほどその範囲は北側へと限定されることになる。

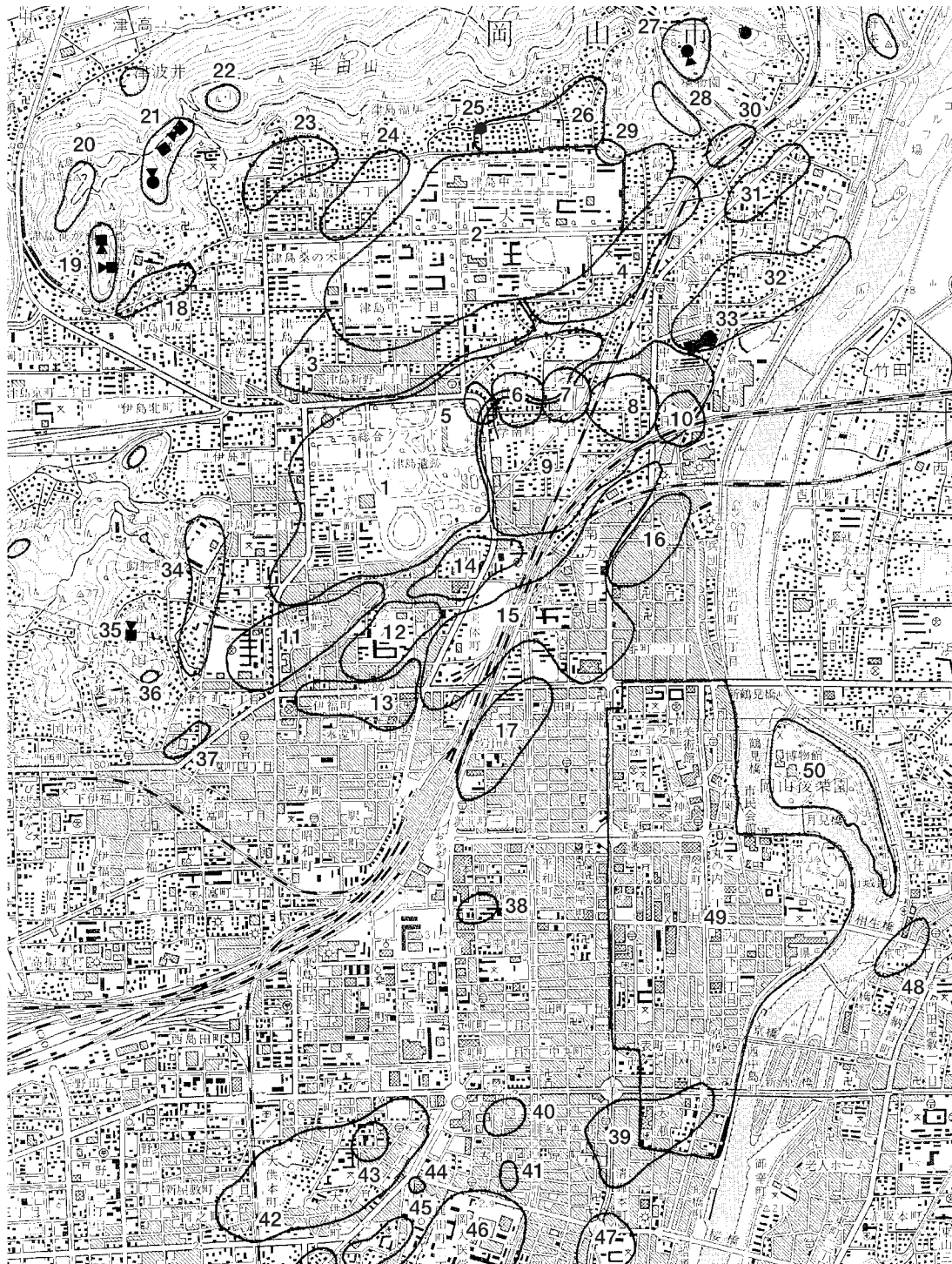
さて、岡山平野北端部近くに位置する津島遺跡周辺に着目すると、旭川の右岸にあって現在はほぼ平坦な地形であるこの一帯も、かつては第2図に示すように何条もの河川が網目状に分流し、その間に大小さまざまな規模の微高地が点在する複雑な地形であった。微高地の多くは、河川の流路に規制されて北東から南西に細長く伸びた島状を呈する。津島遺跡も、このような微高地上に展開した遺跡の一つであり、北隣の津島岡大遺跡と並んで近隣では最大級の面積を誇っている。

津島遺跡の周辺は、微高地上を中心として遺跡の稠密な地帯であるが、その大部分は弥生時代以降に属するものである。旧石器時代の遺跡は平野部では無論、北側の丘陵上でも未だ確認されておらず、やや内陸部に位置する田益田中遺跡において、縄文晩期の河道に混入する形でナイフ形石器が出土している程度である（註2）。

縄文時代に入ると、平野部への人々の進出が活発化し、遺跡数も徐々に増加していくが、津島遺跡周辺では北側の半田山南麓に分布が集中する。形成時期が前期に遡る遺跡として、津島岡大遺跡と朝寝鼻貝塚が挙げられる。朝寝鼻貝塚では、最近前期の層からイネのプラントオパールが検出され、稲作の開始時期との絡みで注目を集めている（註3）。ただ、朝寝鼻貝塚や



第1図 遺跡の位置（星印）(1/15万)



1. 津島遺跡 2. 津島岡大遺跡 3. 津島新野遺跡 4. 津島江道遺跡 5. 北方下沼遺跡 6. 北方横田遺跡 7. 北方中溝遺跡 8. 北方地藏遺跡
 9. 北方上沼遺跡ほか 10. 北方数ノ内遺跡 11. 上伊福遺跡・伊福定国前遺跡 12. 上伊福遺跡 13. 上伊福(立花)遺跡 14. 絵岡遺跡 15. 南方遺跡ほか
 16. 広瀬遺跡 17. 集落跡 18. 散布地 19. 七つ塚古墳群 20. 烏山城跡 21. 都月坂墳墓群 22. 半田山城跡 23. 津島福居遺跡 24. 散布地
 25. お塚様古墳 26. 津島東遺跡 27. 一本松古墳群 28. 散布地 29. 朝寝堂貝塚 30. 鍵田遺跡 31. 二野宮之段遺跡 32. 北方長田遺跡 33. 神宮寺山古墳
 34. 上伊福西遺跡・尾針神社南遺跡 35. 津倉古墳 36. 妙林寺遺跡 37. 津倉遺跡 38. 散布地 39. 天瀬遺跡 40. 大供中道遺跡 41. 散布地
 42. 散布地 43. 大供東浦遺跡 44. 散布地 45. 46. 鹿田遺跡 47. 新道遺跡 48. 散布地 49. 岡山城跡 50. 後樂園

第2図 調査区周辺の地形と主要遺跡分布 (1/25,000)

津島岡大遺跡などでも、本格的な定住は後期に開始される。津島岡大遺跡では炉や貯蔵穴といった集落に伴う遺構が検出された（註4）。遺跡の拡大・発展は晩期にも続き、遺構・遺物の量も増加していく。津島遺跡でもトレンチ調査によって遺構・遺物がわずかながら検出され、人間の活動が晩期にまで遡ることが確認された（註5）。しかし、本格的な定住であったかは定かではない。

弥生時代に入ると、微高地縁辺部の低位部で本格的な稲作が開始される。津島江道遺跡では縄文晩期末（弥生早期）とされる水田の検出が報告されているが、一部には疑問視する意見もある（註6）。前期に至ると水田面積は飛躍的な拡大を見せ、津島遺跡のほか津島岡大遺跡や北方下沼・地藏・横田遺跡などにも水田が拓かれていく。水田面は畦畔で区画され、用排水路も整備されるなど当時の技術水準がうかがわれる。また、水田層内からは稲作の指標とされるイネのプラントオパールも検出されている。ただ、これらの「稲作跡」がそのまま現在の認識でいう「水田」に該当するか否かは近年疑問視する意見もあり、今後さらなる検討が必要であろう（註7）。一方、集落は津島遺跡で微高地上の竪穴住居・掘立柱建物などが検出され、遺物も多数出土するなど（註8）存在は確実であるが他の遺跡では明確な遺構は少なく、水田経営の母体となるべき集落の様相が今一つ明らかでない。

弥生時代中期の遺跡は、津島遺跡よりも南側を中心に分布する傾向がみられる。南方遺跡や上伊福九坪遺跡では多くの遺構・遺物が出土し、集落域の拡大がうかがわれる。特に南方遺跡においては、微高地で竪穴住居・土壙墓などの遺構が検出されたほか、河道から精巧な加工の施された木製品が多数出土し、石器未製品などの存在から石器製作も行われたことが推測される（註9）。津島遺跡では、中葉から後葉にかけて数か所に集落が形成されている。この他、北方中溝遺跡（註10）や津島遺跡では水田域も検出されてはいるが、削平等の影響もあるのか、前期ほどの広がりは見られない。

弥生時代後期に至ると、沖積作用の進展により微高地間の低位部や河道が埋没し、微高地の面積はさらに拡大し、立地する集落も一層の発展をみせる。この時期の遺構は周辺の微高地では普遍的に検出される。津島遺跡では多数の竪穴住居のほか、河道内から後半期の建築部材を初めとする大量の木製品が出土している（註11）。津島江道遺跡では、後期前半から古墳前期までの集落が検出され、多くの住居から獣骨や骨製品が出土することから骨角器製作集団の集落と考えられている（註12）。南方遺跡では土器棺や土壙墓が検出され、中期同様集落の周辺に形成された墓域がみられる。津島遺跡の西側では伊福定国前遺跡が挙げられる（註13）。南部に目を向けると、天瀬遺跡や鹿田遺跡で中期末から後期にかけて集落が形成される。鹿田遺跡では後期を中心とする集落が存在し、多数の製塩土器の出土から製塩に関わる集落と推測されている（註14）。

弥生後期末から古墳時代になると、周辺の丘陵上に墳丘墓や古墳の築造が開始される。半田山に築かれた20×16mの長方形をなす都月坂2号墳丘墓（註15）を嚆矢とし、七つ塚1号墳、都月坂1号墳や京山の津倉古墳などの前期古墳が続く。七つ塚1号墳は全長48mの前方後方墳で、前方部・後方部の両方に竪穴式石室を有するが、後方部石室は破壊が著しく、前方部石室は小規模で副葬品を伴わない（註16）。都月坂1号墳は全長33mを測る前方後円墳であり、出土した特殊器台形埴輪・特殊壺形埴輪が最古段階の埴輪として「都月型」と命名されている（註17）。一方平野部では、津島遺跡の北東に位置する神宮寺山古墳が特筆される（註18）。全長約150mを測り、4世紀末から5世紀前半頃の築造と推定され、旭川西岸地域を掌握した首長の墓と考えられる。中期の古墳としては半田山に全長約65mの前方後円墳である一本松古墳などがあるが概して少なく、後期に至ると目立った古墳は周辺には築かれなくなる。

古墳時代の集落は、各遺跡において弥生後期から引き続き営まれたものが多い。通常の集落のほか、津島江道遺跡では後半期の集落内に鍛冶炉が検出され、鉄器生産に関与する集落との位置づけがなされている（註19）。上伊福西（尾針神社南）遺跡では須恵器埋納土壌が検出され、状況から地鎮に関わる遺構と考えられる（註20）。

古代以降、津島遺跡とその周辺の大部分は耕作地としての歴史を歩むこととなる。古代の条里関連と思われる溝が津島遺跡をはじめ周辺の各遺跡で確認されている。津島江道遺跡では総柱建物の存在や硯の出土などから官衙的施設の存在がうかがわれる（註21）。集落の実態は未解明な部分が多いが、「鹿田荘」に比定される鹿田遺跡では建物や井戸などが検出されている（註22）。中世に至ると鹿田遺跡などで集落もみられるが、広範囲な水田層の存在から平野部の水田化がさらに進展したものと考えられる。この状況は、近世に入り岡山城とその城下町が建設された後も変わることはなかった。

こうして穀倉地帯となった津島の地は、近代に入り大きな転換点を迎える。明治40年（1907年）、旧陸軍第17師団の設置に伴って、津島遺跡一帯は大規模な造成により陸軍の練兵場へと変貌を遂げた。また周辺でも宅地化が進行し、かつての水田景観は徐々に失われてゆく。戦後しばらくの間は放置されていたが、昭和23年（1948年）には津島運動公園に決定され、以降は公園として整備され現在に至っている（註23）。

なお、この章は註8文献「津島遺跡2」の第1章を基調とし、一部を改変したものである。（岡本）

註

- (1) 『岡山県史 自然風土』 岡山県 1983
- (2) 「田益田中（国立岡山病院）遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』141 岡山県教育委員会 1999
- (3) 「岡山市津島東3丁目 朝寝鼻貝塚発掘調査概報」『加計学園埋蔵文化財調査室発掘調査報告』2 1998
- (4) 「津島岡大遺跡10」『岡山大学構内遺跡発掘調査報告』第14冊 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター 1998
- (5) 「津島遺跡1」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』137 岡山県教育委員会 1999
- (6) 神谷正義「最古の水田」『古備の考古学的研究』（上） 山陽新聞社 1992、平井勝「弥生時代への移行」同前
- (7) 高橋護「縄文時代中期稲作の探求」『堅田直先生古希記念論文集』 1997
- (8) 「津島遺跡2」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』151 岡山県教育委員会 2000
「津島遺跡3」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』160 岡山県教育委員会 2001
- (9) 「上伊福・南方（済生会）遺跡（南蓮田調査区Ⅰ・Ⅱ）」『岡山市埋蔵文化財調査の概要 1994・1995年度』岡山市教育委員会 1996・1997
- (10) 「北方下沼遺跡・北方横田遺跡・北方中溝遺跡・北方地蔵遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』126 岡山県教育委員会 1998
- (11) 「津島遺跡4」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』173 岡山県教育委員会 2003
- (12) 「津島江道遺跡」『岡山県埋蔵文化財報告』18 岡山県教育委員会 1988
- (13) 「伊福定国前遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』125 岡山県教育委員会 1998
- (14) 「鹿田遺跡Ⅰ」『岡山大学構内遺跡発掘調査報告』第3冊 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター 1988
- (15) 近藤義郎「都月坂二号弥生墳丘墓」『岡山県史 考古資料』 岡山県 1986
- (16) 七つ塚古墳群発掘調査団編『七つ塚古墳群』 1987
- (17) 近藤義郎「都月坂一号墳」『岡山県史 考古資料』 岡山県 1986
- (18) 『前方後円墳集成 中国・四国編』 山川出版社 1991
- (19) 「津島江道（岡北中）遺跡」『岡山市埋蔵文化財調査の概要 1996年度』 岡山市教育委員会 1998
- (20) 「尾針神社南遺跡」『岡山市埋蔵文化財調査の概要 1995年度』 岡山市教育委員会 1997
- (21) 註12に同じ。
- (22) 註14に同じ。
- (23) 『岡山県史 近代Ⅰ』岡山県 1985、『岡山市史 戦災復興編』岡山市役所 1960

第2章 発掘調査および報告書作成の経緯と経過

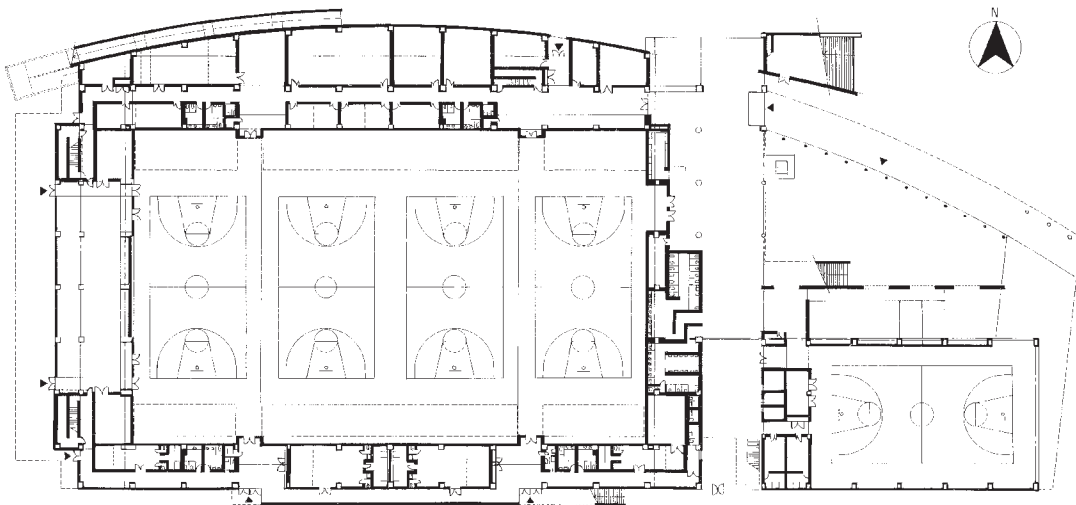
第1節 発掘調査の経緯

津島遺跡は、県総合グラウンド一帯を中心に展開する弥生時代前期以降の集落遺跡として古くから知られてきた。ところが、昭和43（1968）年の武道館建設問題をきっかけとした津島遺跡の保存運動は全国的な規模へと発展した。しかし、昭和46年には遺跡の一部が国史跡に指定されたことでようやく解決し、今日に至っている。

しかしながら、平成9（1997）年になると同17（2005）年開催の第60回国民体育大会岡山大会の主会場の候補地の一つに県陸上競技場を改築して使用する案が出されたことで、これを契機に再び遺跡の保存問題が浮上した。県教育委員会は、この可否の検討と津島遺跡の将来的な保護を図ることを目的として、「津島遺跡検討委員会」を組織し、確認調査を含む度重なる検討・審議を慎重に行った。この結果、陸上競技場の発掘調査も必要最小限度の規模で実施することとなり、また遺跡の保護を図るため、調査に並行してグラウンド全域を対象に確認調査を実施する等の取り組みを行ってきた。

陸上競技場もほぼ完成間近の平成14（2002）年6月になって、遺跡内にある老朽化の著しい県立体育館について、「建て替えを検討すべき時期」「建設が可能ならば、国体に間に合わせたい」との見解が知事から表明された。しかし、これについて当初知事は、県総合グラウンドを国体主会場にするにあたっては、「国体開催が可能な最小限の施設の改修」という考え方を表明しており、陸上競技場だけを改修し、「既存の体育館は改修しない」という方針を示していたため、この度の発言は当初の考え方を大きく変更するものであった。

問題となった県立体育館は、昭和34（1959）年に県総合グラウンドの前身である旧日本陸軍練兵場



第3図 新体育館平面図（1/1,200）

第2章 発掘調査および報告書作成の経緯と経過

跡を都市計画事業で運動公園として整備していく過程で建設されたもので、現在岡山市の災害避難場所にも指定されている重要な施設であった。しかし、平成14（2002）年段階すでに鉄筋コンクリート造りでは省令による耐用年数38年をはるかに超える築後43年が経過しており、老朽化の著しい、しかも近年予測される南海地震等大型地震を想定しての耐震性をかんがみても極めて問題の多い建造物とされていた。この問題については、第31～33回の津島遺跡検討委員会で慎重に審議された。そして7月2日には岡山県遺跡保護調査団から知事および教育長宛に「津島遺跡における体育館改築問題に関する要望書」が提出されたのである。（資料）

改築予定場所については、文化庁との協議、県都市計画課との調整のなかで史跡地から可能な限り離し、しかも第二次確認調査で集落の存在が確認されていないテニスコート場付近に絞られた。これを検討委員会に諮り、8月には第三次確認調査としてさらに4か所の調査を行い、検討を行うこととなった。

調査の結果、候補地内には集落跡は確認されず、ほぼ全域に弥生時代前期の水田の拡がり、さらに古代から近世にかけてと考えられる溝が確認された。この結果は、平成13（2001）年8月29日に検討委員会が公表した「津島遺跡総合評価」を追認するものであった。その後、県教育委員会は検討委員会での審議結果をもって、管理者である県都市計画課と協議を行った結果、埋蔵文化財に十分配慮しながら、当初建設予定地に新体育館を建設することとなった。これにより発掘調査は、面的にはベタ基礎工法の採用により遺構への影響は大きく回避され、調査は必要最小限度の基礎杭部分に限定した、余掘りを含め幅3m、南辺部分は杭2列分を含めて幅7mの総面積2,635㎡を対象に行った。（島崎）

（資料）

2002年7月2日

岡山県知事 石井正弘 殿

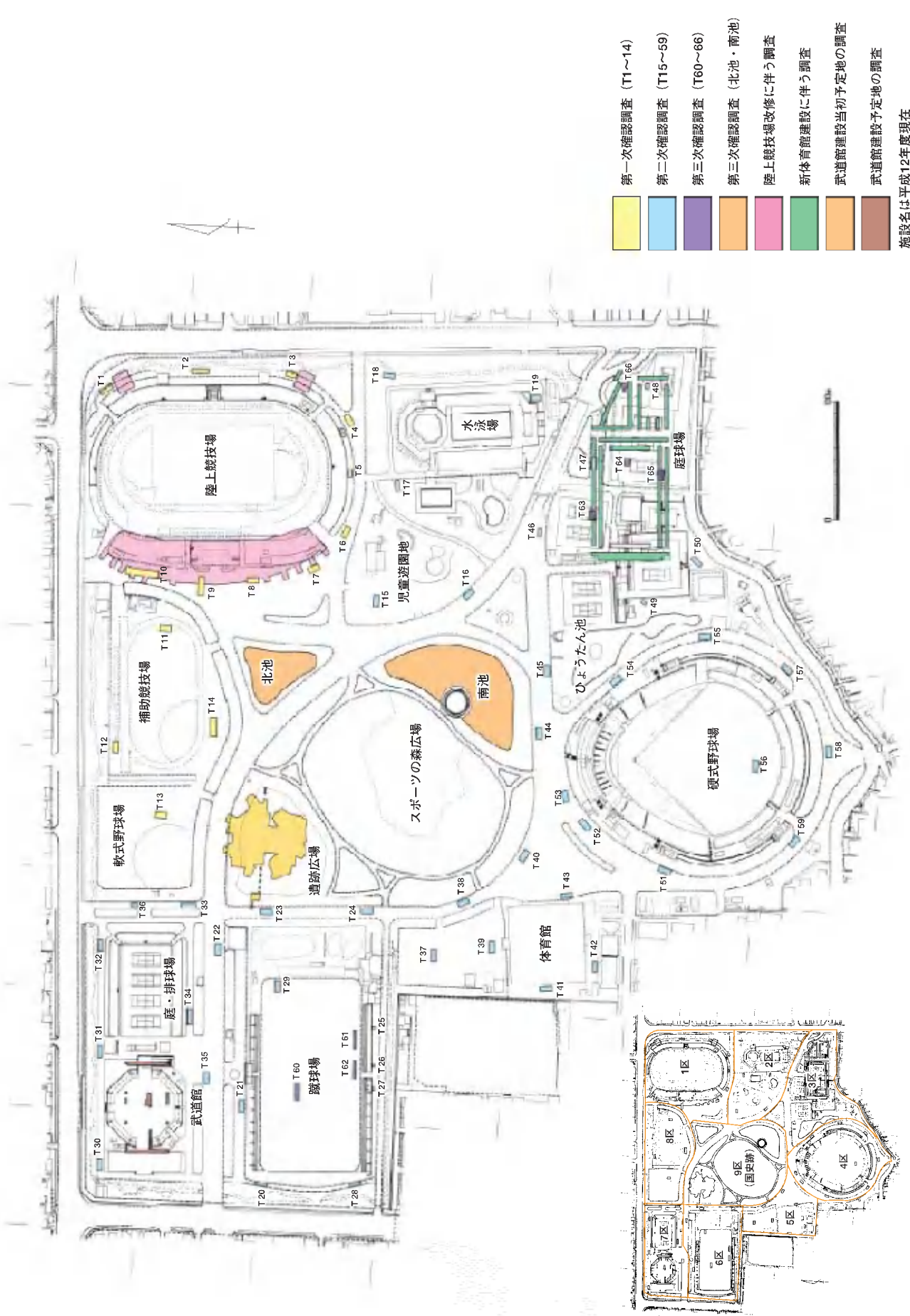
岡山県遺跡保護調査団
委員長 稲川孝司

津島遺跡における体育館改築問題に関する要望書

本年6月25日開催の第33回津島遺跡検討委員会において、県教育委員会から岡山県総合グラウンドの体育館改築に関する確認調査実施の提案があったところですが、当該地は国史跡地を含む津島遺跡の一部にあたりますので、下記の諸点を含め、遺跡の保護には万全を期されるよう要望します。

1. 平成9年からはじまった津島遺跡検討委員会では、国体開催にかかわる施設の改築計画は陸上競技場のみとの説明にもとづき、それへの対応を検討してきましたが、今日にいたって再び大規模な施設の改築計画が提案されることは、これまでの経緯に照らし、はなはだ遺憾といわざるを得ません。今後における大規模な既存施設の改築等に当たっては、可能な限り遺跡地外に適地を求めて行うよう努力すること。
2. 体育館改築計画に先立つ遺跡確認調査において重要な遺構等が発見された場合には、改築予定地の変更も含め、遺跡の保護に万全を期すこと。
3. 予定地において改築を行う場合も、地下遺構への影響をできるだけ少なくする工法を検討する等、遺跡の保護に十分配慮すること。

なお、県当局においては、国史跡・津島遺跡の追加指定を急ぐとともにその本格的な史跡整備に尽力されつつあるとのことですが、こうした国史跡の良好な歴史的環境を維持するという観点からも、総合グラウンド内の周辺遺跡の保護に十分配慮されるよう重ねて要望いたします。



- 第一次確認調査 (T1~14)
 - 第二次確認調査 (T15~59)
 - 第三次確認調査 (T60~66)
 - 第三次確認調査 (北池・南池)
 - 陸上競技場改修に伴う調査
 - 新体育館建設に伴う調査
 - 武道館建設当初予定地の調査
 - 武道館建設予定地の調査
- 施設名は平成12年度現在

第4図 総合グラウンド内全調査区配置図 (1/3,000)

第2節 発掘調査の体制

津島遺跡検討委員会

顧問

田中 琢	元奈良国立文化財研究所所長	佐原 眞	元国立歴史民俗博物館館長
坪井 清足	元興寺文化財研究所所長		(平成14年7月逝去)

委員

稲田 孝司	岡山大学教授	西川 宏	岡山理科大学非常勤講師
亀田 修一	岡山理科大学教授	間壁 忠彦	倉敷考古館館長
小林 博昭	岡山理科大学教授	松木 武彦	岡山大学助教授
新納 泉	岡山大学教授	山本 悦世	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター助教授

平成14(2002)年度

岡山県教育委員会

教育長	宮野 正司
-----	-------

岡山県教育庁

教育次長	三浦 一男
------	-------

文化課

課長	西山 猛
----	------

課長代理(埋蔵文化財係長)	
---------------	--

松本 和男

課長代理	宮田 正彦
------	-------

文化財保護主任	尾上 元規
---------	-------

主事	浜原 浩司
----	-------

岡山県古代吉備文化財センター

所長	正岡 睦夫
----	-------

次長	藤川 洋二
----	-------

〈総務課〉

課長	安西 正則
----	-------

課長補佐(総務係長)	田中 秀樹
------------	-------

主任	小坂 文男
----	-------

〈調査第一課〉

課長	高畑 知功
----	-------

課長補佐(第二係長)	島崎 東
------------	------

文化財保護主幹	光永 真一(調査担当)
---------	-------------

文化財保護主事	物部 茂樹(調査担当)
---------	-------------

主事	福井 優(調査担当)
----	------------

平成15(2003)年度

岡山県教育委員会

教育長	宮野 正司
-----	-------

岡山県教育庁

教育次長	三浦 一男
------	-------

文化財課

課長	西山 猛
----	------

課長代理	田村 啓介
------	-------

課長補佐(埋蔵文化財係長)	
---------------	--

平井 泰男

文化財保護主任	尾上 元規
---------	-------

主事	浜原 浩司
----	-------

岡山県古代吉備文化財センター

所長	正岡 睦夫
----	-------

次長	藤川 洋二
----	-------

文化財保護参事	松本 和男
---------	-------

〈総務課〉

課長	中田 哲雄
----	-------

課長補佐(総務係長)	笏本 弘忠
------------	-------

主任	小坂 文男
----	-------

〈調査課〉

課長	岡田 博
----	------

課長補佐(第二係長)	島崎 東(調査担当)
------------	------------

文化財保護主査	亀山 行雄(調査担当)
---------	-------------

文化財保護主査	澤山 孝之(調査担当)
---------	-------------

文化財保護主査	尾崎 光徳(調査担当)
---------	-------------

文化財保護主事	岡本 泰典(調査担当)
---------	-------------

文化財保護主事	團 奈歩(調査担当)
---------	------------

第3節 発掘調査の経過

発掘調査は、平成14・15年度の2か年にわたって実施した。調査区は17か所からなる基礎杭部分の余掘りを含む3ないし7m幅の調査範囲であるが、平成14年度は2月3日からの2か月間、南東隅に位置するB～D・I・L区の調査を調査員3名の一班体制で実施した。第二・三次確認調査の結果から、遺構は希薄であると考えられていたが、これに反して弥生時代中期の竪穴住居、土壇墓、土壇などを多く検出した。また、I区では古代～中世の大溝を検出した。年度内にI・L区の調査を一部終了することができた。

平成15年度は、調査員6名の二班体制で調査を開始した。1班は調査区西側のO区・N区から調査に入ったが、重機での表土掘削中に大量の日常生活用品である陶磁器やビン類、新聞、ホウロウ看板などの廃棄物が出土した。これらの廃棄物は昭和9（1937）年の室戸台風の被害によって発生したものであり、その資料の一部は岡山県立博物館によって収集された。このO区・N区では、古墳時代の遺構面の大部分が廃棄物層によって削平を受けていたが、O区では弥生時代中期の竪穴住居や土壇などを多く検出し、また、弥生時代前期の低位部層に前期前半の土器が比較的多く出土したが、調査は6月中旬には終了した。1班はその後KS区・KN区の調査に入り、KS区（西）・KN区（西）では弥生時代中期、古墳時代の遺構を比較的多く検出している。KS区（東）・KN区（東）では、I区から延びる古代～中世の溝、近代まで踏襲されている古代の条里溝、弥生時代前期～中期の河道などが錯綜している箇所であり調査には手間がかかったが、調査は8月上旬に終了した。

2班は4月からJ区・L区・M区の調査に入った。J区ではI区から続く古代～中世の溝を検出し、L区・M区では弥生時代前期水田層とそれに伴う畦畔を検出した。弥生時代中期の土壇、後期の土器棺墓・土器溜まりなどを検出したが、これらの調査区は遺構数が少なかったこともあり、5月後半にはE区・F区・A区の表土掘削に入り、複数の調査区の調査を併行して実施した。6月にはP区、7月にはG区とI区の調査に入り、7月末にはH区の調査に入っている。これら東側の調査区では、弥生時代前期の水田層と畦畔、弥生時代中期の溝、古代～中世の溝などを検出している。7月30日にはI区・L区の調査が終了し、8月をもって調査員3名の勤務地が移動となった。この後は、3名の1班体制となり、追加のあった当初予定にはなかった機械室が調査の対象となったため、これらの調査を行った。これら拡張区はいずれも幅は狭いが、弥生時代中期の溝を一部検出している。また、土層断面などの図面を残していたG区・H区の図面作成を併行して行った。8月7日には掘削作業は終了して撤収の準備にかかり、11日にすべての調査と撤収作業を完了した。

調査中、第38回～第40回の「津島遺跡検討委員会」が現地で行われた。調査終了後に第41回と第42回の「津島遺跡検討委員会」が行われ、第42回には3月31日付けでの委員会の解散が承認された。

（團）

第4節 日誌抄

平成14年度

- 2月3日 B区～D区調査開始。
- 2月6日 I区調査開始。
- 2月24日 D区調査終了。
- 3月4日 L区東半調査開始。
- 3月10日 C区調査終了。
- 3月18日 第38回津島遺跡検討委員会開催。
- 3月20日 L区東半調査終了。
- 3月24日 B区調査終了。
- 3月25日 I区調査終了。資料整理作業開始。
- 3月31日 資料整理作業終了。

平成15年度

- 4月7日 発掘調査開始。J区・L区・M区・O区調査開始。
- 4月11日 N区調査開始。
- 4月15日 土器洗浄開始。
- 5月22日 第39回津島遺跡検討委員会開催。
- 5月27日 E区調査開始。
- 5月28日 A区・F区調査開始。
- 6月4日 KN区調査開始。
- 6月9日 P区調査開始。M区調査終了。
- 6月17日 A区・O区調査終了。
京山公民館、長寿会見学。
- 6月22日 N区調査終了。
- 7月2日 G区・I区調査開始。
- 7月10日 E区調査終了。
- 7月16日 N区南拡張区調査開始。
ラジコンヘリによる空撮実施。
- 7月28日 H区調査開始。P区調査終了。
第40回津島遺跡検討委員会開催。
- 7月29日 N区北拡張区・J区南拡張区調査終了。
- 7月30日 I区・L区調査終了。
- 8月6日 G区・H区・N区南拡張区調査終了。
- 8月7日 KS区・KN区・N区北拡張区・J区南拡張区調査終了。
- 8月11日 資材撤収、調査終了。
- 11月14日 第41回津島遺跡検討委員会開催。
- 2月9日 第42回津島遺跡検討委員会開催。
- 3月31日 津島遺跡検討委員会解散。

第5節 報告書作成の体制と経過

津島遺跡検討委員会

顧問

田中 琢	元奈良国立文化財研究所所長	佐原 眞	元国立歴史民俗博物館館長
坪井 清足	元興寺文化財研究所所長		(平成14年7月逝去)

委員

稲田 孝司	岡山大学教授	西川 宏	岡山理科大学非常勤講師
亀田 修一	岡山理科大学教授	間壁 忠彦	倉敷考古館館長
小林 博昭	岡山理科大学教授	松木 武彦	岡山大学助教授
新納 泉	岡山大学教授	山本 悦世	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター助教授

平成15（2003）年度

岡山県教育委員会

教育長 宮野 正司

岡山県教育庁

教育次長 三浦 一男

文化財課

課長 西山 猛

課長代理 田村 啓介

課長補佐（埋蔵文化財係長）

平井 泰男

文化財保護主任 尾上 元規

主事 浜原 浩司

岡山県古代吉備文化財センター

所長 正岡 睦夫

次長 藤川 洋二

文化財保護参事 松本 和男

〈総務課〉

課長 中田 哲雄

課長補佐（総務係長） 笏本 弘忠

主任 小坂 文男

〈調査第一課〉

課長 岡田 博

課長補佐（第二係長） 島崎 東（整理担当）

文化財保護主事 岡本 泰典（整理担当）

文化財保護主事 團 奈歩（整理担当）

報告書の作成は、平成15年度刊行予定の「津島遺跡5」の報告書作成に伴う整理作業を新体育館の発掘調査と並行して行っており、これを優先する必要があった。平成14年度調査の第三次確認調査の土器洗浄・注記などは比較的早い段階で終了したので、今回の調査で出土した土器の洗浄は、調査に並行して行うことができた。

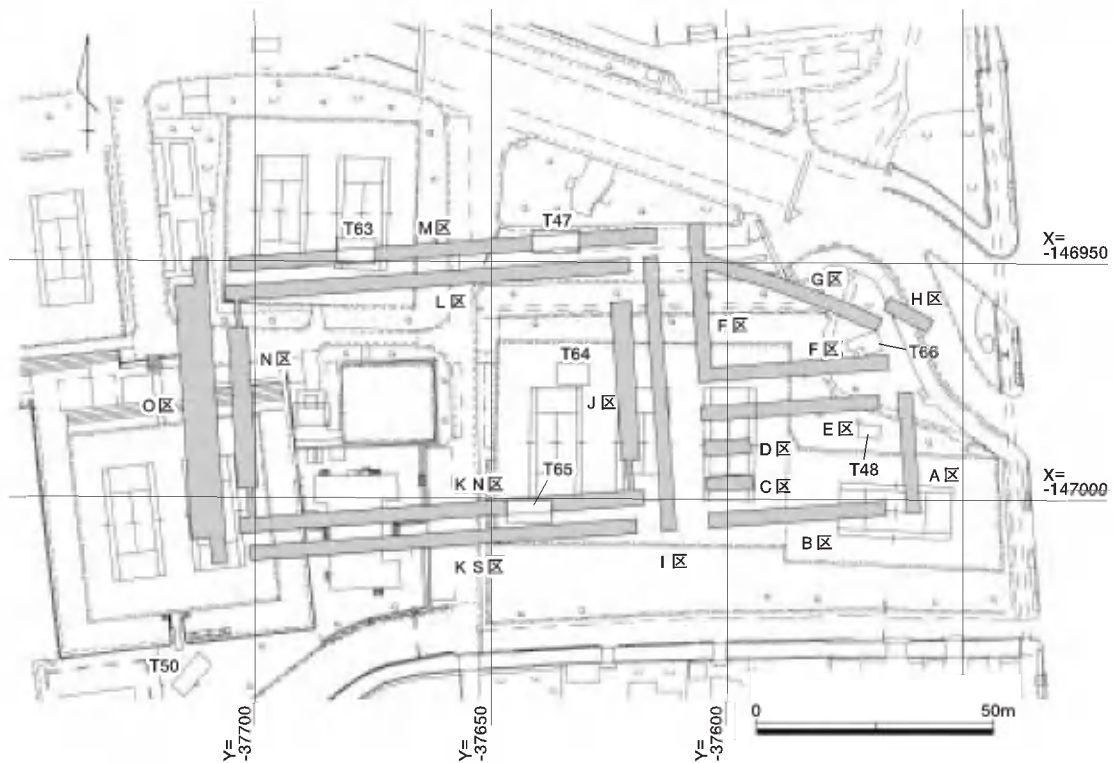
平成9年度から始まり、約7年にわたって続いた津島遺跡の発掘調査が、新体育館の調査終了に伴ってすべて終了することとなった。このため総合グラウンド内にあったプレハブの発掘調査事務所を平成16年3月末で撤収するにあたり、撤収作業準備に時間がかかることが想定されたので、復元作業を平成15年12月いっぱいまでに終了させるとともに、写真撮影も先行して終了させたが、実測作業は3月までかかった。平成15年度は期間に追われ、きわめて困難な状況の中で編集作業および執筆作業を行った。

(團)

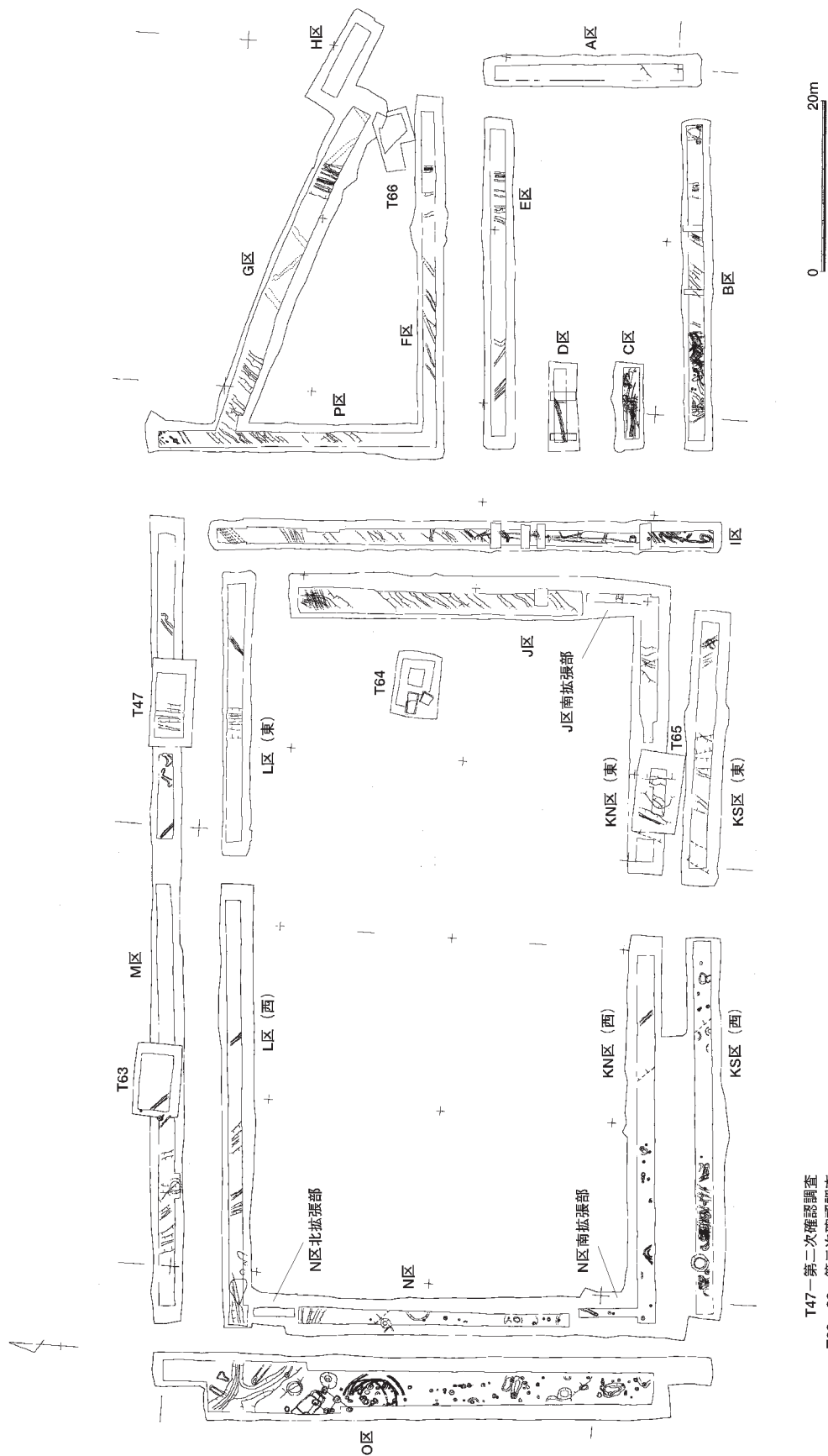
第3章 発掘調査の概要

第1節 調査区の概要

今回の調査では、新体育館の基礎杭部分と余掘りを含む部分を調査するという状況であったため、全面的な発掘調査とは異なり、上端での幅約3～7m、長さ約10～93mという狭小、もしくは長大な調査区をA～P区までの17本を設けての調査となった。調査区の方法はほぼ南北か東西方位に沿っている。調査区の幅がもともと狭いうえに、現地表よりも約3m近くの深さまで掘削を行っているため犬走りを設ける必要があり、調査区の下端の幅は約1～4mとさらに狭く、個々の遺構について完掘できなかつたものも多い。確認調査の成果からは、弥生時代前期水田と古墳時代後期水田、古代の条里溝などの遺構が検出されるが遺構密度は希薄であると考えられた。しかし結果として、弥生時代前期には前期前葉の土器を含む低位部層や河道、弥生時代中期の竪穴住居8軒や土壇墓9基などの今までの津島遺跡の調査では資料の少なかった時期の集落の一部が検出された。弥生時代後期は土器棺墓や上器溜まりなどの検出にとどまったが、古墳時代には前期の井戸や後期の竪穴住居が見られ、引き続き集落が存在したことがうかがえる。古代の掘立柱建物や古代から中世にかけての大溝なども検出された。また、明治時代以降の陸軍練兵場関連の遺構も見つかっている。(團)



第5図 調査区配置図 (1/1,500)



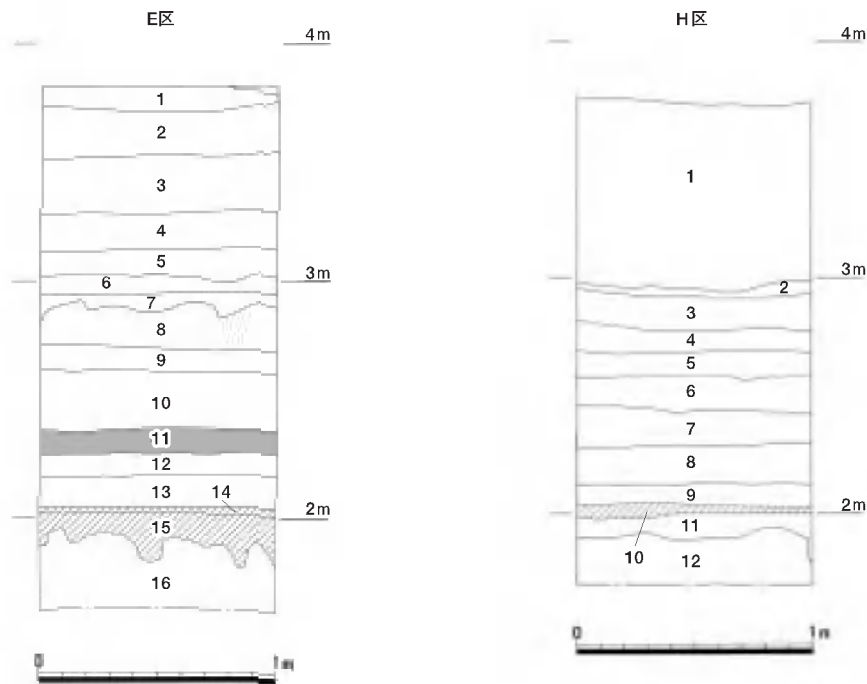
T47-第二次確認調査
T63~66-第三次確認調査

第6図 弥生時代前期~近代遺構全体図 (1700)

第2節 基本層序

津島遺跡は、旭川下流域の沖積平野に形成された複合遺跡である。現在は1条にまとめ固定した流路をもつ旭川であるが、弥生～古墳時代頃には複雑な分岐や流路変更を繰り返し、その流域に形成された大小の微高地域が居住の場となった。

津島遺跡においても、旭川の運搬する土砂の堆積作用という自然的要因、盛土や削平といった人為的要因の双方が絡み合い、最初の人跡が印されてから現代までの間に、厚さ約2 mの堆積土層が形成されている。この土層の中に、集落の出現・移動・消滅、河道流路の変遷、耕作地の展開など、さま



- 1～4 造成土
- 5 にぶい黄褐色砂質土 10YR4/3
- 6 褐灰色砂交じり粘質土 5YR4/1 (近代水田層)
- 7 褐色粘性砂質土 7.5YR4/4
- 8 オリーブ褐色砂質土 2.5Y4/4
- 9 オリーブ褐色弱粘性砂質土 2.5Y4/3
- 10 暗オリーブ色微砂交じり粘質土 5Y4/3
- 11 灰オリーブ色粘質土 5Y4/2
(古墳後期水田層 (水田2))
- 12 灰黄褐色粘質土 10YR4/2
- 13 灰黄褐色粘質土 10YR4/3
- 14 暗褐色粘質土 10YR4/3
(弥生前期水田層 (水田1))
- 15 黒褐色粘質土 10YR2/2
(弥生前期水田層 (水田1))
- 16 暗褐色粘質土 10YR3/3

- 1 造成土
- 2 暗灰黄色微砂質土 2.5Y5/2
- 3 灰黄色粘性微砂質土 2.5Y6/2
- 4 灰オリーブ色微砂質土 5Y5/2
- 5 灰色粘性微砂質土 5Y5/1
- 6 黄灰色微砂質土 2.5Y5/1
- 7 灰色粘質土 5Y5/1
- 8 黄灰色粘質土 2.5Y5/1
- 9 にぶい黄色粘質土 2.5Y6/4
- 10 灰黄褐色粘質土 10YR5/2
- 11 黒褐色粘質土 10YR3/1
(弥生前期水田層 (水田1))
- 12 にぶい黄色粘質土 2.5Y6/3

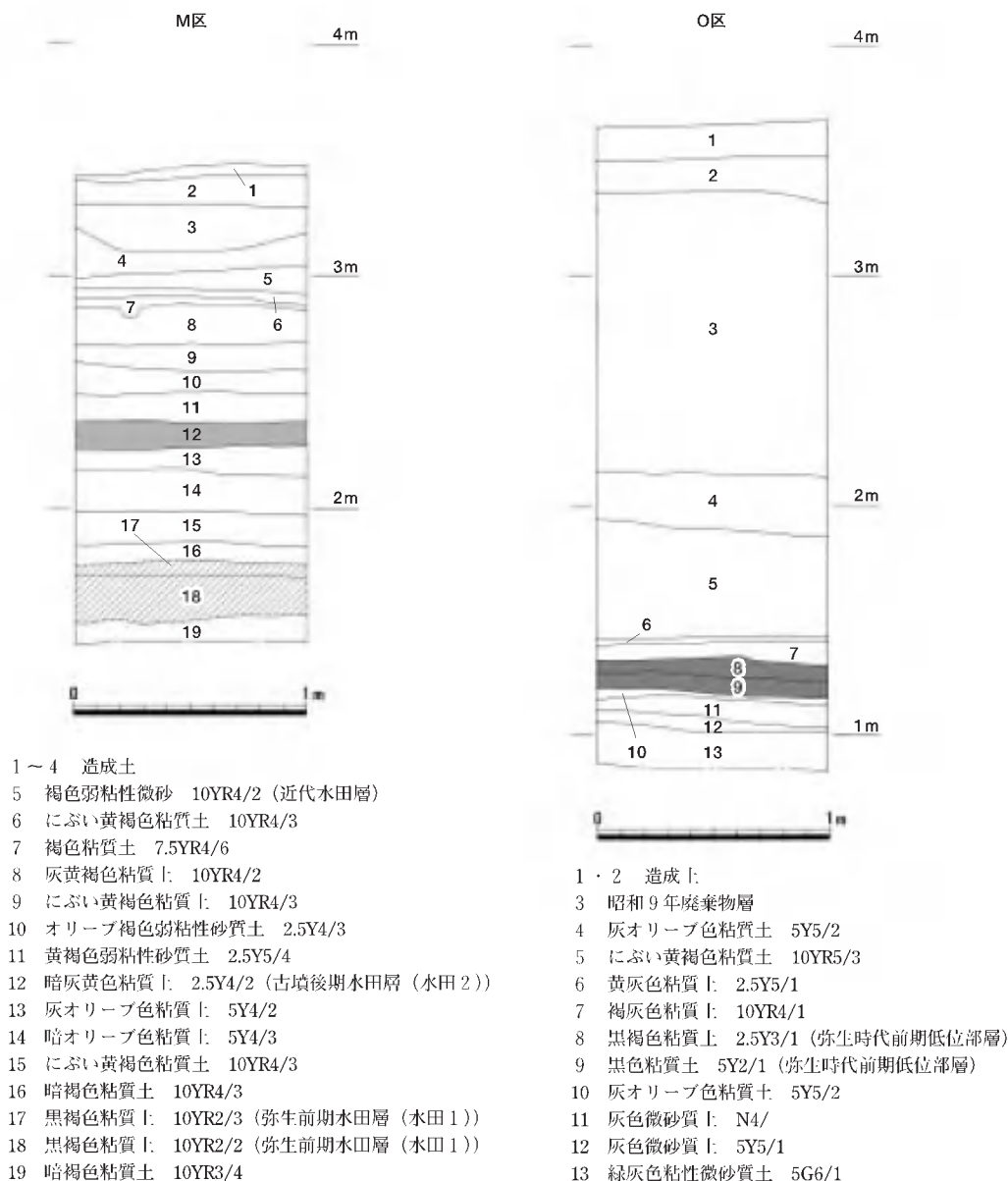
第7図 E区・H区基本土層断面図 (1/30)

第3章 発掘調査の概要

さまざまな事象の痕跡が刻み込まれている。

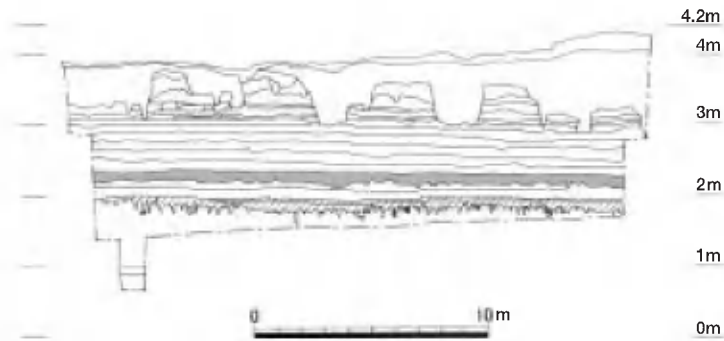
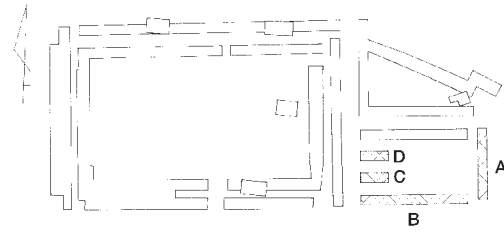
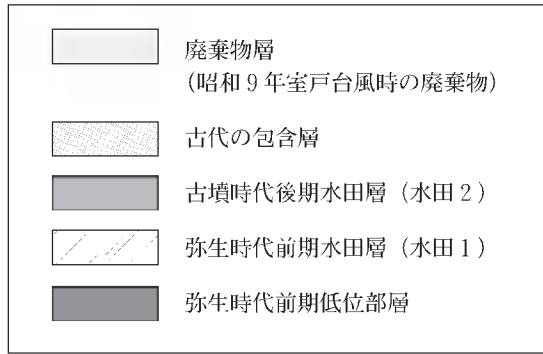
基本層序は遺跡内ではほぼ共通といえるが、細かい部分では地点ごとに相違点も認められる。ここでは県立体育館調査区の状況について説明する。

第7～28図に、各調査区の土層断面を示す。河道や溝による攪乱部分以外はほぼ水平堆積であり、調査区内で共通の堆積状況を示すといえる。図中にトーンで表示する層は、特徴的な色調・土質により上下層との区別が容易であり、出土遺物などから時期の特定が可能で、かつ複数の調査区にまたがるなどある程度広範囲に分布するという条件を満たすもので、鍵層として有効である。具体的には、弥生時代前期の水田を含む黒色土、古墳時代後期の水田、古代の包含層、昭和9（1934）年の廃棄物層が挙げられる。弥生前期層以外は、他の調査区では検出例の少ないものである。

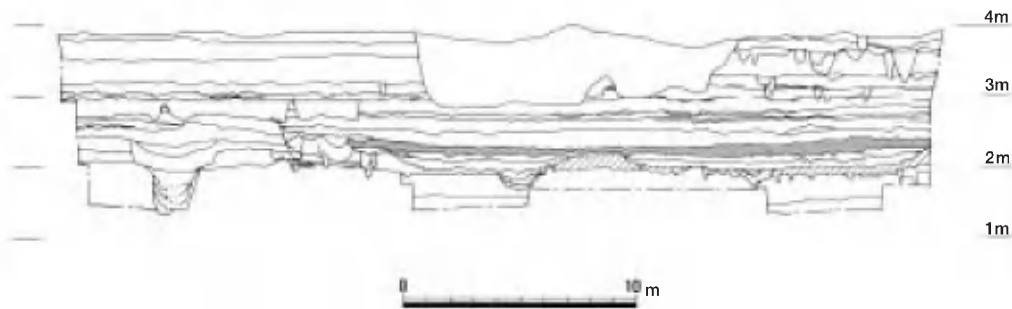


第8図 M区・O区基本土層断面図 (1/30)

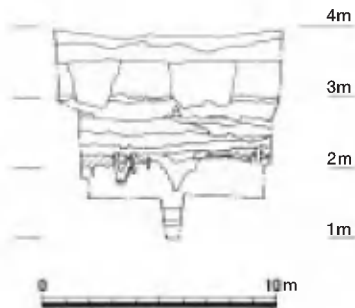
土層凡例



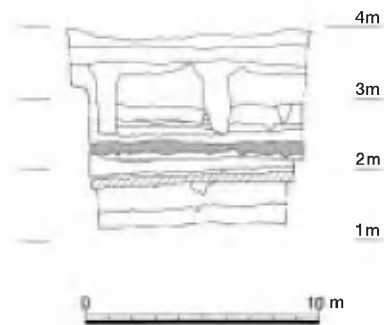
第9図 A区西壁土層断面図 (縦1/100・横1/300)



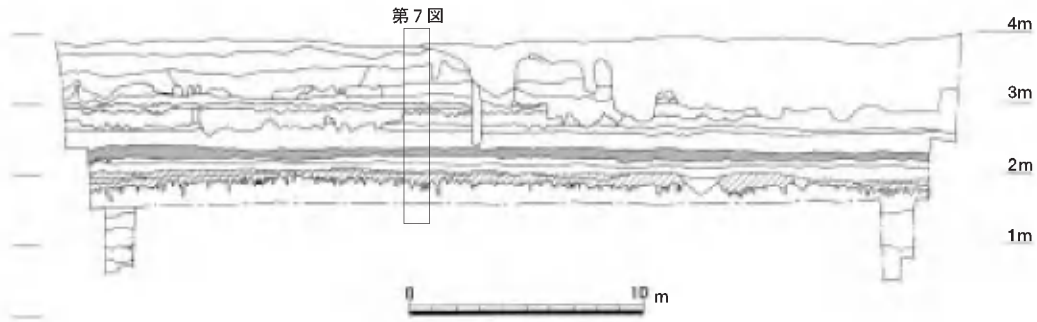
第10図 B区北壁土層断面図 (縦1/100・横1/300)



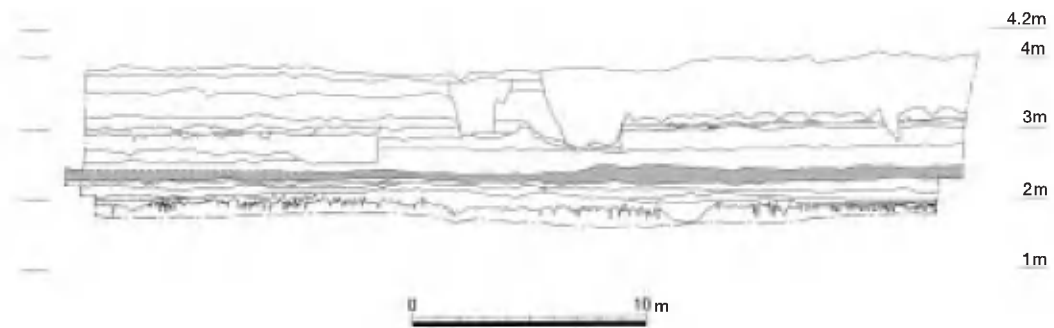
第11図 C区南壁土層断面図
(縦1/100・横1/300)



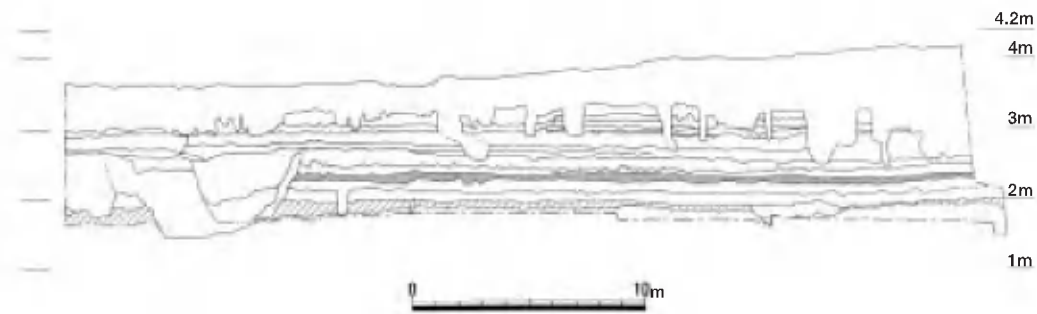
第12図 D区北壁土層断面図 (縦1/100・横1/300)



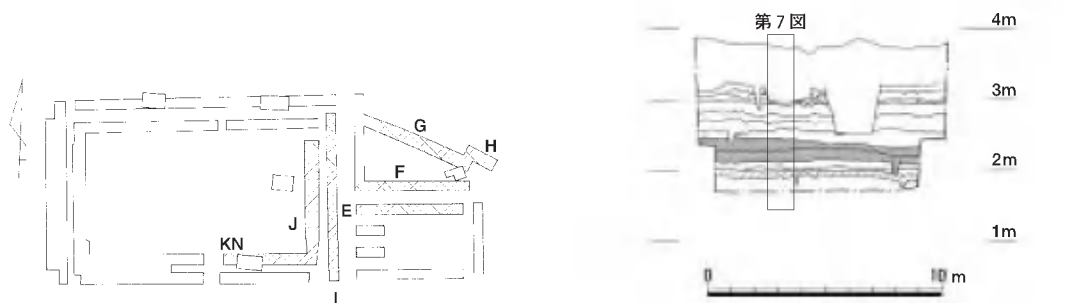
第13図 E区北壁土層断面図（縦1/100・横1/300）



第14図 F区北壁土層断面図（縦1/100・横1/300）



第15図 G区北壁土層断面図（縦1/100・横1/300）



第16図 H区北壁土層断面図（縦1/100・横1/300）

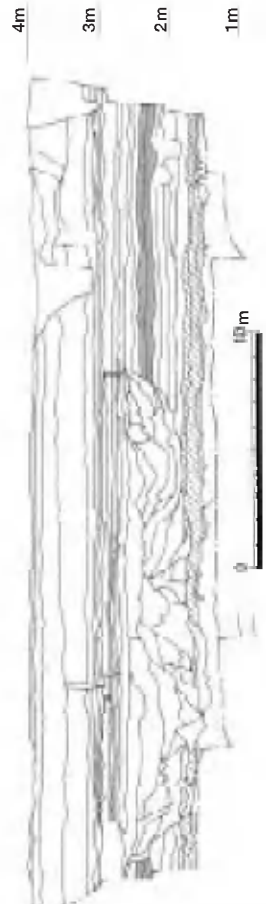
グラウンド内の他地点と同様、本地点でも定住の開始は弥生前期であり、それ以前はすべて自然堆積とみなされる。津島遺跡全体の傾向として、前期水田以前の層準では、産出する珪藻の優占種が時間の経過とともに海水・汽水生から淡水生・陸生へと移行する傾向があり、干潟的環境から土砂の堆積に伴う乾燥化の進行が裏付けられる。今回の調査区では、J区においてその傾向が確認された。

弥生時代前期層は、総合グラウンド全域に分布する黒色土で、上下の層とは際立った対比をなし、当時期の明確な指標となる。この層は、土質・色調・遺構の有無などを手がかりに、水田・微高地・低位部の3種類に分類可能である。本地点では、調査区のほぼ全域にわたって緩やかな起伏をもちながら10~30cm程度の厚さで堆積する。東半部では畦畔を伴う水田、西端部で低位部状を呈しており、両者間は北西から南東に走る河道で分断される。

続く弥生時代中期の遺構面は、前期黒色土上面より30~50cm程度上



第17図 I区西壁土層断面図 (縦1/100・横1/300)



第18図 J区西壁土層断面図 (縦1/100・横1/300)



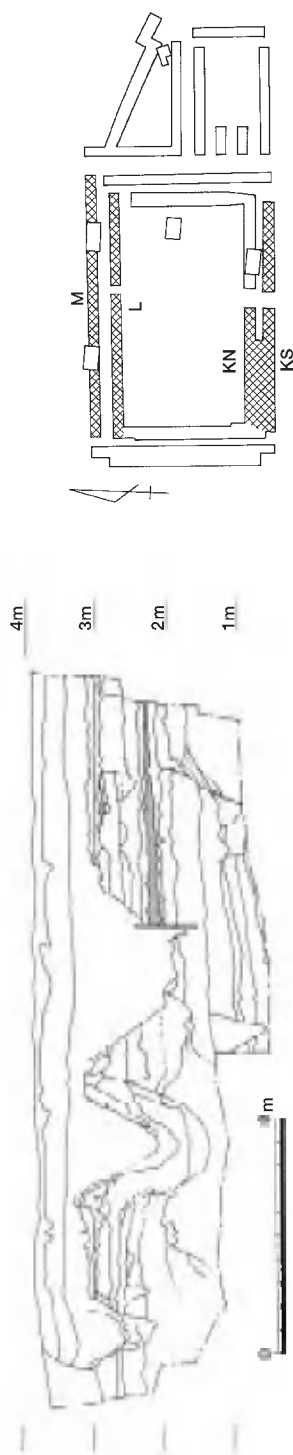
第19図 KN区(東)北壁土層断面図 (縦1/100・横1/300)

第3章 発掘調査の概要

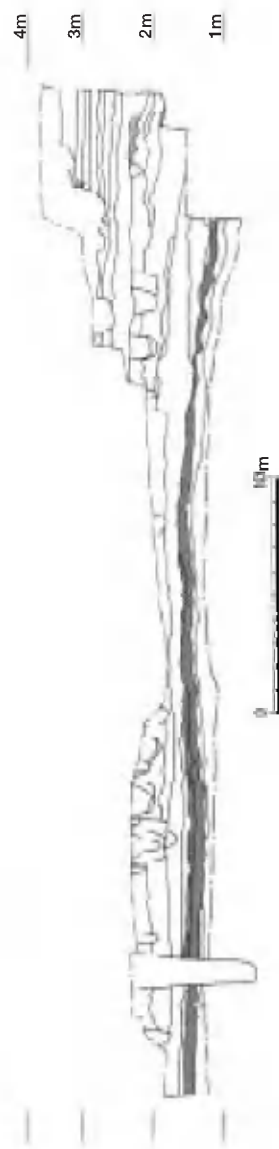
位、古墳時代前期面がそれより若干上位に存在する。ただ、他調査区の状況を参照すると、特に弥生時代後期以降の面に削平の影響が強く及んでおり、本地点においても遺構の検出面は本来の生活面より数10cm低い可能性が高い。古墳時代後期に入ると明確な遺構は減少し、調査区東半部を中心として水田層が広範に認められる。水田層は灰色系の色調を呈する単一層であり、植物珪酸体分析からも水田の裏付けが得られた。陸上競技場調査区などで観察される、古墳前期から後期にかけての集落の小



第20図 KN区 (西) 北壁土層断面図 (縦1/100・横1/300)



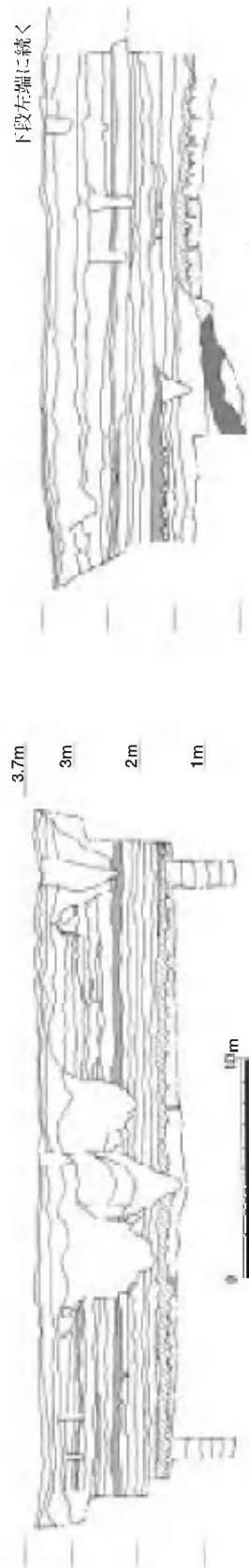
第21図 KS区 (東) 北壁土層断面図 (縦1/100・横1/300)



第22図 KS区 (西) 北壁土層断面図 (縦1/100・横1/300)



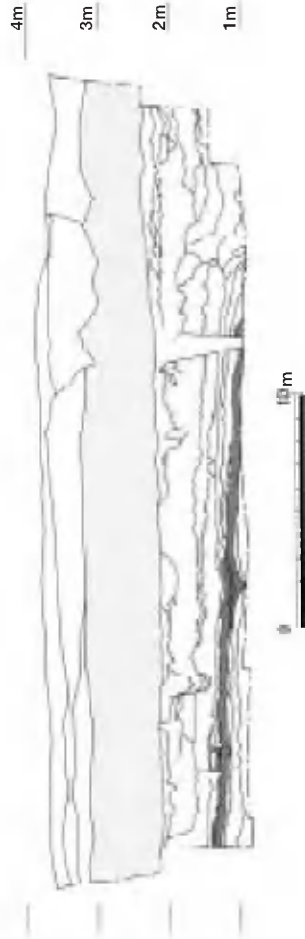
第23図 L区(西)北壁土層断面図(縦1/100・横1/300)



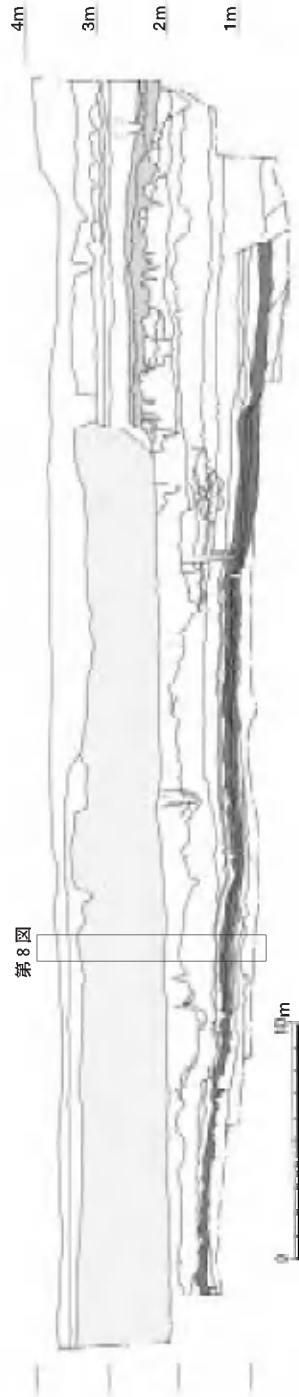
第24図 L区(東)北壁土層断面図(縦1/100・横1/300)



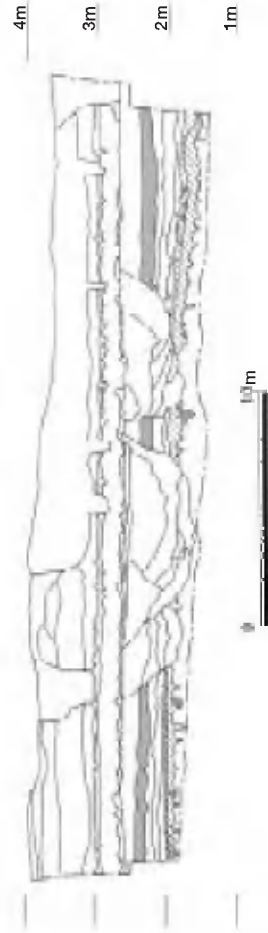
第25図 M区北壁土層断面図(縦1/100・横1/300)



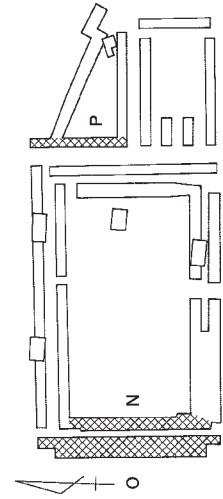
第26図 N区西壁土層断面図 (縦1/100・横1/300)



第27図 O区西壁土層断面図 (縦1/100・横1/300)



第28図 P区西壁土層断面図 (縦1/100・横1/300)



規模化傾向と軌を一にするといえよう。

古代以降は、水田層と思われる灰色系の粘質～微砂質土が累積するが、平面的には個々の水田面を捉えにくく、出土遺物も少ないため時期特定も困難であった。おおむね奈良時代以降は、一部を除いて耕作地の景観が継続していたと考えられ、最終段階の水田層は表土直下に認められる明治時代のものである。

表土層は、明治40（1907）年、日本陸軍第17師団の設置に伴い、津島遺跡一帯に盛土された真砂土である。この造成土層は、総合グラウンドとその周辺一帯に広く盛土され、本地点では石炭殻も併用されていた。いまひとつ特筆すべきは、昭和9年の室戸台風による水害廃棄物の埋め立て層である。この層は、K・N・O区にわたって検出され、厚さ1～1.5m、海拔約2mにまで及ぶもので、これによって弥生中期～古墳時代の遺構面までが大きく損壊を受けた状態であった。（岡本）

第3節 弥生時代前期の遺構・遺物

1 弥生時代前期の概要

検出した遺構は、水田・低位部層・溝7条・河道1か所などがある。水田は調査区の東側において検出され、それに伴う畦畔がE～G・I・L・M区の各調査区で見ついている。この畦畔は北東―南西の方向とそれと直交する方向で検出され、陸上競技場調査区と同様に方形に区画された水田であったことが想定される。溝4のように畦畔に伴う、水路と考えられる溝も検出されている。前期水田層と考えられる黒色土は色調から基本的に2層に分層でき、これは陸上競技場調査区の成果などから新旧の時期差であると考えられる。この水田の広がり、調査区域の東側、半分以上に及ぶ広範囲のものであった。水田から低位部層への転換部分には、北西から南東方向に流路をとる幅約25～30mの河道が流れており、河道の西岸が低位部層、東岸に水田という様相を呈している。この低位部層からは主として弥生時代前期前葉の上器が出上っており、この低位部層のさらに西側に弥生時代前期前葉の遺構を主体とする微高地の存在が想定される。(團)

2 水田

水田1 (第29～33図、図版3～5・11・12)

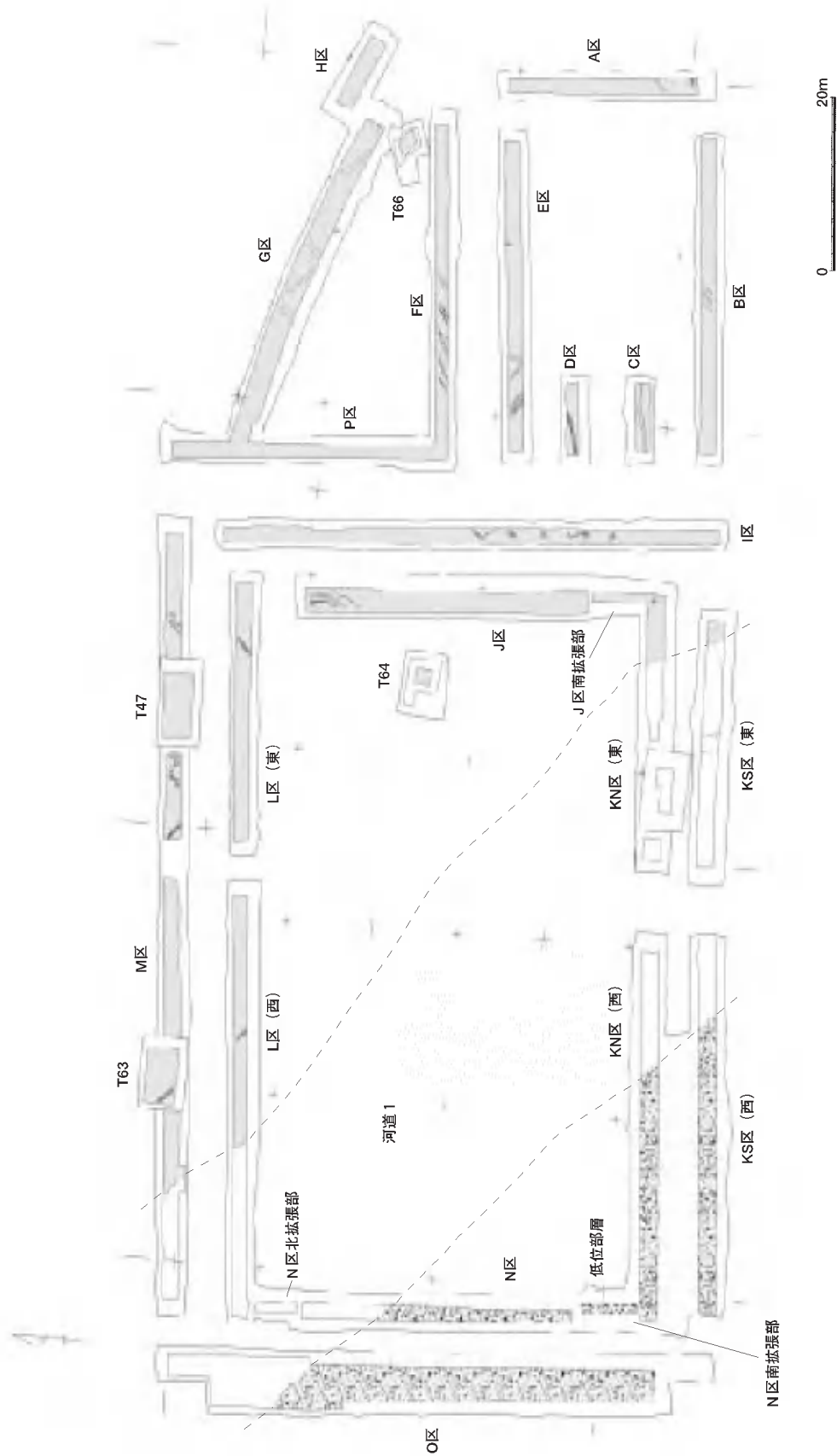
河道の東側一帯で検出された水田である。水田層の厚さは10～30cm程度で、A・E・I・J・P区では色調的に2～3層に細分された。基本的には陸上競技場調査区と同様に新旧2層からなると思われる。下層に比べ上層では色調がやや薄くなる傾向がある。上層水田面の標高は、攪乱部分を除くと最も高いC区で約230cm、低いM区中央部などで約170cmを測る。水田面の傾斜は、北東から南西へという津島遺跡での一般的傾向に必ずしも一致せず、E～G区などでは東、J・P区などでは北へ下がるなど、本地点の微地形を反映している。植物珪酸体分析はJ区の水田に相当する第77・78・80層およびその上下あわせて13点を対象に実施し、第65～77層でイネを比較的高密度に検出した。

畦畔は、調査区が狭く十分に把握できないが、識別が容易な下層水田に伴うものが痕跡も含めE～G・I・L・M区で検出された。方向は北東―南西、北西―南東を指し、他調査区と同様の方形区画が想定される。M区東半、T47の西で検出された畦畔には、水口状に途切れる部分が1か所あり(第30図上段)、実際に水口とすれば、掛け流しによる給水が主流の本遺跡では例外的な事例である。

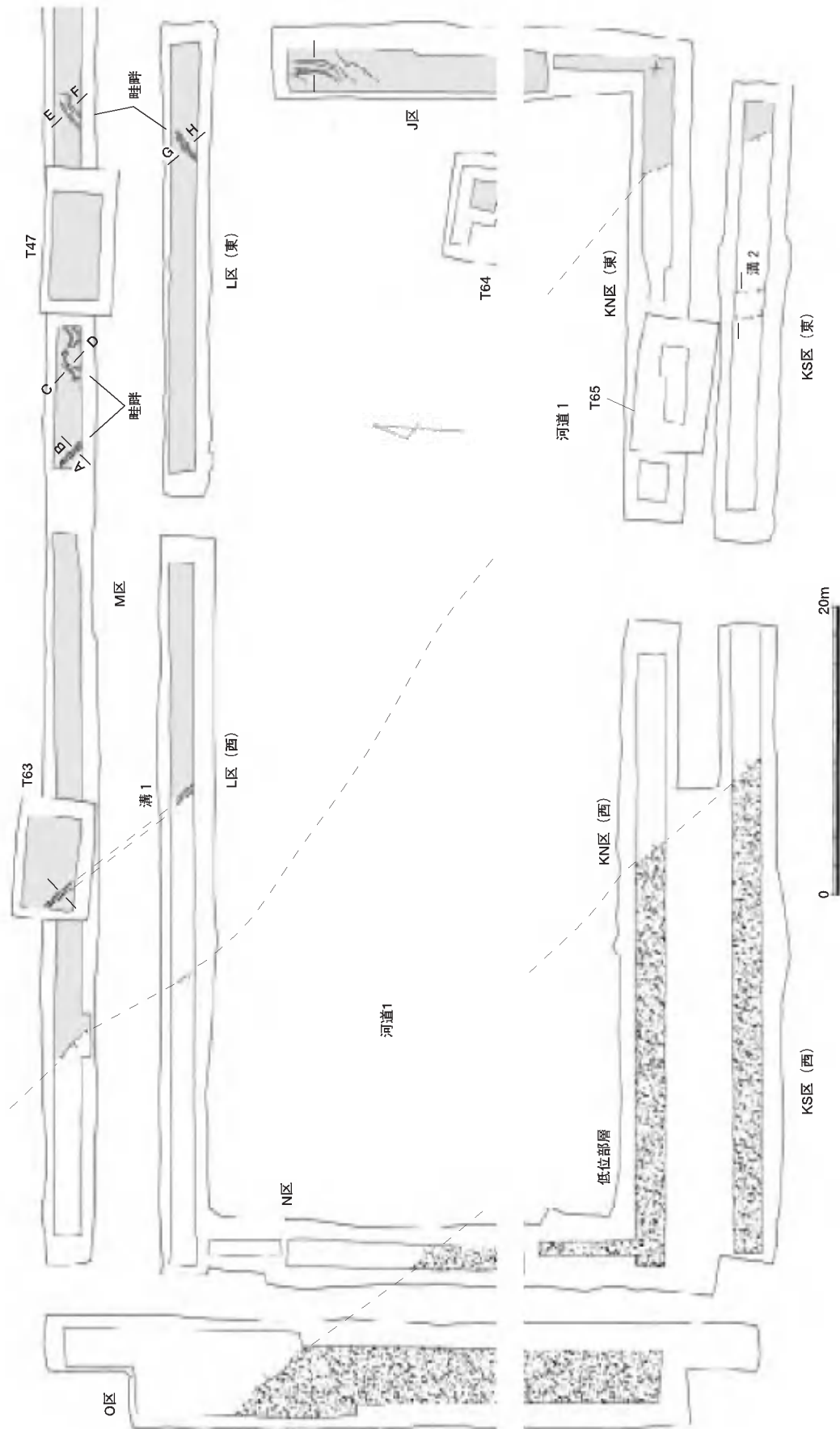
また、水田層を除去した段階で、畦畔と同様の方向性を有する複数の溝が検出された。これらの溝の中には、具体的な機能は不明ながら水田との有機的な関連をもつものも含まれると思われる。その他、C区では性格不明のたわみ、F区では水田の掘削痕と想定される溝状の窪みが検出されている。

水田面からの出土遺物のごく少ない。1は突帯文土器で、口縁直下に1条の刻み目突帯が巡る。2は多条沈線と逆L字状の口縁部で特色付けられる弥生前期後葉の甕である。また、図示していないが水田面上および水田層内から径2～4cm程度の円礫が散発的に出土した。この種の円礫は、津島遺跡の前期水田では普遍的に出土し、水田に侵入した鳥獣を駆逐する目的で投げ込まれたとの解釈もある。

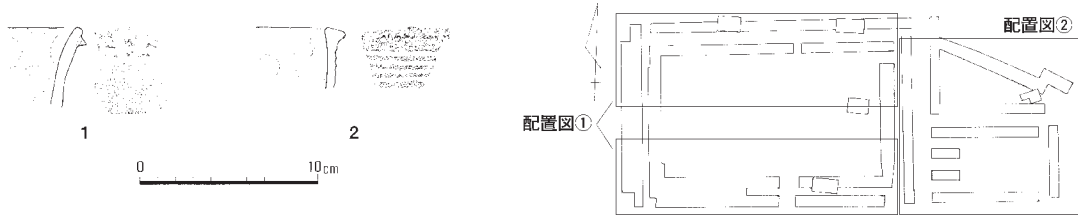
出土遺物から、水田が最終的に機能していた時期は弥生前期後葉と比定されるが、開田の時期については前期のいずれの時点に置けるのか明確ではない。(岡本)



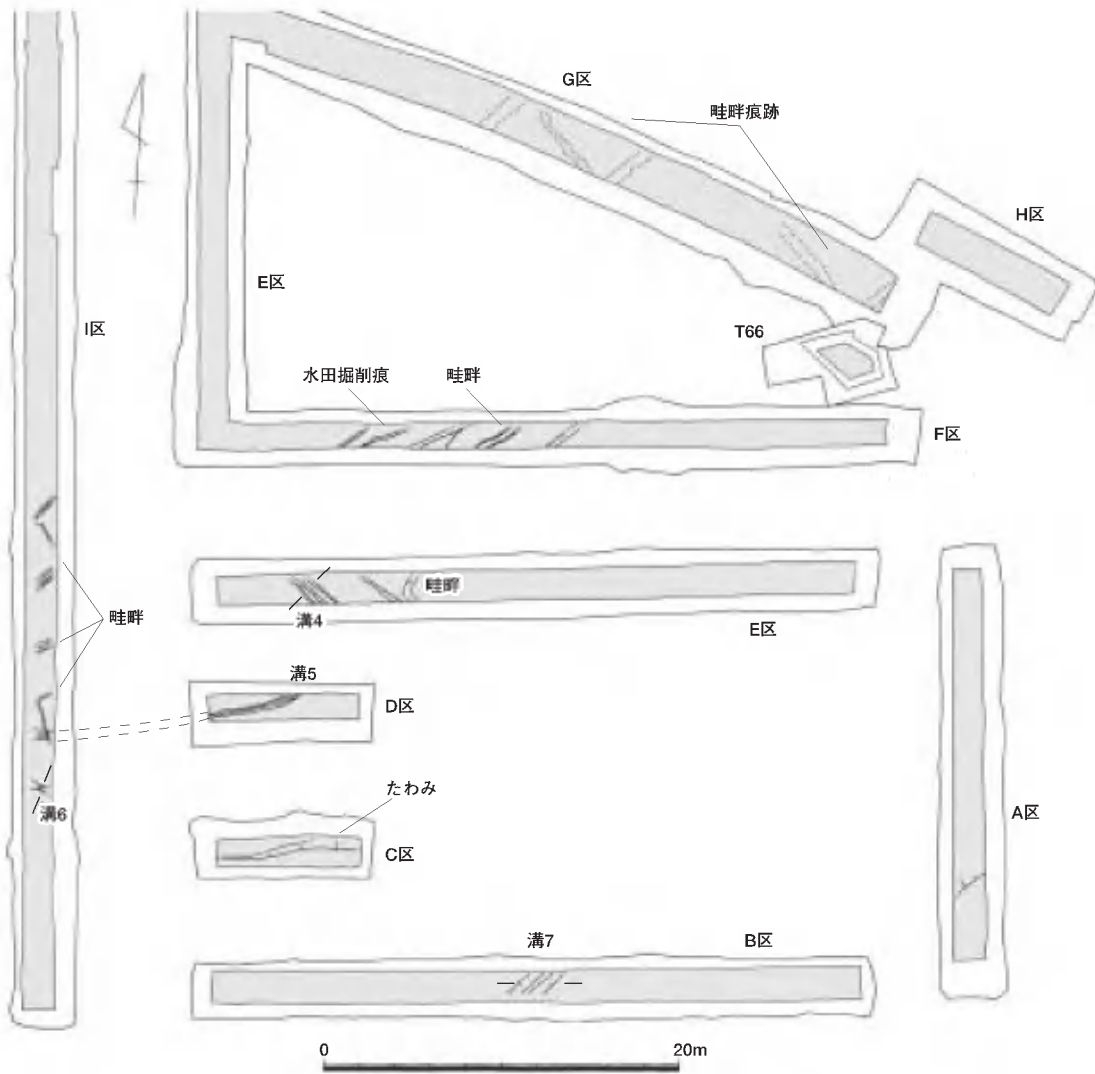
第29図 弥生時代前期遺構全体図 (1/700)



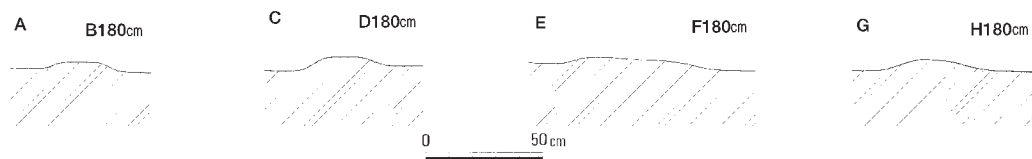
第30図 弥生時代前期遺構配置図① (1/400)



第31図 水田1出土遺物(1/4)



第32図 弥生時代前期遺構配置図②(1/400)



第33図 水田1畦畔断面図(1/30)

3 溝

溝1 (第29・30・34図、図版11)

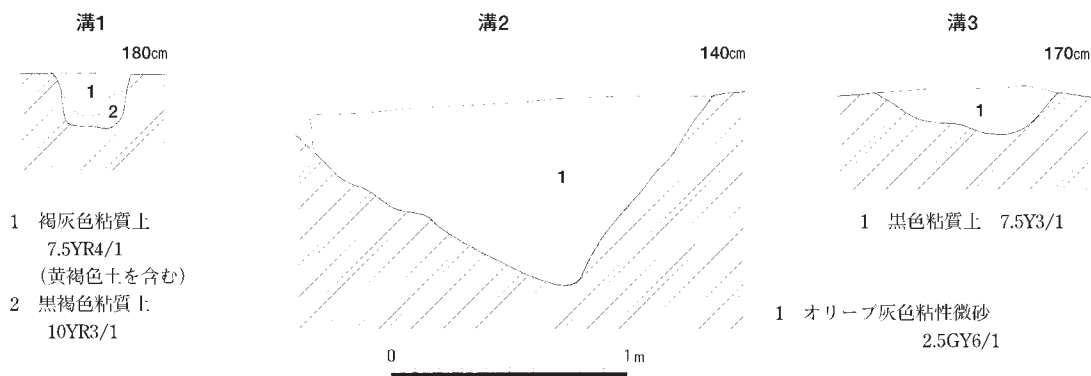
L西区中央付近を、北西から南東に流下する断面逆台形の溝である。検出面において幅は最大40cm、深さ17~22cmを測る。出土遺物はないが、検出層位から弥生時代前期に属すると考えられる。なお、第三次確認調査のT63で検出された溝と流路がつながり、同一の溝と判断できる。(尾崎)

溝2 (第29・30・34図、図版11)

K S区(東)にある南北方向と思われる溝で、調査区壁面で確認したにとどまる。幅約180cm、深さ80cmを測り断面形はV字形に近い。遺物はないが、検出層位から弥生前期と推定される。(岡本)

溝3 (第29・30・34図、図版6)

J区北で検出された。調査区北端から南走し、流路をやや西に変え西壁に消える。幅は最大88cm、深さ11~18cmを測る。層位から弥生時代前期に属すると考えられるが近隣の調査区に本溝に連なると考えられる溝が確認されておらず、溝の全体状況の推定は困難である。



第34図 溝1~3 (1/30)

溝4 (第29・32・35図)

E区の東端を北西から南東へ縦断すると考えられる。幅は最大で105cmを測るが、検出面での深さが非常に浅く、流走方向の断定はできない。遺物はないが検出状況から、時期は弥生前期。(尾崎)

溝5 (第29・32・35図、図版3)

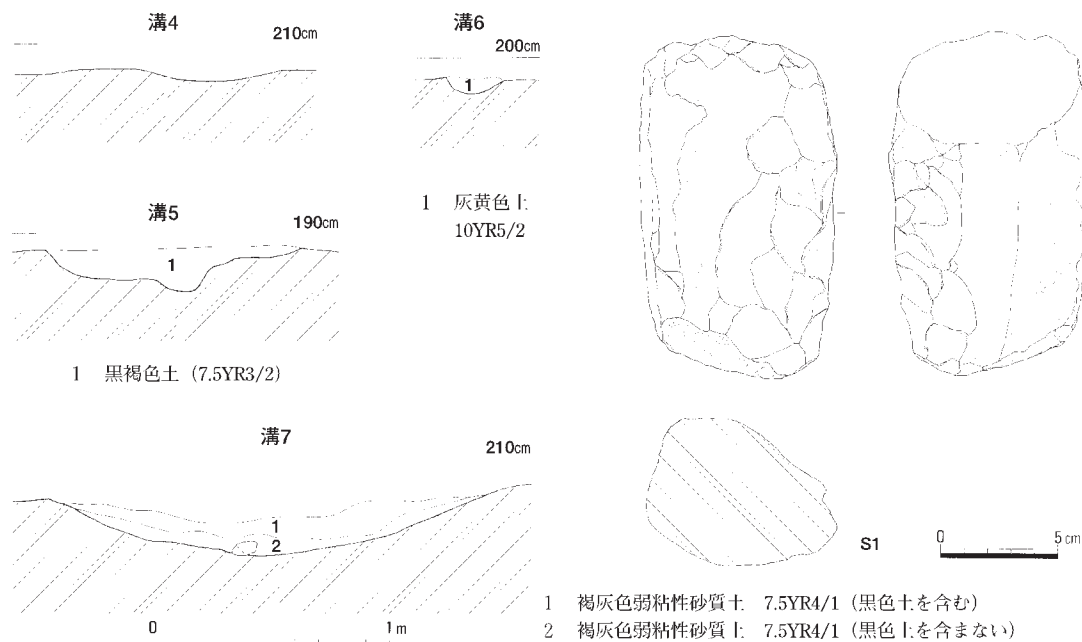
D区からI区にかけて延びる幅約30cm、深さ18cmほどの溝である。この溝は、前期の水田層とされる黒色土を除去した後に黄褐色基盤層上面で検出した。埋土は水田層とよく似ている。流走方向はI区などで検出されている畦畔の主軸とは一致せず、畦畔より一段階古い時期が考えられる。

溝6 (第29・32・35図)

I区の南部に位置し、低位部と微高地の境あたりに立地する。畦畔を伴う水田層を切っている。埋土はその水田層直上層と同一であり、前期水田直後の水田耕作に伴う溝と推定される。

溝7 (第29・32・35図)

B区中央で検出された。微高地部ではあるが若干たわんで低くなった部分に立地している。幅約150cm、深さ約20cmを測る。前期の黒色土が上部を覆う。溝底面に接地して、珩岩製の太形蛤刃石斧の未製品S1が出土した。敲打工程で刃部が欠損し、そのまま捨てられたものと考えられる。(物部)



第35図 溝4～7 (1/30)・溝7出土遺物 (1/3)

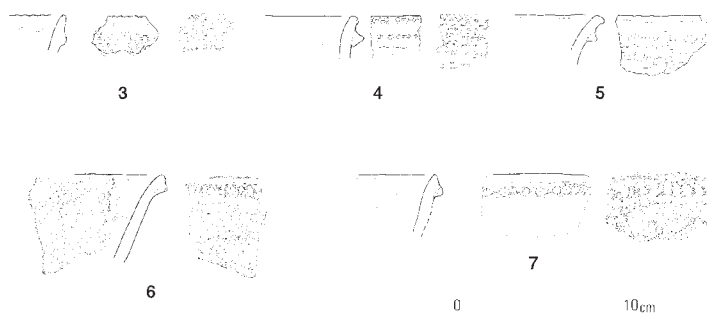
4 低位部層

低位部層 (第29・30・36～39図、巻頭図版2、図版17・18)

河道1の西側に位置するK・N・O区において、前期水田層に類似する黒色土層が広範囲に検出された。厚さは10～30cm程度を測り、厚い部分では色調的に2～3層に細分可能である。色調は、暗灰褐色から黒褐色を呈し、下層ほど黒味が強く、最下部ではグライ化傾向が認められる。K・N区で河道1に接する部分では、河道斜面の傾斜に連動して下方へ落ち込む状況が認められた。なお、水田の広がる河道1の東側でも、L・M区の河道に接する標高の低い部分はこの黒色土に特徴が類似するため、断面図では同じ扱いとしている。

この黒色土は、外観は前期水田層に類似するが、以下のような相違点を根拠に一応別個の層と捉えている。第一に、水田層は上面の標高が170～230cmにあるのに対し、西岸の黒色土では上面の標高が最も高いO区南端でも175cm前後であり、水田面より相対的に低位にある点。第二に、O区では水平距離約45mの間で約90cmの高低差が認められるなど、上面が水田面以上の傾斜をもつ一方、精査にもかかわらず畦畔が検出されない点。第三に、層内から前期の土器片が多く出土する点である。

さらに、この黒色土層が水田としての性格を有するか否かを見極めるため、N・O区でプラントオパール分析を実施した。該当するのは、N区の試料番号No.2～4、O区のNo.2～5で



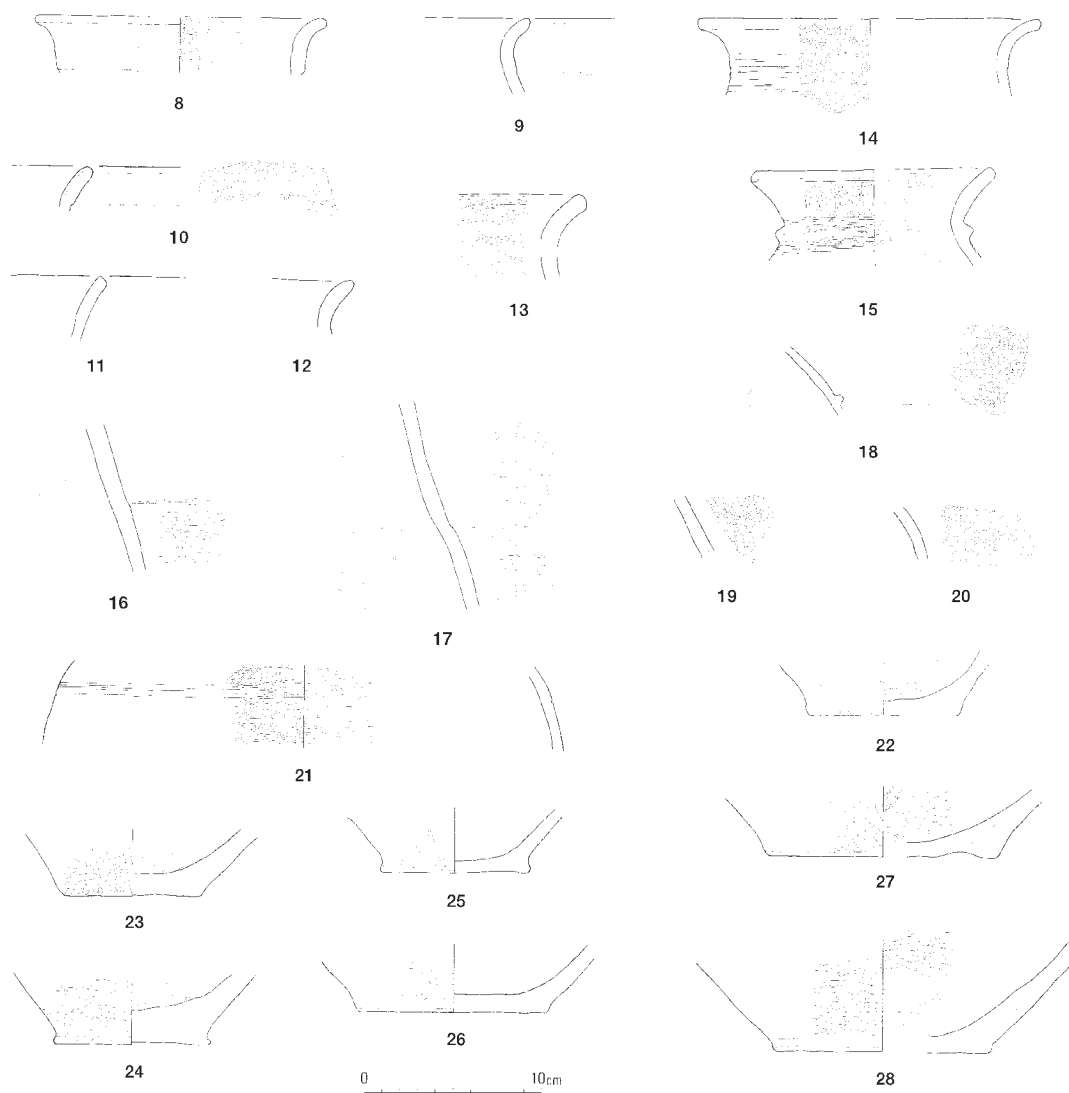
第36図 低位部層出土遺物① (1/4)

第3章 発掘調査の概要

ある。分析の結果、N区 No. 2 で3,500個/g という比較的高密度でイネのプラントオパールを検出した以外は低密度であり、先の相違点もあわせるとこの層を水田と評価する積極的な根拠は乏しいといえる。ただ、武道館当初予定地の微高地縁辺で検出された水田のように、明瞭な畦畔を伴わない湿田状の稲作形態が一時的に存在した可能性も否定はできない。

集落域の可能性についても、遺物の豊富さにもかかわらず、黒色土上面および除去後の段階とも遺構は全く検出されなかったことから、やはり積極的に肯定することはできないと考える。一方で、上面が南西に向かって徐々に上昇する点や、水田域に比べて豊富な出土遺物をみた点は、近辺に集落を伴う微高地の存在を示唆する要素ともいえる。曖昧な表現を連ねたが、現時点での評価は「微高地域に近接する可能性のある低位部」としておきたい。同じ弥生前期の水田・微高地などとの関係も注目されるが、それらの問題については十分究明することができなかった。

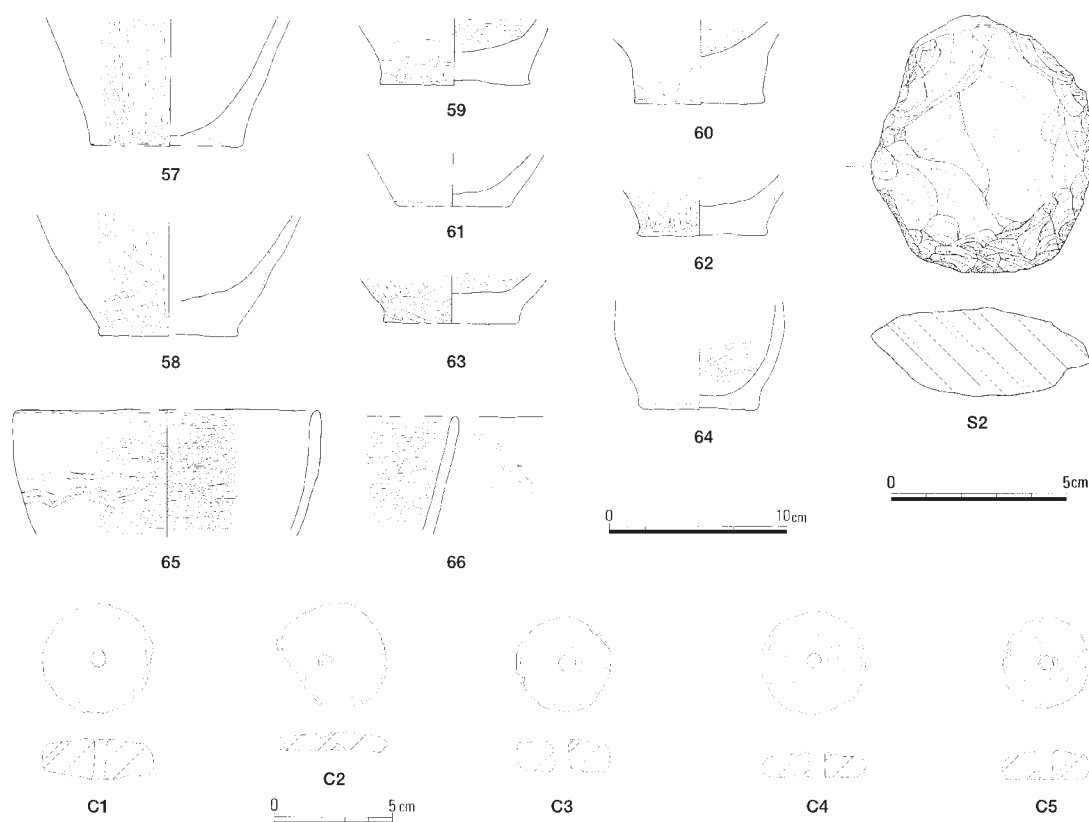
遺物は各層から出土しているが、出土地点・層位を記録していないため、層ごとの出土量や時期差などは十分に把握できない。ただ、土器の出土量は下層のほうが多い傾向は認められる。



第37図 低位部層出土遺物② (1/4)



第38図 低位部層出土遺物③ (1/4)



第39図 低位部層出土遺物④ (1/4・1/2・1/3)

3～7は縄文晩期末の突帯文土器で、弥生前期土器に交じって出土した。いずれも深鉢と考えられ、口縁部に刻み目突帯が巡る点が共通している。3は突帯の下に斜め方向のへら描き沈線文がみられる。4は口縁端部にも刻み目を施している。6は外面の付着炭化物をAMS法によって年代測定したところ、補正¹⁴C年代で2500±30年BPとの結果が得られている。この時期の土器は、他地点の微高地や水田面でも前期土器とともにしばしば出土している。

8以降が弥生前期土器である。8～28は壺である。8～10は頸部に段ないし沈線を有し、前期前葉に属す。9は段が沈線に置き換わっておりやや新相を示す。14は頸部に細いへら描き沈線が7条、15は頸部に断面三角形の貼り付け突帯が巡っており、この2点は前期後葉に降ると考えられる。16～20は肩部付近で、16・17は段を有し前期前葉、21は3条の沈線が巡り前期中葉に位置づけられよう。18は突帯が残存している。19の表面には重弧文が描かれている。22～28は底部である。

29～63は甕である。29～40は口縁部に段を有し、前期前葉でも古相に属す。39・40は段の上に刺突文が施される。41～50・54は如意状口縁をもつもので、41～51の口縁端部には刻み目が施されている。56は胴部で、口縁部を欠損するため時期不詳である。57～63は底部である。34・37・49について、外面付着炭化物をAMS法で年代測定した結果、補正¹⁴C年代でそれぞれ4480±40年BP、2750±40年BP、2490±30年BPとなった。なお年代測定試料については「まとめ」で詳述する。

64～66は鉢と考えられる。65の体部には連続する重弧文が上下2列に施されている。

石器はほとんど出土していない。S2はサヌカイト製で、石核ないし叩き石の可能性はある。長さ

73.0mm、重量145.6gを測る。C1～C5は土製の紡錘車で、C1・C2は径47mm、C5は径37mmを測る。C2は土器片の再利用品であるが、穿孔位置が食い違い製作途上で放棄されている。

以上のように、出土遺物の大部分が前期前葉に属す中で、一部に縄文晩期および前期中・後葉のものが含まれており、黒色土層の形成時期が前期のどの段階にあるのかは特定しがたい。むしろ、特定の一時点ではなく、ある程度の時期幅をもって徐々に形成された層とみるべきかも知れない。

5 河道

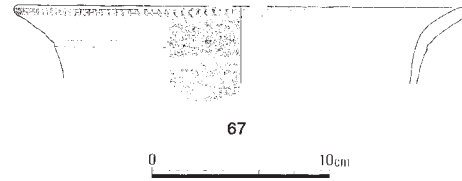
河道1（第29・30図）

調査区内を北西から南東へと横断する河道である。次節で詳述するが、埋積土中からは弥生中期の遺物が出土しており、その点からは中期への位置付けが妥当である。しかしながら、各調査区の土層断面において、弥生前期の黒色土層がこの河道によって寸断されず、むしろ河道斜面の傾斜に連動して下部へ落ち込んでいく状況が観察された（第20～22・24図）。このことから、河道の埋没時期は中期に降るとしても、前期段階において黒色土と併存する時期もあったと判断される。今回の検出状況は中期の様相を反映するものであるため、その出現時期や前期段階での規模などは判断材料がなく不明であるが、前期の景観復元のうえで重要な位置を占めると考えられる。

6 遺構に伴わない遺物

遺構に伴わない遺物（第40図・図版18）

水田や黒色土以外の包含層中から、少量の前期遺物が出土している。67はO区の包含層から出土した甕で、口縁部と胴部の境には弱い段を有する。（岡本）



第40図 遺構に伴わない遺物（1/4）

第4節 弥生時代中期の遺構・遺物

1 弥生時代中期の概要

検出した遺構には、竪穴住居8軒・土壇墓9基・土壇31基・溝17条・河道1か所などがある。前期の河道は中期も引き続いて同じ場所において流路をとるが、堆積作用が進むことによって中期の早い段階で埋没していることが土層の観察から理解される。そして調査域全体に微高地化が進むことで、中期中葉には集落としての利用が始まる。特に遺構は南側の調査区で検出されているものが多く、集落の中心は南側であったことがわかる。

特に遺構密度の高い南東部のB区・C区・I区では、竪穴住居と土壇墓が重複して検出されており、竪穴住居が廃絶されたのちに土壇墓がつくられており、居住域と墓域については、明確な区分がされていない。O区では、竪穴住居4軒が1か所で検出されているほか、周辺で検出された焼土面は周囲の柱穴の配置から竪穴住居の火処である可能性が高く、少なくともあと5軒の竪穴住居の存在が想定される。O区の土壇は規模が大きく、炭を多く含む層が面的に検出されている。その性格は不明であるが、このような土壇は墓であるとの見解もある。また、M区の土壇12では土器が埋設された出土状況を呈しているなど、注目される遺構がある。

これらの集落の時期の中心は弥生時代中期中葉～後葉であり、従来の津島遺跡の調査では存在が明確でなかった中期中葉の時期の集落がみつかったことや、土壇などの出土遺物には一括性が高いものがあることから、当時期の良好な資料であるといえる。(團)

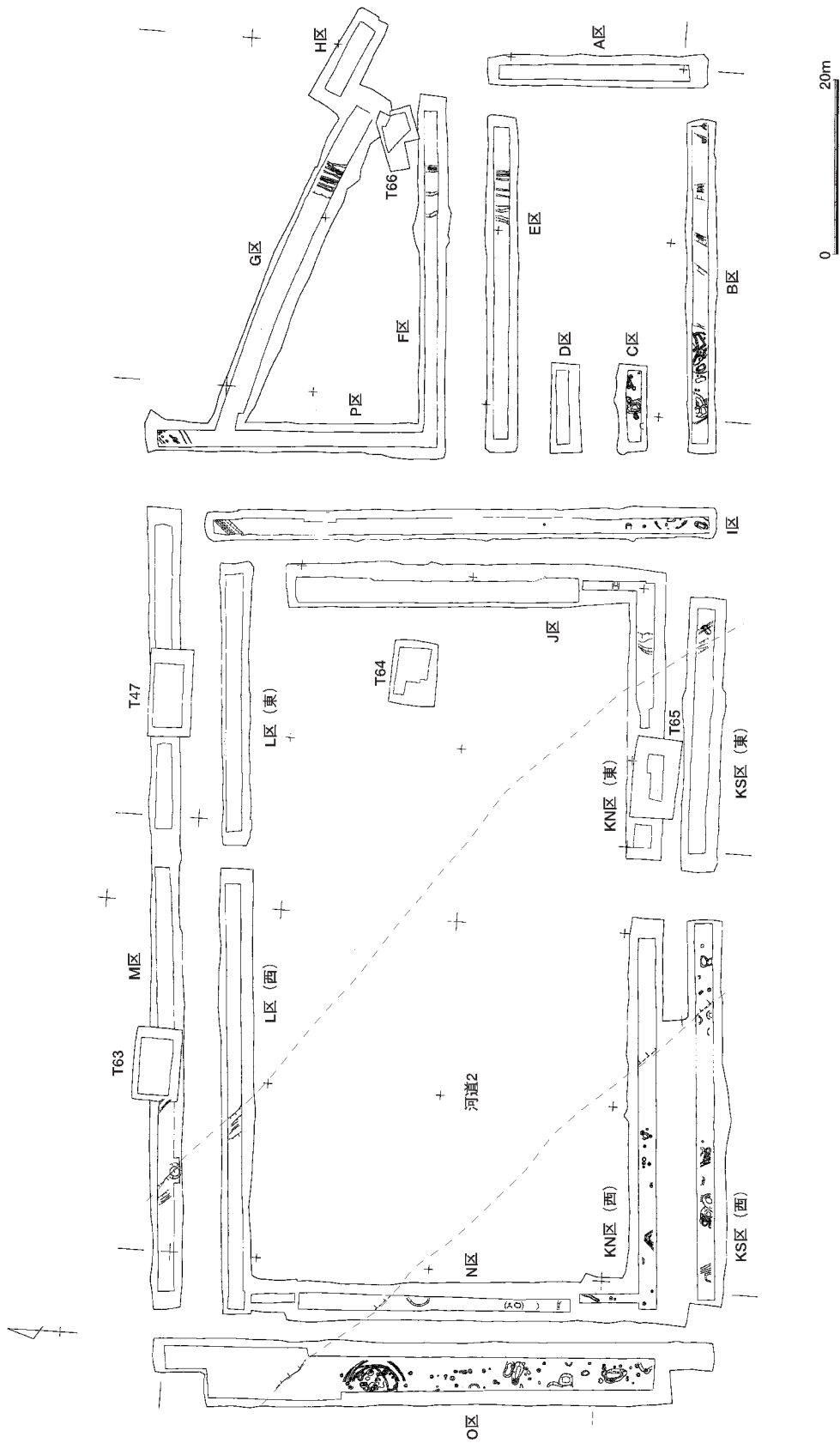
2 竪穴住居

竪穴住居1～4 (第41・42・44・45図、図版15・18)

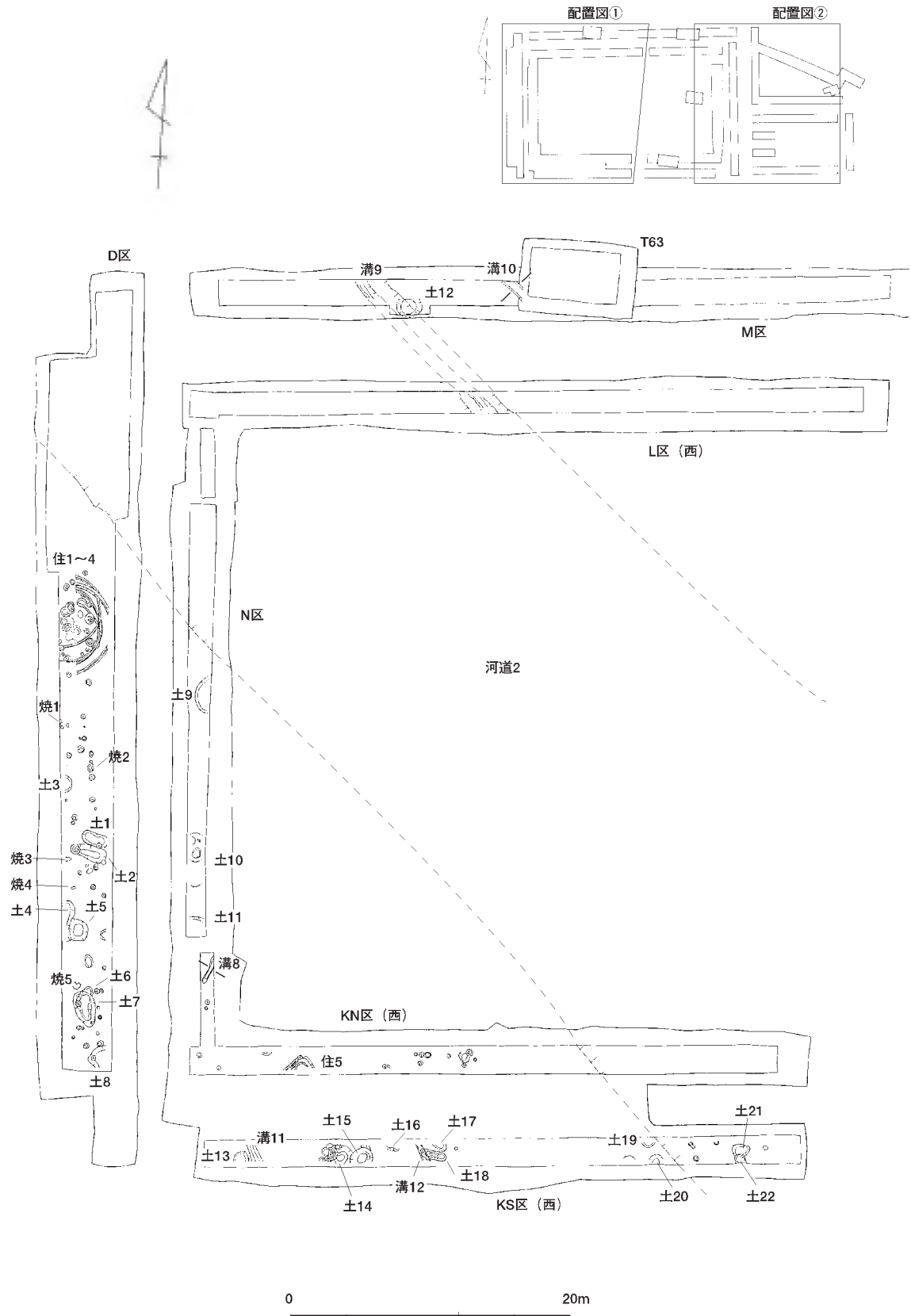
調査区の西側、O区の中央部から北側にかけては弥生時代前期前半の河道が存在する。しかし、中期中葉段階にはすでに厚い堆積砂によって埋没を完了していたようで、この頃当該地は中州状にすでに微高地が形成され、人の定住にも適した環境にあったことが判明した。すなわち、全体掘り下げ途中の海拔180cmにおいて集落の存在を証明する竪穴住居4が、さらにこの床面掘り下げ時に3軒分の壁体溝が検出され、また周辺からは後述する多くの土壇・火処が数多くの土器・石器等を伴って確認されたのである。ここで確認された竪穴住居は、いずれも円形を呈するものであった。ただし、これらは、いずれもが砂を基盤としてさらに洪水砂によって埋没しているため、壁体溝の在り方から4軒の重複は認められるものの、これに伴う柱穴・中央穴は、中でも最も新しい竪穴住居4以外には明確には検出できなかった。

竪穴住居1は、重複して検出された4軒の竪穴住居の切り合いからは最も古いと考えられる。この住居は、かろうじて幅10cm前後を残す壁体溝の存在によって住居の存在が認識出来る程度である。残存状況からの復元規模は、およそ直径450cmの円形であったことが推測される。床面の海拔高は1,55mである。ただし、この竪穴住居に伴う状況での遺物の出土は認められなかった。

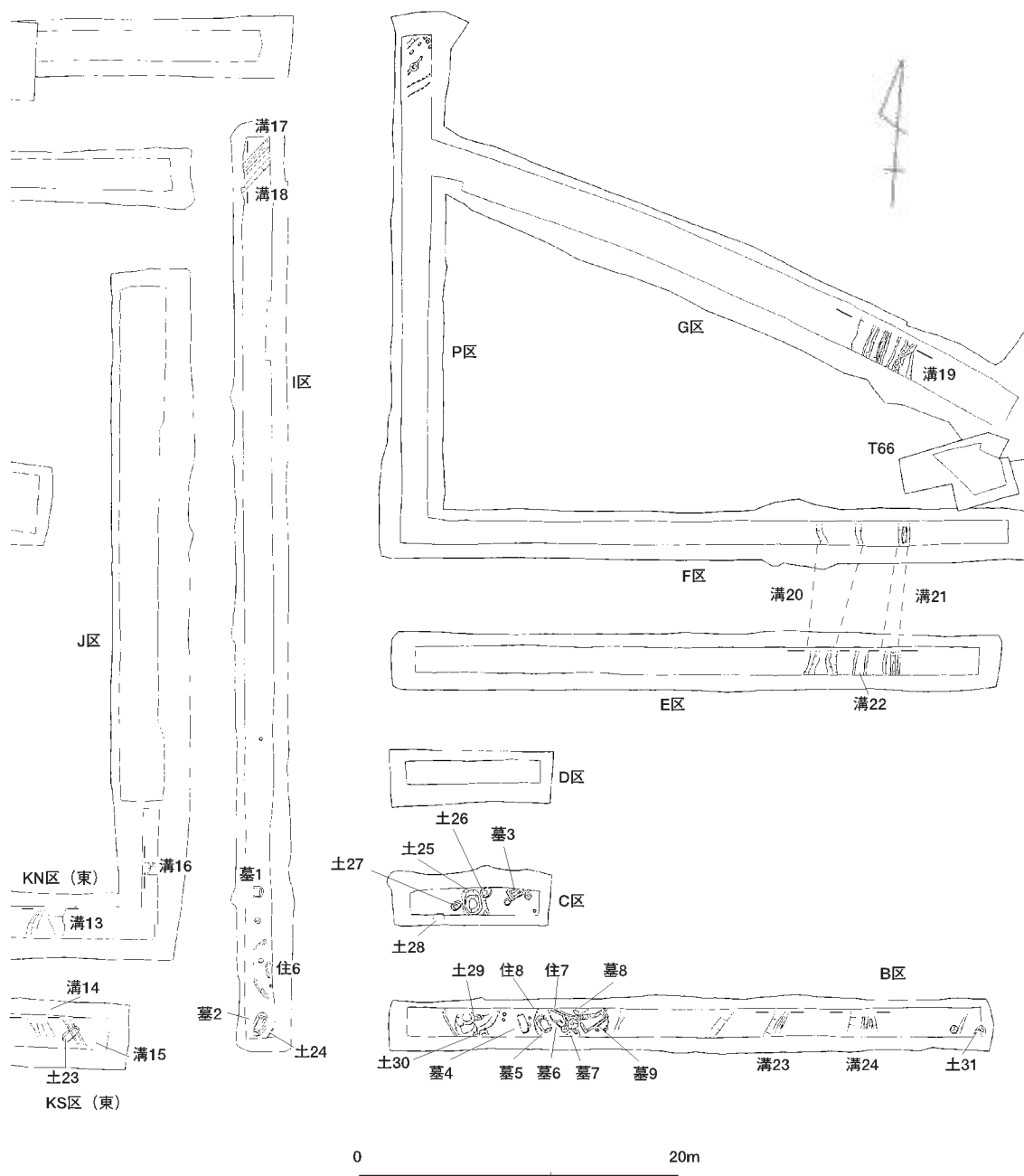
竪穴住居2は、壁体溝が竪穴住居1の南東側を切り、竪穴住居3によって切られた状態で検出された。床面の高さは、竪穴住居1とほぼ同じか、やや高かったものと推測される。



第41図 弥生時代中期遺構全体図 (1/700)



第42図 弥生時代中期遺構配置図① (1/400)



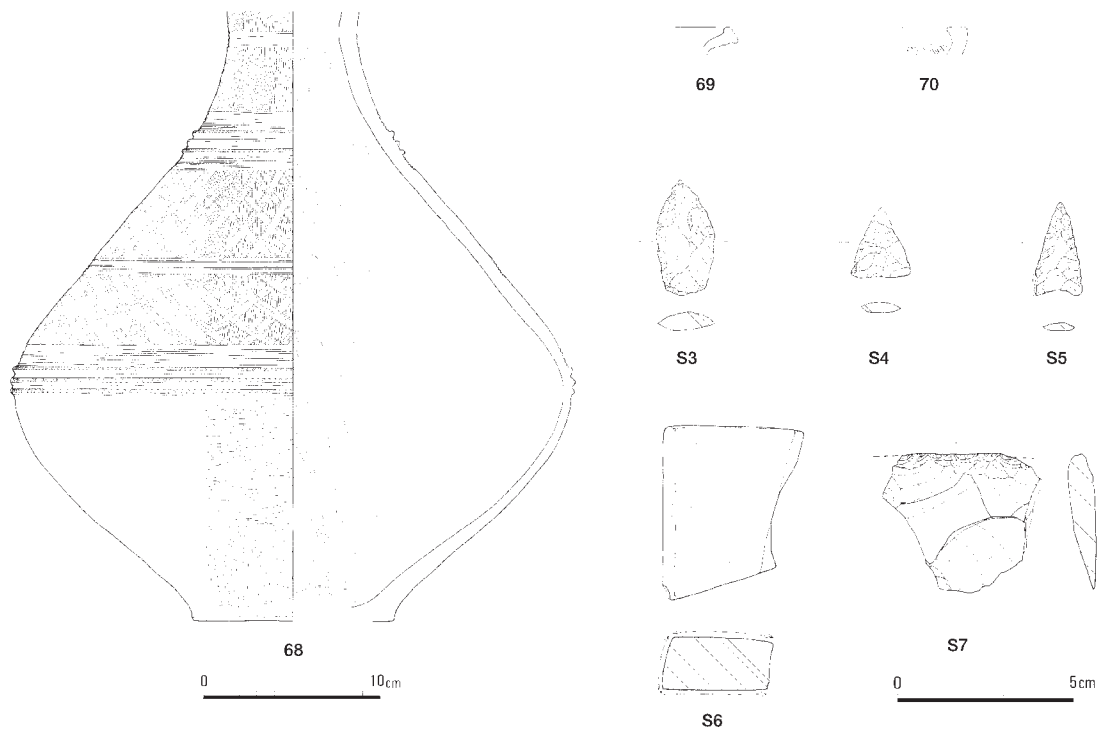
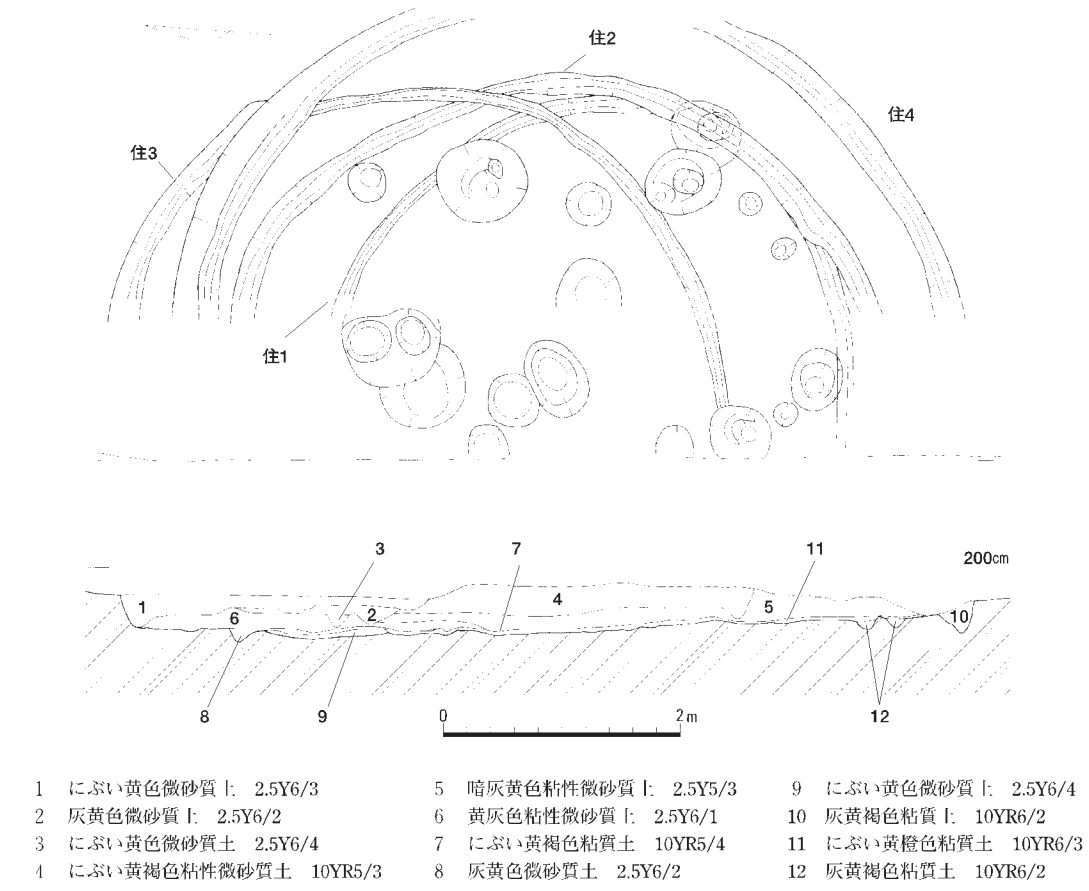
第43図 弥生時代中期遺構配置図② (1/400)

竪穴住居3は、竪穴住居1と2が拡張傾向のもとで検出されたのに対して、竪穴住居4の床面下で竪穴住居2と3を切り、竪穴住居4によって切られていた。およそ550cm近い大きさを測る。

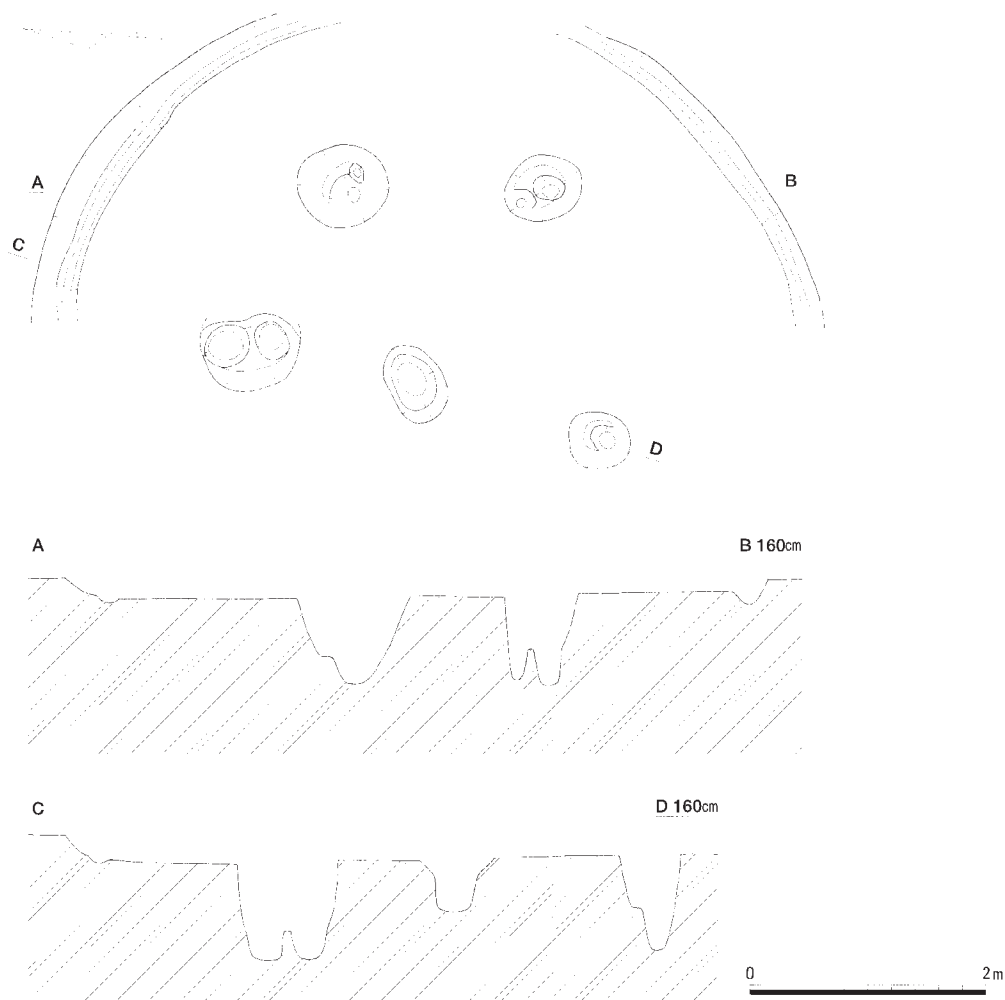
竪穴住居4は、推定径670cmと当該調査区内では最大の規模を誇る。海拔125cmにある床面には柱穴5本が想定され、そのほぼ中央部に中央穴が確認された。

これら4軒の竪穴住居の時期は、土器の遺存が竪穴住居4の覆土中からわずかに壺68が1点と他に細片の甕69と高杯70が出土したにすぎなく明言は出来ない。しかし、竪穴住居の切り合い状況等から、およそ中期中葉と考えて差し支えない。(島崎)

第3章 発掘調査の概要



第44図 竪穴住居1～4 (1/60)・出土遺物 (1/4・1/2)

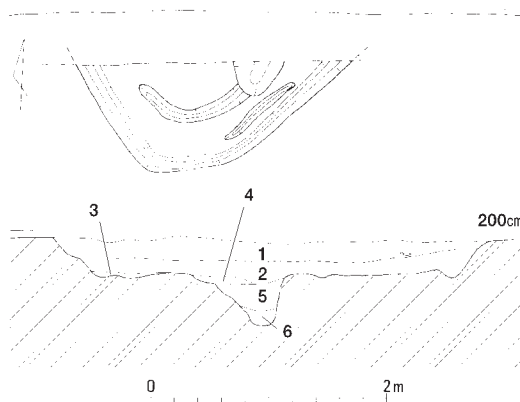


第45図 竪穴住居4 (1/60)

竪穴住居5 (第41・42・46・47図、図版10・18)

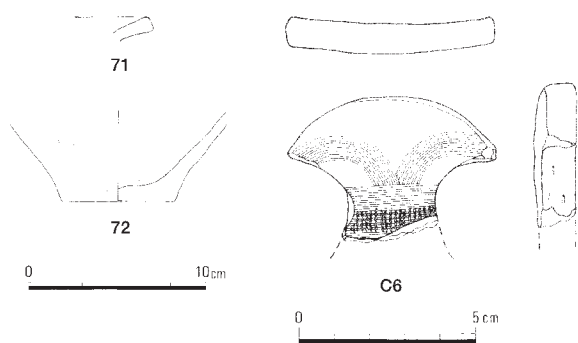
KN区の西端近くに位置する方形の竪穴住居である。調査区内では北端の一部を検出したのみであり、本来の規模は不明である。検出面からの深さは28cmを測る。調査区南壁ではこの住居に伴う柱穴が検出された(第5・6層)。住居の壁面に沿って壁体溝が巡るが、床面にも細かい溝が認められることから、数回の建て替えが行われたと推測される。床面上および埋土中には炭・焼土が含まれていた。

床面上から、壺71・甕72の小片のほか、表面に櫛描文が施される分銅形土製品C6が出土した。これらの遺物から判断して、住居の時期は弥生中期中葉であろう。(岡本)

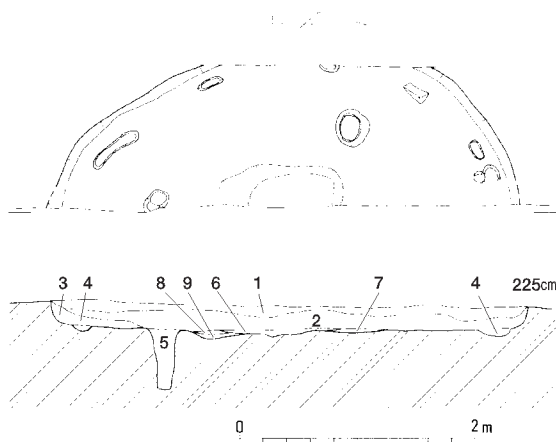


- 1 灰色粘性微砂質土 7.5Y5/1 (炭含む)
- 2 黄灰色粘性微砂質土 2.5Y4/1 (焼土塊・炭を含む)
- 3 黄灰色粘質土 2.5Y6/1
- 4 橙色微砂質土 7.5YR6/6 (焼土)
- 5 灰オリーブ色粘質土 5Y6/2
- 6 灰色粘質土 5Y6/2 (暗灰色土を含む)

第46図 竪穴住居5 (1/60)

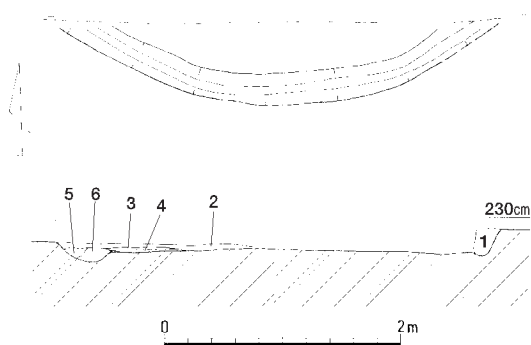


第47図 竪穴住居5出土遺物 (1/4・1/2)



- | | |
|--------------------------------|------------------------|
| 1 オリーブ黒色粘質土 7.5Y3/2 | 6 黒褐色粘土 2.5Y3/2 |
| 2 オリーブ黒色粘質土 10Y3/1 | 7 オリーブ黒色粘質土 7.5Y3/1 |
| 3 オリーブ黒色粘質土 10Y3/1 | 8 にぶい黄褐色砂混じり粘質土10YR4/3 |
| 4 オリーブ黒色～灰オリーブ色粘質土 5Y3/1～5Y6/2 | 9 黒褐色粘土 2.5Y3/2 |
| 5 暗緑灰色粘土 5G3/1 | |

第48図 竪穴住居6 (1/60)



- | | |
|----------------------|----------------------|
| 1 灰黄褐色砂質土 10YR4/2 | 4 オリーブ黒色弱粘性砂質土 5Y3/2 |
| 2 オリーブ黒色弱粘性砂質土 5Y3/2 | 5 褐色粘質土 10YR4/4 |
| (下部に炭が部分的に入る) | 6 にぶい黄色砂質土 2.5Y6/3 |
| 3 明黄褐色砂質土 2.5Y6/6 | |

第49図 竪穴住居7 (1/60)

竪穴住居6 (第41・43・48図、図版5)

I区の南部、微高地上に立地する。竪穴住居の西端と東半部分は調査区外になる。平面形は、直径約4mの円形もしくは隅円方形を呈すと推定される。壁面からやや内側に、途切れ途切れに溝が巡る。支柱穴は4個と考えられ、また、竪穴住居の中心からやや西に寄った位置と推定されるが、浅い土壌がある。埋土下半からはサヌカイトの剥片が比較的多く検出された。出土土器はないが、竪穴住居6の時期は、検出層位や埋土から弥生時代中期と考えられる。

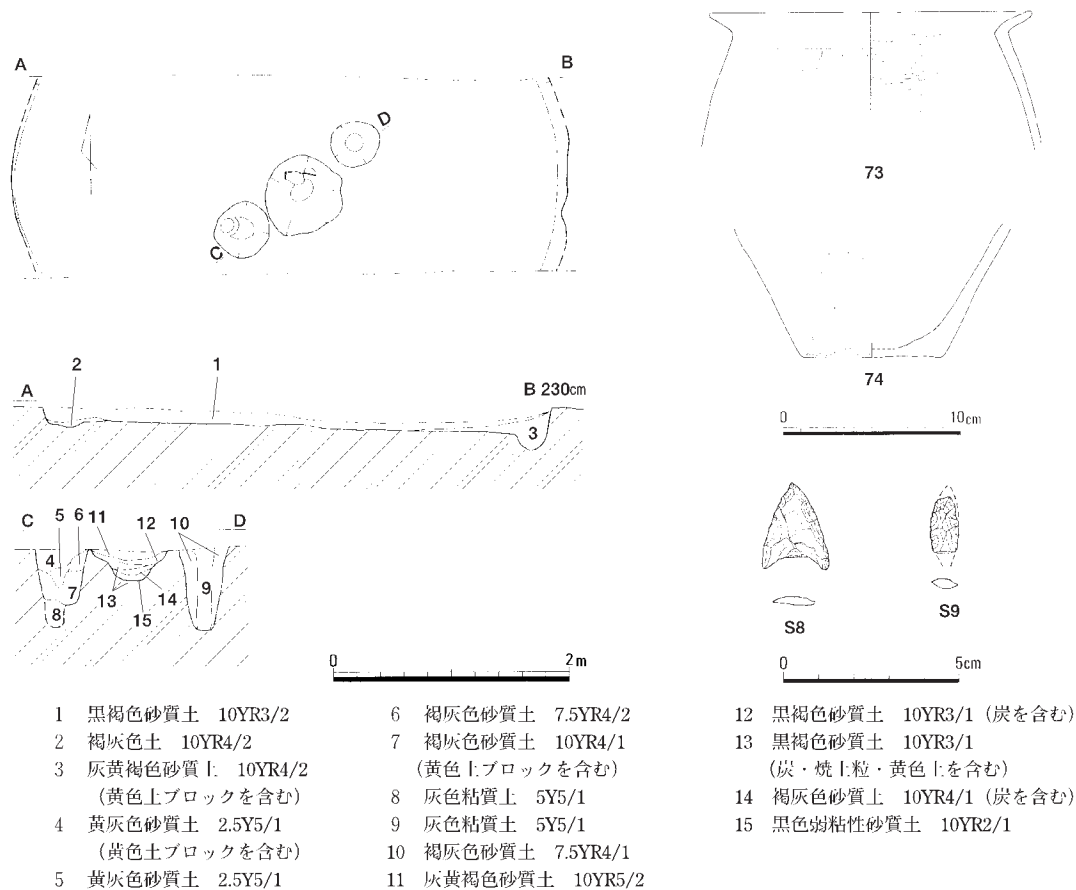
竪穴住居7 (第41・43・49図)

B区の西部、微高地上に立地する。竪穴住居の大半は調査区外になるが、検出した壁体溝から円形の竪穴住居と推定される。床面には明黄褐色の貼り床があり、その上面に炭粒が散っている。出土遺物はないが、竪穴住居8を切り、土壌墓に切られていることや検出層位などから、竪穴住居7の時期は弥生時代中期と考えられる。

竪穴住居8 (第41・43・50図、図版18)

B区の西部、微高地上に立地し、竪穴住居7や土壌墓5～9に切られている。平面形は直径約4.7mの円形と推定される。壁体溝をもつが平面では検出できなかった。柱穴は中央穴を挟んで2か所ある。どちらも深さが70cm前後を測り、しっかりしている。中央穴の平面形は円形を呈し、床面からの深さは約25cmを測る。中央穴埋土中には炭粒や焼土粒が混入しているが、多くはない。遺物は、中央穴上部から甕73・74、埋土上層から石鏃S8・S9が出土した。竪穴住居8の時期は土

器の特徴から弥生時代中期中葉と考えられる。中央穴と柱穴の配置から、この竪穴住居を「松菊里型住居」と捉えたいが、その性格についてはなお検討を要するものである。



第50図 竪穴住居 8 (1/60) ・ 出土遺物 (1/4・1/2)

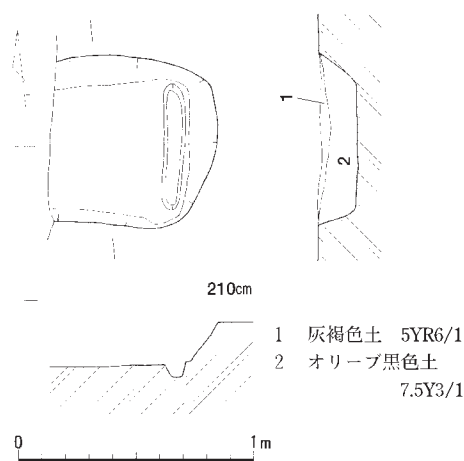
3 土壙墓

土壙墓 1 (第41・43・51図、図版 5)

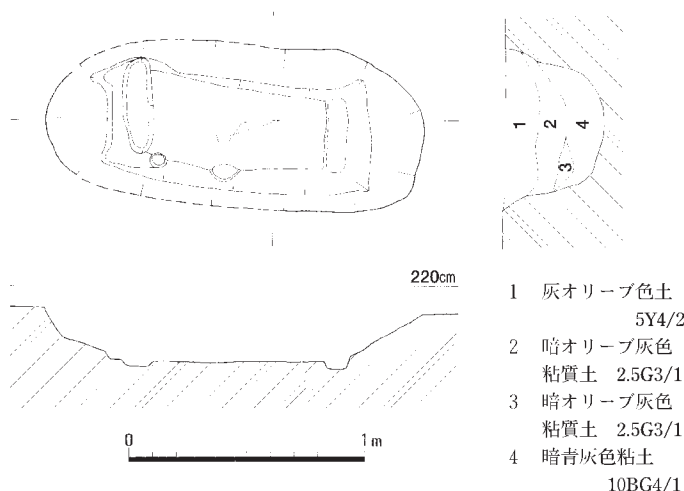
I 区南部に位置する。この土壙墓が立地する微高地端部は、古墳時代後期には水田域となる。土壙墓西半部は調査区外であるが、小口溝をもち、木棺墓と推定される。長軸はほぼ東西にあり、周辺で検出された土壙墓とは主軸方向を異にする。出土遺物はないが、層位関係から弥生時代中期と考えられる。

土壙墓 2 (第41・43・52図)

I 区南端に位置する。小口溝をもち、南側壁面には側板を設置するための抉り込みがあることから、側板で小口板を挟む木棺墓と推定される。木棺の規模は長さ80cm、幅30cm前後と考えられる。時期は、検出層位・埋土から弥生時代中期と思われる。



第51図 土壙墓 1 (1/30)



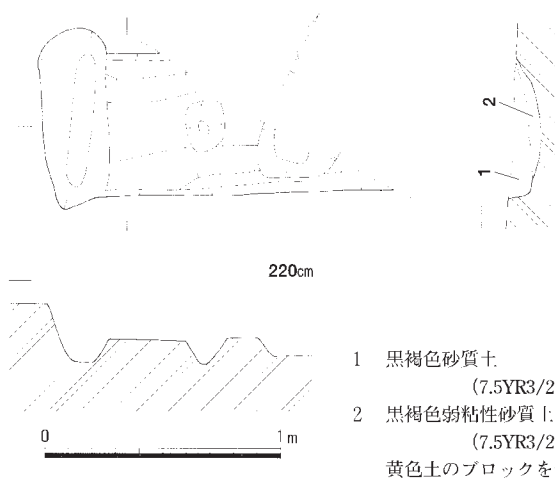
第52図 土壙墓 2 (1/30)

- 1 灰オリーブ色土 5Y4/2
- 2 暗オリーブ灰色粘質土 2.5G3/1
- 3 暗オリーブ灰色粘質土 2.5G3/1
- 4 暗青灰色粘土 10BG4/1

土壙墓 3

(第41・43・53図、図版 2)

C区北東部に位置する。小口溝をもち、底面は平らではなく、その横断面の中央部分が浅く窪む形状を呈する。墓壙の北東部が調査区外になるので、正確な規模は解らないが、小口溝が比較的大きいことから、土壙墓 9 ぐらいの規模になると推定される。遺物は出土しなかった。時期は、埋土と検出層位から弥生時代中期と考えられる。



第53図 土壙墓 3 (1/30)

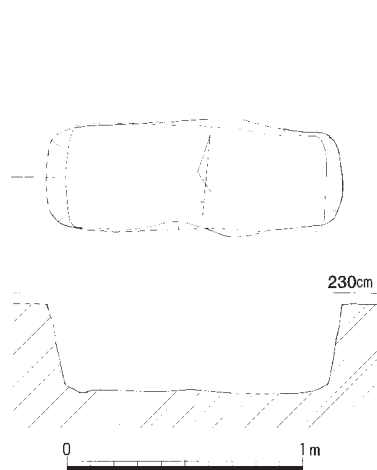
- 1 黒褐色砂質土 (7.5YR3/2)
- 2 黒褐色弱粘性砂質土 (7.5YR3/2) に黄色土のブロックを含む

土壙墓 4 (第41・43・54図)

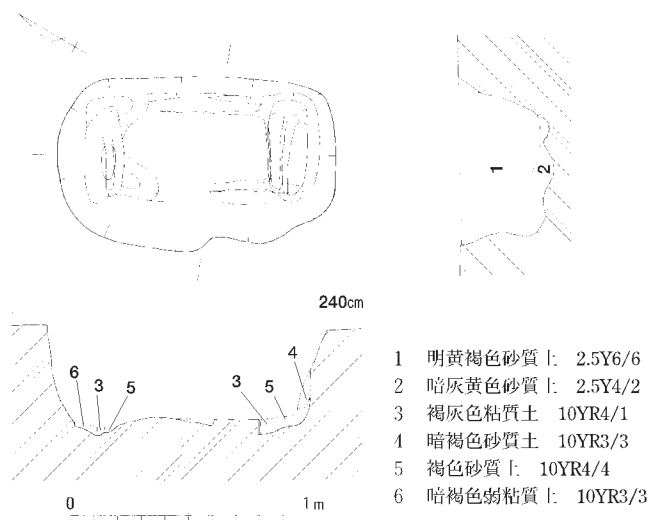
土壙墓 4 は B 区の西部に位置する。底面は平らで、その規模は長軸約 110cm、短軸約 40cm を測る。木棺の痕跡等は検出されなかったが、土壙墓 5 と同様の明黄褐色砂質土で埋まっていること、主軸がほぼ等しいことから、墓と判断した。出土遺物はない。土壙墓 4 の時期は、埋土や検出層位から弥生時代中期と推定される。

土壙墓 5 (第41・43・55図、図版 1)

土壙墓 5 は B 区西部に位置する。土壙墓 4・6 に隣接し、主軸を同じくする。竪穴



第54図 土壙墓 4 (1/30)



第55図 土壙墓 5 (1/30)

- 1 明黄褐色砂質土: 2.5Y6/6
- 2 暗灰黄色砂質土: 2.5Y4/2
- 3 褐灰色粘質土 10YR4/1
- 4 暗褐色砂質土 10YR3/3
- 5 褐色砂質土: 10YR4/4
- 6 暗褐色弱粘性土: 10YR3/3

住居8埋土を切る。小口溝と浅い側板溝をもち、木棺痕跡がわずかに検出された。木棺は側板で小口板を挟み、木棺内法は約65cm×30cmと推定される。底面近くに骨片状の白色微粒が5・6点確認できたが、同定には至らなかった。出土遺物はなく、時期は埋土と検出層位から弥生時代中期。

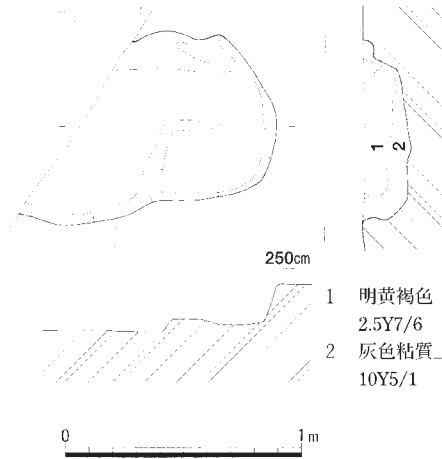
土壙墓6 (第41・43・56図、図版1)

B区西部に位置する。土壙墓4・5と主軸および埋土を同じくする。底面には段があり、木棺痕跡なども検出されなかったが、土壙墓5との規則的な位置関係から墓と推定した。竪穴住居8を切る。埋土・検出層位から、土壙墓6の時期は弥生時代中期と考える。

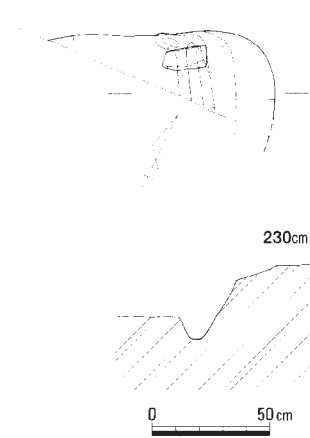
土壙墓7

(第41・43・57図)

土壙墓7はB区西部に位置し、大半は調査区外になる。小口溝と側板の押さえと考えられる石を検出した。竪穴住居8を切る。規模は不明。主軸は、土壙墓4～6と直交、土壙墓8・9と平行する。時期は、埋土と検出層位から弥生時代中期と推定される。



第56図 土壙墓6 (1/30)



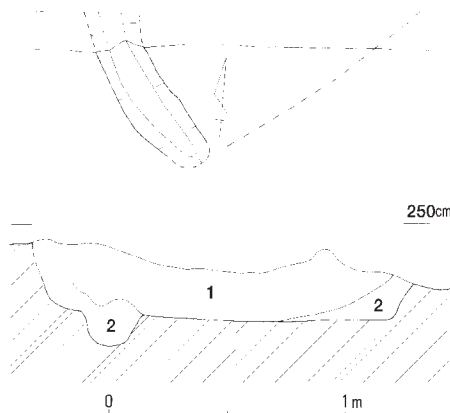
第57図 土壙墓7 (1/30)

土壙墓8 (第41・43・58図)

B区西部、土壙墓9の北西40cmに並行して位置する。調査区北壁の断面観察で、この土壙墓は竪穴住居8埋土を切っていると確認できるが、平面では識別できず、竪穴住居床面でようやく小口溝を検出できた。時期は埋土と層位から弥生時代中期と考えられる。

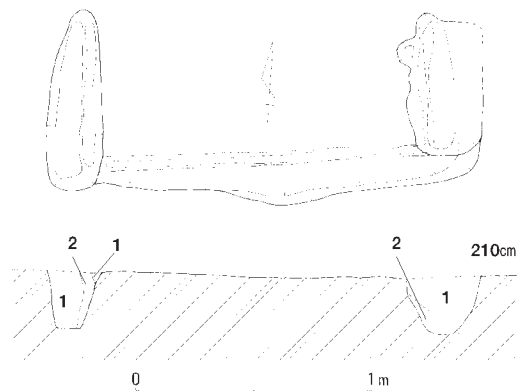
土壙墓9 (第41・43・59図)

B区西部に位置する。土壙墓7・8と主軸を同じくする。土壙墓8と同様に竪穴住居8床面で検出



1 灰黄褐色砂質土 10YR5/2
2 灰黄褐色砂質土 10YR4/2

第58図 土壙墓8 (1/30)



1 黒褐色粘質土 10YR3/2
2 灰褐色粘質土 10YR4/1

第59図 土壙墓9 (1/30)

第3章 発掘調査の概要

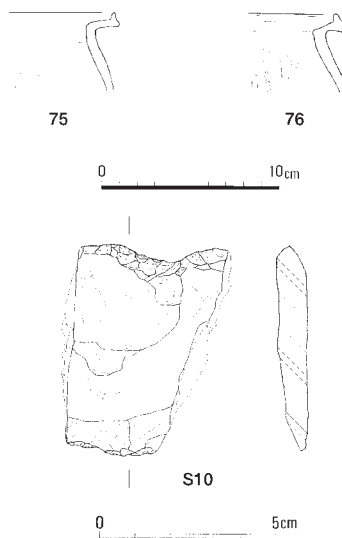
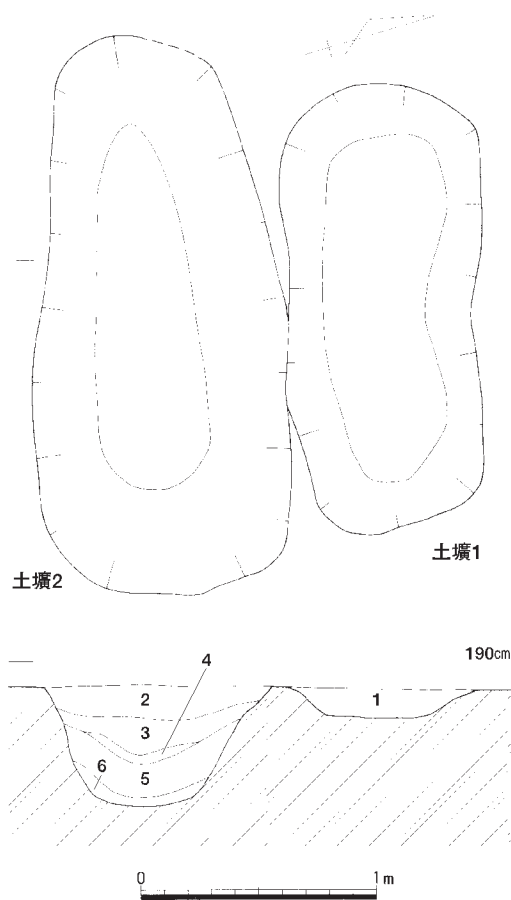
されたが、本来は竪穴住居 8 埋没後に掘削されたものであろう。両小口溝と南側側板溝、小口板を側板で扶む木棺痕跡を検出した。小口溝は24cmと深く、しっかりしたものである。木棺内法は約140×50～60cmと推定される。時期は周辺の土壌墓と同様に弥生時代中期と考えられる。(物部)

4 土壌

土壌 1・2 (第41・42・60図)

0区の中央やや南寄りの位置で、南北に2基並んで検出された土壌である。北側を土壌1、南側を土壌2としたが先後関係は不明である。土壌1は長さ189cm、幅76cmを測り深さは12cmと浅いのに対し、土壌2は長さ238cm、幅110cmで、深さは51cmを測り断面逆台形に深く掘削されている。土壌2の

第4層と最下層の第6層に多量の炭が含まれていた。図示した遺物は土壌2からの出土で、甕75・76は弥生中期後葉の前半に属すと思われる。S10はサヌカイト製の楔形石器である。



- 1 灰黄色微砂質土
- 2 灰色微砂質土 10Y5/1
- 3 灰色粘質土 7.5Y5/1 (黄褐色土・炭を含む)
- 4 灰色粘質土 5Y4/1 (炭を多量に含む)
- 5 灰色粘質土 5Y5/1 (黄褐色土・炭を含む)
- 6 黄灰色粘質土 2.5Y5/1 (炭・焼土を多量に含む)

第60図 土壌 1・2 (1/30) ・土壌 2 出土遺物 (1/4・1/2)

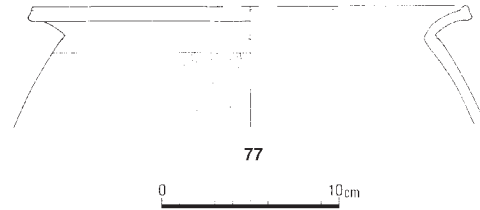
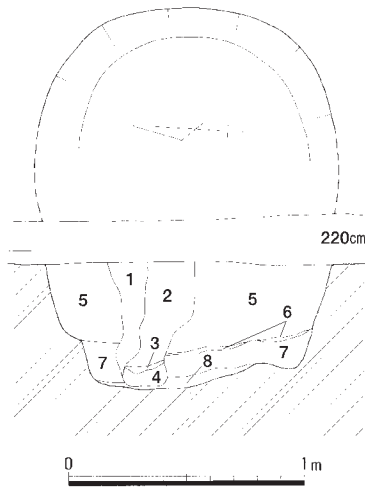
土壌 3 (第41・42・61図)

0区の西壁沿いで検出された、円形と思われる土壌である。検出面での最大径125cm、壁面での深さ55cmを測る。断面図に示す第1～4層は別時期の柱穴で、第5～8層がこの土壌の埋土である。出土した甕77からみて、土壌の時期は弥生中期中葉と思われる。

土壌 4 (第41・42・62図)

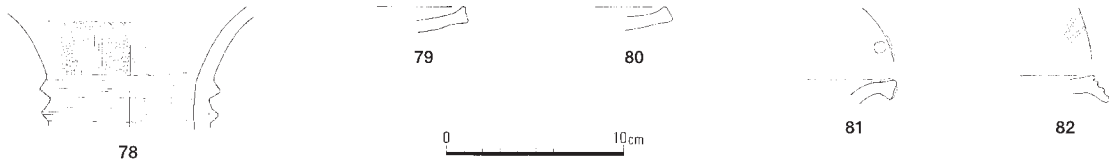
0区の西壁沿いにあり、土壌5の西側に接して検出された。大形の土壌を思わせるが、埋土と地山

の区分が困難であり、西壁にも断面が現れておらず遺構と呼べるかどうか疑問もある。弥生中期中葉の土器小片が少量出土している。



- | | |
|-------------------|-----------------|
| 1 暗オリーブ色土 5Y4/3 | 5 オリーブ黒色土 5Y3/ |
| 2 灰色土 10Y4 (礎板痕跡) | 6 炭層 |
| 3 灰色土 10Y4/ | 7 暗オリーブ色土 5Y4/3 |
| 4 オリーブ黒色土 10Y3/ | 8 暗オリーブ色土 5Y4/3 |

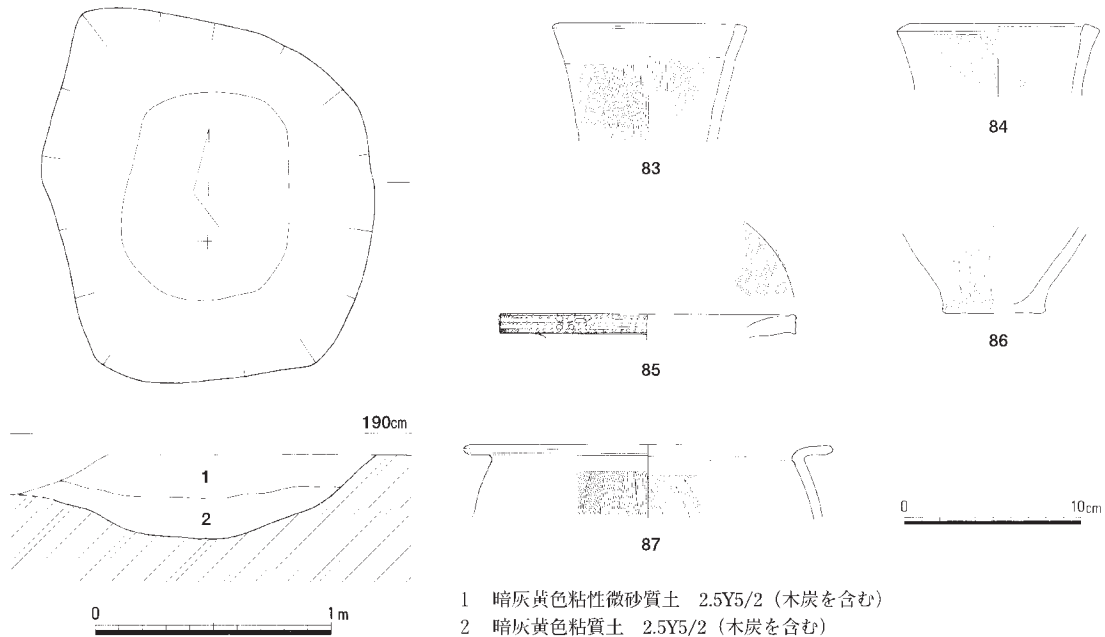
第61図 土壙3 (1/30) ・出土遺物 (1/4)



第62図 土壙4 出土遺物 (1/4)

土壙5 (第41・42・63図)

土壙4の東に接して位置する。多角形ぎみの不整楕円形を呈し、長径153cm、短径135cm、深さ35cmを測り、土器小片が出土した。83・84は直口壺の口縁部と思われる。85は小片であるが、口縁端部に刻み目と円形浮文、上面に斜格子文がみられる。時期は、弥生中期中葉である。

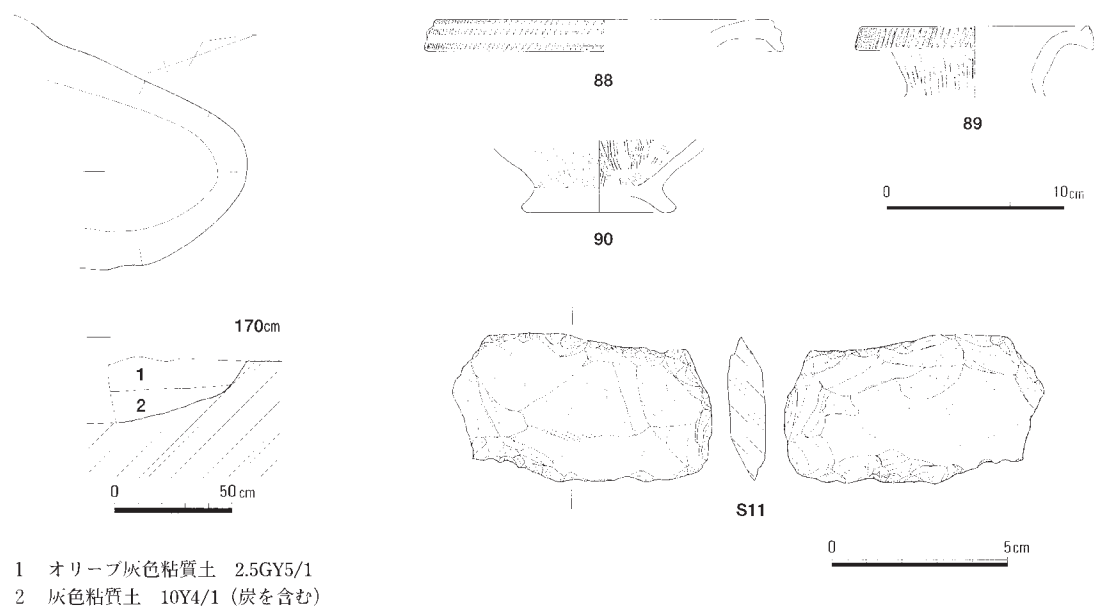


- | |
|------------------------------|
| 1 暗灰黄色粘性微砂質土 2.5Y5/2 (木炭を含む) |
| 2 暗灰黄色粘質土 2.5Y5/2 (木炭を含む) |

第63図 土壙5 (1/30) ・出土遺物 (1/4)

土壙6 (第41・42・64図)

0区南部に位置する土壙で、土壙7に南側を破壊されているため全形は明らかでないが、楕円形と推測される。深さは最大で21cmを測る。埋土中から、口縁端部に刻み目を有する壺88・89、台付鉢の脚部90、石包丁片と思われるS11が出土している。土器の形態からみて、土壙の時期は弥生中期中葉であろう。(岡本)



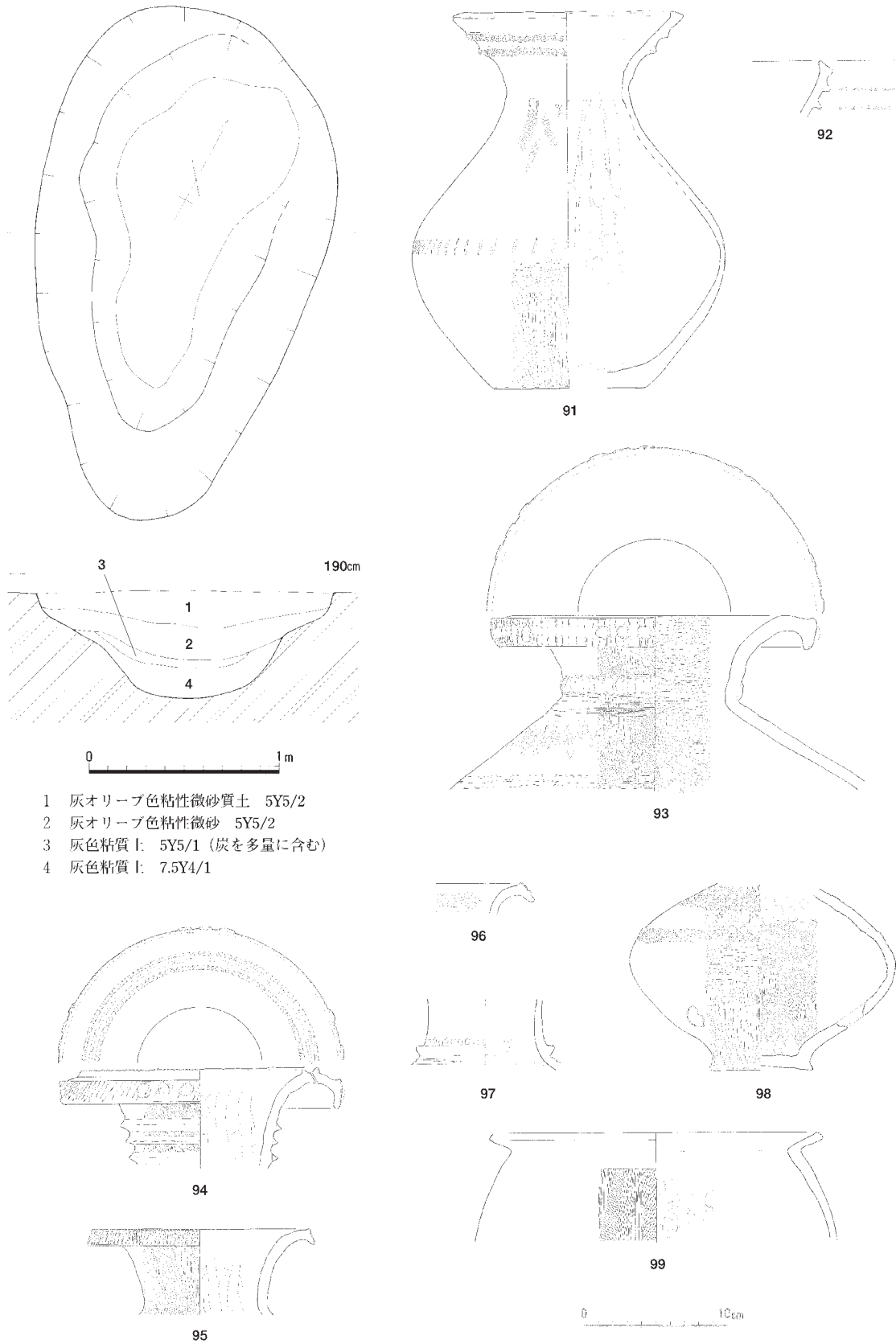
第64図 土壙6 (1/30) ・出土遺物 (1/4・1/2)

土壙7 (第41・42・65図、図版15・18)

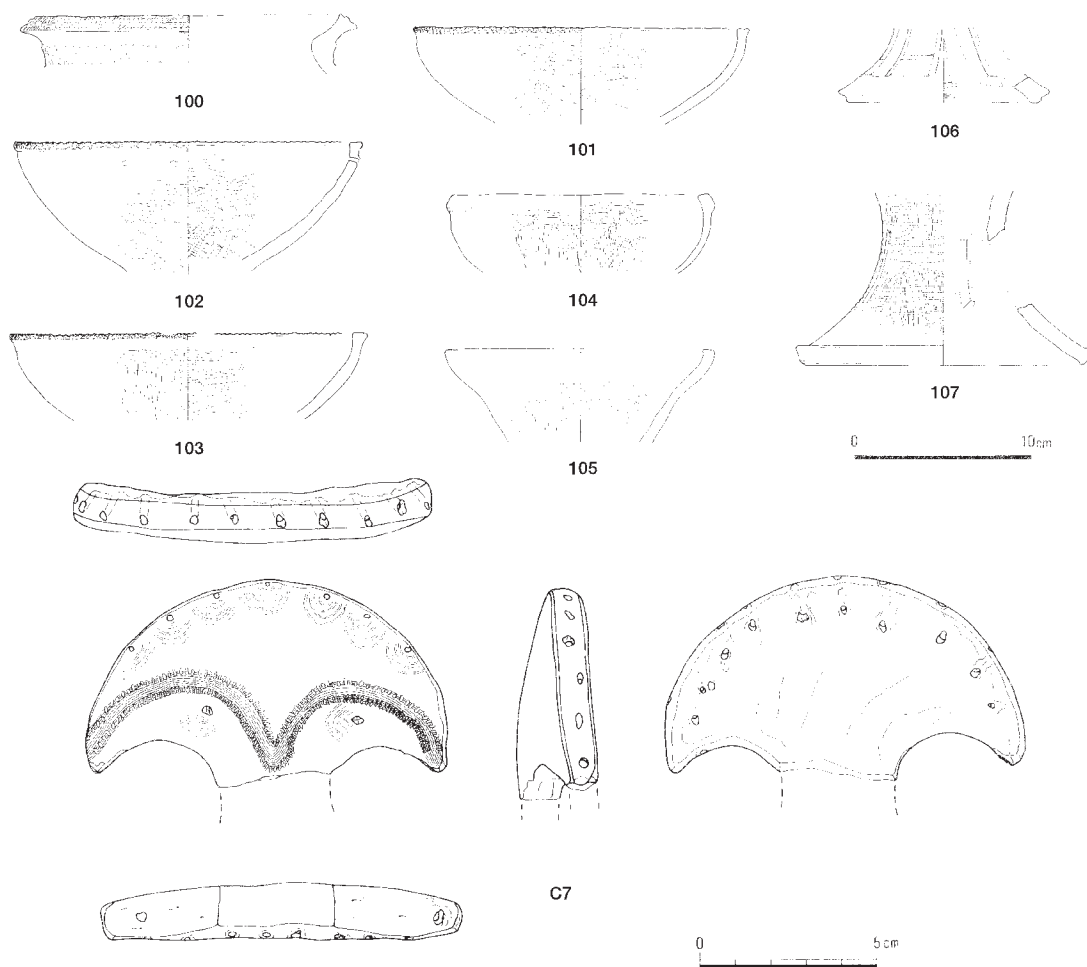
0調査区南側に位置する。当該調査区には、竪穴住居の存在は確認されなかったが楕円形を呈する土壙が数多く検出された。土壙7もその中のひとつで、長軸270cm・幅155cm・検出面の海拔180cmからの最深部の深さ55cmを測るもので、やや不定形気味の土壙であった。土壙は、底から検出面の途中に段を有し、このあたりを境に土層の埋積状況の変化が確認された。すなわち、中間層には炭を多く含んだ灰色粘質土が上層の比較的質の良い土層によりバックされた状況で検出され、意図的な埋没を推測させた。

土壙埋積土中特に中間層以下からは、比較的数多くの土器が出土した。なかには大形の破片も多く含まれており、壺の93・94等は、口縁部から頸部、さらには肩部をそのまま残したものであった。一方、壺98は、頸部以上を欠損するものの、肩部以下はすべて残存していた。注目すべきは、胴部下半に認められた2cm前後の穿孔である。外側からの力によって意図的に開けられた孔で、同様なものはC区土壙25にも認められ、祭祀的な意味合いが示唆される。

出土した土器には、壺91～98、甕99・100、高杯101～104・106・107、鉢105がある。壺には、口頸部に突帯文を巡らし、その上に指突によるキザミメ・円形浮文等で、肩部には櫛描き波状文で加飾されたものが多い。高杯の口縁部は端部を拡張しない。口縁部外面にはキザミメが認められる他、2孔一対の穿孔の認められる102も見られる。時期的には、脚部には新しい様相をもつ107が存在するが中期中葉の範疇で考えて差し支えない。



第65図 土坑7 (1/30)・出土遺物① (1/4)



第66図 土壌7出土遺物② (1/4・1/2)



第67図 土壌8 (1/30)

また、この他に注目される遺物に分銅形土製品とガラス滓の出土があった。

分銅形土製品は、下半を欠損するが最大幅10cmを計る大型品で、表面には櫛描き文様が、側面には裏面へと貫通する刺突孔が10か所と両端を挟み端部へと抜ける2か所の計12か所があった。

ガラス滓の成分等分析結果は、後述「津島遺跡出土のガラス滓の分析」のとおりである。 (島崎)

土壌8 (第41・42・67図)

O区の南東端に位置する土壌で、全体を検出していないため本来の形状は不明である。断面形は浅い皿状を呈する。埋土中から図示可能な遺物は出土していないが、検出層位や埋土から判断して周辺の土壌と同じく、弥生中期の遺構と考えられる。

土壌9 (第41・42・68図)

N区中央部に位置する土壌で、大部分は調査区外になる。検出時に上面を削平したためごく浅いが、調査区壁面の観察では10cm程度の深さがあった。弥生中期中葉の壺小片108が出土した。

土壌10 (第41・42・69図)

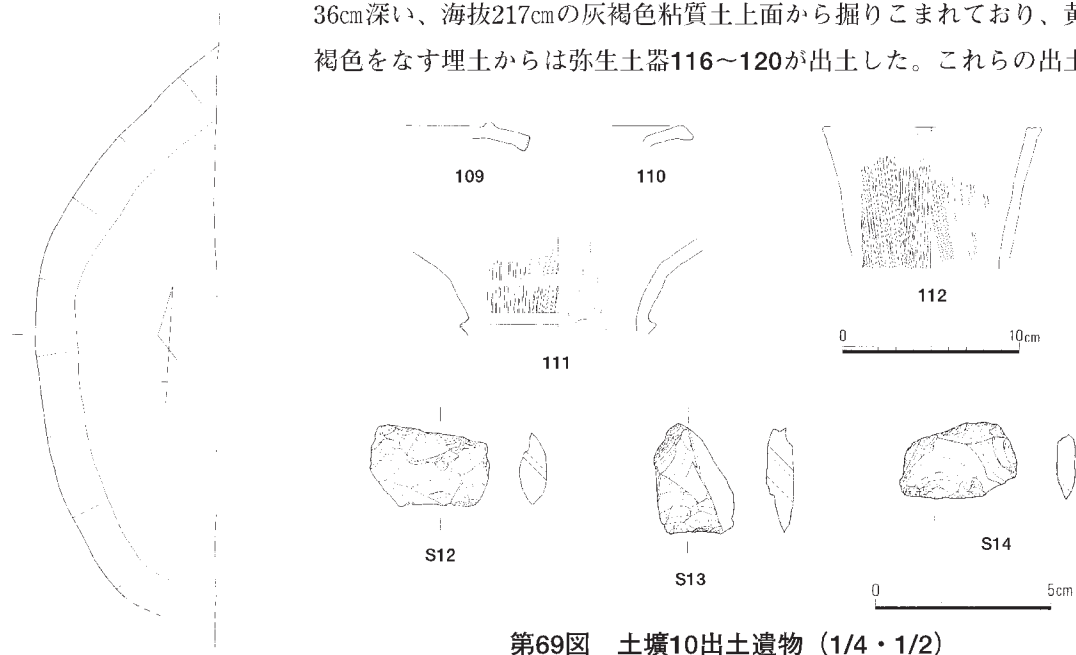
N区の南端近くで検出された。複数の土壌や柱穴が重複しているようであるが、調査区内で十分識別できなかったため1基の土壌として扱っている。遺物は、壺109~112および楔形石器S12~14が出土している。これらの遺物から、土壌の時期は弥生中期中葉に比定される。

土壌11 (第41・42・70図)

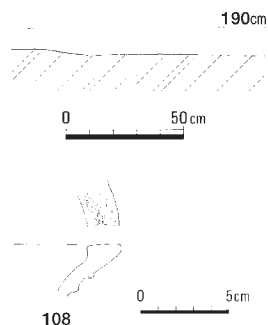
N区の南端部に位置する。南へ傾斜する遺構の北端部を検出したのみで、形状・規模は不明である。壺の胴部113は、最大径よりやや上に刺突文が施されている。114は壺口縁部の小片、115は口縁端部がやや上方につまみ上げられた甕である。時期は弥生中期中葉である。 (岡本)

土壌12 (第41・42・71図、巻頭図版3、図版12・19)

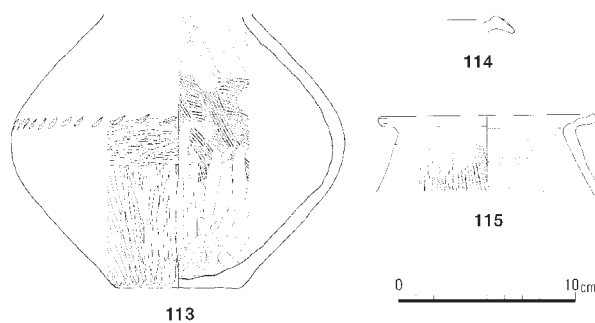
M区の西端に位置する土壌で、河道2の北東岸上層で検出した。南側は調査できなかったものの、現状から径178cmの円形をなすものと推定され、その深さは26cmを測る。上器棺墓1の検出面より36cm深い、海拔217cmの灰褐色粘質土上面から掘りこまれており、黄褐色をなす埋土からは弥生土器116~120が出土した。これらの出土



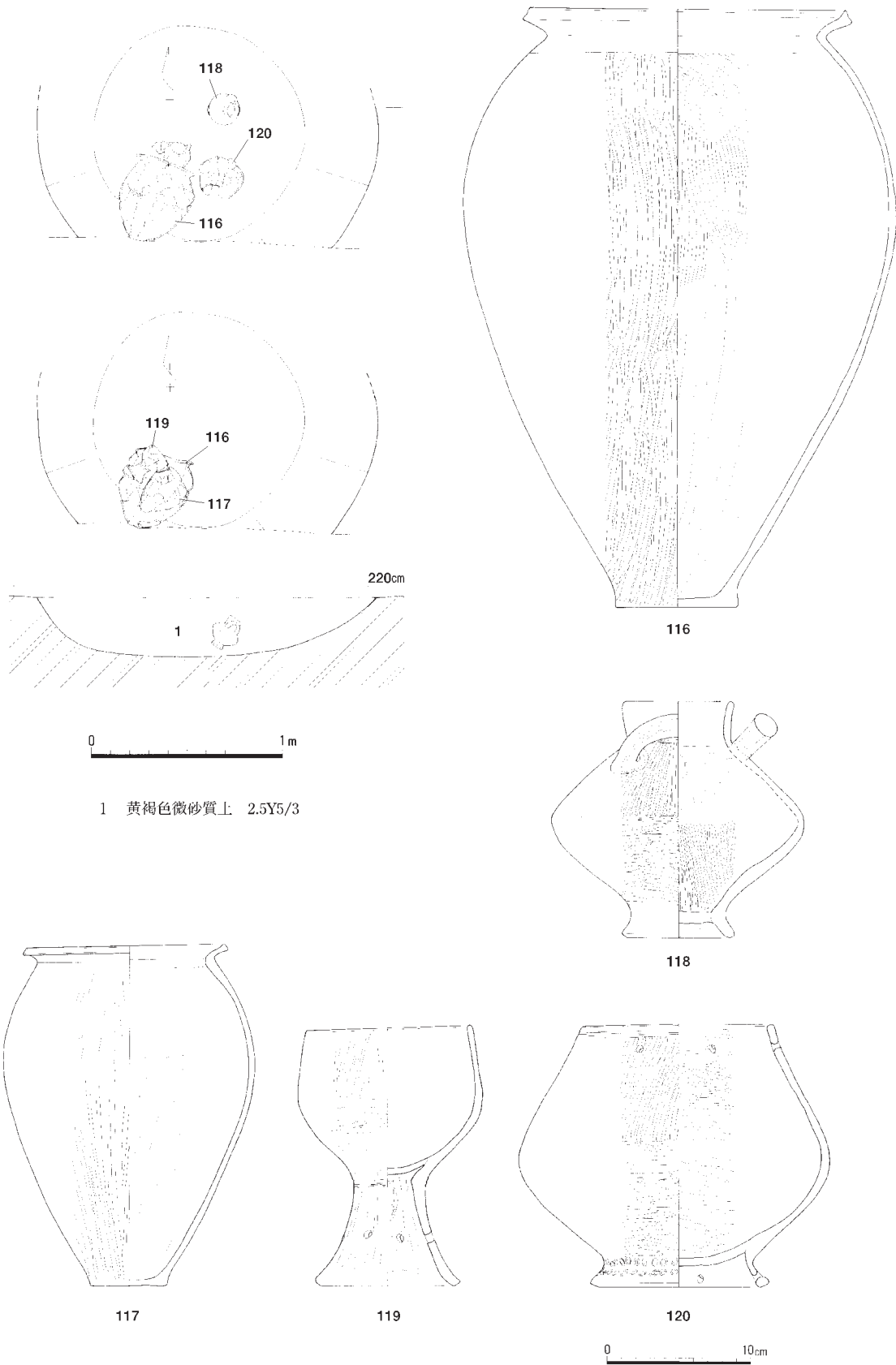
第69図 土壌10出土遺物 (1/4・1/2)



第68図 土壌9 (1/30)
・出土遺物 (1/4)



第70図 土壌11出土遺物 (1/4)

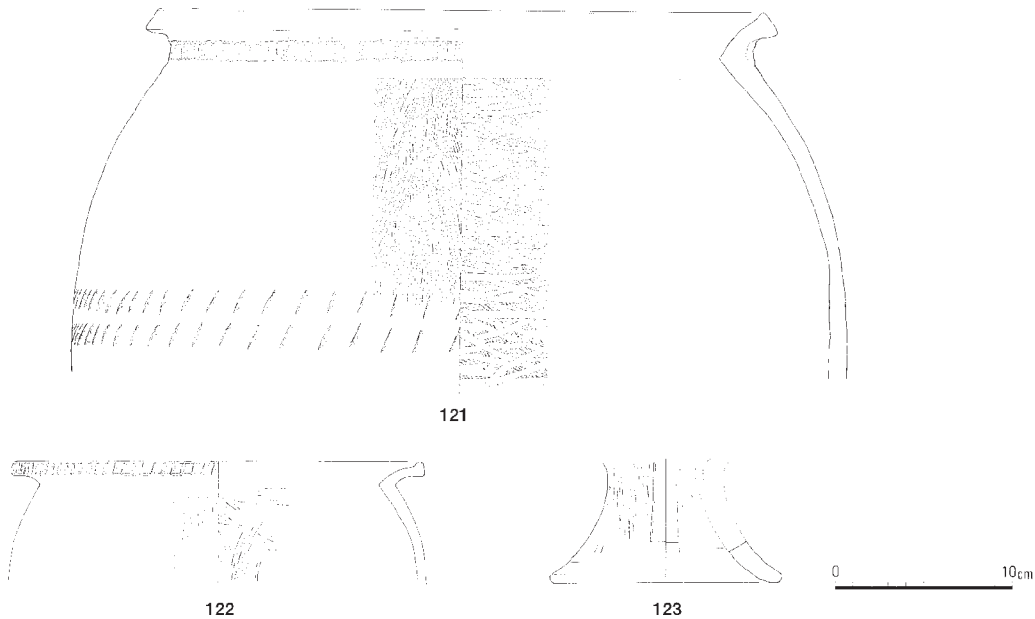
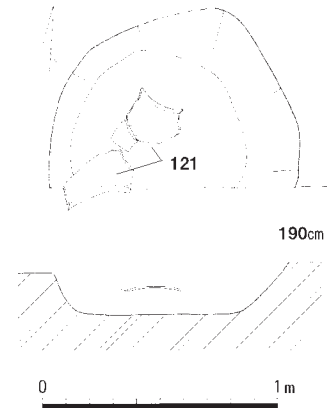


第71図 土壌12 (1/30) ・出土遺物 (1/4)

状況を見ると、墳底のほぼ中央に水差し**118**があり、その南側には横転する大形の甕**116**とこれに接するように短頸壺・台付鉢**120**が出土した。口径22cm、器高41.7cmを測る**116**の内部には、口径13.7cm、器高23.8cmの小形の甕**117**と口径11.2cm、器高18.2cmの高杯**119**が並ぶように納められており、前述の短頸壺はその口を塞ぐように据えられていた。甕**116**・**117**は外面をヘラミガキ、内面下半をヘラケズリで調整し、外反する口縁は端部を上方へつまみ上げる。直口の水差し**118**や無頸の鉢**120**は、いずれも算盤玉形の胴部に低い脚台を備えている。また高杯**119**は、深い杯部と透かし孔を飾る脚部からなる。これらは弥生中期中葉でも新しい様相を示すが、水差しや台付鉢など稀少な器種を含むとともに、その埋置状況からしても特殊な性格が想定される。(亀山)

土壙13 (第41・42・72図)

K S区(西)の西側で検出した土壙である。南側は側溝によって切られているが、ほぼ楕円形の平面形を呈していたと考えられる。規模は短径105cm、深さ22cmを測る。断面形は浅い皿状を呈しており、埋土は単一層であった。出土遺物には甕**121**・**122**、高杯**123**があり、遺物はいずれも底面から浮いた状態で出土している。**121**は口径が34cmの大形、**122**が口径22.8cmの小形の甕であった。いずれも内面にヘラミガキを施す。**123**は4方向に長方形のスカシが見られる。



第72図 土壙13 (1/30) ・出土遺物 (1/4)

土壙14 (第41・42・73図、図版18)

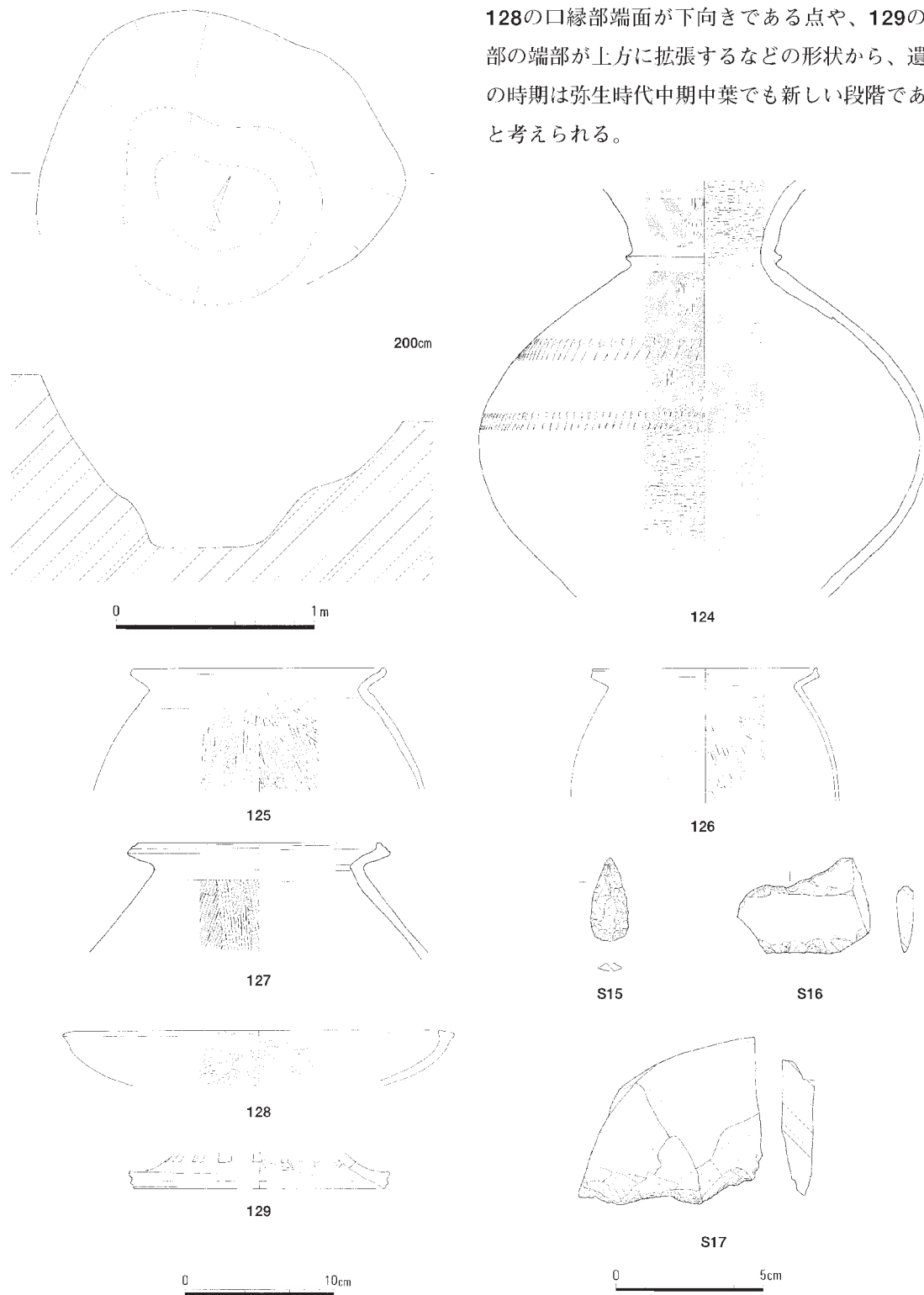
K S区(西)の西側寄りの部分で検出した土壙で、土壙15と東側で重複しており、切りあい関係から土壙15より古いと考えられる。南側は側溝によって切られているが、不整形の平面形を呈していたと考えられる。検出面での規模は長径170cm、深さ87cmを測り、断面形は途中に段を設け、底面は

第3章 発掘調査の概要

不整形であるが平らである。埋土は土層断面の観察から暗灰黄色粘質土の単一層で、炭を多く含むものであった。出土遺物は破片ではあるが多く出土しており、壺124、甕125～127、高杯128・129、

石鏃S15、スクレイパーS16・S17などがある。

128の口縁部端面が下向きである点や、129の脚部の端部が上方に拡張するなどの形状から、遺構の時期は弥生時代中期中葉でも新しい段階であると考えられる。

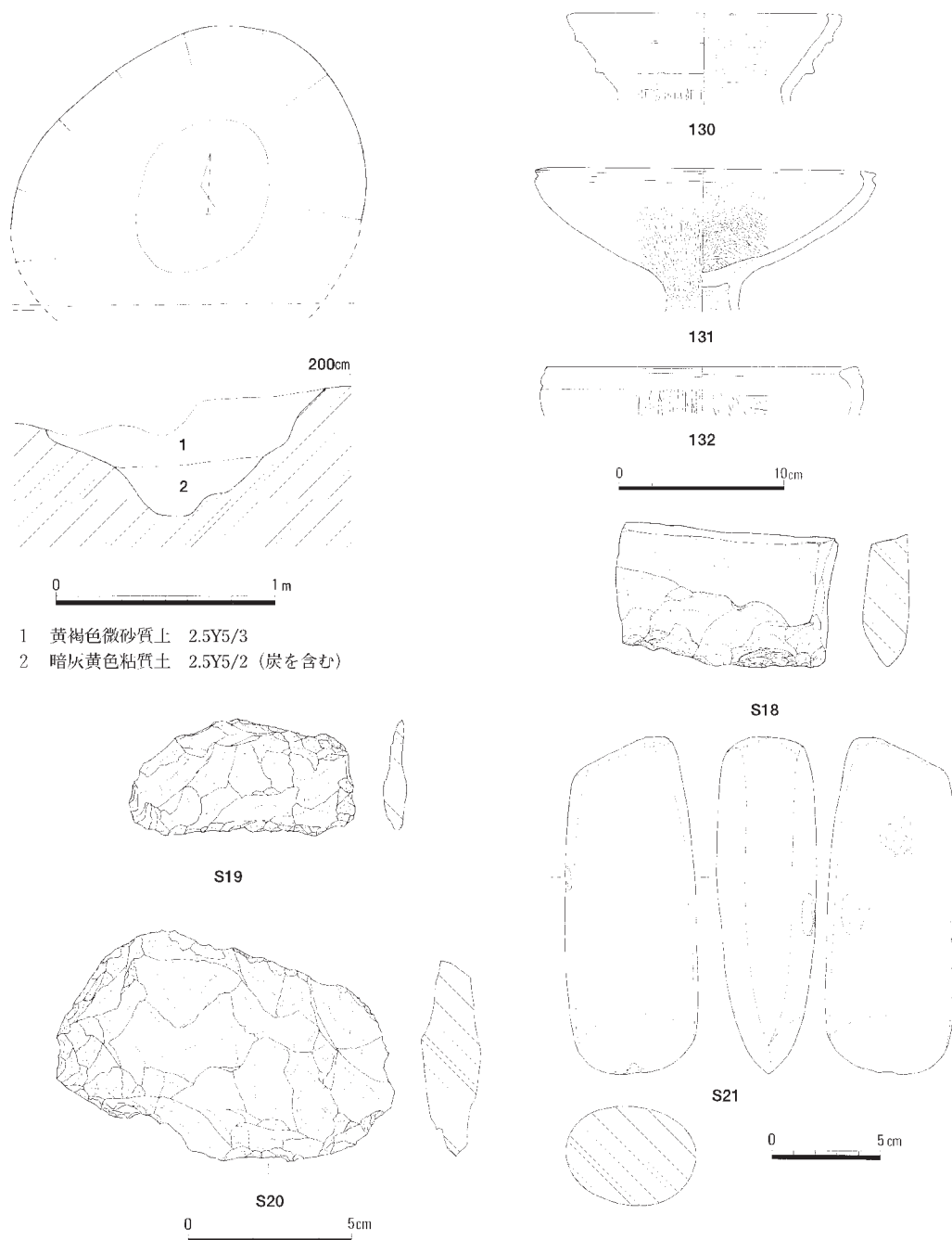


第73図 土壌14 (1/30) ・出土遺物 (1/4・1/2)

土壌15 (第41・42・74図、図版19)

K S区 (西) の西寄りの部分で検出された円形を呈すると考えられる土壌で、南側は側溝によって削平されており、西側に位置している土壌14を切っている。規模は長径160cm、深さ53cmを測り、壁面には多少の凹凸が見られる。

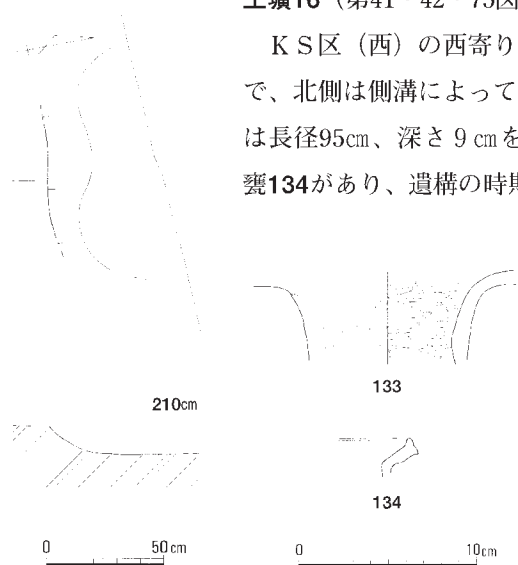
出土遺物には、壺130、高杯131・132、打製石包丁 S18 やスクレイパー S19・S20、磨製石斧 S21 などがある。131・132の口縁部には凹線がめぐることから、土壌の時期は弥生時代中期後葉であると考えられ、130のように様相の古いものが混じっている。



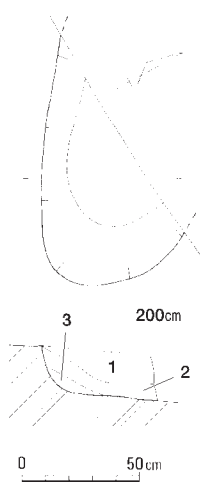
第74図 土壌15 (1/30) ・出土遺物 (1/4・1/2・1/3)

土壌16 (第41・42・75図)

K S区 (西) の西寄りの部分で検出された楕円形を呈すると考えられる土壌で、北側は側溝によって削平されているため一部分の検出にとどまった。規模は長径95cm、深さ9cmを測り、断面形は浅い皿状である。出土遺物は壺133、甕134があり、遺構の時期は弥生時代中期である。 (團)



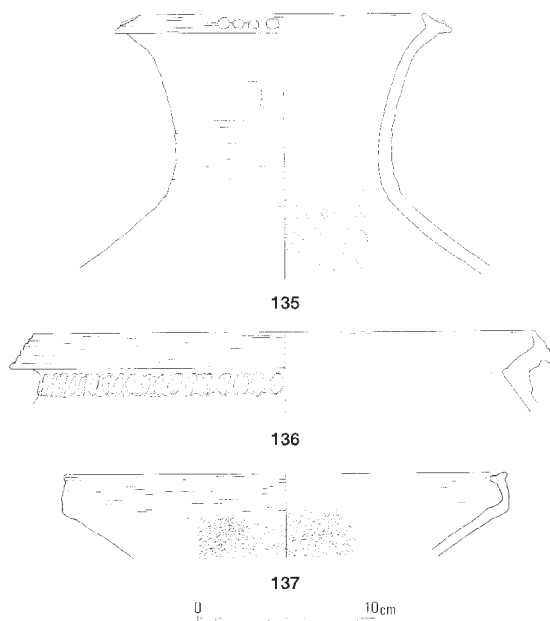
第75図 土壌16 (1/30) ・出土遺物 (1/4)



- 1 灰オリーブ色微砂質土 5Y4/2
- 2 灰色粘質土 5Y4/1 (炭を含む)
- 3 灰オリーブ色粘質土 5Y5/2

土壌17 (第41・42・76図)

K S区の西部に位置し、南側のみが検出された土壌である。形状は細長い楕円形と推定され、深さ18cmを測る。出土土器は、壺135・甕136で口縁端部の上下への拡張が顕著な点、高杯137の端部がほぼ直立し外面に凹線文が施される点などから、弥生中期後葉に属すと思われる。周囲の土壌よりも時期の降る遺構である。



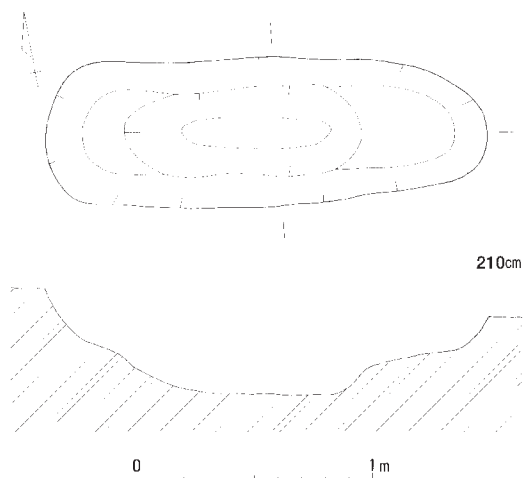
第76図 土壌17 (1/30) ・出土遺物 (1/4)

土壌18 (第41・42・77図)

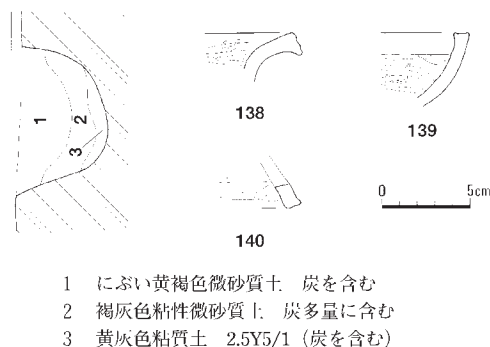
土壌17の南側に位置し、主軸を東南東-西北西に向ける楕円形の土壌である。長さ187cm、幅61cmを測り、中央部は楕円形に深く掘り込まれ深さ37cmを測る。埋土には炭が多く含まれ、特に第2層では顕著であった。出土した土器小片138~140より、土壌の時期は弥生中期中葉である。 (岡本)

土壌19 (第41・42・78図)

K S区 (西) で検出した土壌で、北側を側溝によって切られているが、方形を呈すると考えられる土壌である。出土遺物には甕141がある。口縁端部は上方にやや拡張している。この遺物から、遺構の時期は弥生時代中期後葉であると考えられる。



第77図 土壌18 (1/30) ・出土遺物 (1/4)



- 1 にふい黄褐色微砂質土 炭を含む
- 2 褐灰色粘性微砂質土 炭多量に含む
- 3 黄灰色粘質土 2.5Y5/1 (炭を含む)

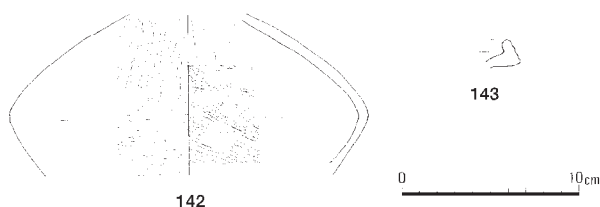
土壌20 (第41・42・79図)

K S区 (西) で検出した、円形を呈すると思われる土壌である。規模は短径110cm、深さ27cmを測る。出土遺物には壺142・143などがあり、遺構の時期は、弥生時代中期後葉であると考えられる。

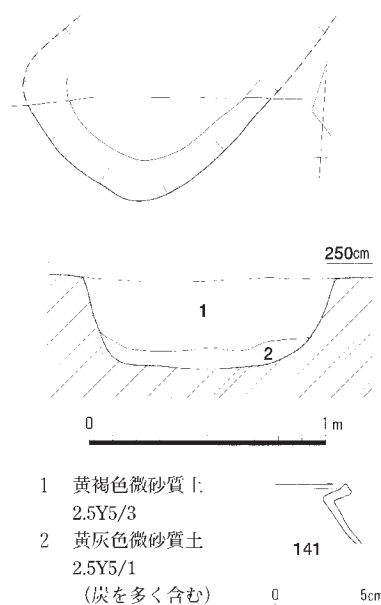
土壌21 (第41・42・80図)

K S区 (西) の東側で検出した平面形が不整円形を呈している土壌であり、南側の上端の一部が側溝によって削平されている。

規模は長径126cm、深さ13cmを測り、断面の形状は浅い皿形を呈する。出土遺物は認められないものの、検出レベルが他の弥生時代中期の遺構と同レベルであることから、当該時期のものであると考えられる。

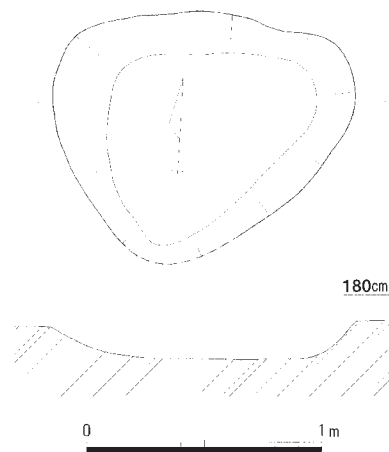


第79図 土壌20 (1/30) ・出土遺物 (1/4)



- 1 黄褐色微砂質土 2.5Y5/3
- 2 黄灰色微砂質土 2.5Y5/1 (炭を多く含む)

第78図 土壌19 (1/30) ・出土遺物 (1/4)



第80図 土壌21 (1/30)

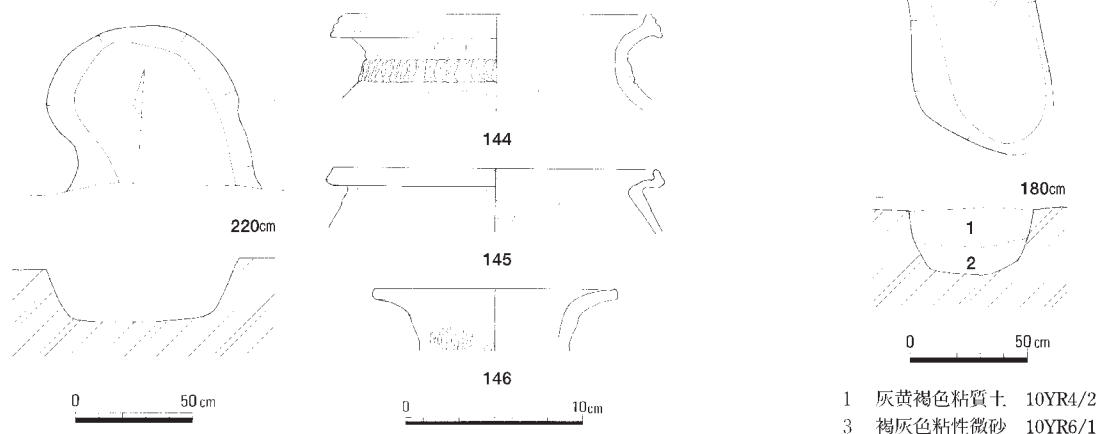
土壙22 (第41・42・81図)

K S区(西)の東側で検出された土壙で、南側は側溝によって削平されている。規模は短径83cm、深さ26cmを測り、平面形は不整円形を呈していて底面は平らである。

出土遺物には甕145、壺144・146などがある。144の頸部には指頭圧痕文突帯が巡る。この遺構の時期は、弥生時代中期中葉であると考えられる。(團)

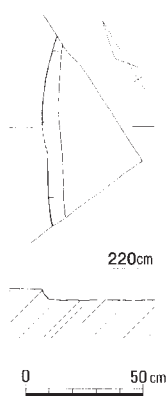
土壙23 (第41・43・82図、図版8)

K S区の東端部で検出された不整楕円形の土壙である。長さは126cm、幅55cmを測り、断面は逆台形を呈し深さ28cmを測る。遺物は出土していないが、検出層位・埋土から弥生中期の遺構と判断される。(岡本)



第81図 土壙22 (1/30)・出土遺物 (1/4)

第82図 土壙23 (1/30)



第83図 土壙24
(1/30)

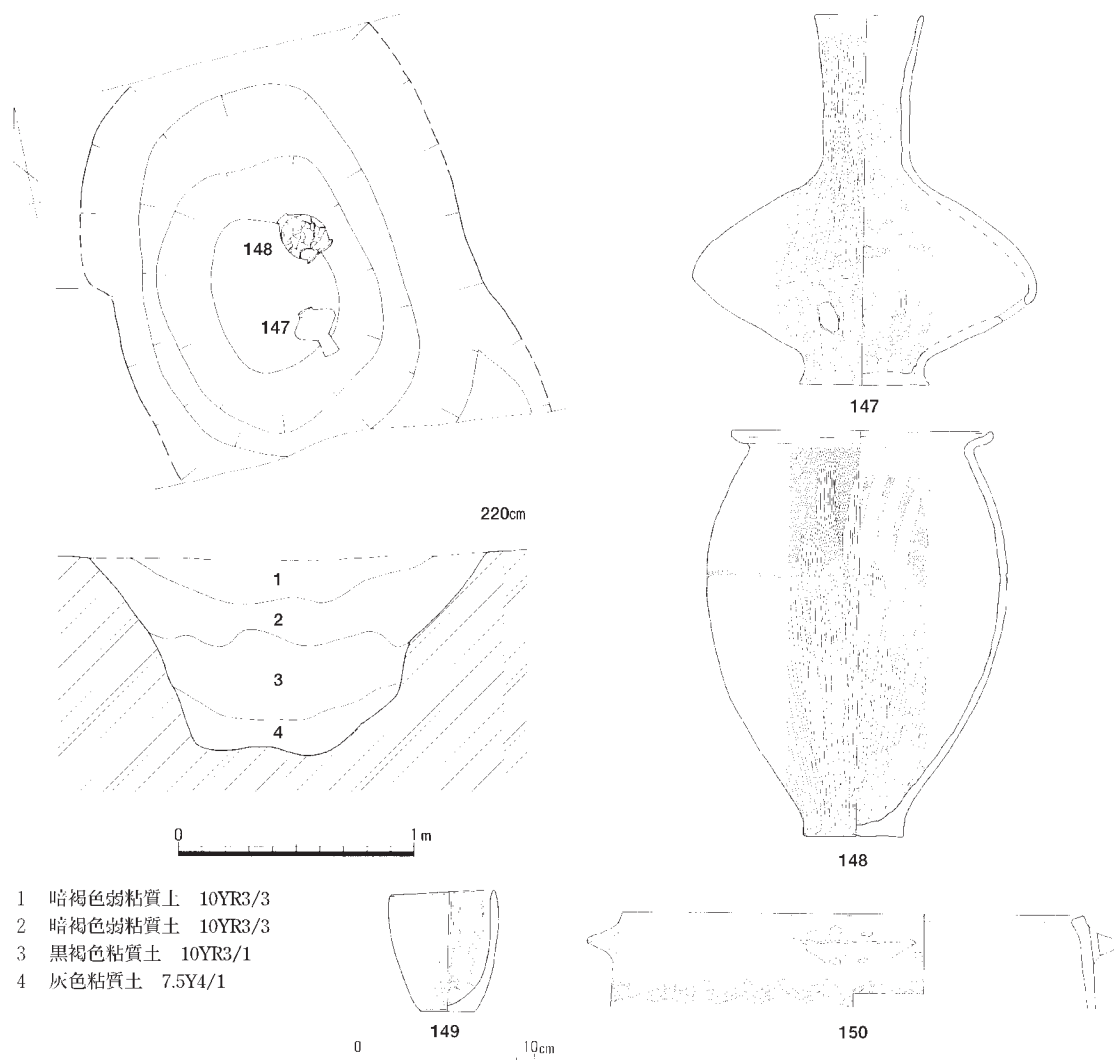
土壙24 (第41・43・83図)

土壙24はI区南東隅で検出した。大半が調査区外になり、形状は不明な点が多く、遺物もない。ただし、隣接する土壙墓2と同じ主軸をとることから、墓の可能性もあるが、土壙墓2と底面の差が25cmあり、性格は不明。時期は埋土と検出層位から弥生時代中期と考えられる。

土壙25 (第41・43・84図、図版2・19)

土壙25はC区中央に位置する。土壙26に切られている。平面形は、南北推定200cm、東西約150cmの楕円形を呈し、検出面からの深さは約80cmを測る。埋土は下層ほど粘性が強く、断面形は上部に向かって大きく開く形状である。井戸の可能性もある。

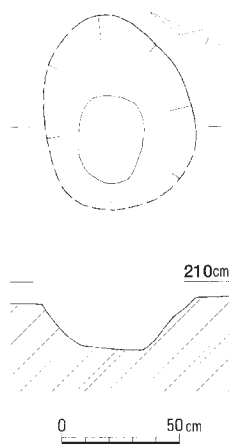
出土遺物は少なく、147は完品の浅黄橙色を呈する直口壺で、埋土上層から出土。算盤玉形の体部下半に穿孔している。体部最大径はやや下方寄りである。底部は屈曲して突出する。149は埋土上層から出土したにぶい黄橙色を呈する手捏ねの甕で、口縁部がわずかに欠損している。148はにぶい黄橙色を呈する甕で、第1層から出土。ほぼ完形に復元された。口縁端部上面がわずかに窪む。150は第3層出土の甕あるいは鉢で、浅黄橙色を呈し、口縁部外面に把手が付く。把手には2か所に円孔がある。把手の下方には波状文が巡る。土壙25の時期は出土土器の形態から弥生時代中期中葉と推定される。



第84図 土壌25 (1/30) ・出土遺物 (1/4)

土壌26 (第41・43・85図)

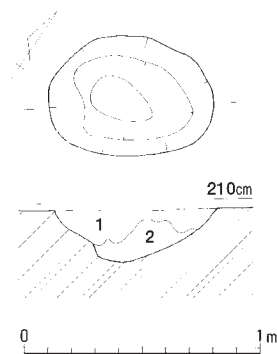
C区中央に位置し、土壌25の埋土を切る。平面形は約80×65cmの楕円形を呈し、検出面からの深さは、約20cmを測る。埋土は暗褐色土で、土壌25の埋土とよく似ている。遺物の出土はない。時期は埋土や検出層位から弥生時代中期と推定される。



第85図 土壌26 (1/30)

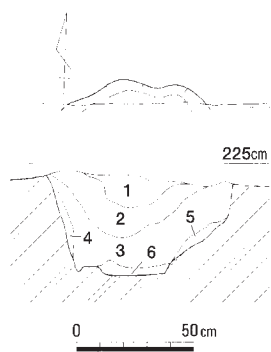
土壌27 (第41・43・86図)

土壌27はC区中央に位置する。平面形は約70×50cmの楕円形を呈し、検出面からの深さは約20cmを測る。遺物の出土はない。時期は、埋土と検出層位から弥生時代中期と推定される。



- 1 黒褐色弱粘質土 10YR2/2
 (炭粒やや多く含む)
 2 暗褐色砂質土 10YR3/3
 (黄色土ブロックを多く含む)

第86図 土壌27 (1/30)



- 1 灰褐色砂質土 10YR4/1
- 2 黒褐色弱粘質土 10YR3/1
- 3 黒褐色弱粘質土 10YR3/1
(黄色土ブロックを含む)
- 4 灰褐色弱粘質土 10YR4/1
- 5 黒褐色弱粘質土 10YR3/1
- 6 黒褐色弱粘質土 10YR3/1
(黄色土ブロックを多く含む)

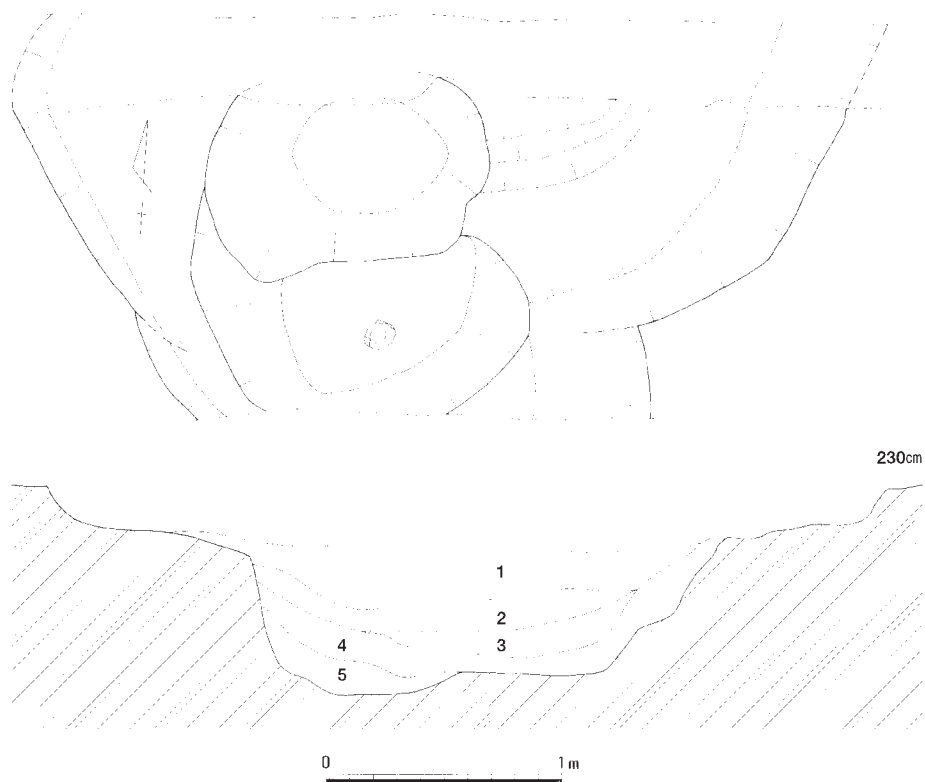
第87図 土壌28 (1/30)

土壌28 (第41・43・87図)

土壌28は、C区の南壁沿いで検出した。土壌の大半は調査区外になり、形状、規模、主軸など不明である。しかし、検出面からの深さは約42cmと深く、壁も垂直に近い。また、中央に沈み込むような埋土層が観察されたことから、木棺墓の可能性はある。時期は埋土と検出層位から、弥生時代中期と推定される。

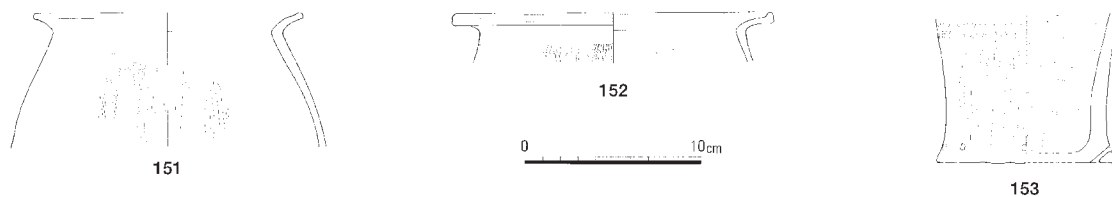
土壌29 (第41・43・88・89図)

土壌29はB区西部に位置する。検出当初、2つの土壌が切り合っているものと思われたが、平面では前後関係を識別できず、断面土層と底面の形状から、結果的に3つの土壌が重複しているものと判断した。断面図の第1～4層で示される推定直径350cmの円形を呈する土壌が新しく、これに切られて、南側の比較的浅い土壌と、断面図第5層に相当する長軸約100cmの楕円形土壌がある。出土土器は、一番新しい土壌埋土上層から少量出土。時期は弥生時代中期中葉。



- 1 黒褐色粘質土 7.5YR3/2
- 2 黒褐色粘質土 2.5Y3/1
- 3 暗青灰色粘質土 5BG3/1
- 4 暗青灰色粘質土 5BG3/1 (青色砂のブロックを含む)
- 5 青黒色粘質土 5BG2/1 (青色砂のブロックを多く含む)

第88図 土壌29 (1/30)



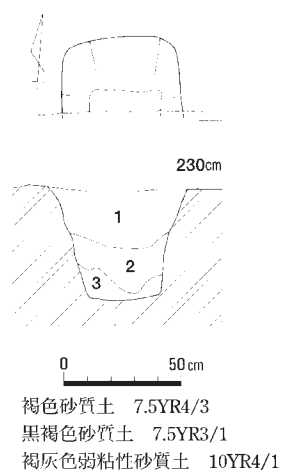
第89図 土壌29出土遺物 (1/4)

土壌30 (第41・43・90図)

土壌30はB区西部に位置する。南半が調査区外になるが、主軸を南北にとる長方形あるいは方形を呈する土壌と推定される。規模・形状から墓の可能性はある。弥生時代中期と考えられる。

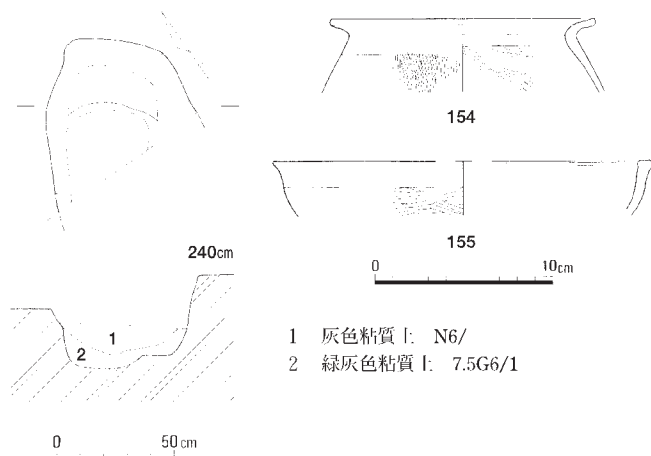
土壌31 (第41・43・91図)

B区東端部に位置する。長方形を呈する土壌と推定され、底面には段がある。墓の可能性もあるが、断定はできない。混入土器片の特徴から、土壌31の時期は弥生時代中期中葉と推定される。(物部)



- 1 褐色砂質土 7.5YR4/3
- 2 黒褐色砂質土 7.5YR3/1
- 3 褐灰色弱粘性砂質土 10YR4/1

第90図 土壌30 (1/30)



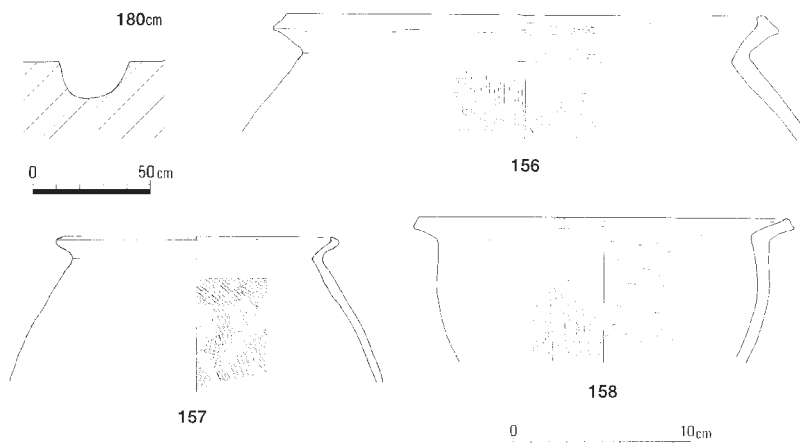
- 1 灰色粘質土 N6/
- 2 緑灰色粘質土 7.5G6/1

第91図 土壌31 (1/30)・出土遺物 (1/4)

5 溝

溝8 (第41・42・92図)

N区南端に位置し、南西から北東へ流れる溝である。幅は最大で35cm前後である。図では南西端部が途切れているが、壁面の観察ではさらに南西へ続いている。出土遺物には甕156・157、鉢158などがある。甕の口縁端部が上方への拡張をみせ



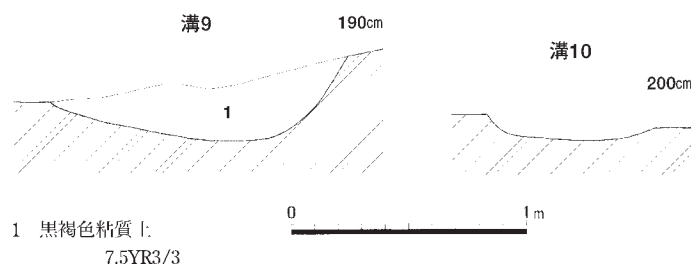
第92図 溝8 (1/30)・出土遺物 (1/4)

ることなどから、時期は弥生中期中葉の後半と考えられる。

(岡本)

溝9 (第41・42・93図)

M区の西を北西から南東に流下し、さらにL西区に連なる状況で検出された溝。幅は最大245cm、深さ56~68cmを測る。遺物の出土はないが、検出状況から考えて、弥生時代中期。



第93図 溝9・10 (1/30)

溝10 (第41・42・93図)

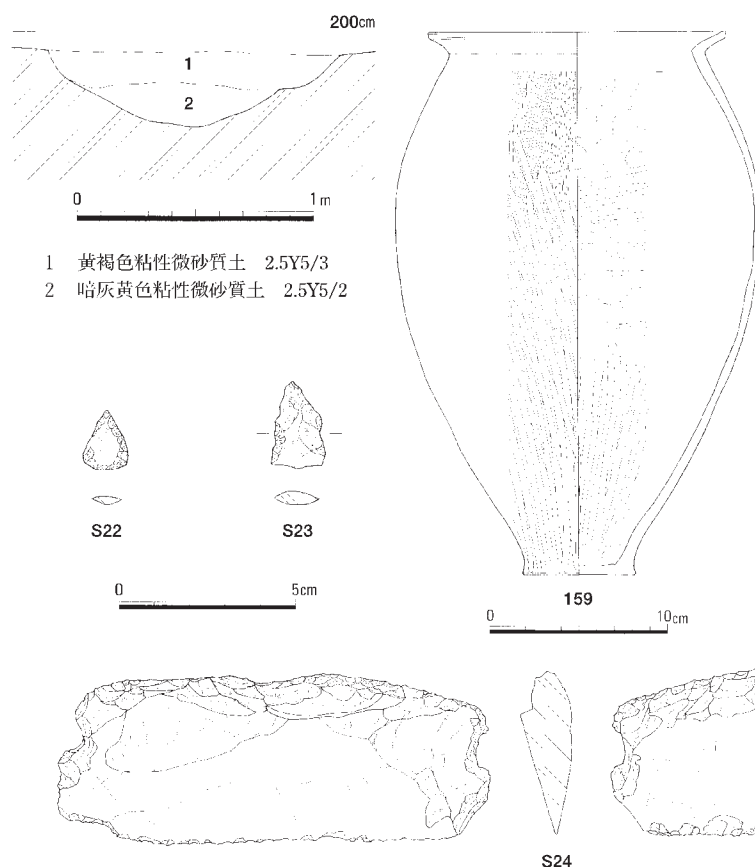
M西区中央で検出された。溝9の東を平行し、北西から南東に流走する。幅は最大77cm、深さ6~9cmを測る。遺物は出土していないが、検出層位から、弥生時代中期とした。(尾崎)

溝11 (第41・42・94図、

図版19)

K S区(西)の西側、土壙13の東側で検出された溝で、北西から南東方向のものである。規模は検出面で幅57~75cm、深さ32cmを測るもので、断面形は浅い椀状を呈している。

出土遺物には甕159、石鏃S22・23、石包丁S24がある。遺物から、この溝の時期は弥生時代中期中葉と考えられる。(團)



第94図 溝11 (1/30)・出土遺物 (1/4・1/2)

溝12 (第41・42・95図)

K S区の東端に位置し、土壙18の上面を切って南東に流れる溝である。西側の肩が一部損壊しているが、溝の最大幅は約52cm、深さは4~5cmを測る。出土遺物は土器小片のみで、検出層位等も併せて弥生中期の遺構と判断される。

溝13 (第41・43・95図)

K N区東端に位置する南北溝で、溝14・16とも調査区外でつながる可能性がある。幅・深さとも大規模で、複数の溝が重複した状態を示すものと思われる。時期は弥生中期と推測される。

溝14 (第41・43・95図)

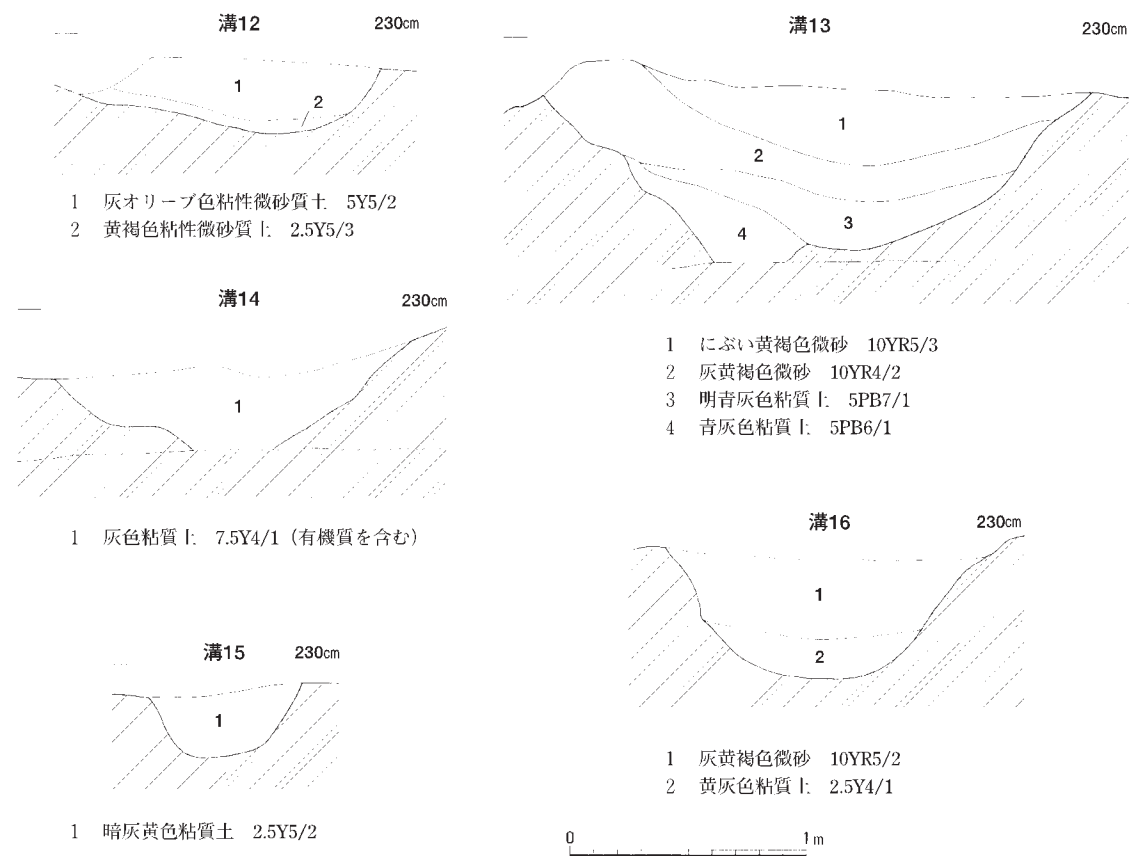
K S区の東端に位置し、北西から南東に流れる溝である。流路の方向は東隣の溝15とほぼ同一である。遺物は出土していないが、検出層位から弥生中期の遺構と推測される。

溝15 (第41・43・95図)

K S区の東端に位置し、土壙23を切って溝14と同じく北西から南東に流れる。溝の幅は45~63cm、深さは32cmを測る。遺物は出土していないが、弥生中期の遺構と推測される。

溝16 (第41・43・95図)

J区南端で検出された東西溝である。検出範囲の西半部では底面が急激に落ち込んでおり、他の土壙が切り合っている可能性もある。この溝も遺物がみられないが、弥生中期と推測される。(岡本)



第95図 溝12~16 (1/30)

溝17・18 (第41・43・96図)

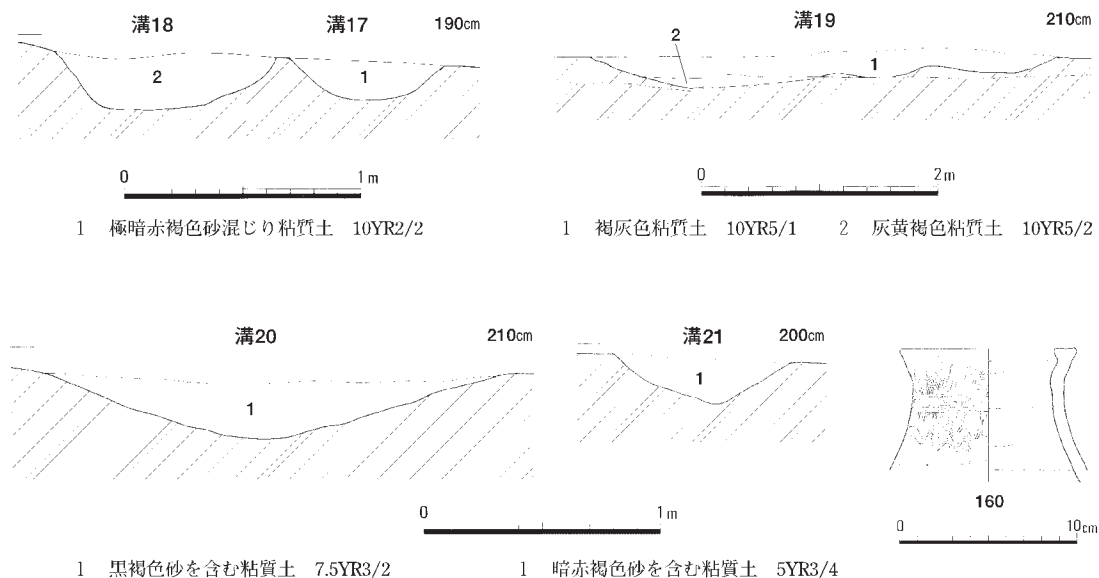
溝17と溝18はI区北端の東西壁の土層断面観察から、北東から南西方向にほぼ2条が平行となって流れていたと想定される。また、P区北端付近で認められた溝状遺構と、これらのいずれかが対応すると思われるが判然としない。時期は層位から弥生時代中期頃と考えられる。

溝19～21 (第41・43・96図)

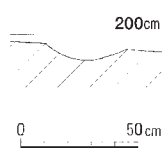
溝19～21はF・G区の東側を、北東から南西方向へ流れていたと思われる。溝19の断面状況ではあまり判然としないが、溝20と溝21のように溝が本来は多条であったことが窺える。溝21は底面が段堀り状であり、遺物は壺160が出土している。時期は弥生時代中期中葉と思われる。

溝22 (第41・43図)

溝22は溝19～21から派生した溝と考えられる。特に溝22東側の溝の床面は、溝21の特徴と類似する。流路はB区東側の溝に対応すると思われ、時期は弥生時代中期頃であろう。(澤山)



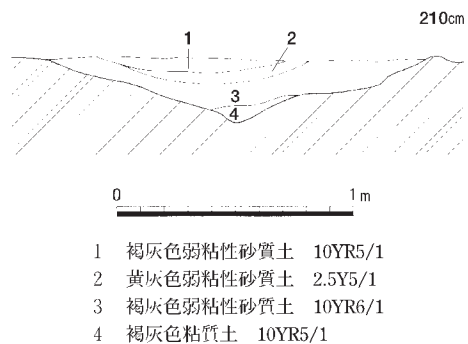
第96図 溝17～21 (1/30・1/60)・溝21出土遺物 (1/4)



溝23 (第41・43・97図)

B区西半部には、北東—南西方向に併走する幅約6mと11mのたわみがあり、溝23は、幅の広い方のたわみの西側肩部からやや下がった位置で検出した。検出層位から弥生時代中期と推定される。

第97図 溝23 (1/30)



第98図 溝24 (1/30)

溝24 (第41・43・98図)

溝24はB区西部、溝23のあるたわみ中央部で検出したが、たわみと主軸を異にする。弥生前期に比定される黒色土を切る。弥生時代中期と考えている。(物部)

6 焼土面

焼土面1 (第41・42・99図)

O区南半部において、赤褐色を呈する焼土塊の面が5か所検出された。検出状況は住居の火処を想起させ、周囲の柱穴などと有機的な関連を有する可能性も高いが、調査区内では確実に伴う遺構を特定することは

きなかった。遺物はほとんど伴わないが、検出面などから判断して時期はいずれも弥生中期である。

焼土面1は最も北に位置し、厚さ約3～4cmの板状をなす焼土塊が東西2群に分かれて検出された。西端部は側溝に切られて欠損する。焼土塊の表面は不規則な凹凸を有し、被熱によって赤褐色に固く焼け締まっていた。焼土内から遺物は出土していない。

焼土面2 (第41・42・99図)

土壌3の北東に位置する。厚さ3cm前後の焼土塊が6個程度集中して検出された。焼土塊は中央に空間を残し、南北65cm、東西50cmの楕円形状をなして分布している。個々の焼土塊は、上面が内側に傾斜する傾向が認められた。遺物は伴っていない。

焼土面3 (第41・42・99図)

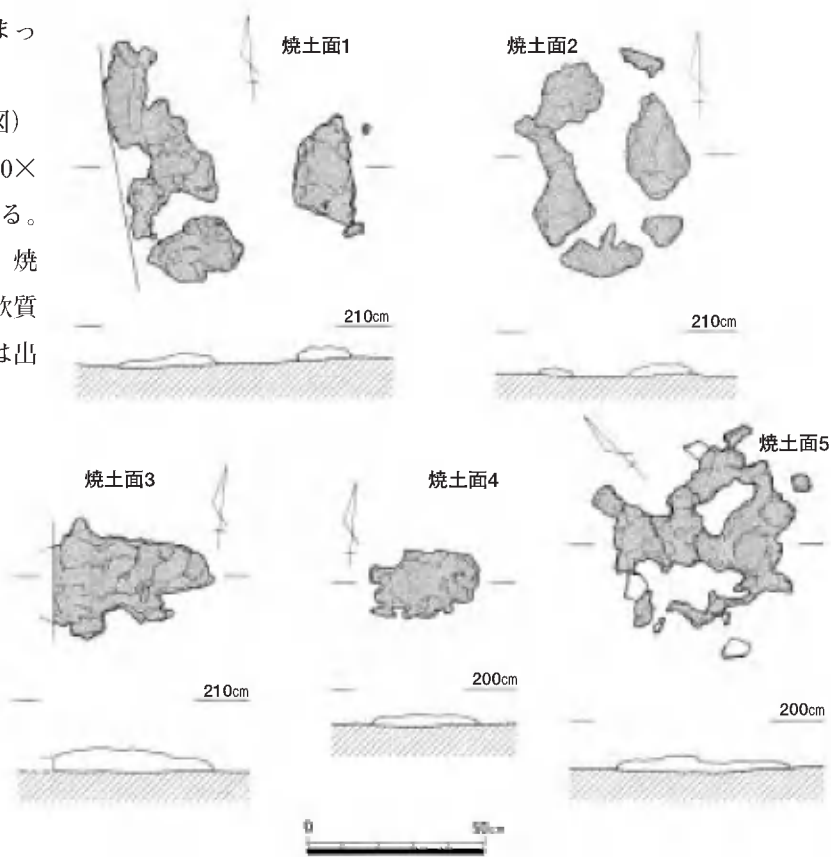
土壌2の西に位置し、西端部を側溝によって欠損する焼土面である。焼土塊の厚さは最大で約6cmと他に比べて厚く、上面はほぼ平坦で赤褐色に焼け締まっている。出土遺物はない。

焼土面4 (第41・42・99図)

土壌4の北に位置する20×32cmの小さな焼土面である。色調はやや灰褐色を帯び、焼土面1～3に比べてやや軟質である。焼土内から遺物は出土していない。

焼土面5 (第41・42 ・99図)

土壌7の北に位置する。厚さ2～5cm程度の焼土塊が内部に2か所の空間を残して集中しているが、全体としては円形に近い範囲におさまる。焼土内からは弥生中期の土器小片が出土した。

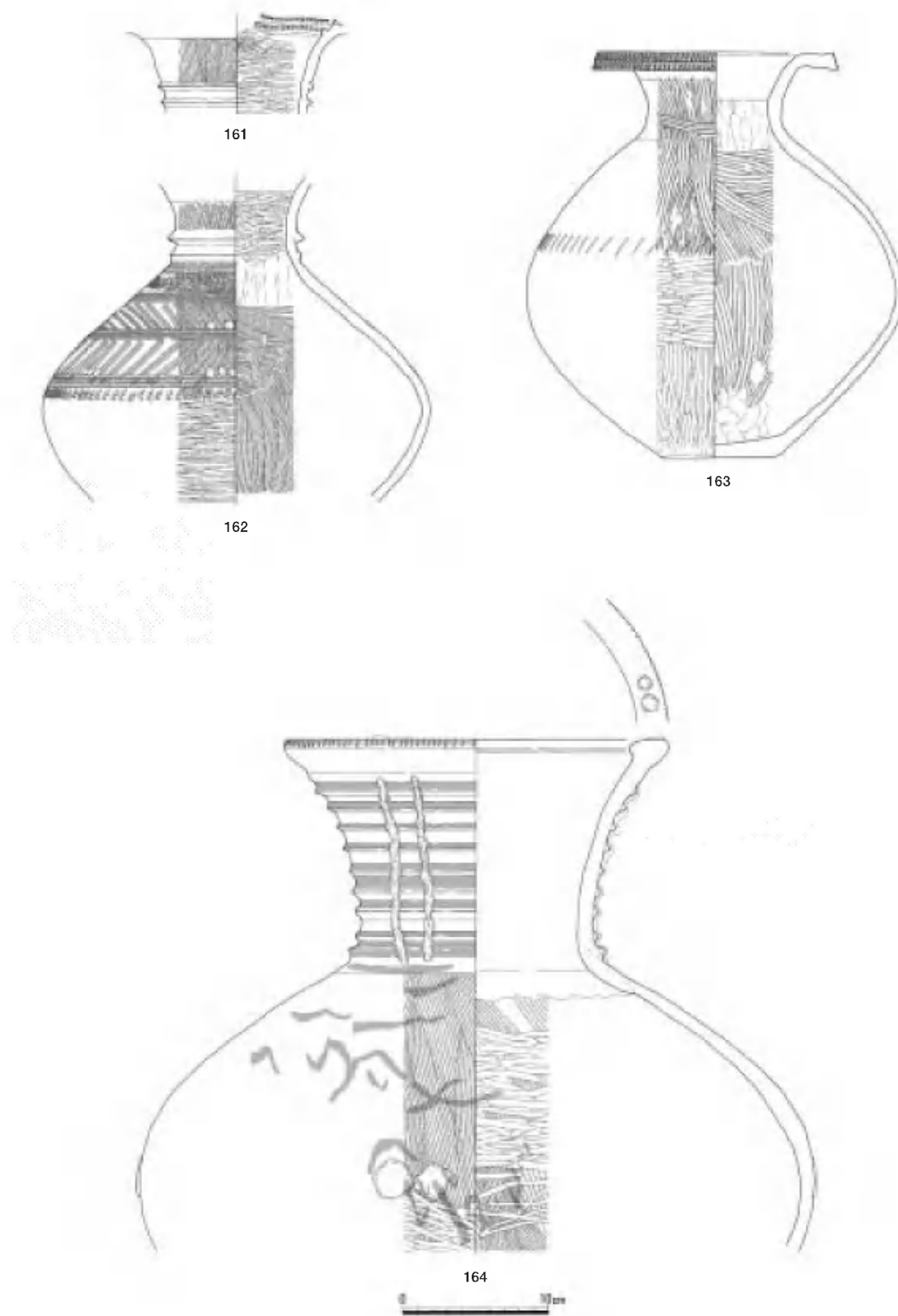


第99図 焼土面1～5 (1/20)

7 河道

河道2 (第41・42・100図、図版20)

調査区を北西から南東に横断して流れる河道で、上流側はL～O区、下流側はKN・KS区で断片的に検出されている。前節で述べた通り、その出現は前期に遡ると考えられるが、調査範囲の制約により下層部にまで調査が及ばなかったため、確認できた遺物は中期のものに限られる。河道の幅は30m前後を測り、この範囲で流路位置を移動しながら兩岸の集落と併存していたと考えられる。他の



第100図 河道2出土遺物 (1/4)

調査区ではこの河道の上流部は把握できないが、南池調査区の北端部で検出された中期河道（河道2）に繋がる可能性もある。その場合、両河道の分岐点は南池と児童遊園地の間と想定される。

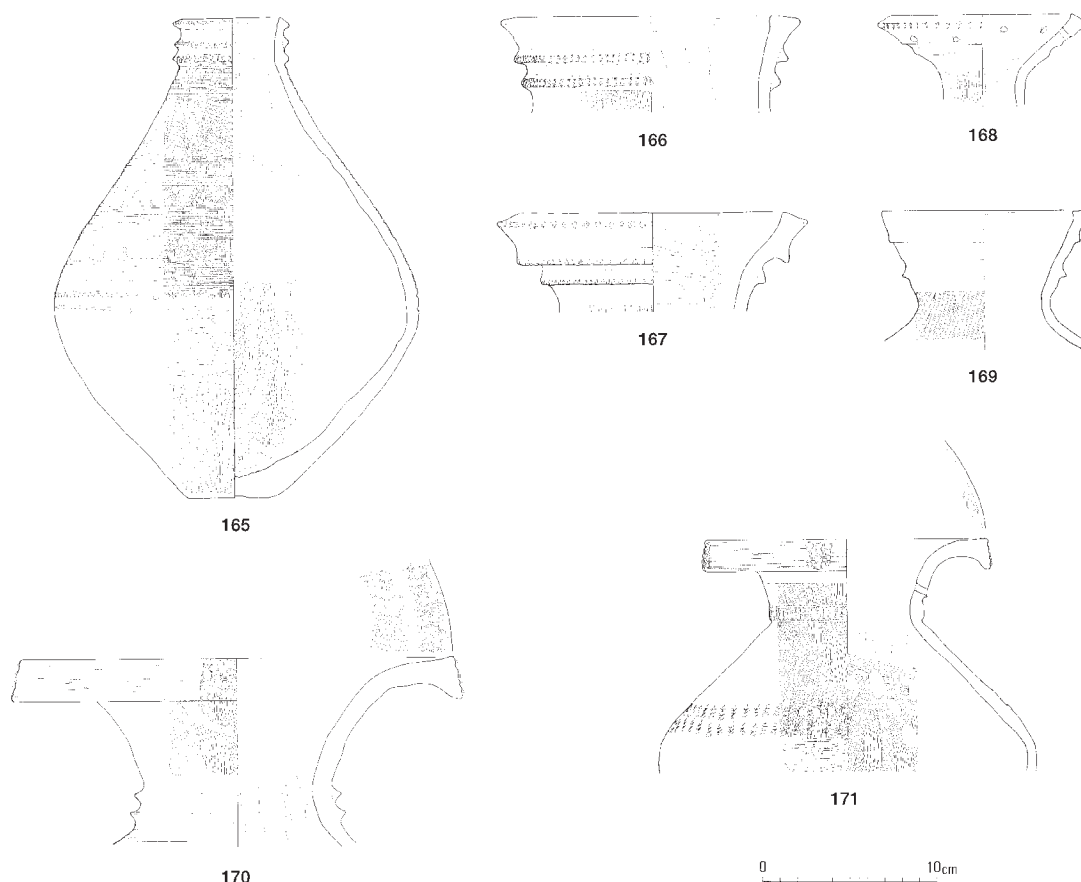
埋積土上層から土器類が出土しているが量は少なく、その大部分はO区に集中し、図示した4点の壺もいずれもO区出土である。161は頸部に2条の突帯が巡るほか、口縁部内面に刻み目突帯が2条貼り付けられている。162は頸部に2条の突帯が巡り、肩部から上には櫛描きの直線文・波状文、刺突文、円形浮文など豊富な装飾が施されている。163はほぼ完形に復元されたもので、胴部・頸部の装飾は簡素であり、口縁端部には凹線文と刻み目が施される。164は、頸部に9条の突帯と長い棒状浮文が付く、特異な形態をした大形の壺である。また、平坦な口縁部上面と胴部にも円形浮文が貼り付けられている。さらに、頸部では各突帯の上面や突帯間の谷間部分に、胴部では不鮮明ながら籠目状に赤色顔料（未同定）の塗布が認められ、日常使用する土器とは異なる性格が示唆される。以上の土器は、弥生中期中葉に比定される。（岡本）

8 遺構に伴わない遺物

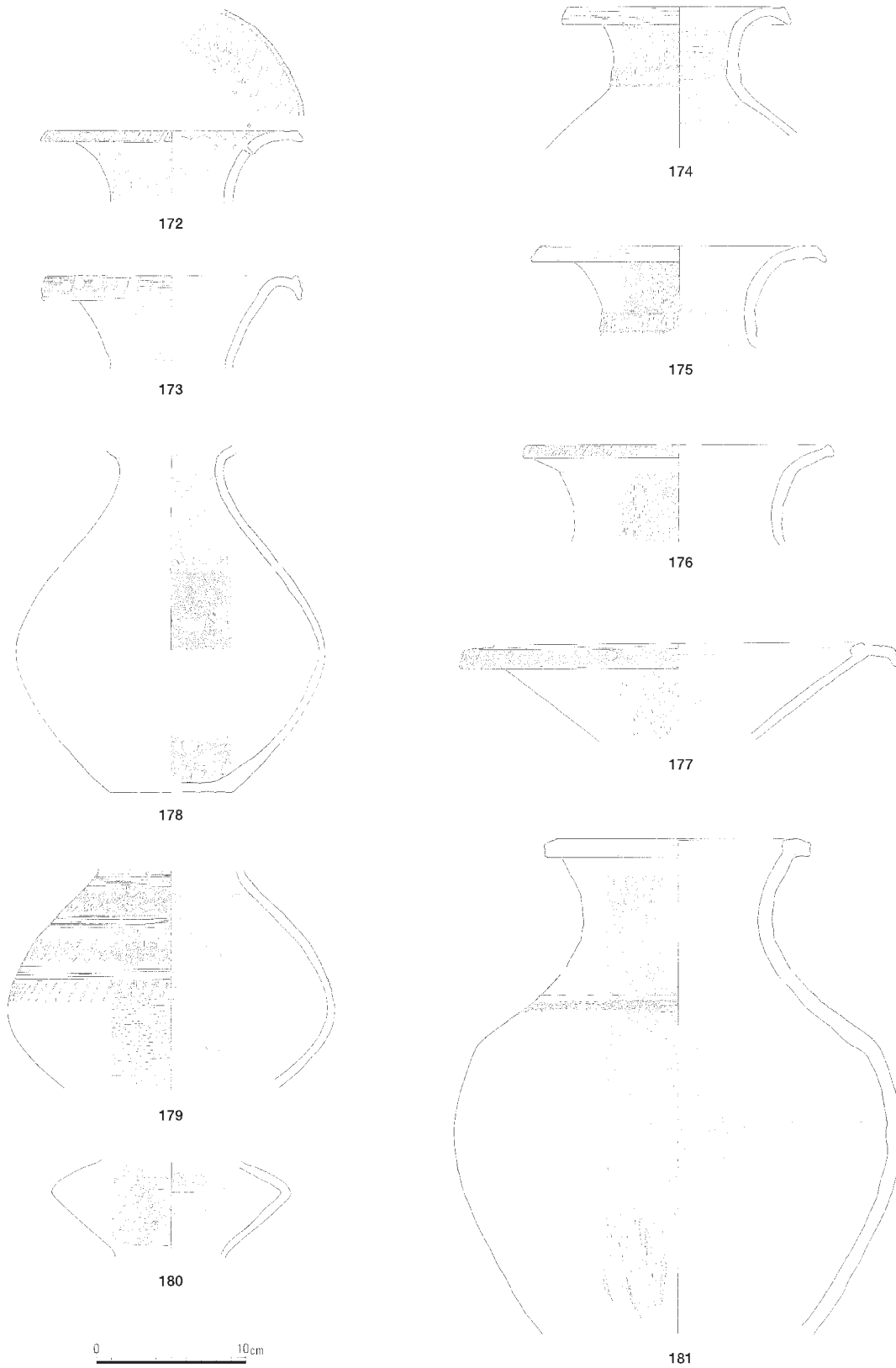
遺構に伴わない遺物（第101～111図、図版20～22）

土器・土製品

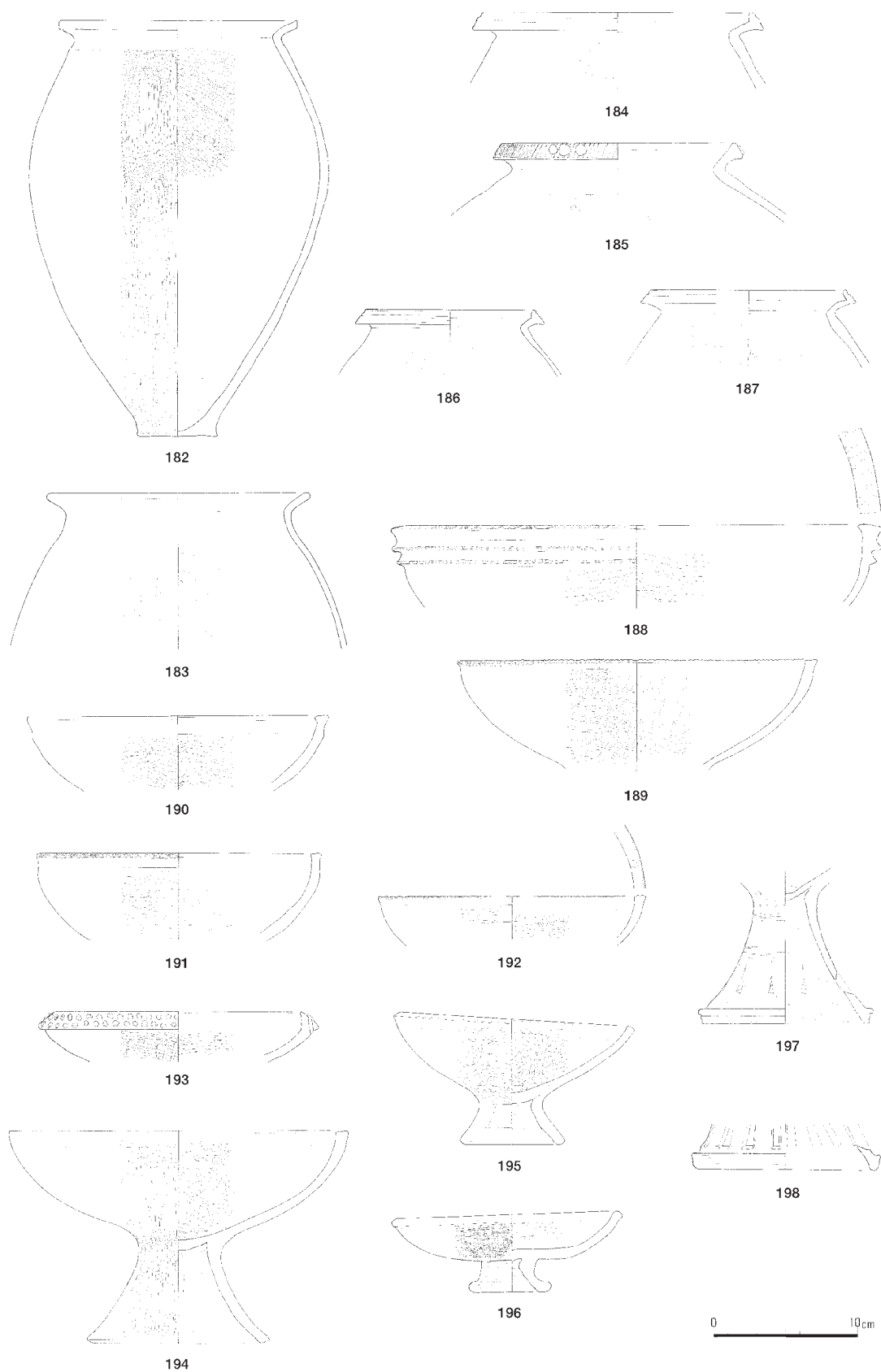
遺構に伴わない土器は、同時期の遺構が多く見つかったO区・KS区（西）・B区から出土し、特



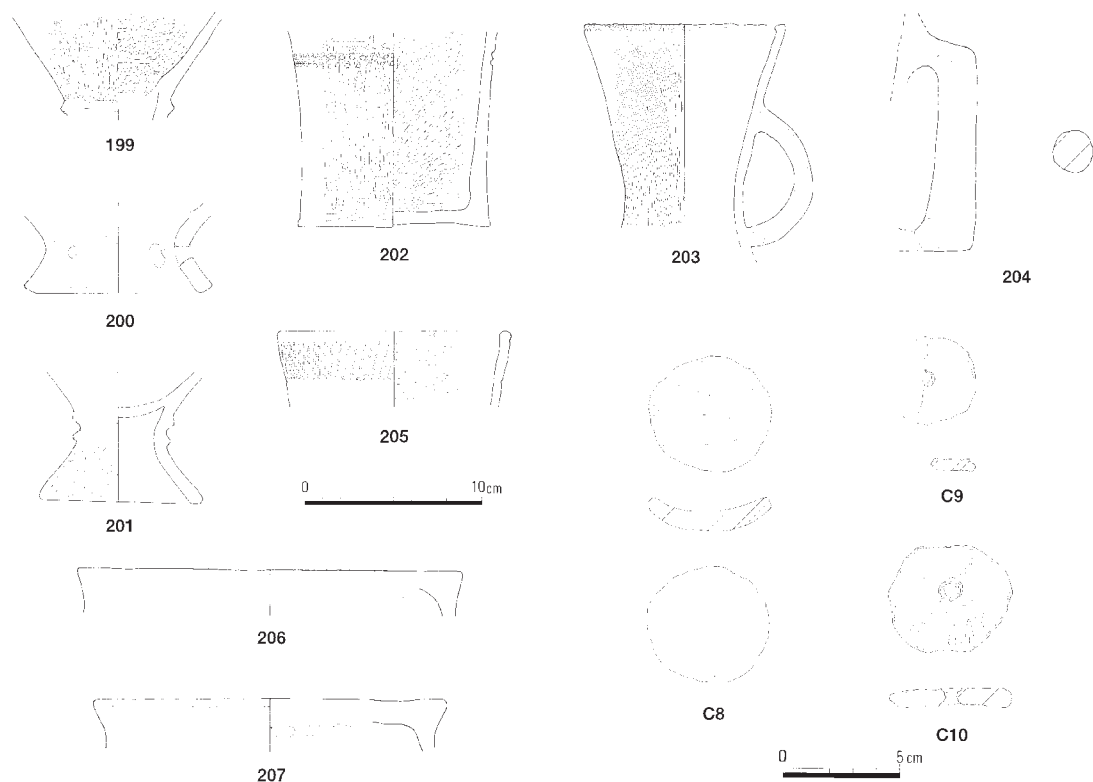
第101図 遺構に伴わない遺物①（1/4）



第102図 遺構に伴わない遺物② (1/4)



第103図 遺構に伴わない遺物③ (1/4)



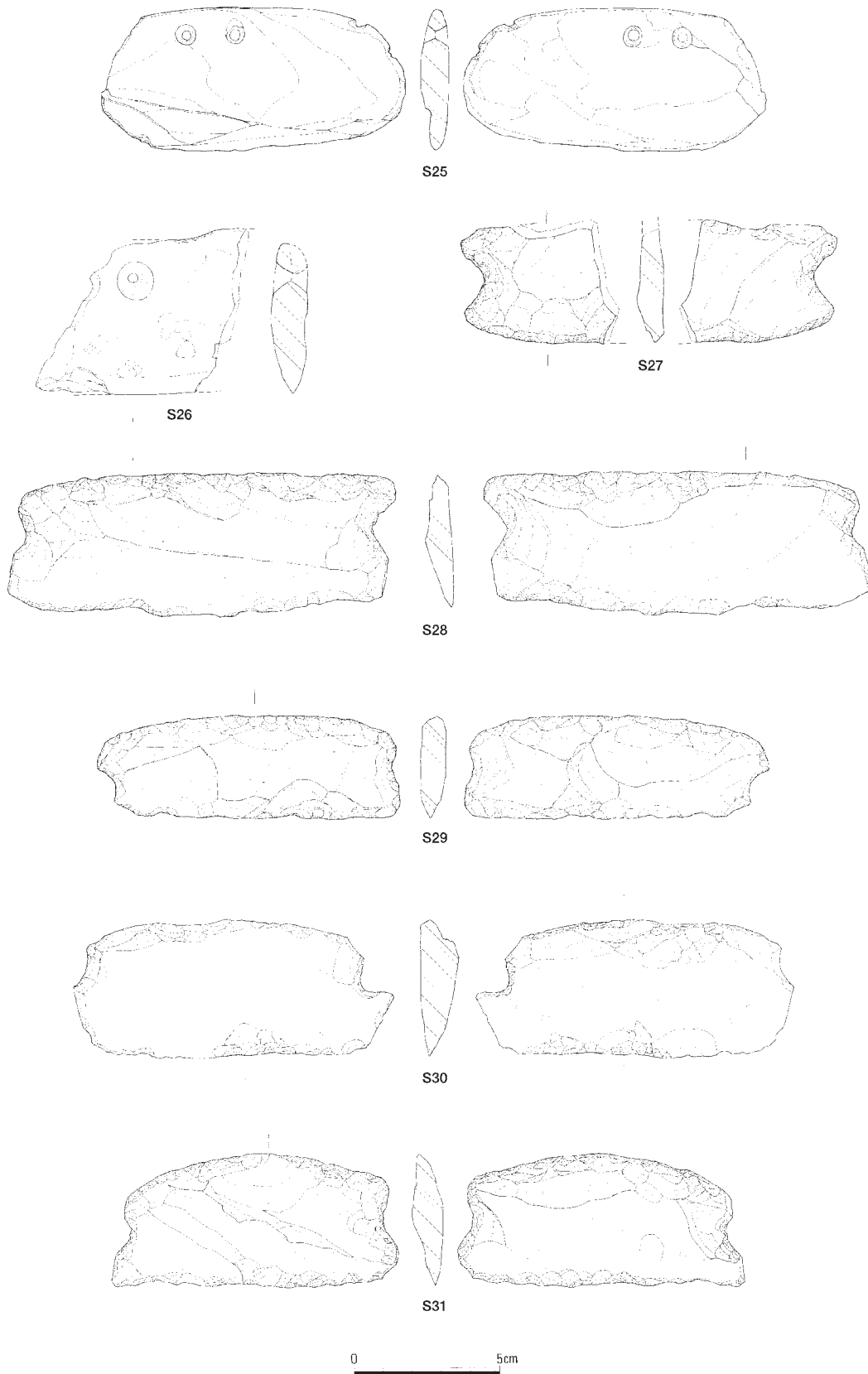
第104図 遺構に伴わない遺物④ (1/4・1/3)

にO区から多く出土している。出土遺物には、壺165～181、甕182～187、高杯188～199・201、台付鉢200、ジョッキ形上器202～205、回転台形上器206・207、円盤形上製品C8、上製紡錘車C9・C10などがある。

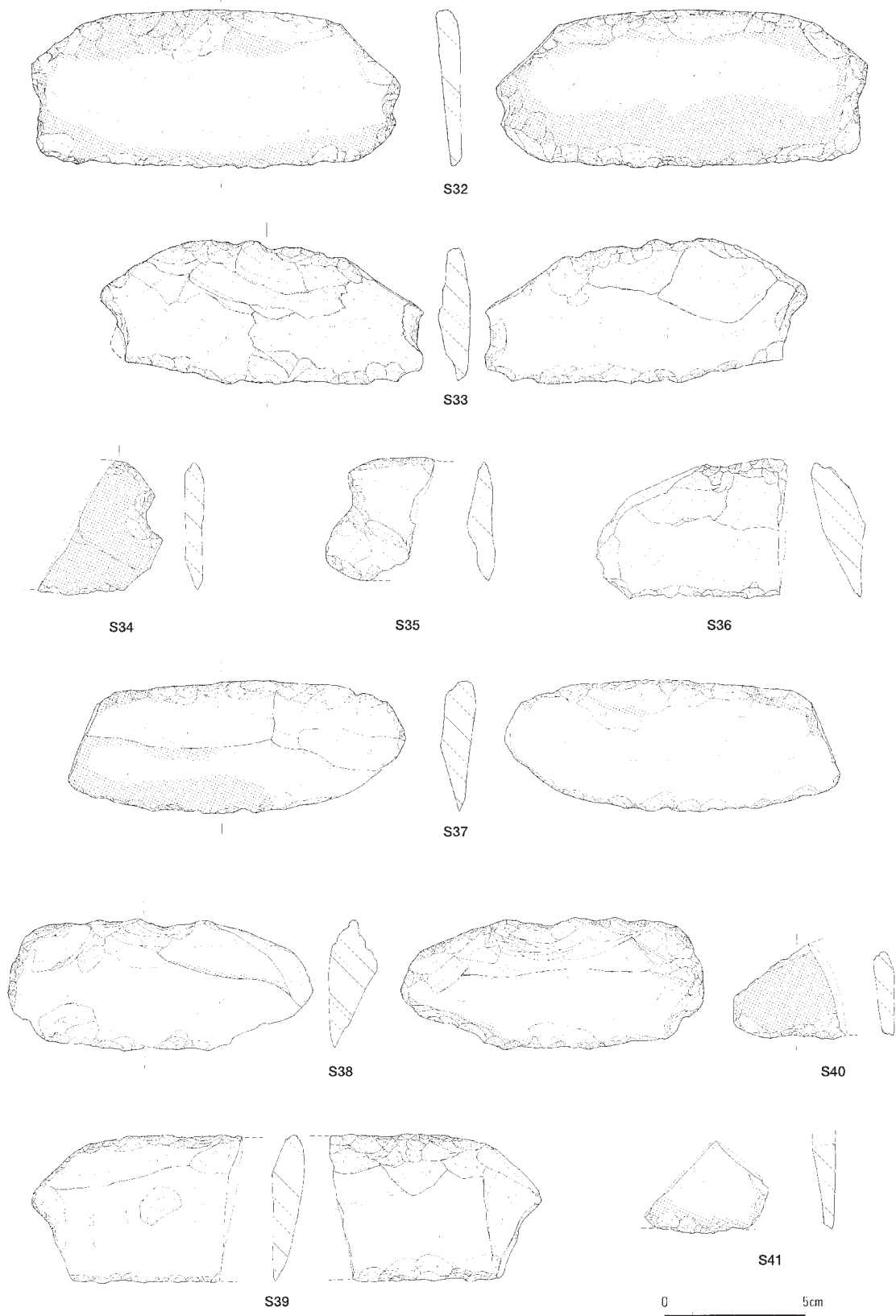
壺は、口縁部が直立して短い165・166や、外反する167～169がある。168は口縁部に2個一對の穿孔が2か所見られる。165～168の突帯には、刻目文が施されている。170～177は口縁部を大きく外反する。170・171は口縁端部が広く拡張して凹線が見られ、棒状浮文が施される。173～175も口縁端部にも凹線が施されている。180は算盤玉状の胴部を持つ台付きの直口壺であると考えられる。181は肥厚する口縁端部の形状や胎土に金雲母を多く含む点など、北部九州で出土する中期中葉の壺に類似している。しかし、肩部の施文は北部九州では見られないものである。類似した口縁部を持つもので、県下で出土しているものには、加茂政所遺跡の袋状土壘10、南溝手遺跡の土壘178出土のものなどがある。この壺の時期は、中期中葉であると考えられる。

甕は、「く」の字の口縁を持つ182・183は、外面下半にミガキが施される。185は口縁端部に刻目文と円形浮文を施している。これらは中期中葉のものである。184・186・187は口縁部を上方へ拡張して凹線を施しており、時期は中期後葉と考えられる。

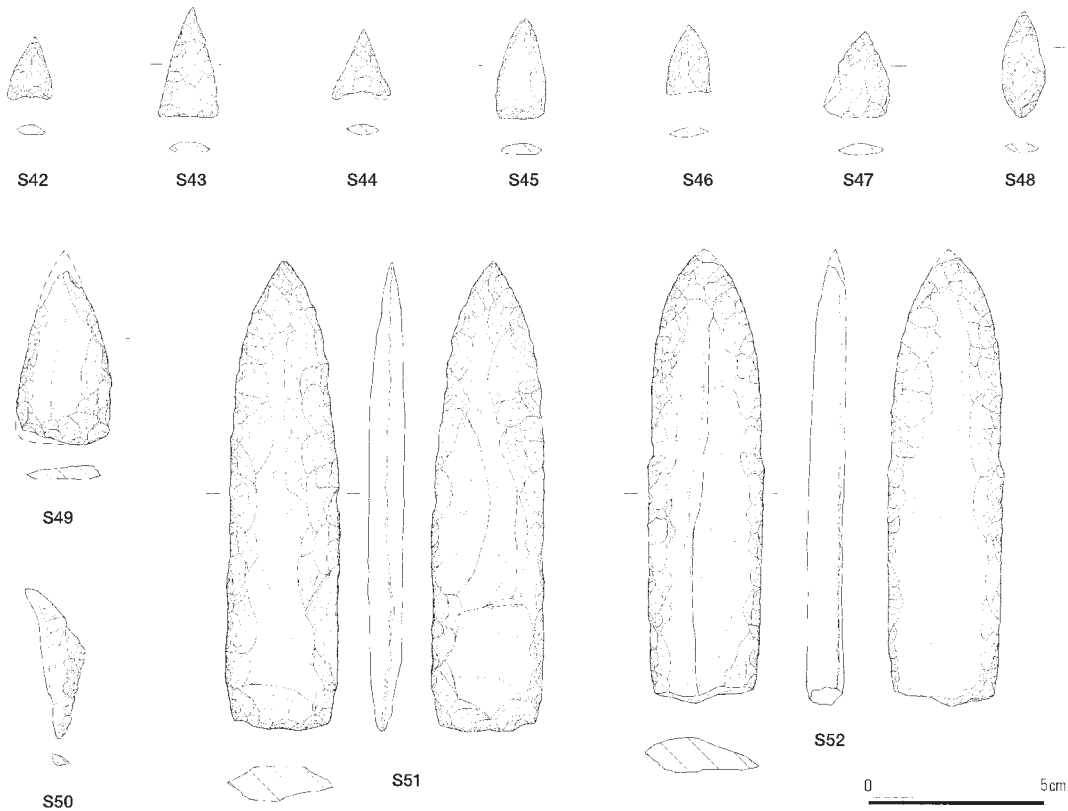
高杯は碗状の杯部を持つ188～196があり、188のように口唇部に斜格子文が施され、刻目突帯が付くものや、口縁端部にのみ刻目文を持つ189・191・192、竹管文を施す193などがあり、調整は内外面にミガキが施されるものが多い。これらの高杯には杯部の径が17cm前後の小さいもの、30cmを超えるものが存在する。これらの時期は中期中葉であると考えられる。また、197・198は脚部の端部が



第105図 遺構に伴わない遺物⑤ (1/2)



第106図 遺構に伴わない遺物⑥ (1/2)



第107図 遺構に伴わない遺物⑦ (1/2)

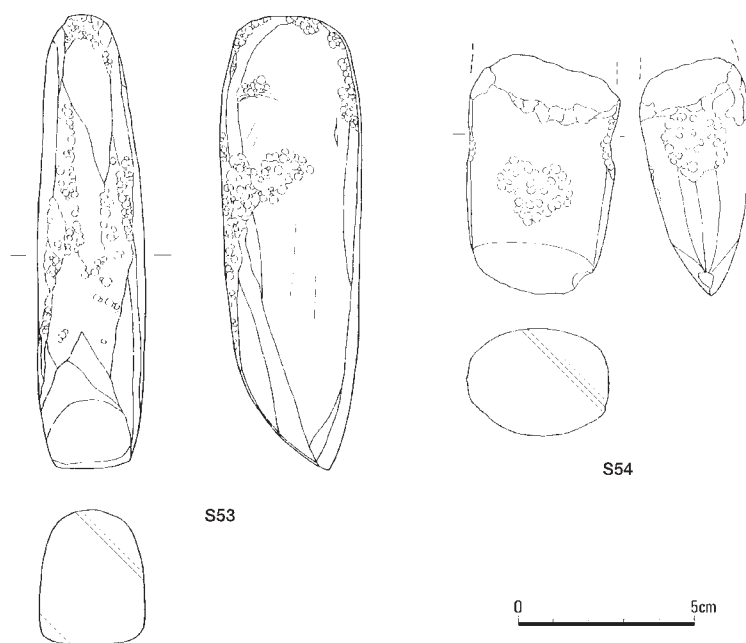
上部へ拡張し、中期後葉の特徴を持つものである。199・201は杯部と脚部の境に突帯を施すものである。台付鉢200は脚部のみで、3か所の穿孔がある。ジョッキ形土器202～205は4点出土しており、内外面にミガキを施すものや、ハケメ調整のものがある。回転台形土器206・207はいずれも破片であるが、2点出土している。

土製品は、円盤形土製品と紡錘車が出土している。円盤形土製品C 8は土器の転用ではなく、凹面はミガキが施されていることと対照的に凸面は一部ユビオサエがみられるのみで未調整であり、性格は不明である。紡錘車C 9・C 10はいずれも土器の破片の転用品である。これらの土製品の時期については、土器と同様に弥生時代中期中葉～後葉のものであると考えられる。(團)

石器・石製品

石器類は、包含層および古墳以降の遺構への混入等を含め多数出土している。時期は必ずしも特定できないが、出土地点はK S・N・O区が多く、中期の遺構密度の濃淡と対応する傾向があることからみて、その多くは中期に属すると考えて差し支えないであろう。集落の形成が後期に降る陸上競技場調査区などと比較すると面積の割に出土量が多く、中期という時期的な特性が反映されていると思われる。また遺構出土分も含めてサヌカイトの剥片・石核類の出土が目立つことから、集落内で石器製作がなされた様子がうかがえる。

S 25～S 41は石包丁で、うち8点が完形品である。S 25・S 26がそれぞれ頁岩製・粘板岩製の磨



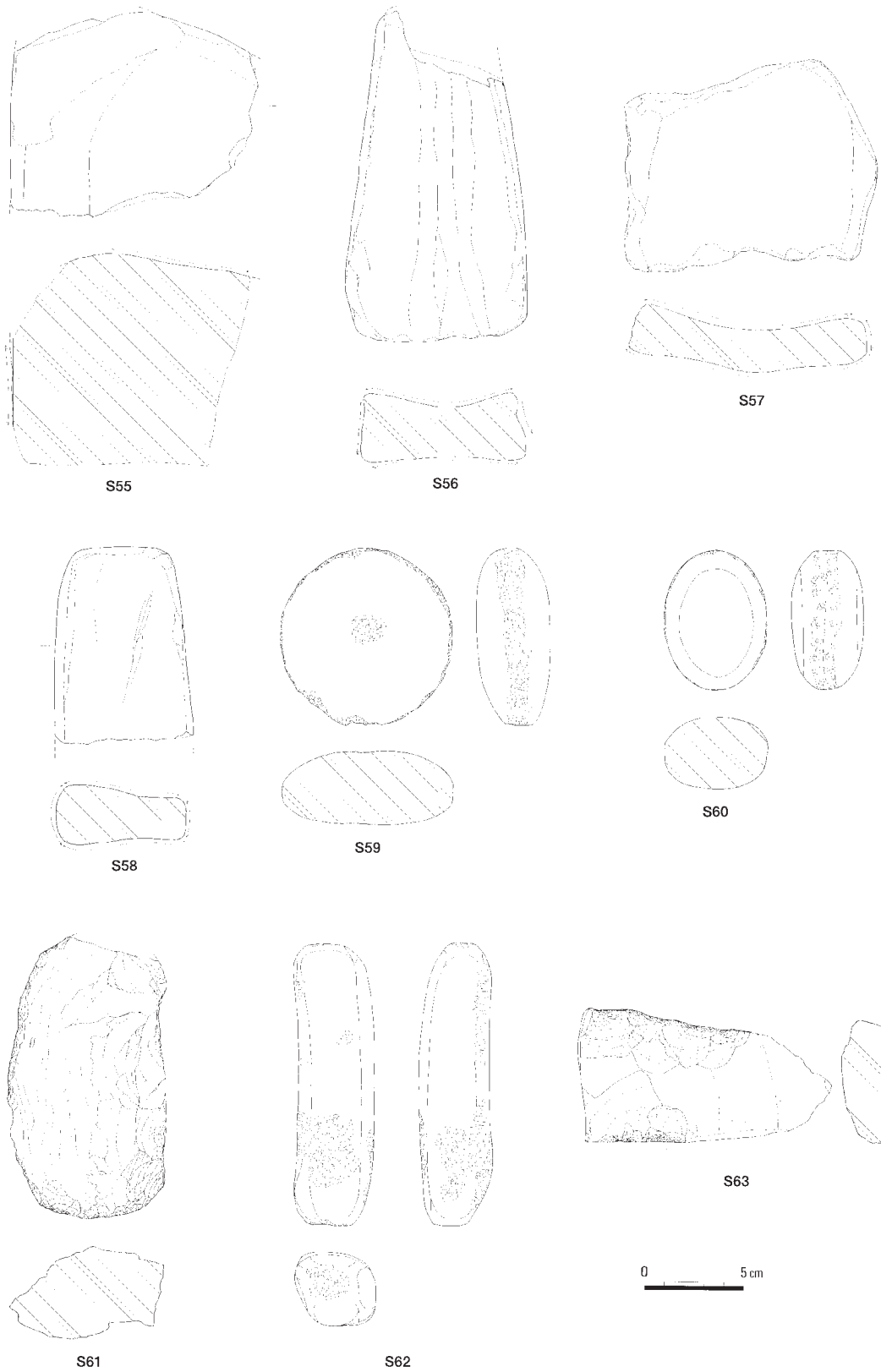
第108図 遺構に伴わない遺物⑧ (1/2)

製品である以外はすべてサヌカイト製の打製品であった。表面に珪酸分による特徴的な光沢（コーングロス）を呈するものも多い。S27～S35は両端部に明確な紐掛けの挟りが入るもので、S28はほぼ長方形、S29～S33は背部が湾曲した形状である。S33は一部に原礫面を残している。S36～S39は挟りが明確でないもので、S37・S38は刃部が外湾する。S38は厚手でやや粗雑な作りである。S40・S41は小片であるが、表面に光沢が認められるため石包丁とした。

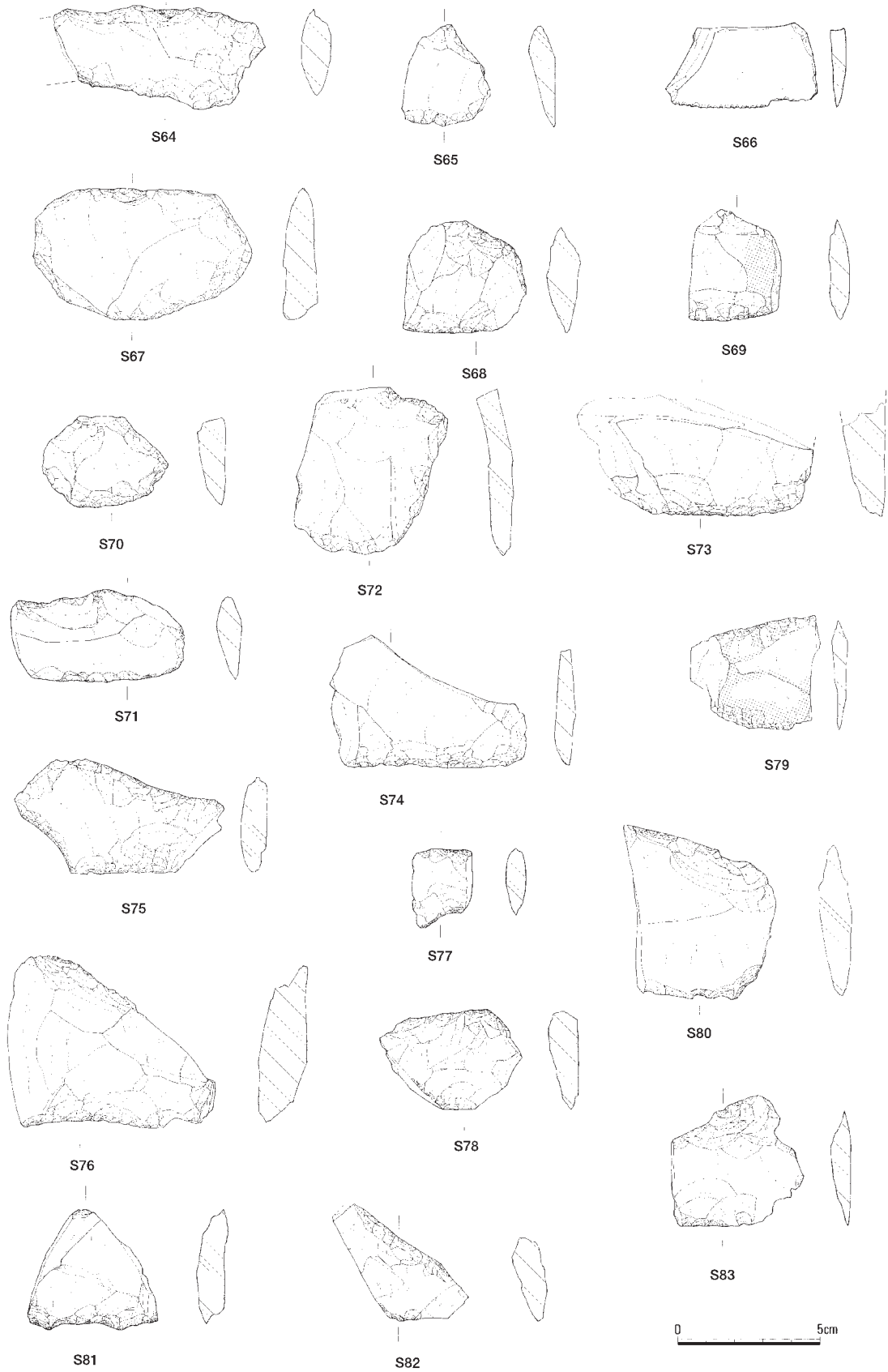
S42～S49は石鏃である。基部の形態には、凹基式（S42・S44）、平基式（S43・S45～S47）、凸基式（S48）の3種が認められる。S46・S47は五角形に近い形状である。S49は大形の平基式石鏃と考えるが、石剣などの転用品である可能性もある。S50は石錐である。S51・S52はO区出土の打製石剣である。S51は全長13.3cm、幅3.2cm、重量53.75gを測る完形品、S52も先端部をわずかに欠損するほかはほぼ完形で長さ12.7cm、幅3.4cm、重量52.97gを測る。2点とも両面からの丁寧な剥離で刃部を形成するが、全長の中ほどより基部側では刃潰し加工がなされ、S52ではその境界が肩状に段をなしている。全体的にS51のほうがS52に比べて鋭利な作りである。

S53は完形の柱状片刃石斧で、長さ12.95cm、重量295.93gを測る。石材はチャートの一種で、研磨は全体に及んでおらず側面の一部には風化した原礫面が残っている。S54は太型蛤刃石斧で、基部を欠損するが側面には装着のための挟りが認められる。

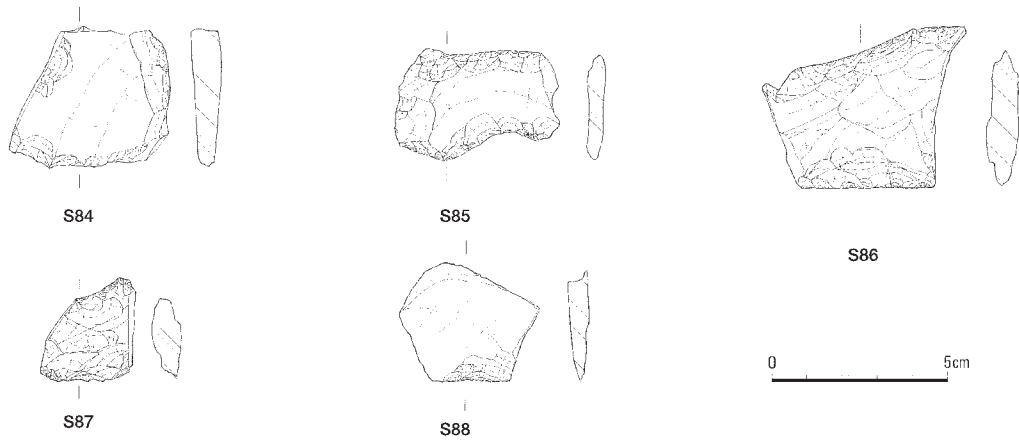
S55～S58は砂岩ないし花崗岩製の砥石である。S55は残存重量1351.8gを測る大形砥石の破片である。S56は4面とも使用痕が残り、特に図示した面では中央にごく浅い溝状の窪みが2条認められる。S59は凹石で、扁平な円礫の中央が小さく窪むほか、外周にそって敲打痕が残る。S60は石錘である。S61はサヌカイトの塊で石核と考えられるが、叩き石としても使用されたらしく図の下端部分に顕著な敲打痕が認められる。S62は叩き石で、細長い礫の両端部と側面に多数の敲打痕が残って



第109図 遺構に伴わない遺物⑨ (1/3)



第110図 遺構に伴わない遺物⑩ (1/2)



第111図 遺構に伴わない遺物① (1/2)

いる。S63はサヌカイトの石核ないし何らかの未製品かと思われる。

S64～S88は、サヌカイト製のスクレイパー・楔形石器などである。その形態から、S64は石鎌、S65～S74はスクレイパー、S75～S88は楔形石器と一応分類しているが、厳密な基準はなく器種の特定は困難である。S66は細かい鋸歯状を呈する刃部が特徴的である。S69・S79は表面に珪酸分による光沢があり、石包丁の転用品と考えられる。 (岡本)

第5節 弥生時代後期の遺構・遺物

1 弥生時代後期の概要

この時期の遺構は、土器棺墓1基、土壙3基、土器溜まり1か所である。これらの遺構は調査区全体の北西隅にあたるO区北側とL区・M区の西側で確認されたのみで、遺構密度は希薄で、包含層からの遺物の出土量も少ない。

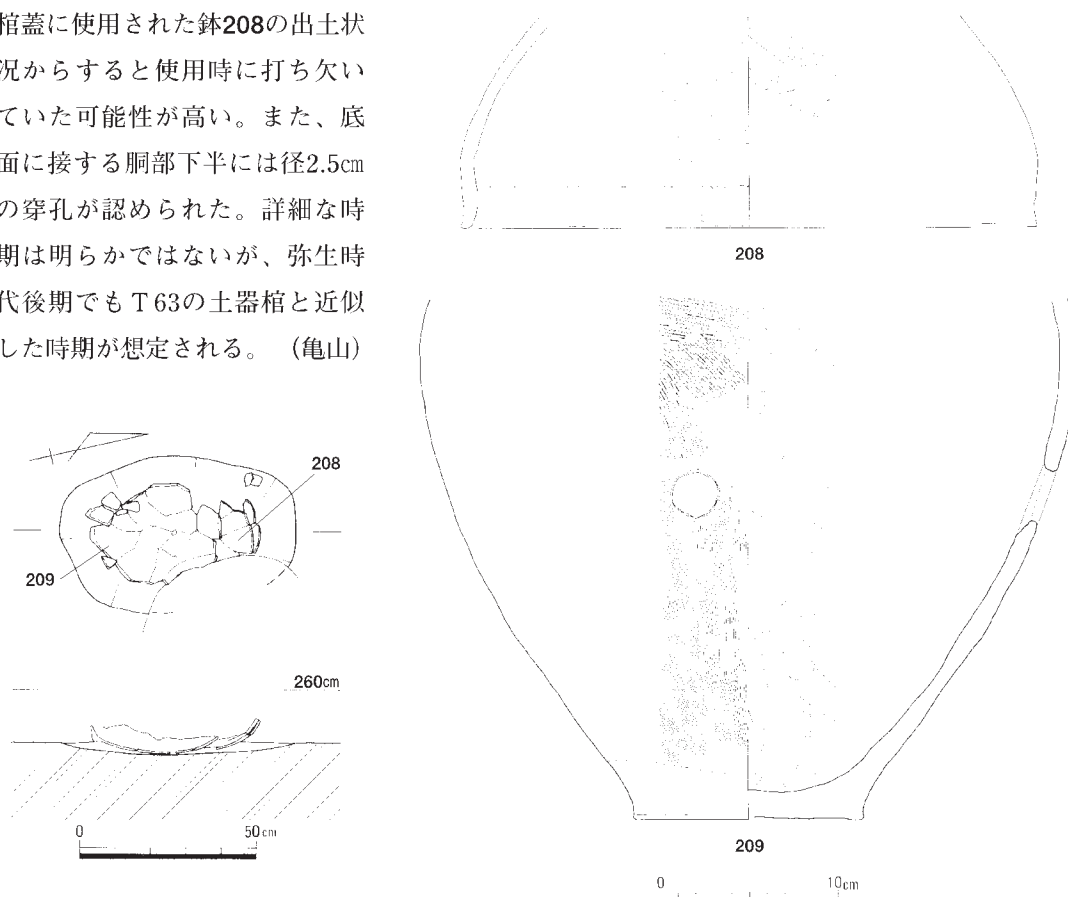
土器棺墓の北側、平成14年度に調査したT63内においても、同様に弥生時代後期の土器棺墓が検出されており、周辺には墓域が存在したと考えられる。 (園)

2 土器棺墓

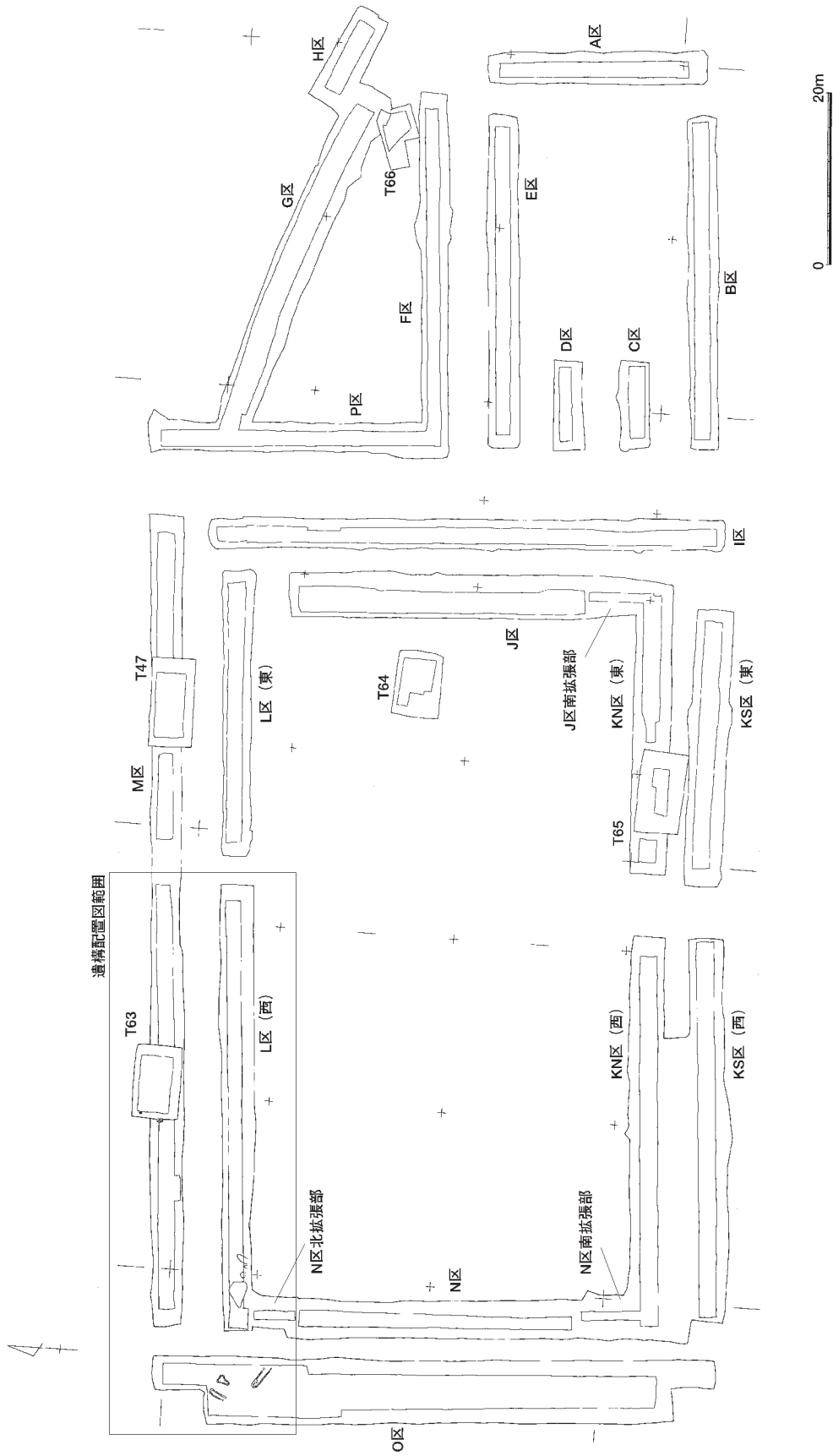
土器棺墓1 (第112図、図版12)

M区の西側で検出したもので、T63で検出した土器棺墓の南2mに位置する。

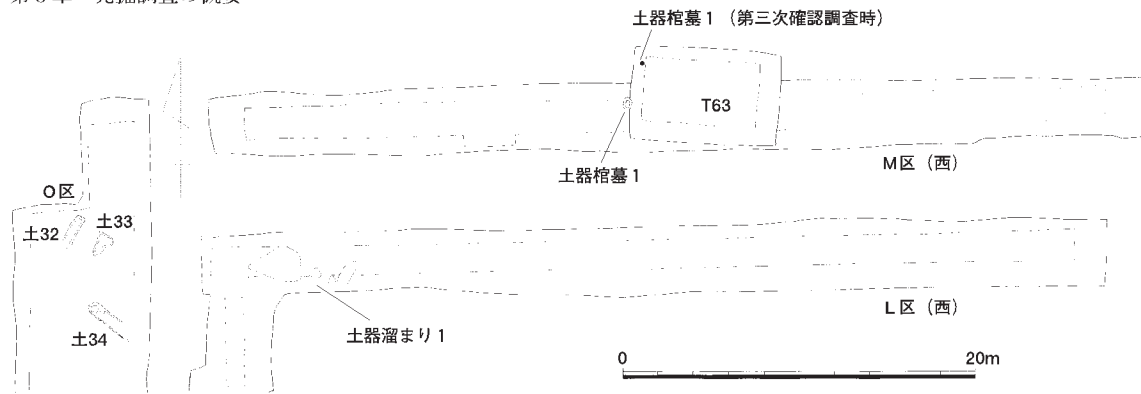
検出面は海拔253cmと高いためか、その上半はすでに失われており、長径67cm、短径44cmの楕円形を呈する堀り方の底面に接する下半部をかりうじて検出したにすぎない。棺身は胴径37cmを測る壺で、口頸部は見つかっていないが、棺蓋に使用された鉢208の出土状況からすると使用時に打ち欠いていた可能性が高い。また、底面に接する胴部下半には径2.5cmの穿孔が認められた。詳細な時期は明らかではないが、弥生時代後期でもT63の土器棺と近似した時期が想定される。(亀山)



第112図 土器棺墓1 (1/20)・出土遺物 (1/4)



第113図 弥生時代後期遺構全体図 (1/700)



第114図 弥生時代後期遺構配置図 (1/400)

3 土壇

土壇32 (第113~115図)

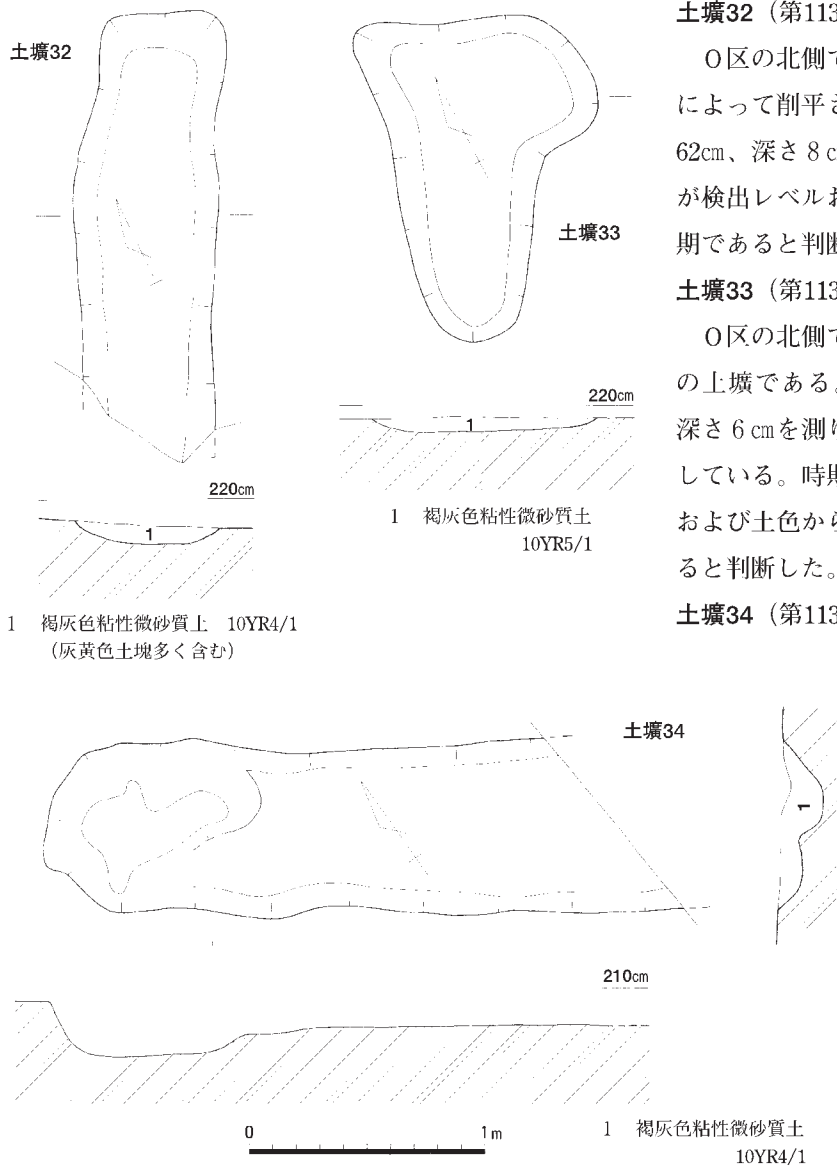
O区の北側で検出し、南半を後世の溝によって削平されている。規模は、短径62cm、深さ8cmを測る。出土遺物はないが検出レベルおよび土色から弥生時代後期であると判断した。

土壇33 (第113~115図)

O区の北側で検出している、不整形の上壇である。長径135cm、短径94cm、深さ6cmを測り、断面形は浅い皿状を呈している。時期については、検出レベルおよび土色から弥生時代後期の遺構であると判断した。

土壇34 (第113~115図)

O区の北側で検出している、楕円形を呈する土壇である。規模は短径71cm、深さ18cmを測り、断面形は北西側に凹みを有している。土壇の時期については、検出レベルおよび土色から弥生時代後期であると判断した。(團)



第115図 土壇32~34 (1/30)

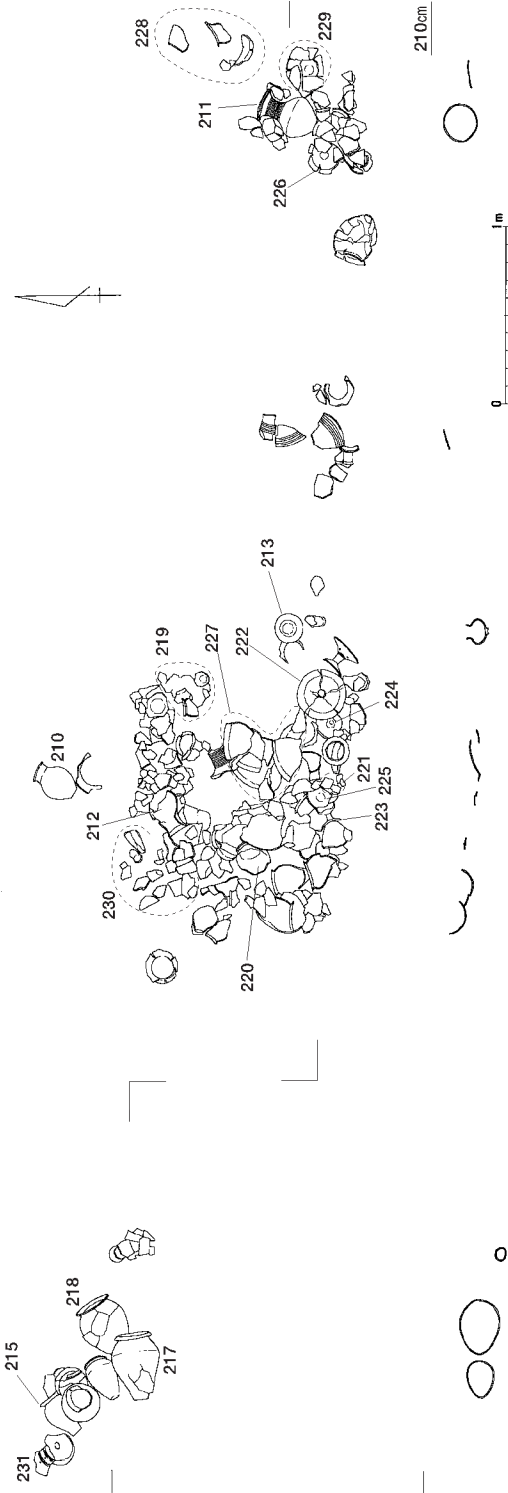
4 土器溜まり

土器溜まり1 (第113・114・116~118図、図版11・22・23)

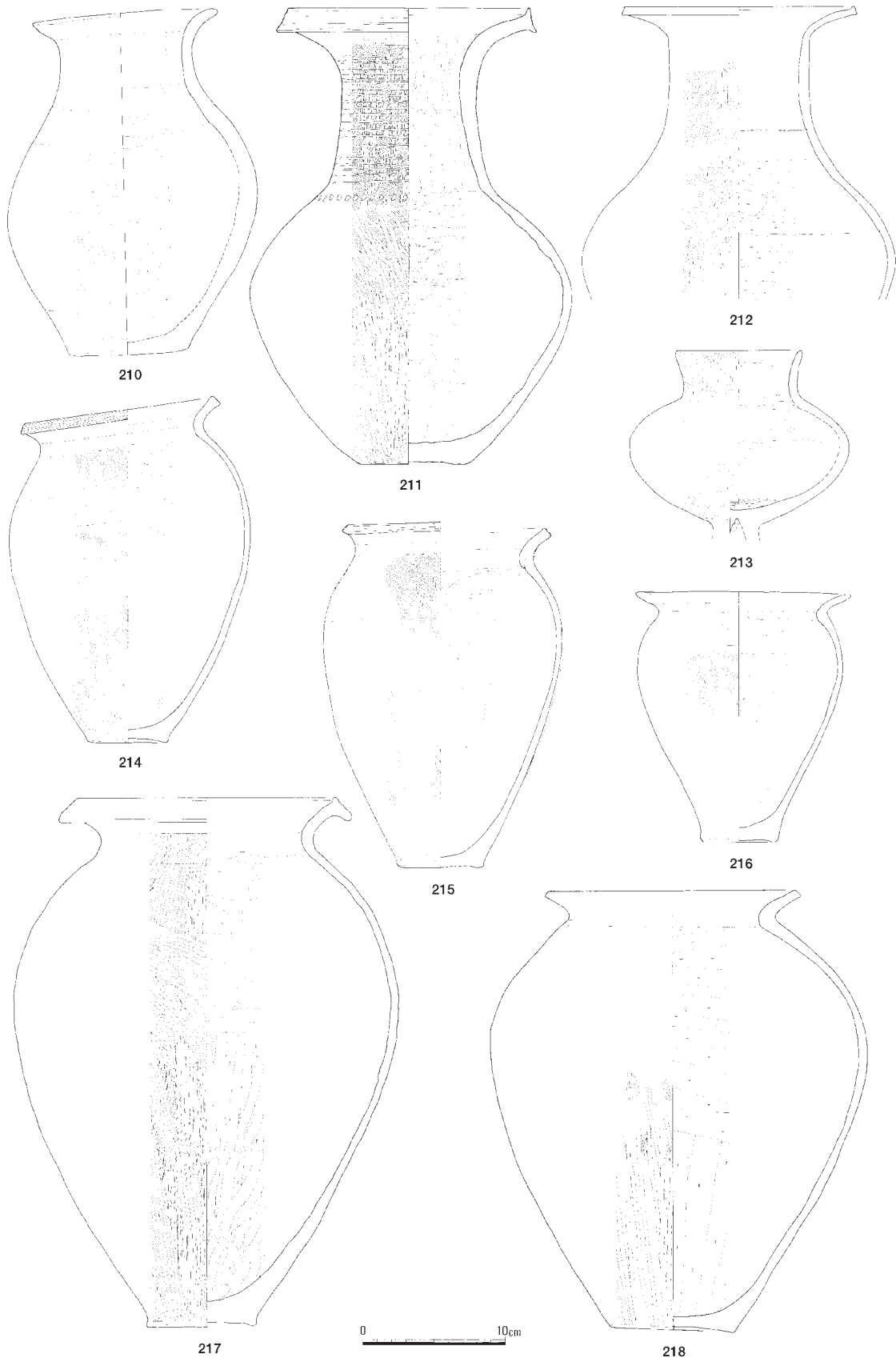
L区の西端で検出した土器群で、北東に向けて下る斜面の肩口に廃棄された状況が観察されたが、その広がりもM・O区に及んでいないようで、現状では河道2の埋没過程で生じた窪みを利用して廃棄されたものと推定したい。

土器群は大きく3つに分かれているが、その検出高は海拔164~207cmとほぼ一定である。210~212は長頸壺で、211は口縁部を上下に拡張し頸部には幅広の沈線をめぐらす。213は精良な胎上をもつ小形の直口壺で、高杯に似た脚部を有していたものと思われる。甕には214~220があるが、外反する口縁端部を尖りぎみに収める216、凹面をなす214・215・218~220、上下に拡張する217に分けられる。外面は粗いハケメで調整し、底面が凹むものが多い。高杯は口径25~27.5cmを測る大形221・222と口径10.6~14cmの小形223・224があり、後者は口縁部が体部から屈折して立ち上がる223と碗形の杯部をもつ224に分けられる。221~223の脚部は差し込んで接合する。鉢も口径31.6cmを測る大形227と口径15.6~18.5cmの小形225・226があり、口縁端部が面をなす225・227と丸く収める226とに分けられる。また、228は内外面をヘラミガキで調整する台付鉢で、外反する口縁端部をわずかにつまみ上げる。230・231は筒部の上下が大きく開く器台で、口縁部や裾部には鋸歯文を飾り、透かし孔を穿つ筒部には幅広の沈線をめぐらす。

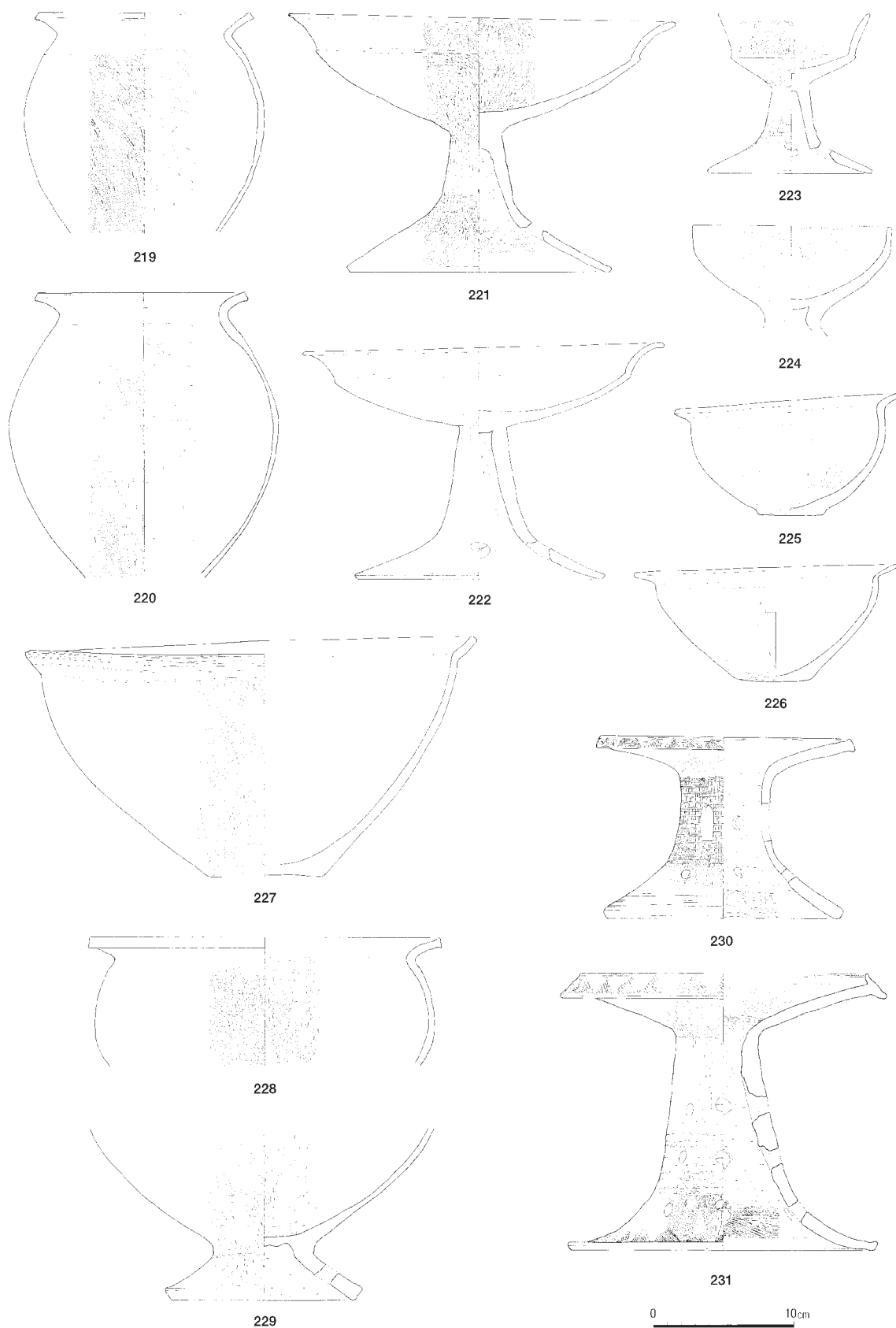
これらは概ね後期中葉の特徴を示している。(亀山)



第116図 土器溜まり1 (1/40)



第117図 土器溜まり1 出土遺物① (1/4)



第118図 土器溜まり1 出土遺物② (1/4)

第6節 古墳時代の遺構・遺物

1 古墳時代の概要

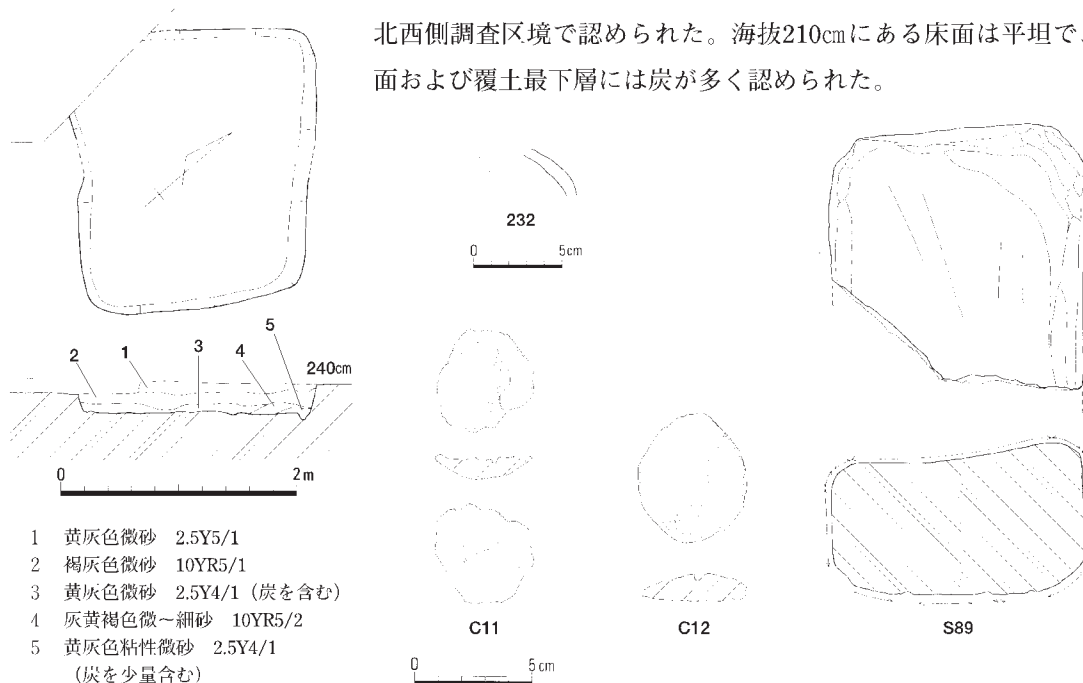
竪穴住居1軒、井戸3基、土壇3基、溝10条、後期水田などを検出している。調査区の北側～東側では、土層断面で海拔高約230cmの高さで灰色がかった粘質土層を検出し、これは古墳時代後期の水田層であると想定されるものである。この水田は、調査区域の東側半分以上において広がりを見る。O区・N区・KN区（西）・KS区（西）の、調査区全体では南西にあたる部分では、竪穴住居や井戸、土壇などが検出されていることなどから、集落域が広がっていたものと推定される。しかし、第8節「近世・近代の遺構・遺物」の中で後述しているように、昭和9年の室戸台風の際に出た廃棄物を埋めた穴によって大きく攪乱を受けていることから、特にO区やKN区（西）などは本来の遺構のほとんどは削平を受けて存在しないと考えられる。古墳時代前期の井戸が3基検出されたが、このうちの2基には完形の上器が出上しており、一部の甕の口縁部には蔓のような植物が残存していた。これは釣瓶として使われた可能性も考えられ、注目される。（圖）

2 竪穴住居

竪穴住居9（第119～121図）

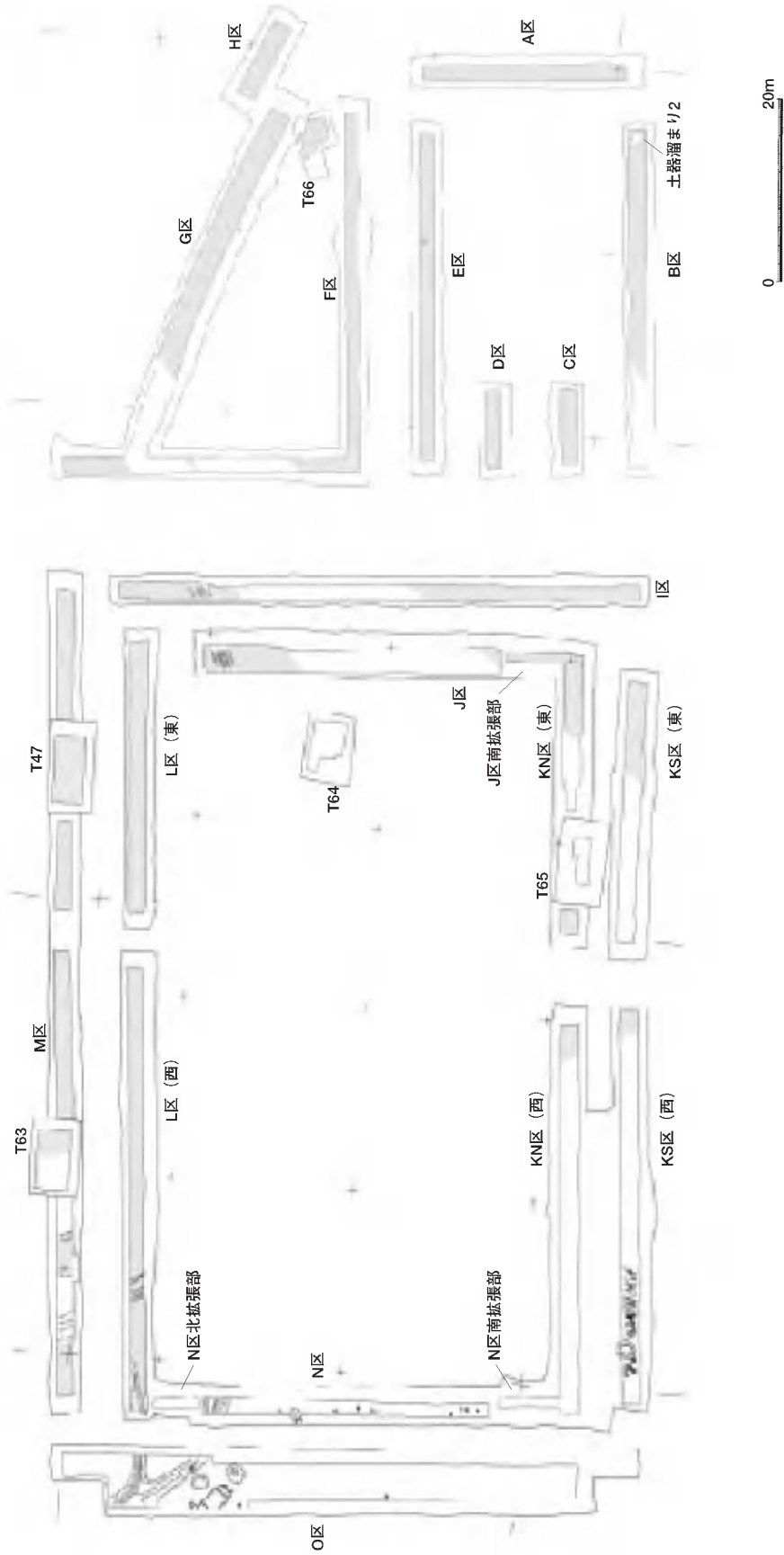
O区北西部において海拔235cmで検出された長軸235cm、幅203cmと長方形を呈する小型の竪穴住居である。古墳時代後期の用水路と考える溝25の南西約3mの地点に位置するが、南側に存在していたであろう遺構が昭和9年の掘開で消滅していたため、この住居がどういう環境にあったかは不明である。

住居は、建て替えがなされたようで、同規模の住居との切り合いが北西側調査区境で認められた。海拔210cmにある床面は平坦で、床面および覆土最下層には炭が多く認められた。

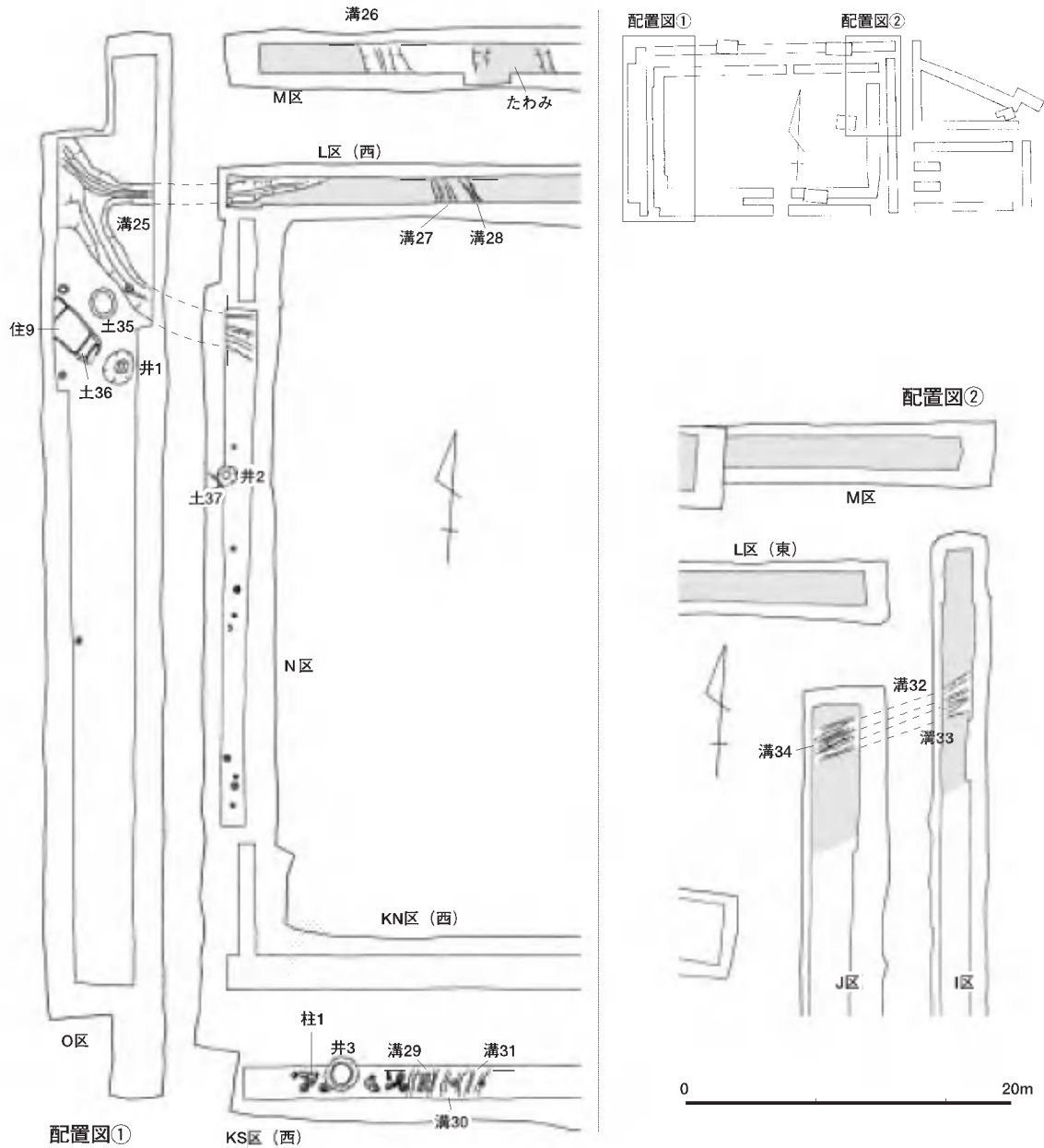


- 1 黄灰色微砂 2.5Y5/1
- 2 褐灰色微砂 10YR5/1
- 3 黄灰色微砂 2.5Y4/1 (炭を含む)
- 4 灰黄褐色微～細砂 10YR5/2
- 5 黄灰色粘性微砂 2.5Y4/1
(炭を少量含む)

第119図 竪穴住居9（1/60）・出土遺物（1/4・1/3）



第120図 古墳時代遺構全体図 (1/700)



第121図 古墳時代遺構配置図①・② (1/400)

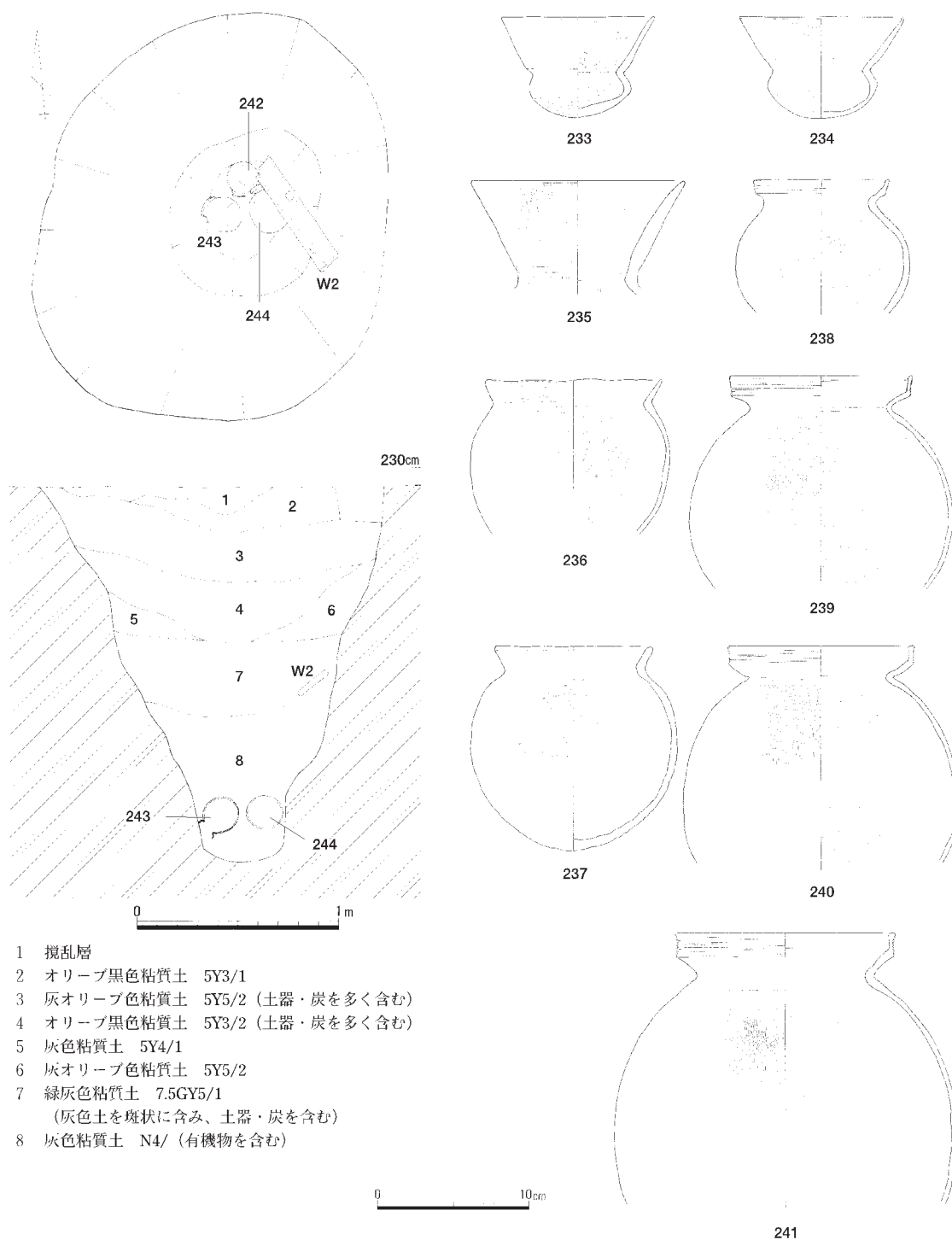
この住居は、当初規模から古墳時代前期の竪穴住居とも考えた。しかし覆土中からは杯蓋と考えられる須恵器片が1点、平たく手捏ねされた祭祀的な様相をもった圧痕粘土塊が2点、さらに砥石が1点検出されたことから古墳時代後期の竪穴住居として差し支えないと考える。(島崎)

3 井戸

井戸1 (第120~124図、巻頭図版3、図版24)

O区の北半部に位置する楕円形の井戸である。長径200cm、短径177cm、検出面からの深さ185cmを測る。断面形は逆三角形を呈し、井戸最下部の壁面はほぼ垂直に掘り込まれている。遺物は主に第4層以下から出土しており、最下層の第8層には種子や枝葉などの植物遺体が含まれる。

出土した土器には小型丸底壺233・234、壺235、甕236～244（うち239～244は古備型甕）、高杯245～250、鉢251、小型器台252、製塩土器253などがある。242～244はほぼ完形で、井戸底部に並べて置かれたような状態で出土したことから、井戸廃絶時に埋納されたものと思われ、陸上競技場調査区の井戸1と類似する。3点とも外面には煤が多く付着し、244の頸部には釣瓶への転用を示すのか、植物の蔓が巻き付けられている。高杯の杯部は直線的に開くものも多く、脚部は短脚と長脚のもの



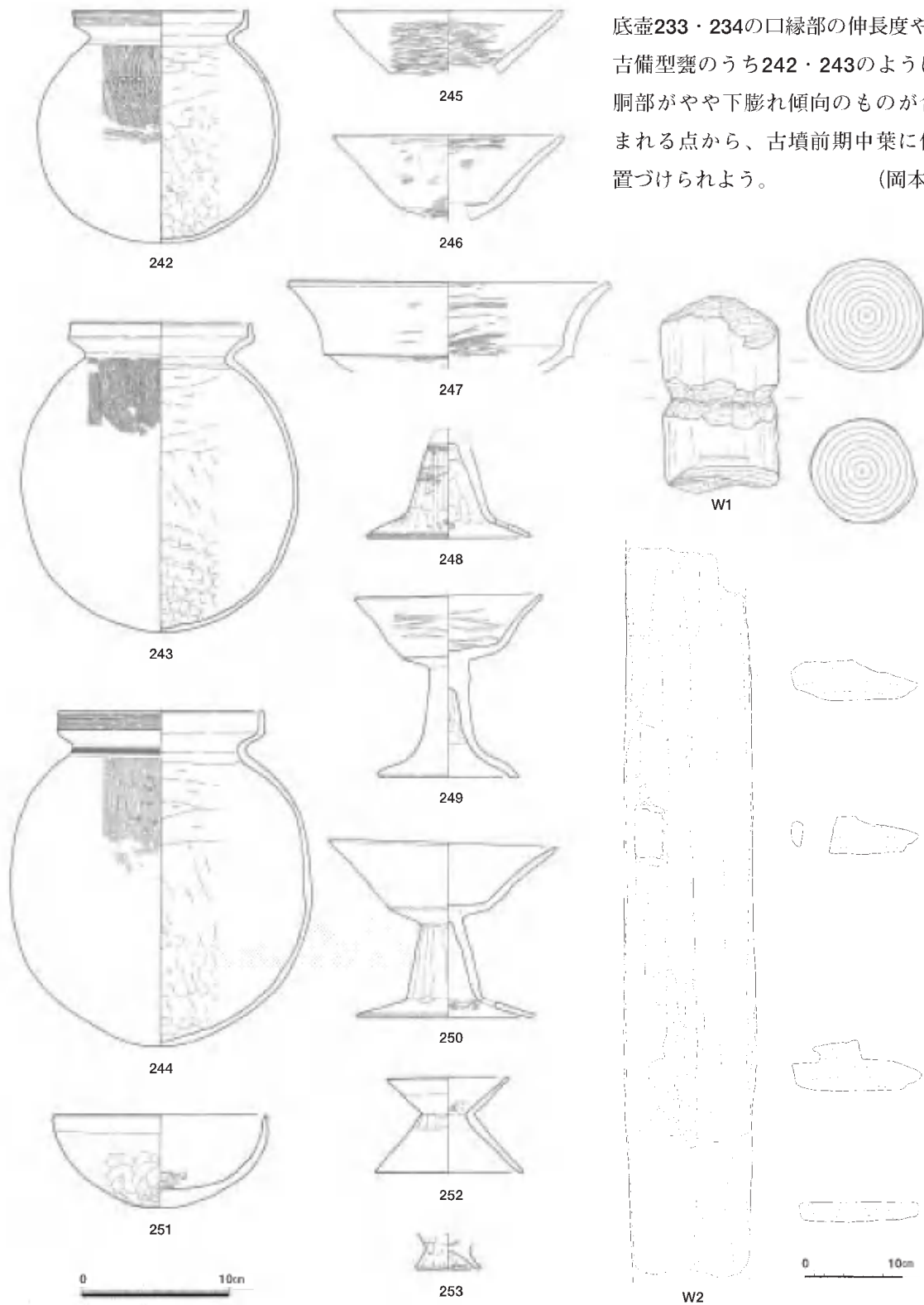
- 1 攪乱層
- 2 オリーブ黒色粘質土 5Y3/1
- 3 灰オリーブ色粘質土 5Y5/2 (土器・炭を多く含む)
- 4 オリーブ黒色粘質土 5Y3/2 (土器・炭を多く含む)
- 5 灰色粘質土 5Y4/1
- 6 灰オリーブ色粘質土 5Y5/2
- 7 緑灰色粘質土 7.5GY5/1
(灰色土を塊状に含み、土器・炭を含む)
- 8 灰色粘質土 N4/ (有機物を含む)

第122図 井戸1 (1/30)・出土遺物① (1/4)

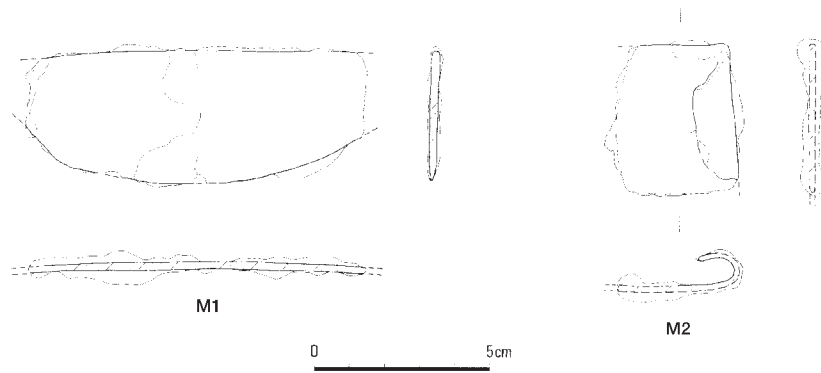
第3章 発掘調査の概要

のがある。W1は芯持ち材を用いた木錘である。W2は第6～8層にかけて傾いた状態で出土した建築部材片で、1か所に方形の穿孔がなされている。鉄器M9・10は完存しないが、鋤先と考えられる。

この井戸の廃絶時期は、小型丸底壺233・234の口縁部の伸長度や、古備型甕のうち242・243のように胴部がやや下膨れ傾向のものが含まれる点から、古墳前期中葉に位置づけられよう。(岡本)



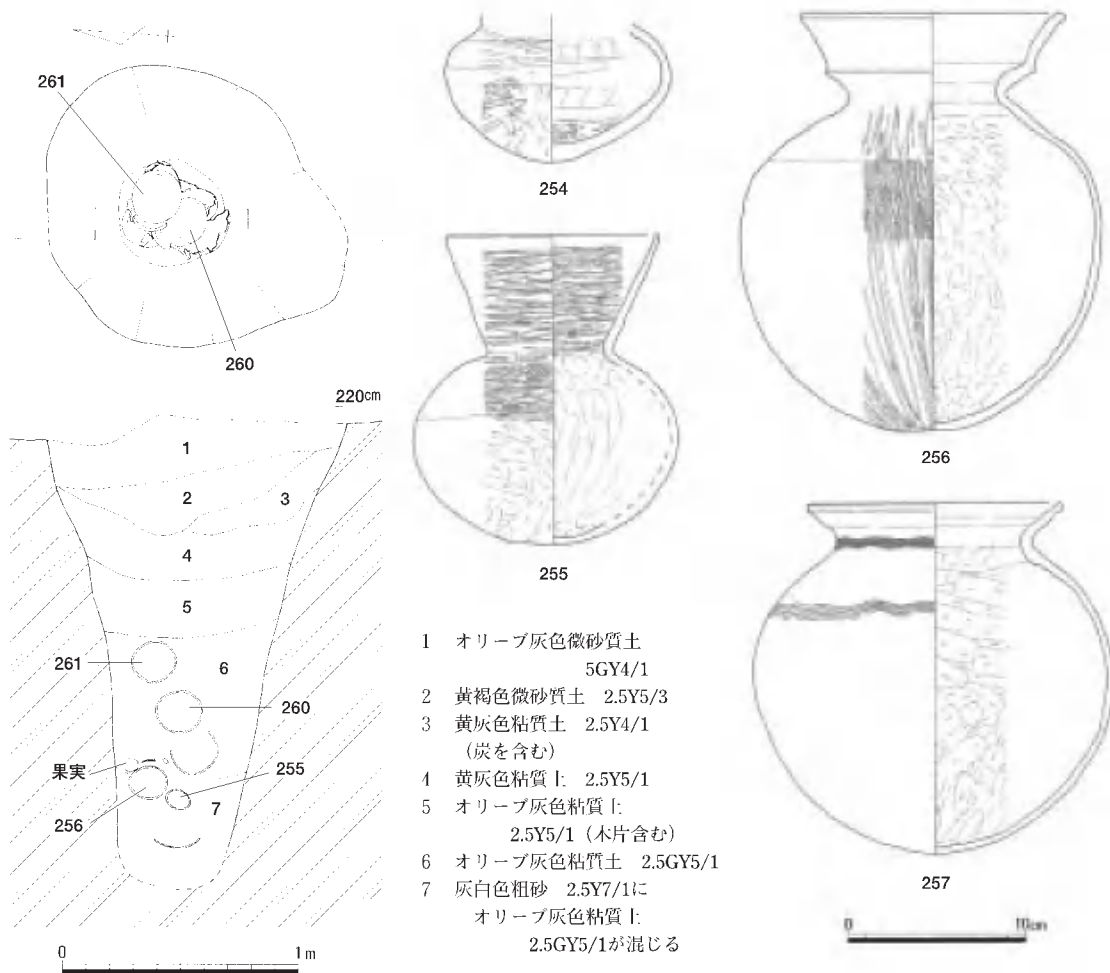
第123図 井戸1出土遺物② (1/4・1/6)



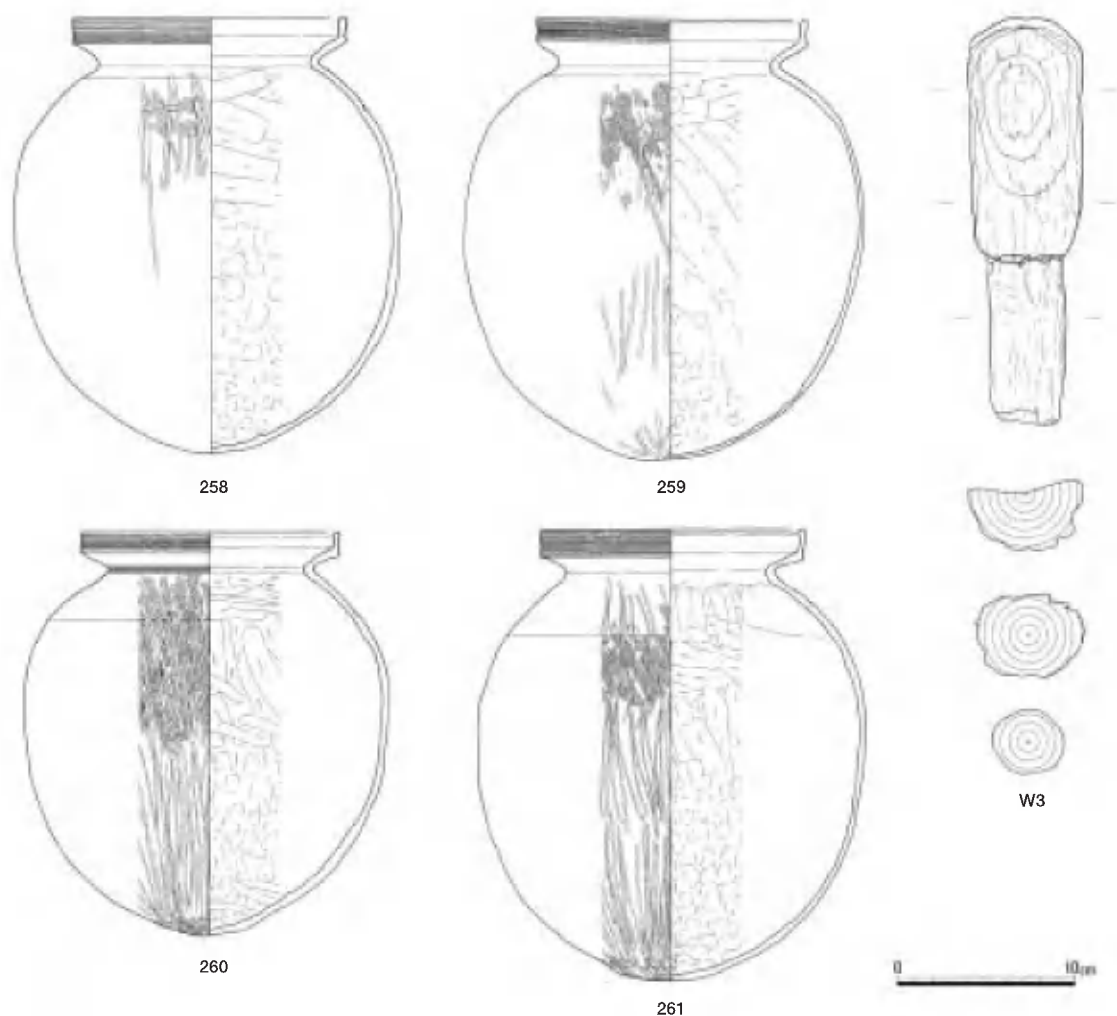
第124図 井戸1出土遺物③ (1/2)

井戸2 (第120・121・125・126図、図版13・24・25)

調査区域の西側、N区で検出した井戸である。平面形は図面では不整形であるが、これは調査区内の犬走りの上面で検出した西側と、東側での検出したレベルの差であり、本来は円形を呈するものと考えられる。規模は長径125cm、短径117cm、最大の深さ200cmを測り、底面の海拔高は16cmであった。



第125図 井戸2 (1/30) ・出土遺物① (1/4)



第126図 井戸2出土遺物② (1/4)

底面については湧水が激しく、明瞭に検出はできていない。底面に近づくほど径は狭くなり、底面付近では最小径が42cmとなる。出土遺物には、図示した壺254～256、甕257～261、木製品の横槌W3などがある。これらの遺物はいずれも6層以下で出土した。また、255～261の土器はほぼ完形であった。出土状況は、7層で完形の255・256が並べて置かれ、6・7層の境付近には甕が3個体以上まとまって出土したが、土圧で壊れたものではなく、復元ができない破片や高杯の破片なども含まれている。6層の上層では完形の260・261の2個体が、縦方向に連なって出土した。このほか遺物で注目されるものには、湿潤な環境であったためか、257の口縁部に蔓状の植物がまきつけられた痕跡が残っていた（網掛部分）。またほぼ完形のヒョウタン類の果実が1個体出土したが、取り上げの際に破碎してしまった。この井戸の時期については、土器の特徴から古墳時代前期前葉であると考えられ、良好な一括資料である。また、土器の出土状況から井戸の廃棄に伴う祭祀であると考えられる。

(團)

井戸3 (第120・121・127～133図、図版7・25・26)

調査区の西南側、KS区西側において検出された。この地点は、周辺部に広がる昭和9年の室戸台風災害後始末のための大がかりな掘削が幸いにも及んでいない箇所、調査区幅2mと狭いながら柱

穴・溝等が複雑に切り合う、比較的遺構の多く密集する状況のなかで存在が確認された。

井戸は、海拔240cmで検出されたものの、土層断面の在り方からすれば上端はさらに50cm～100cm上にあった可能性が高い。ここでも本来の生活面が後世に掘削され、消滅したことが窺われた。

井戸は、検出平面径2m前後の円形を呈し、検出面から約200cm下に底がほぼ水平につくられてあった。ところが遺物の検出状況は、前述の井戸1・2とは異なり、底には完全な状態の甕の存在は認められなく、土器のほとんどは中層の第3・4層に多く投げ込まれた状況で出土した。

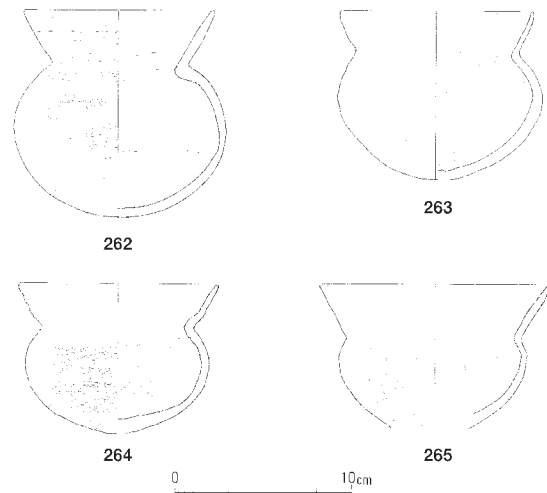
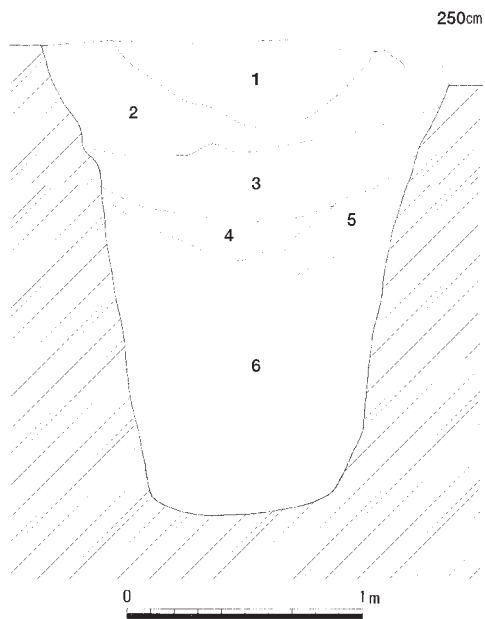
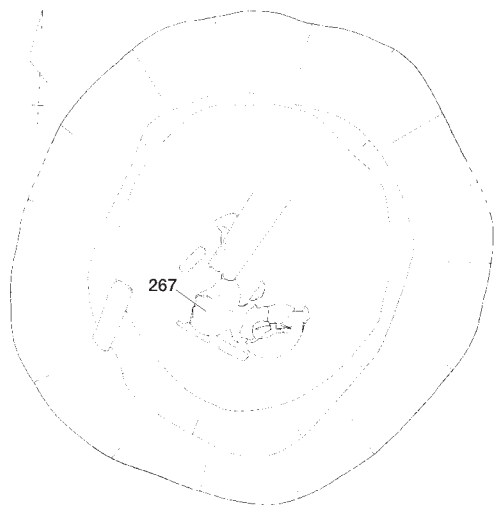
遺物は、土器がほとんどで、土器以外には土製品C13・C14、軽石S90があった。土器には、壺262～278、甕279～305・334、高杯307～320、鉢321～333・335～338、器台340～344、蓋345、手焙形土器346等がみられた。壺には二重口縁と大きく外反する二者が、甕の大半は古備甕と呼ばれるもので大きく大・中・小の3器種が存在する。高杯は、いずれも水こしされた粘土で製作されており、脚部に穿孔された孔は4つを数えた。鉢も大・中・小の器種があるが、小型品の占める割合が高い。

一方、出土した土器は在地で生産され日常使用されたものがほとんどであるが、中には他地域との交流を物語る、他地域から当地域に搬入されたと考えられる土器も散見される。

壺273が畿内、甕300・301が讃岐、甕303、器台344が山陰と認識され、さらに甕334は小片であるが東海地方の「S」字甕の底部である。

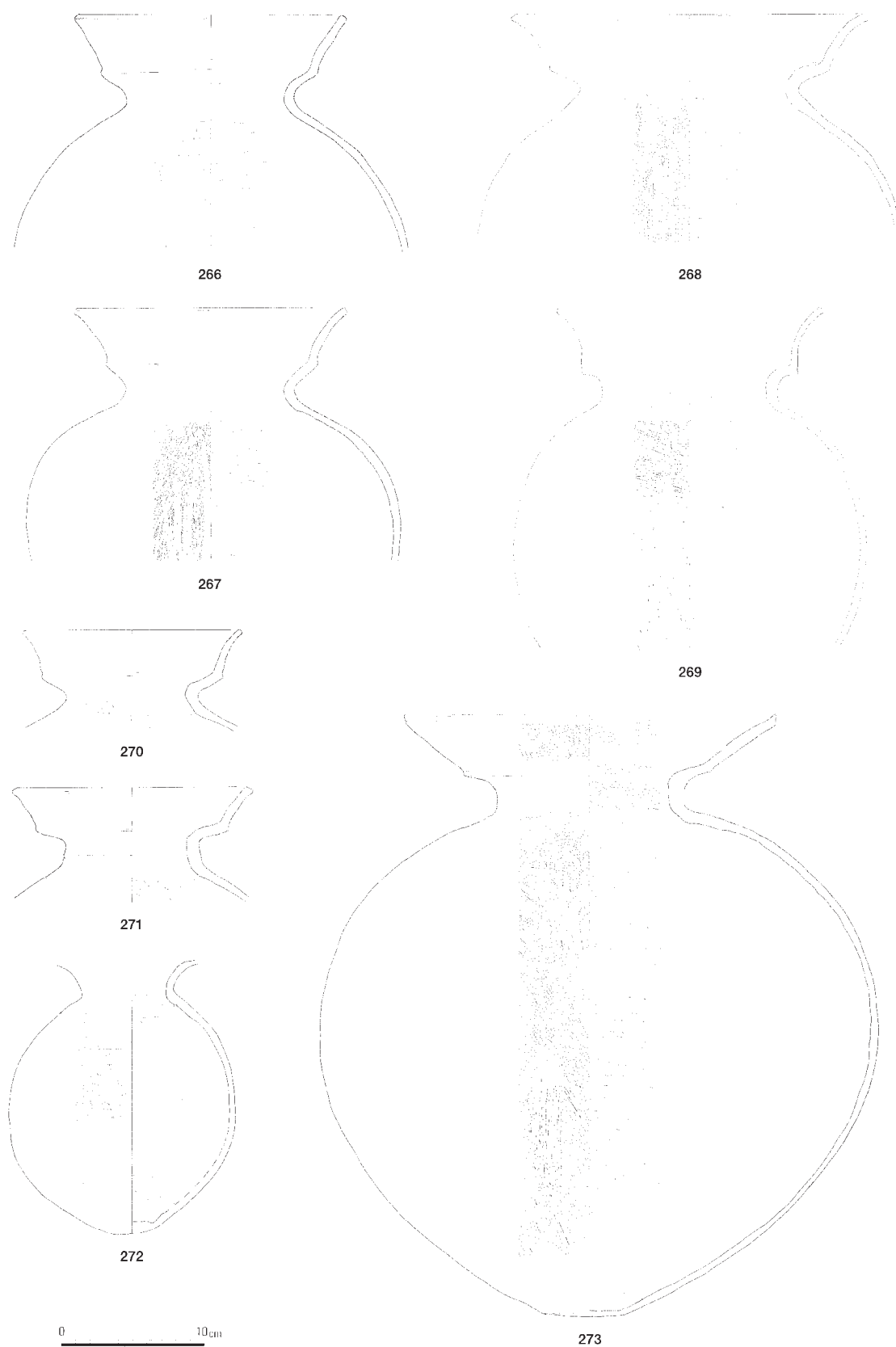
時期は、特に吉備型甕の在り方から古墳時代前期前葉と考える。

(島崎)

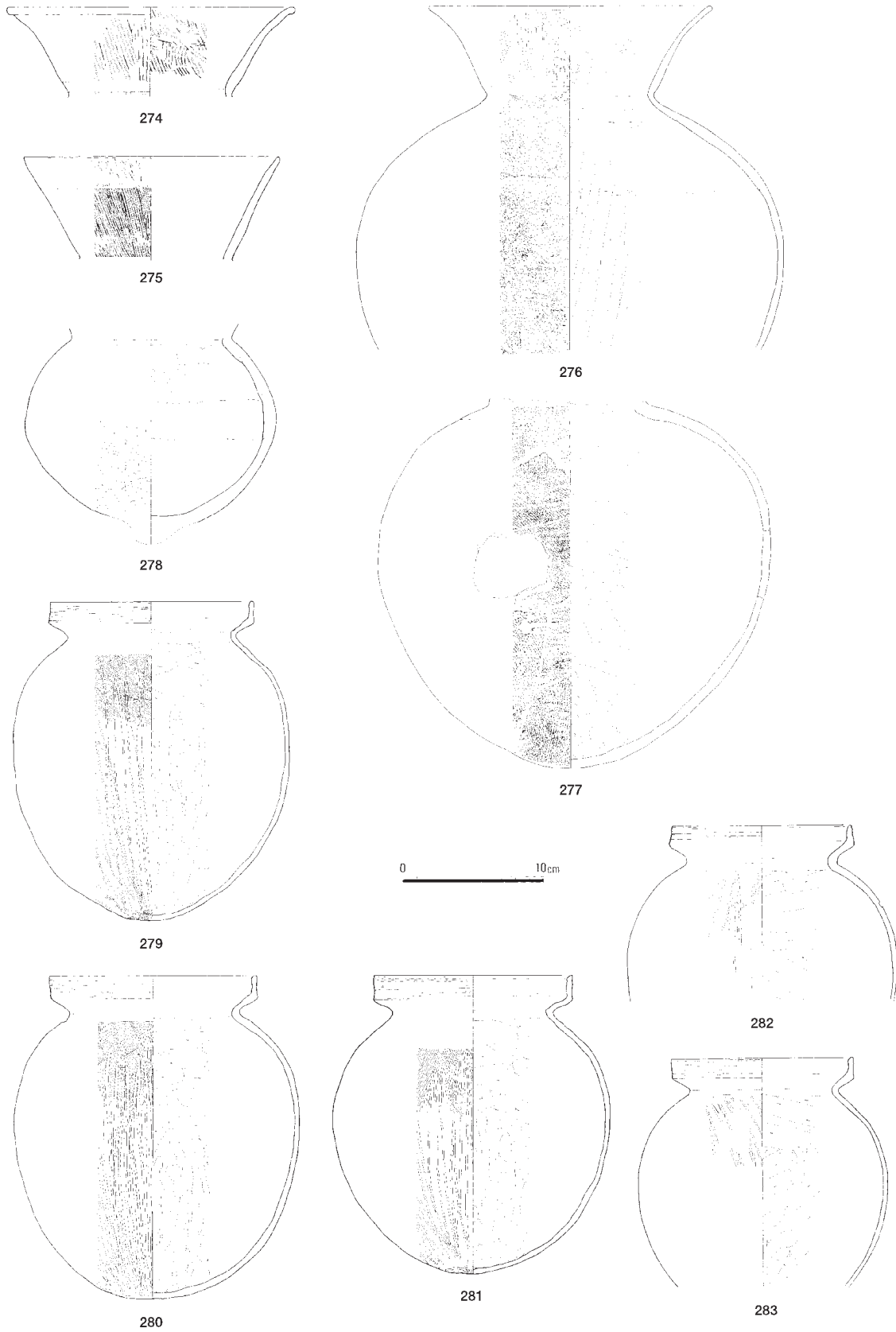


- | | |
|-------------------|------------------|
| 1 暗灰黄色土 2.5Y5/2 | 4 灰黄褐色土 10YR5/2 |
| 2 黄灰色土 2.5Y5/1 | 5 にぶい黄色土 2.5Y6/3 |
| 3 にぶい黄褐色土 10YR5/3 | 6 黄灰色土 2.5Y6/1 |

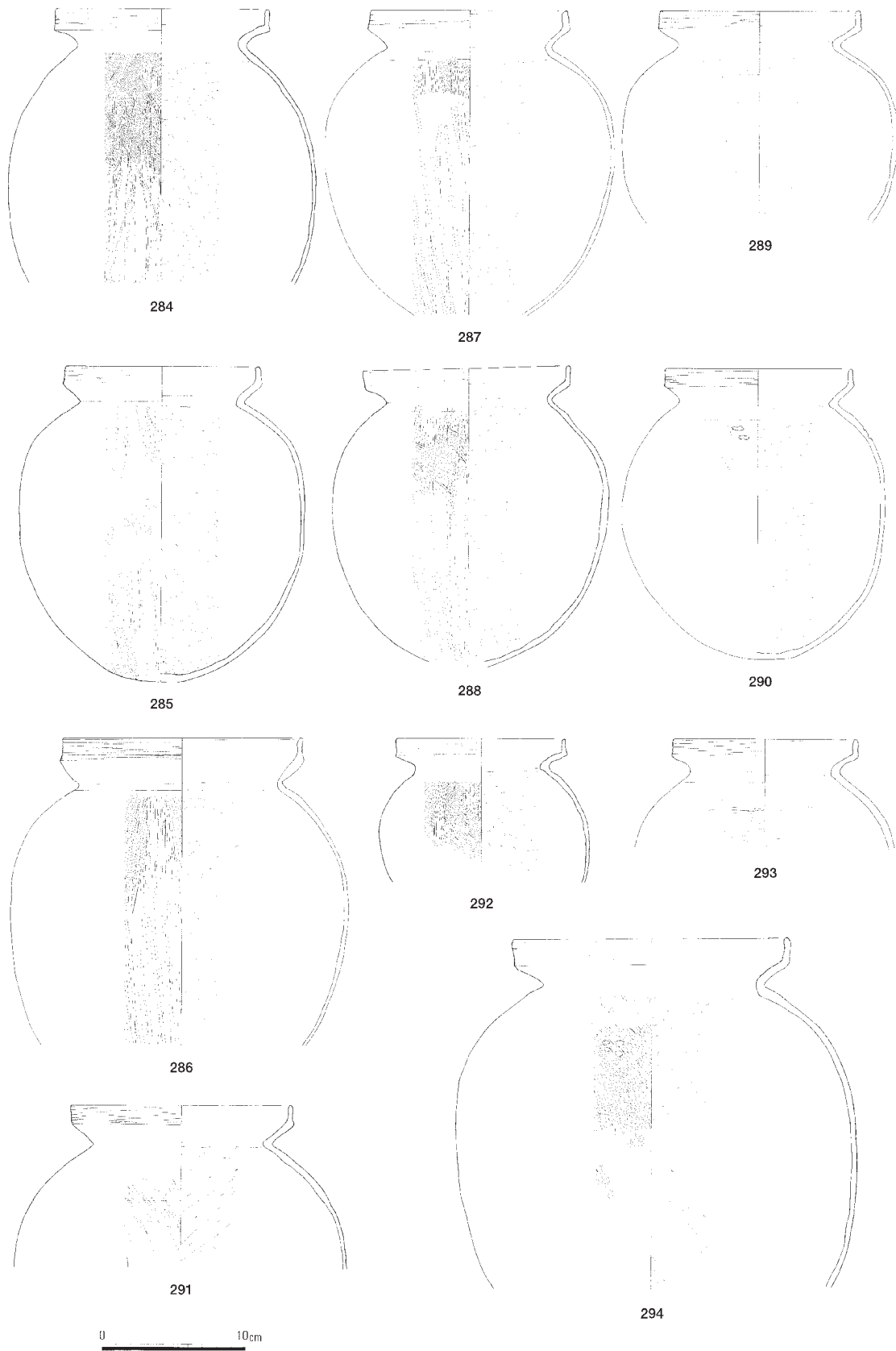
第127図 井戸3 (1/30)・出土遺物① (1/4)



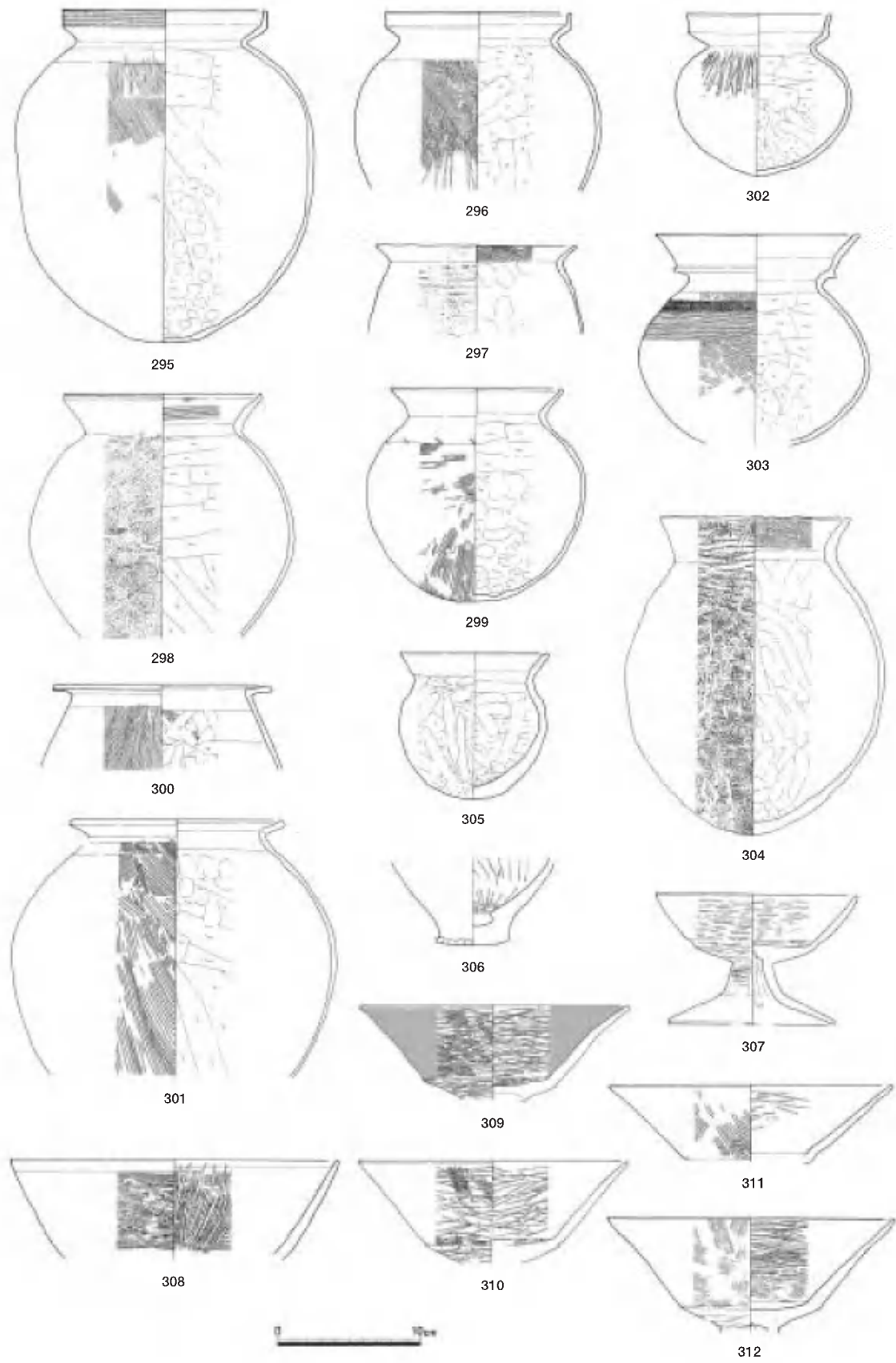
第128図 井戸3出土遺物② (1/4)



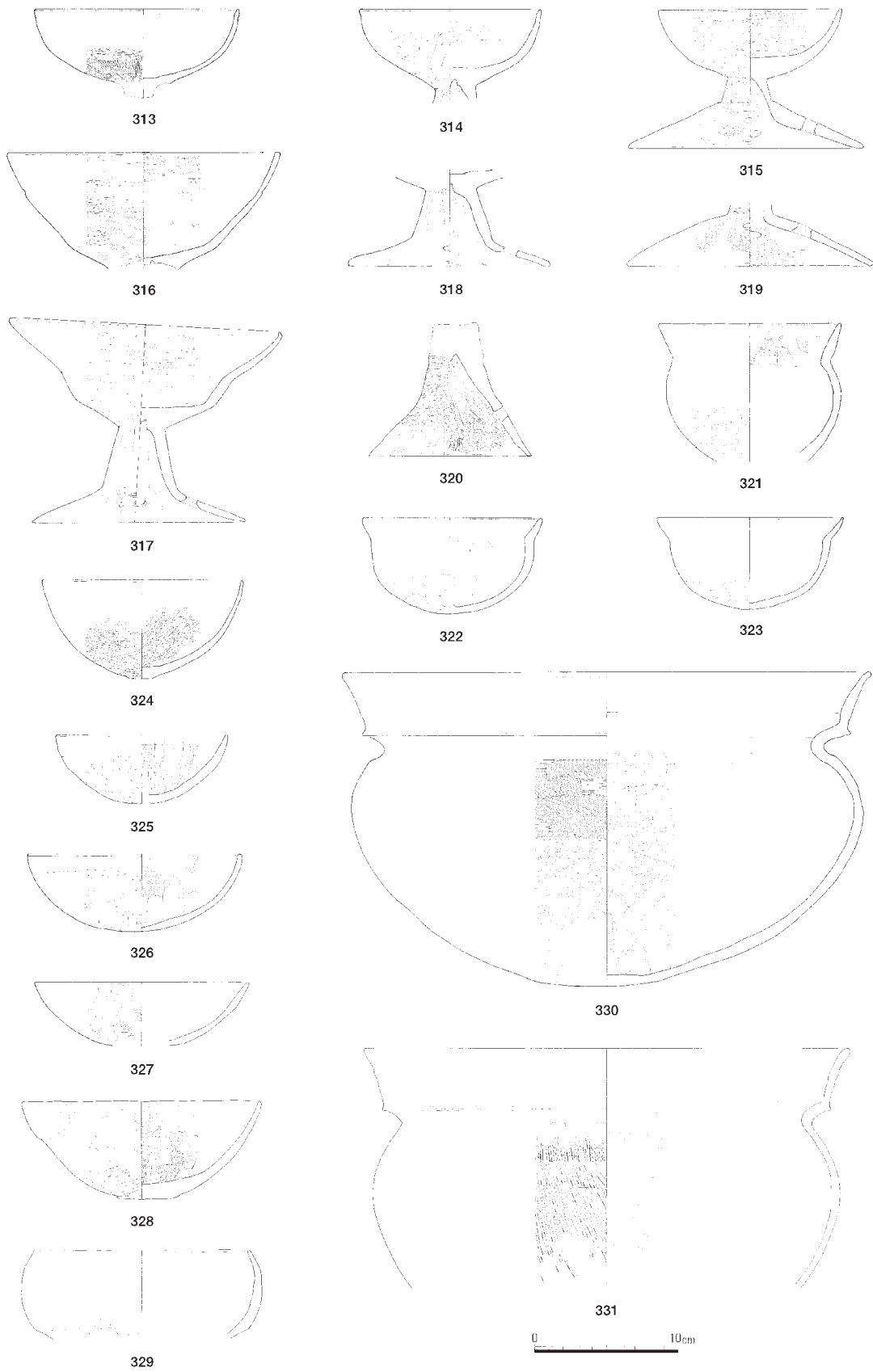
第129図 井戸3出土遺物③ (1/4)



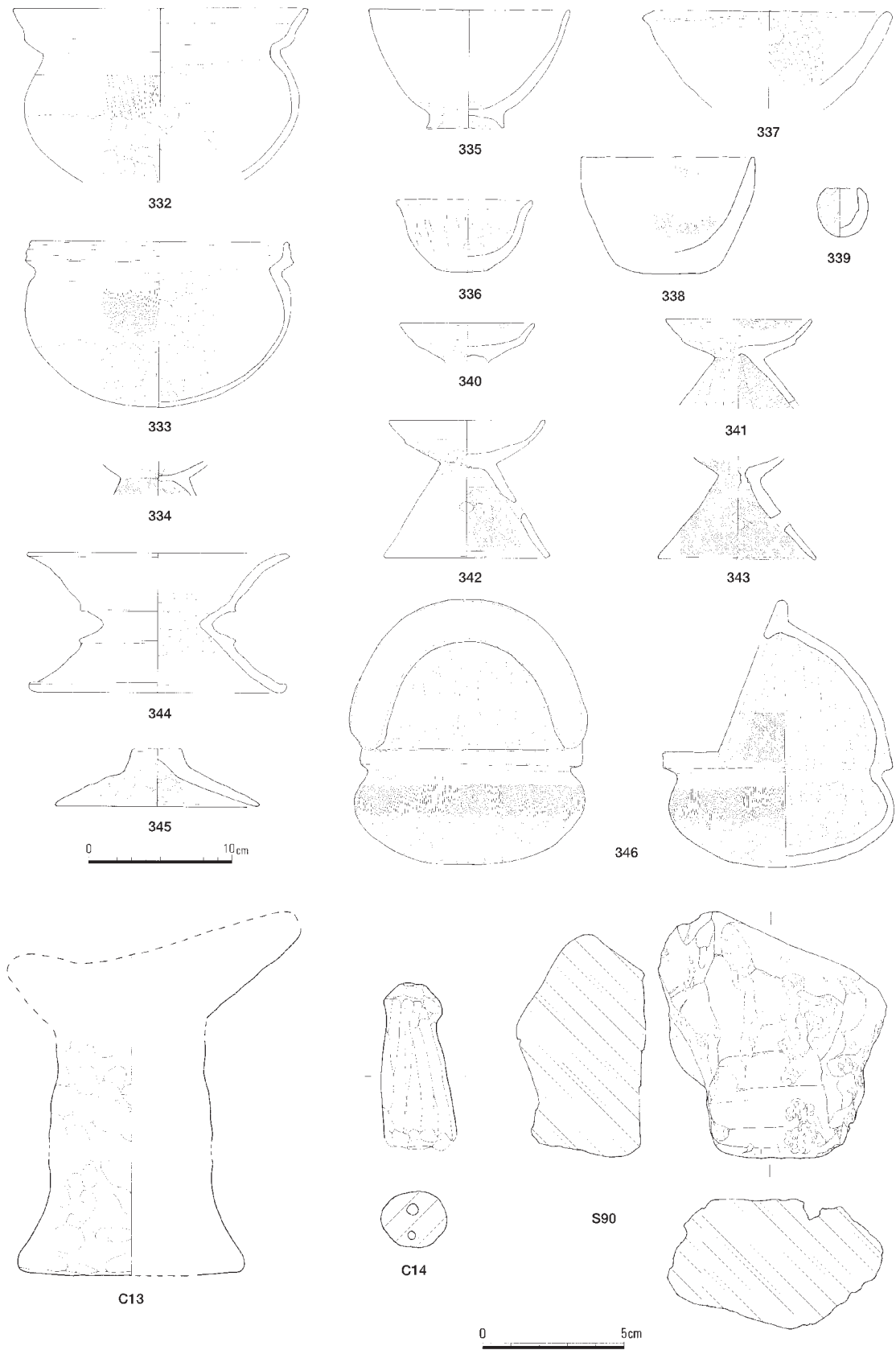
第130図 井戸3出土遺物④ (1/4)



第131図 井戸3出土遺物⑤ (1/4)



第132図 井戸3出土遺物⑥ (1/4)



第133図 井戸3出土遺物⑦ (1/4)

4 土壌

土壌35 (第120・121・134図)

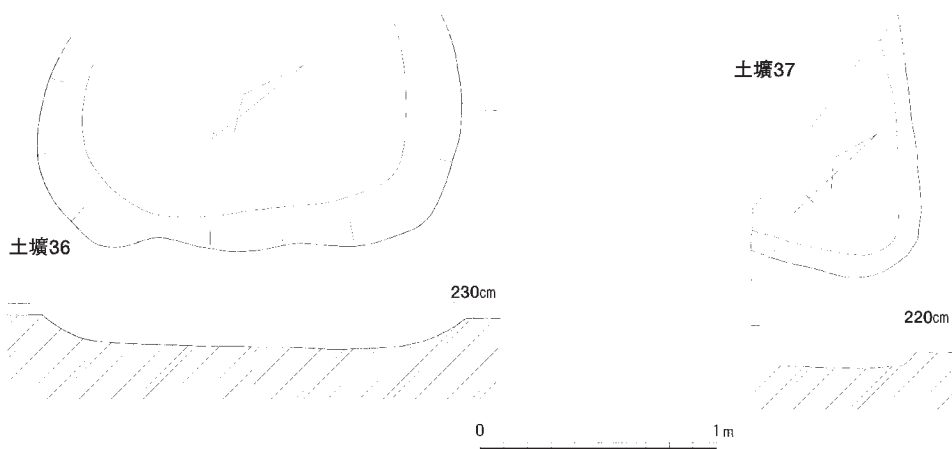
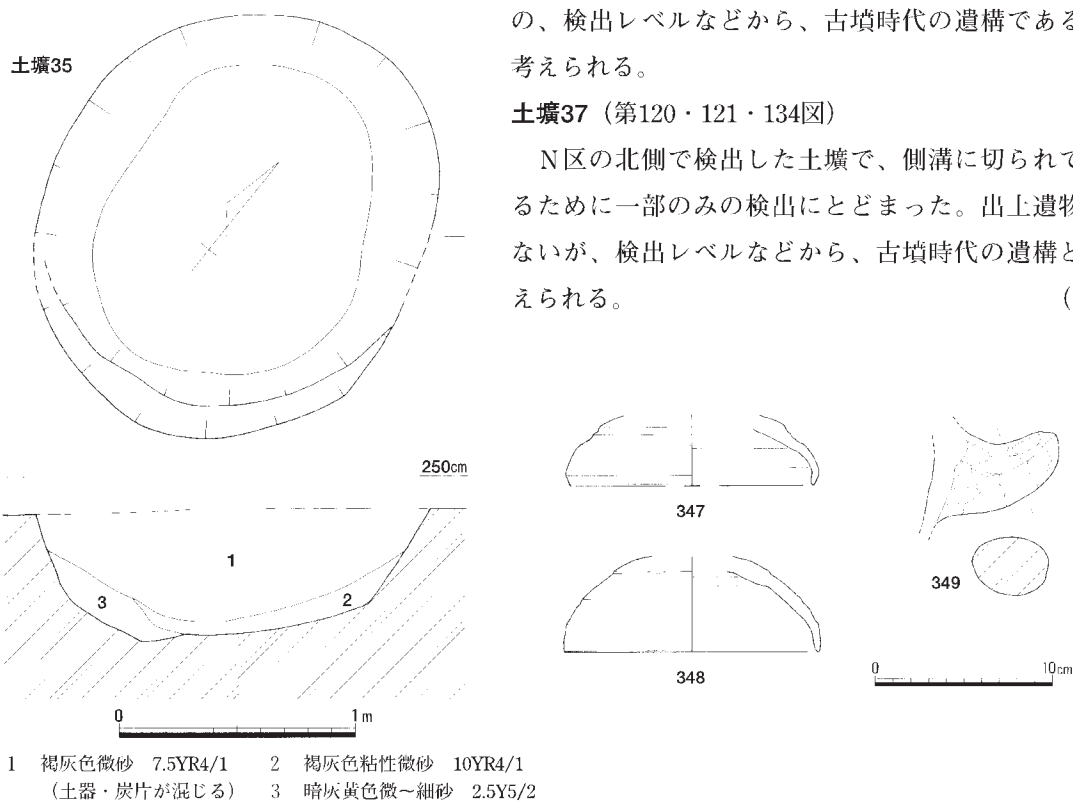
0区の北側で検出している円形の土壌である。長径188cm、短径160cm、深さ55cmを測り、断面形は碗状を呈する。出土遺物には須恵器の杯蓋347・348、甗の取手349などがあり、杯蓋の形状から時期は古墳時代後期後半であると考えられる。

土壌36 (第120・121・134図)

0区の北側で検出した楕円形の土壌で、長径178cm、深さ15cmを測るものである。竪穴住居9によって北西側を削平されている。出土遺物はないものの、検出レベルなどから、古墳時代の遺構であると考えられる。

土壌37 (第120・121・134図)

N区の北側で検出した土壌で、側溝に切られているために一部のみの検出にとどまった。出土遺物はないが、検出レベルなどから、古墳時代の遺構と考えられる。



第134図 土壌35～37 (1/30) ・土壌35出土遺物 (1/4)

5 溝

溝25 (第120・121・135図、図版11・16)

L区西端とN・O区北端で検出された、東西方向に緩く蛇行して流れる2条の溝である。O区内で南側の溝が北側の溝に接続する形態を呈するため、一連の溝とした。遺物は古墳前期の土師器が多数を占めるが、少量の須恵器片が出土しており、溝の時期は古墳後期と考えられる。(岡本)

溝26 (第120・121・135図)

溝26はM区西側で検出された。北西から南東方向に流れていたと考えられ、基本的に逆三角形の掘り方をもつ。東肩口付近ではわずかな下がりの変換箇所が認められたが、これはL区(西)の西側で検出された溝27と溝28の派生状況の兆しを示す。時期は古墳時代後期である。

溝27 (第120・121・135図)

溝27はL区(西)の西側で検出され、北西から南東方向に流れていたと思われる。溝26から派生したものと考えられ、方形のしっかりとした掘り方をもつ。時期は古墳時代後期である。

溝28 (第120・121・135図)

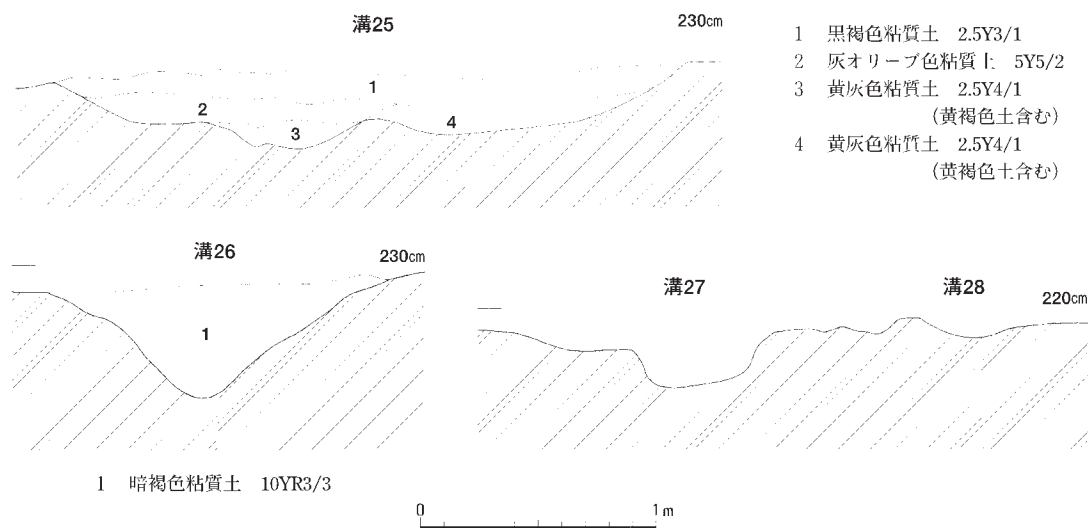
溝28はL区(西)の西側で検出された。北西から南東方向に流れていたと想定される浅い溝である。溝27と同様に溝26から派生したものと考えられる。時期は古墳時代後期である。(澤山)

溝29 (第120・121・136図)

K S区西端近くで、北から南に流下する溝が3条並んで検出された。溝29はその中で最も西側に位置し、最大幅158cm、深さは46～54cmを測る。断面は逆台形を呈するが、埋上の第1層はそれ自体が平・断面とも溝状を呈しており、少なくとも2時期の溝が重複している可能性が高い。出土土器には土師器の壺350、甕351～353、高杯354などがみられ、溝の時期は古墳前期前半に比定される。

溝30 (第120・121・136図)

溝29と31の間に位置し、最大幅117cm、深さ19～22cmを測る溝である。出土遺物には、土師器の壺355・356、甕357～359、高杯360などがみられる。これらの遺物より、溝の時期は古墳前期前半



第135図 溝25～28 (1/30)

に比定され、溝29と大きく異なる時期に機能したとみられる。

溝31 (第120・121・136図)

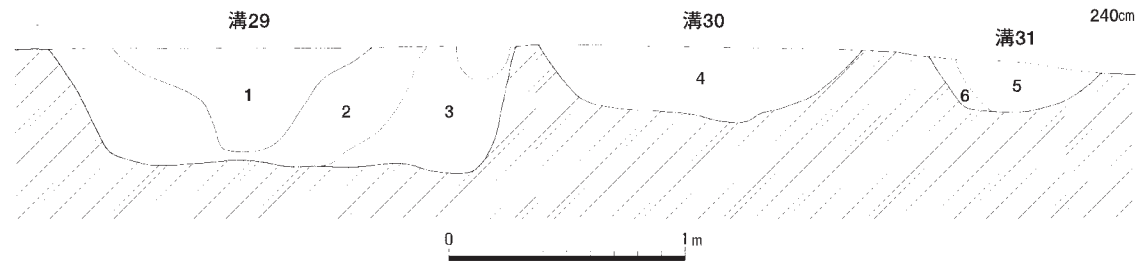
溝30の東側に位置する溝である。最大幅77cm、深さ17~22cmを測り、溝29・30よりやや規模が小さい。埋土中から図示可能な遺物は出土していないが、検出状況などから溝29・30と同じく古墳前期前半に位置づけられよう。(岡本)

溝32 (第120・121・137図)

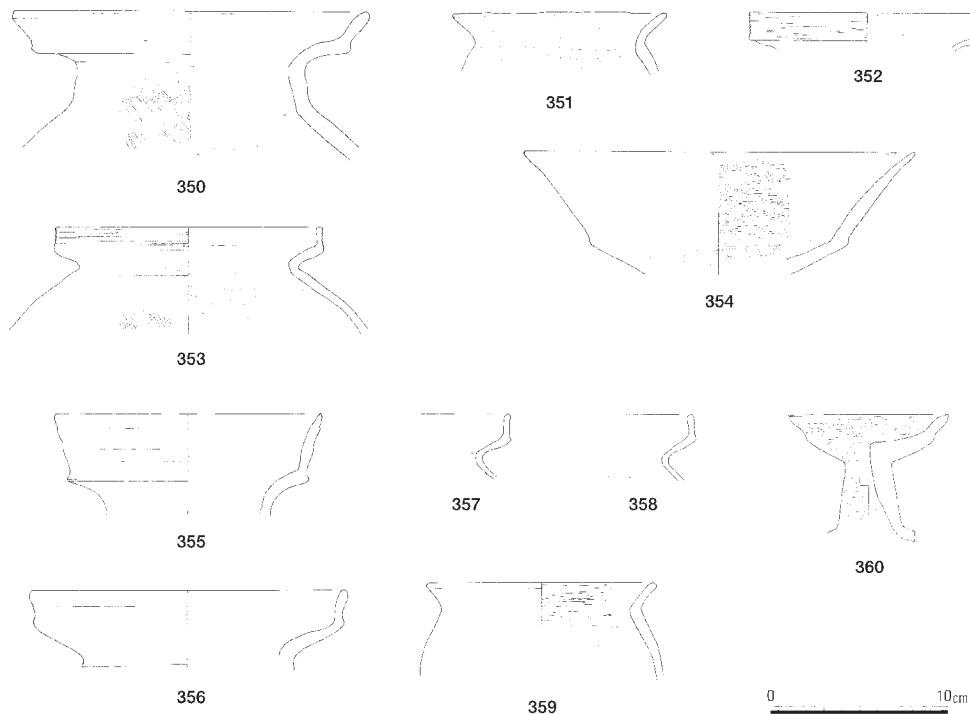
溝32はI・J区の北側で、後述する溝33と溝34の埋没後のほぼ同位置で検出された。流れは北東から南西方向と考えられる。時期は古墳時代後期と思われる。

溝33 (第120・121・137図)

溝33はI・J区の北側で検出された。北東から南西方向に流れていたと考えられ、方形のしっかりとした掘り方をもつ。時期は古墳時代後期と思われる。



- | | | |
|-------------------|----------------------|--------------------|
| 1 黄灰色粘質土 2.5Y5/1 | 3 にぶい黄褐色微砂質土 10YR5/4 | 5 灰黄色微砂質土 2.5Y6/2 |
| 2 灰黄色微砂質土 2.5Y6/2 | 4 灰黄色微砂質土 2.5Y6/2 | 6 暗灰黄色微砂質土 2.5Y5/2 |

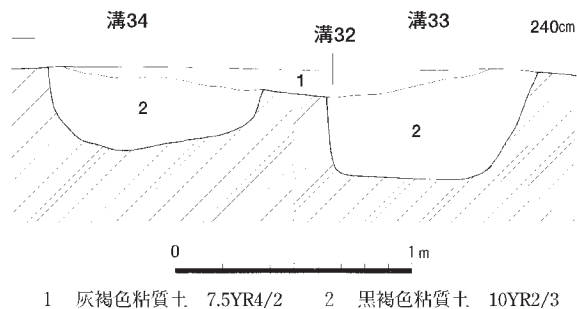


第136図 溝29~31 (1/30)・溝29・30出土遺物 (1/4)

溝34 (第120・121・137図)

溝34は、I・J区の北側で先述の溝33とほぼ平行である。北東から南西方向に流れていたと考えられる。

断面形態も溝33同様に方形のしっかりとした掘り方を有しており、両者は同一の用途を持ったものと思われる。時期は古墳時代後期と思われる。(澤山)



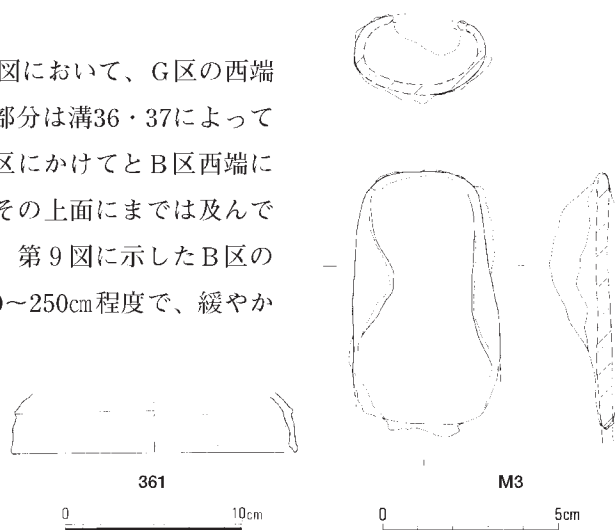
第137図 溝32～34 (1/30)

6 水田

水田2 (第7～28・120・121・138図)

第119図に示した範囲で検出された。同図において、G区の西端からKS区(東)の西端にかけての空白部分は溝36・37によって失われた部分だが、KS・KN・N・O区にかけてはB区西端については、弥生時代の微高地が所在し、その上面にまでは及んでいない。微高地との層序関係については、第9図に示したB区の様子が典型的である。田面の海拔高は230～250cm程度で、緩やかな凹凸を示すが、畦畔等の区画を示す構造は認められない。

遺物の出上は少ないが、須恵器杯蓋361はA区から、袋状鉄斧M3もA区から出上しており、古墳時代後期の水田遺構と考える。(光永)



第138図 水田2 出土遺物 (1/4・1/2)

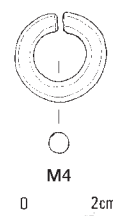
7 その他の遺構

土器溜まり2 (第120図)

B区の西端部に位置する。古墳時代後期の水田層直下で検出され、およそ130×100cmの範囲に平面的に検出された。約1000片の細・小片ばかりで、時期のわかるものは弥生時代中期中葉が多い。須恵器片も4・5点混じるので、古墳時代後期の水田による削平・攪乱をかなり受けている。(物部)

柱穴1 (第120・121・139図、図版26)

KS区の溝29～30よりも西側に古墳時代の柱穴が集中して分布する。柱穴1は井戸3の西側に位置する最大径50cm、深さ38cmの円形の柱穴で、埋土中から土器細片のほか古墳時代後期の耳環M4が出土した。外径2.6cm、内径1.5cm、を測る金銅製で、表面には鍍金が部分的に残存する。柱穴内を精査したが耳環はこの1点のみであった。出土状況には埋葬や祭祀と関連づけられる要素は確認できず、いかなる理由で耳環がこの柱穴に埋蔵されたのかは不明である。(岡本)

第139図 柱穴1
出土遺物 (1/2)

第7節 古代・中世の遺構・遺物

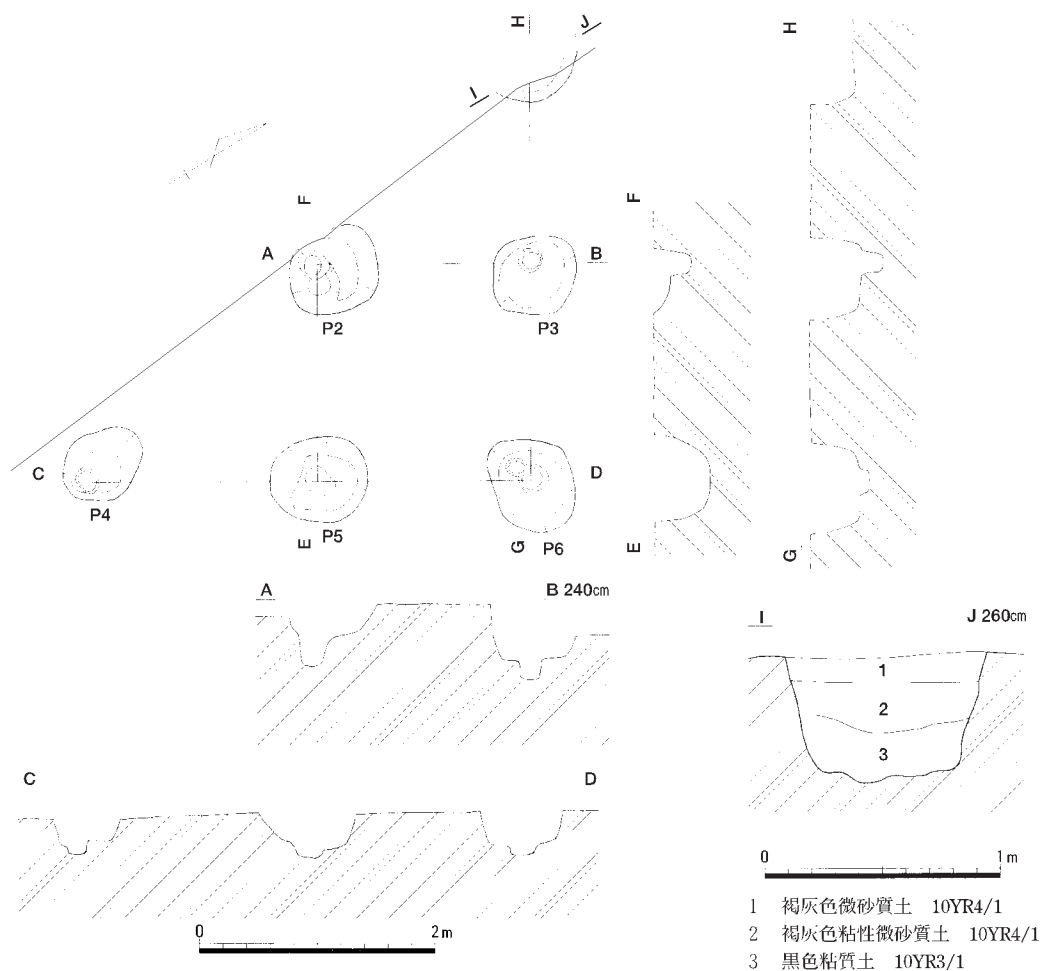
1 古代・中世の概要

掘立柱建物を1棟、溝を4条検出している。遺構密度は希薄で、包含層からの遺物の出土量も少ない。掘立柱建物が調査区の西側のO区で検出されていることから、集落域は西側に広がっていることも考えられる。調査区東側では北東から南西方向に流路をとる、比較的規模の大きい溝36・37があり、常時、水が流れていた溝であったことが埋土の状況から想定される。自然地形を利用したこのような溝は、陸上競技場調査区でも見られる。(圖)

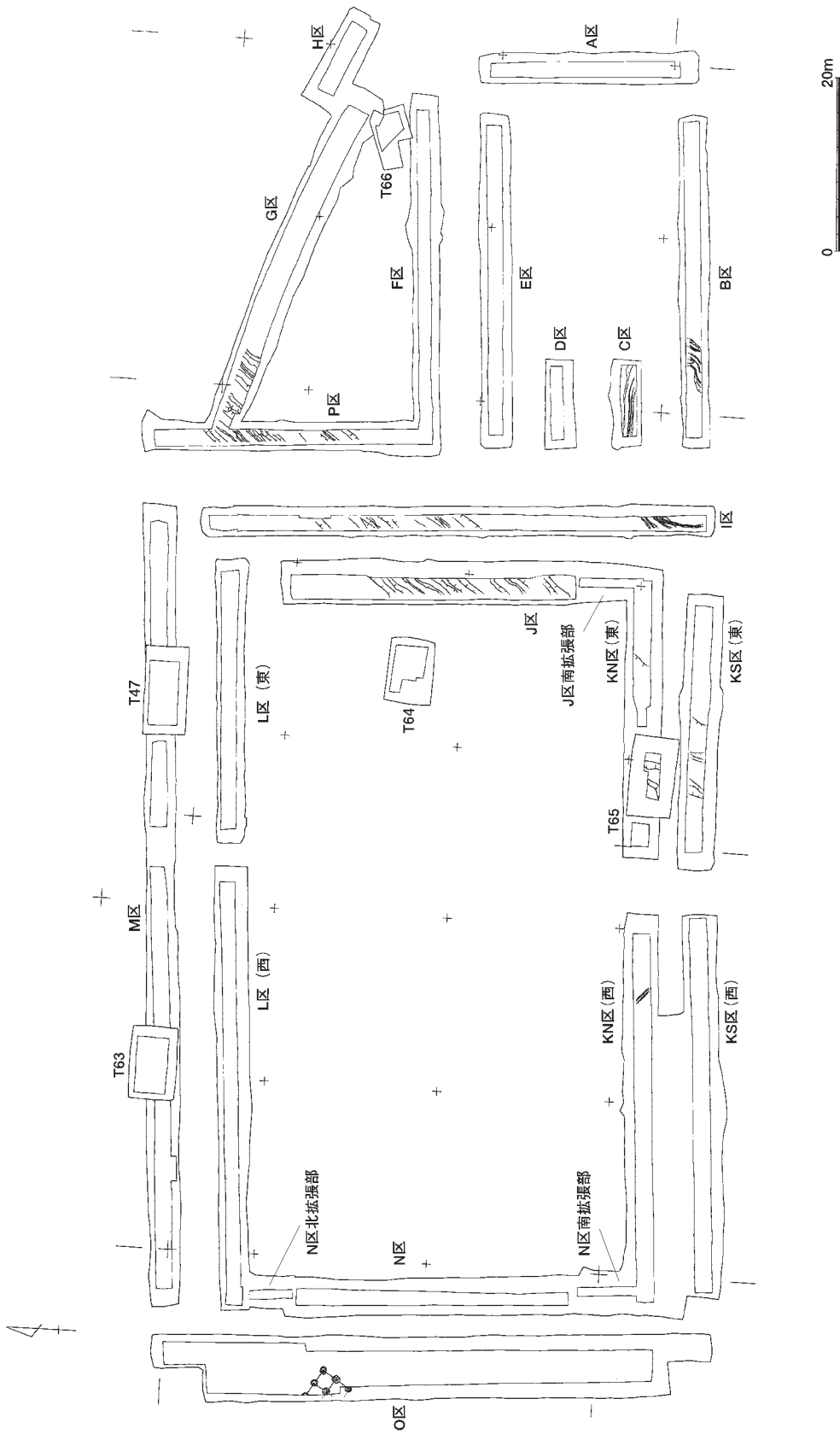
2 掘立柱建物

掘立柱建物1 (第140～142図、図版15)

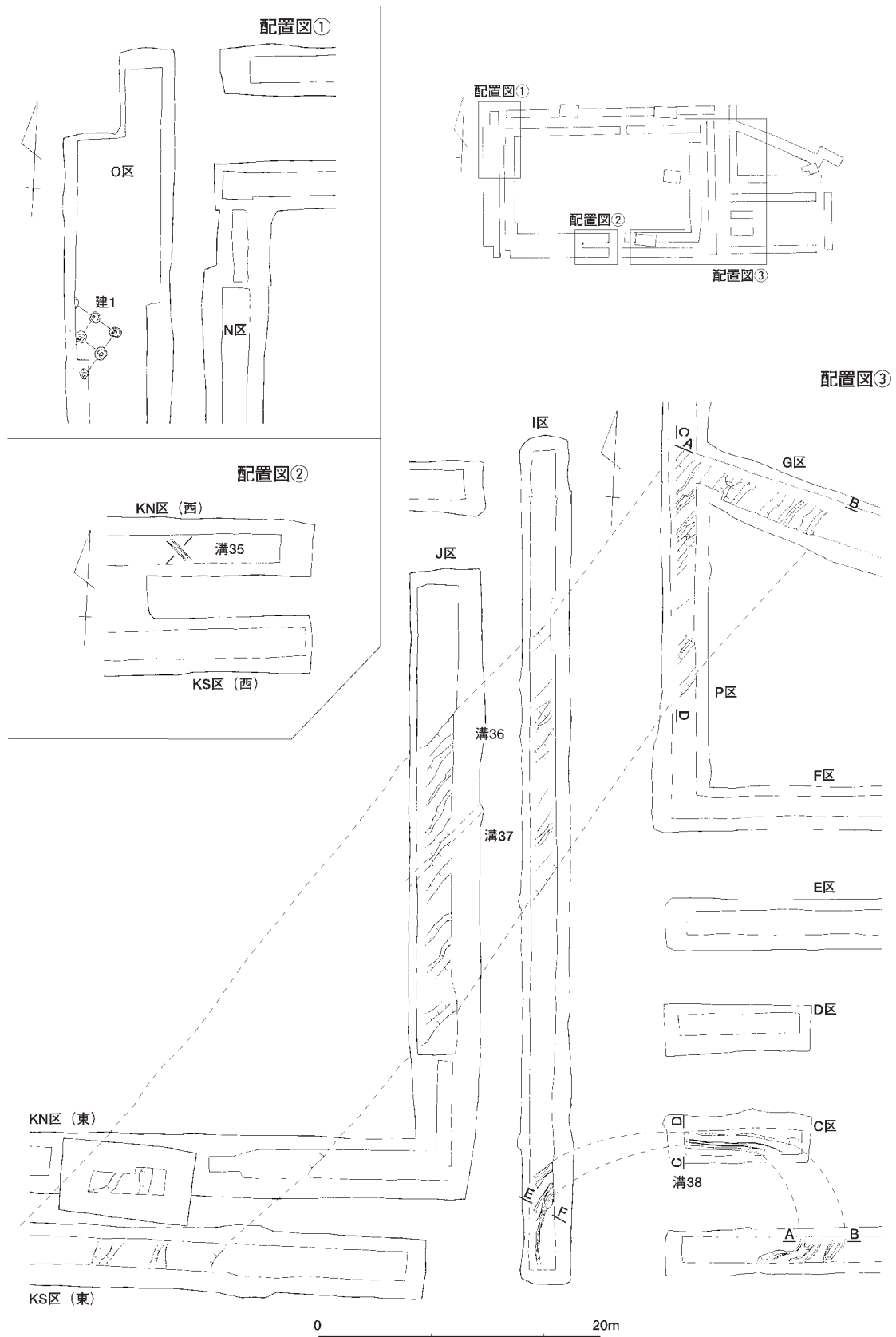
O区の北半部に位置する掘立柱建物である。西側が調査区外のため本来の規模は不明で、柱穴の配置から2×2間ないしそれ以上の総柱建物になる。検出範囲での規模は桁行約345cm、梁間374cmを測



第140図 掘立柱建物1 (1/60・1/30)



第141図 古代・中世遺構全体図 (1/700)



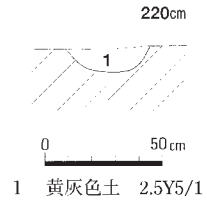
第142図 古代・中世遺構配置図①・②・③ (1/400)

り、棟方向はN-59°-Wを指す。柱穴は最大径40cm前後を測り、形状は不整な楕円形であるが、P2・3・6は若干隅丸方形に近い。各柱穴の底面には柱を据えた径15~20cm程度の穴が明瞭に検出され、P2・6では2基が重複することから、少なくとも1回の建て替えがなされたと推測できる。柱穴内から時期を特定できる遺物は出土していないが、古墳後期~奈良時代頃の土器を含む包含層の上面に築かれていることから、大まかに古代の遺構と判断している。

3 溝

溝35 (第141~143図)

KN区(西)の東端付近で検出された溝で、北西から南東へ流下する。最大幅45cm、深さ3~11cmを測り、断面形は浅い碗状を呈する。出土遺物が土器細片のみのため時期を特定しがたいが、検出層位などから一応、古代ないし中世の溝と判断した。(岡本)



第143図 溝35
(1/30)

溝36・37 (第141・142・144図、図版5・6・8)

溝36と溝37はG区・I区・J区・KN区(東)・KS区(東)・P区の各調査区を大きく横切る溝である。流れはいずれも北東から南西方向である。深さは、溝36は172~186cm、溝37は140~257cm、検出状況から溝36より溝37の方が新しい。

断面観察からは、いずれも下層が粘性土、上層は一部に粘性を帯びる粘性土が認められるものの、砂質土を基調とする堆積が確認された。おそらく、長期間に堆積される溝内の流砂を必要に応じてさらい、改修を行っていたと思われる。以上のことから、これらは高い通水目的と用途を持ち得た溝であったことが推測される。

遺物はわずかであるが、須恵器蓋362や格子目叩きを残す平瓦片R1などが認められた。しかし、これらは上層からの出土であることや同期の遺構が周辺で検出できていないことなどから、これらの遺物が実態として機能していた時期を示しているのか判断は難しい。ただし、これらと「津島遺跡4」の溝51~55の流路方向や規模、断面状況などを比較検討してみると、両者の共通点を指摘でき、ほぼ同一機能を持ち合わせていたと思われる。こうしたことから、時期も古代から中世までを想定して問題ないと考えられる。(澤山)

溝38 (第141・142・145図、図版6)

B・C・I区においてそれぞれ検出された浅い溝状の遺構が、同一の遺構と判断されたもので、長径18m前後の楕円形で弥生時代の微高地部分を取り囲むように所在する。

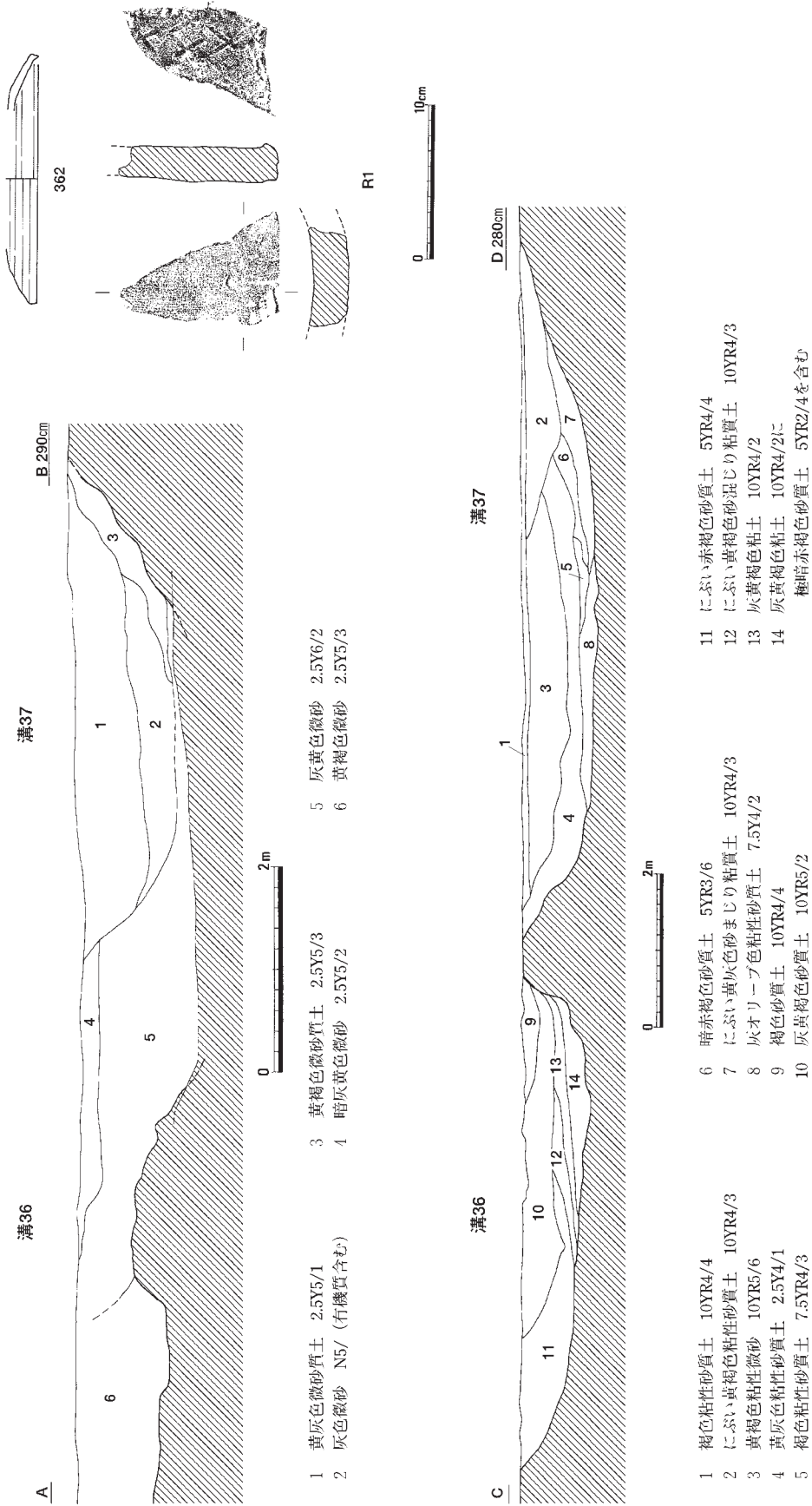
場所ごとに非常に不定型な規模を示すが、幅100cm以内、深さ20cm以内程度の数値が得られる。底面にも凹凸があり、水を流す溝というよりは微高地縁辺を掘削した残痕とでもみなしうる形状である。

層序に見合う出土遺物はないが、上下の層序から古代ないし中世の遺構と考える。(光永)

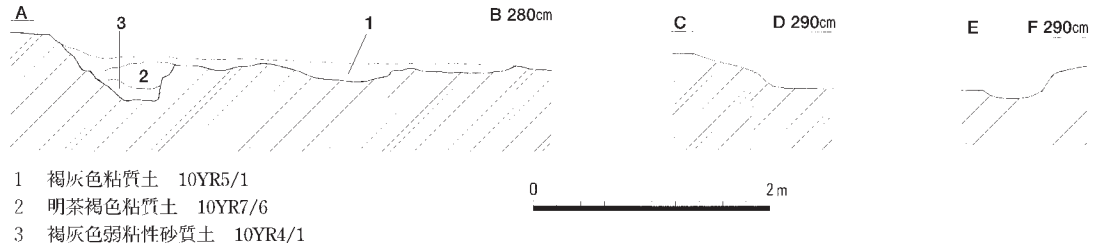
4 遺構に伴わない遺物

遺構に伴わない遺物 (第146図)

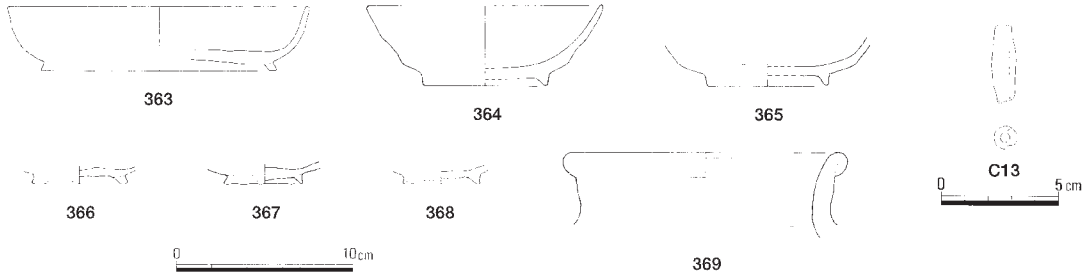
包含層から出土した遺物には、古代の遺物には高台が付く杯363、中世の遺物には吉備系土師器碗364~368、備前焼甕369、土錘C13などがある。遺構出土の遺物も少量であったが、同様に包含層からの出土量も少ない。(團)



第144図 溝36・37 (1/60・1/80) 出土遺物 (1/4)



第145図 溝38 (1/60)



第146図 遺構に伴わない遺物 (1/4・1/3)

第8節 近世・近代の遺構・遺物

1 近世・近代の概要

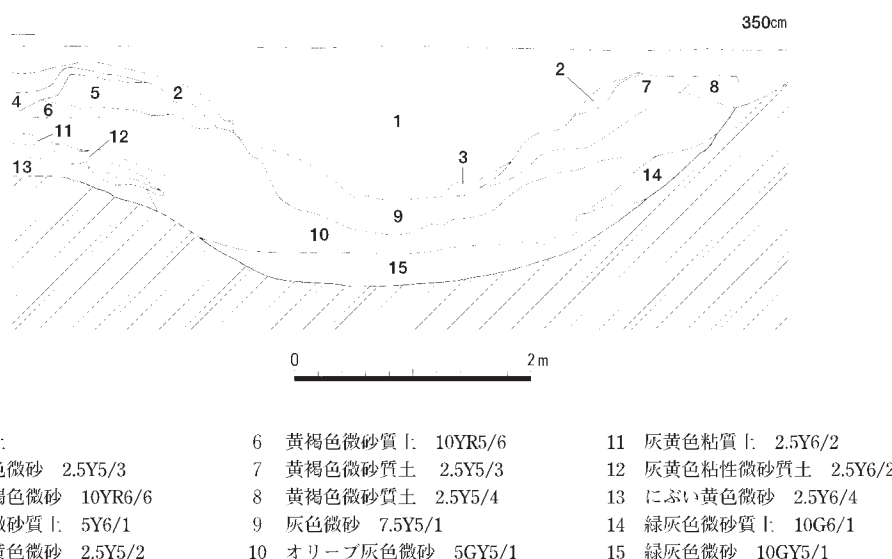
遺構密度は極めて希薄である。近世の遺構としては古代の条里溝を踏襲したと考えられる溝39があり、条里溝にも近世まで踏襲しているものと、陸上競技場調査区のように中世段階で埋没しているものがあることがわかった。近代～現代にかけての遺構であるが、偕行社の基礎跡と廃棄物層はともに、津島グラウンドが陸軍関係の施設である練兵場であったことから残された、特徴的な遺構であるといえる。1910（明治43）年に建設された偕行社は県下に残る代表的な明治擬洋風建築として現存しており、この発掘調査の直前に移築が行われたばかりである。1968（昭和43）年にも移築されたことがわかっていて、今回はその建設当時の基礎が検出された。また廃棄物層については昭和9年の室戸台風時のものであったことが判明したが、この廃棄には陸軍が関係していたため廃棄場所に練兵場が選択されたようである。（團）

2 溝

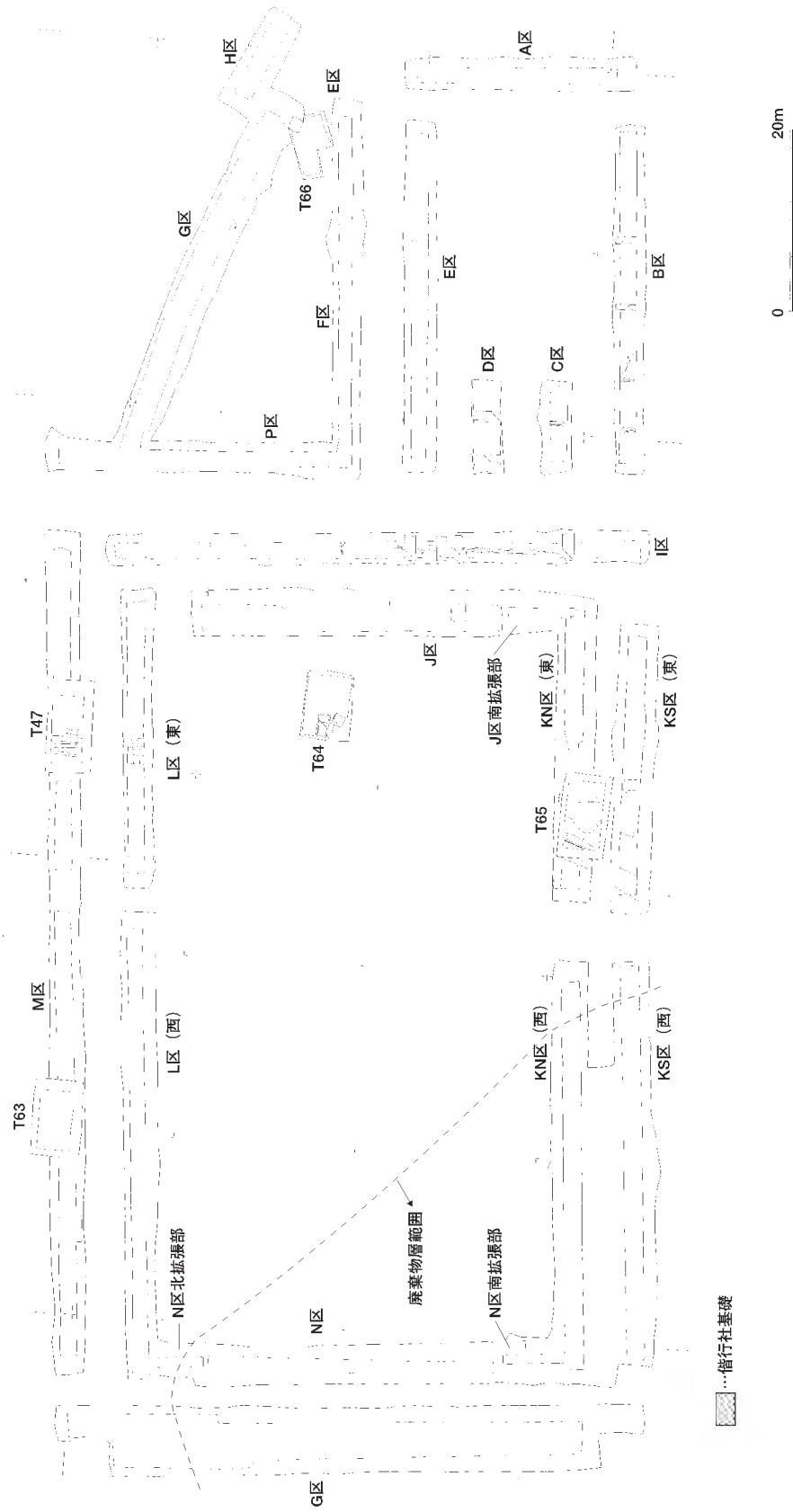
溝39（第147～150図）

溝39はL区（東）中央付近で検出された。検出幅は302～358cm、深さは158cmを測り、大規模なものであったといえる。流路は北から南方向に流れており、これは平成12年度の確認調査T47の溝47、平成14年度の確認調査T65の溝58につながるものと考えられる。

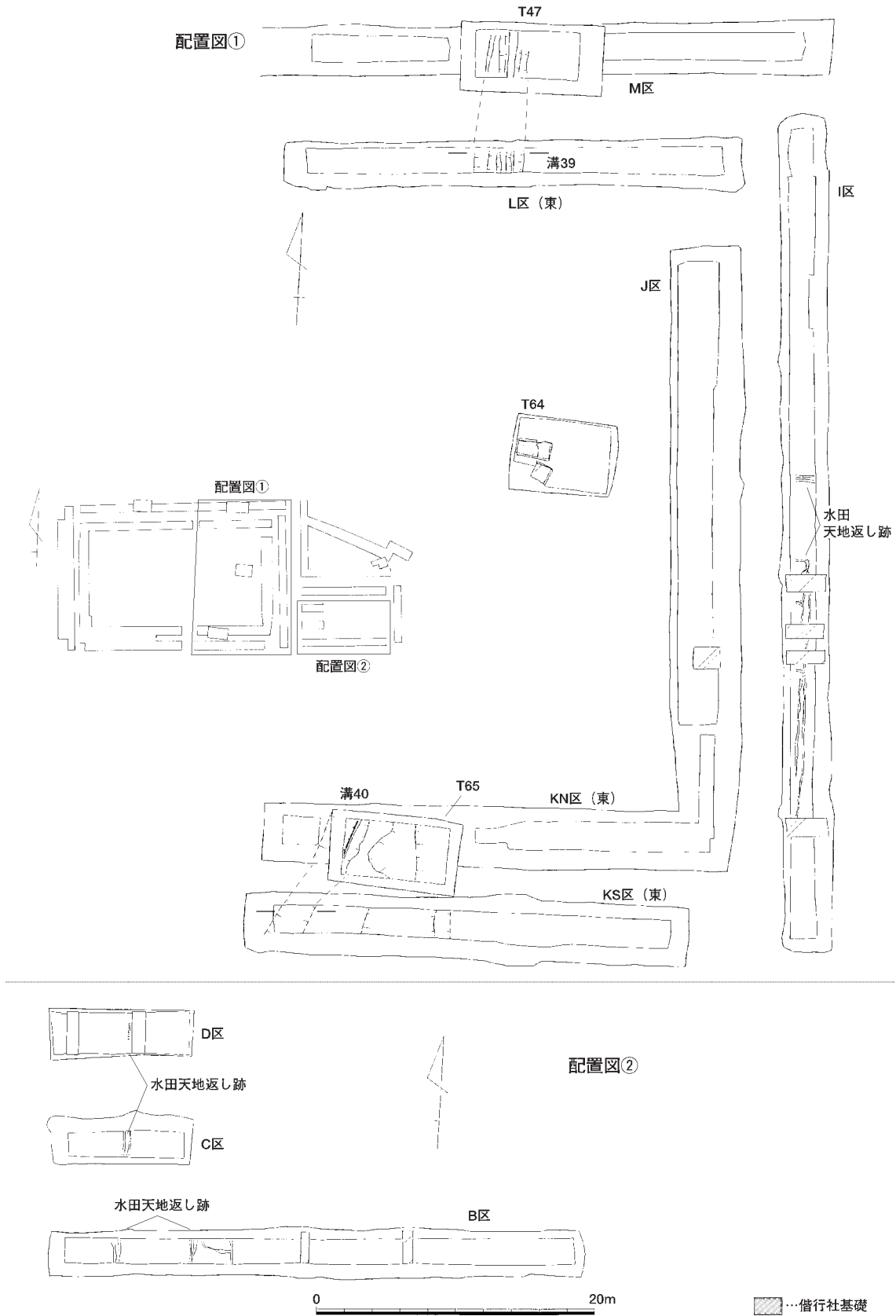
遺物は肥前皿370・371・374、碗375、猪口376、仏花器372や瀬戸美濃鉢377、中国碗373などが認められ、時期は近世全般の出上を見る。なお、周辺の条里復元から、これは伊福郷と弘世郷を東西に分かつ郷境の溝であり、機能として近代まで踏襲、利用されていたものである。（澤山）



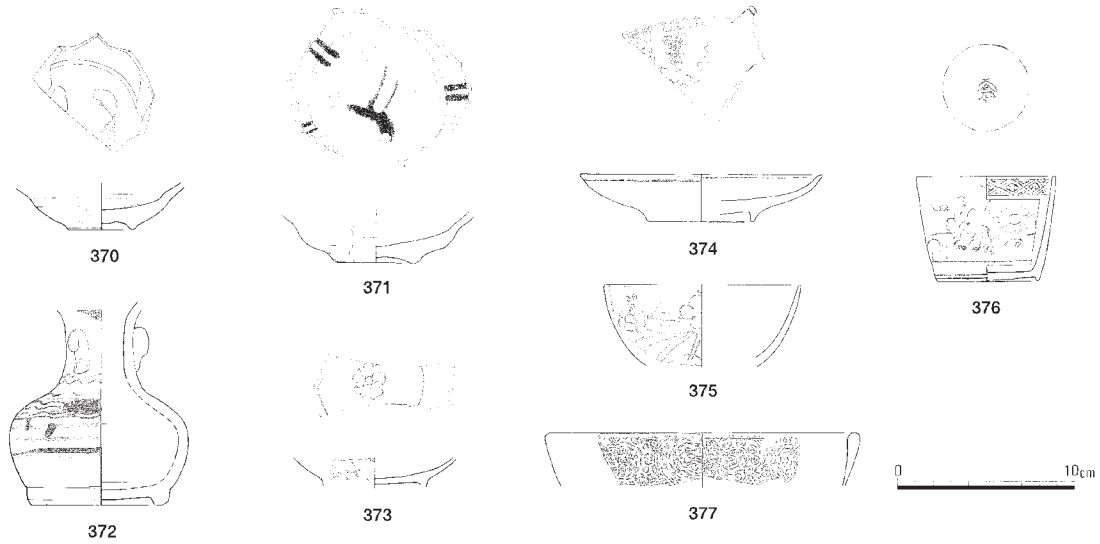
第147図 溝39（1/60）



第148図 近世・近代遺構全体図 (1/700)



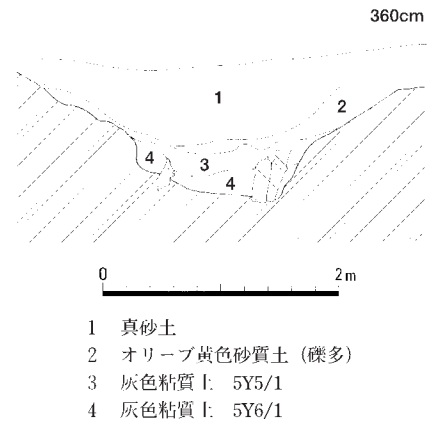
第149図 近世・近代遺構配置図 (1/400)



第150図 溝39出土遺物 (1/4)

溝40 (第148・149・151図)

KN・KS区で検出された北東から南西に流下する溝で、第二次確認調査時にT65で検出した溝59にあたる。幅約3m、深さ約1mを測り、溝の中央は断面箱状に深く掘り窪められ、壁面は横木を縦杭で固定して保護されている。確認調査時に、昭和41年と書かれた看板片などが出土したことから、時期はごく新しく、近代から現代にかけて存続した溝であると考えられる。(岡本)



第151図 溝40 (1/60)

3 その他の遺構

水田天地返し跡 (第148・149図)

B・E・F区の西半から、C・D区およびI・J区にかけて検出されている。練兵場造成前の水田層直下から深さ30~40cmまで掘り込まれ、南北方向に掘り残された畦畔状の部分は、間隔は3~5mとばらつきがあるものの、並行関係を保っている。

この遺構の性格については、ノートルダム清心女子大学教授高橋護氏の御教示により、近代の水田において地味の枯渇時に行われる水田土壌の天地返しと考えた。

偕行社基礎 (第148・149図)

練兵場当時、陸軍第17師団の将校の社交場として建築された偕行社は、今回2度目の移転を行ったが、建築当時の基礎がB~D・I区等で検出された。割石とコンクリートによる構造物で、方向はほぼ東西南北を示している。建築当時の記録との照合はできなかったが、終戦直後の航空写真に残る2棟の建物の位置関係は整合しており、写真に残らない建物の基礎も残っていた。(光永)

廃棄物層 (第20・26・27・148・149図)

調査区の西端に位置するKS・KN区の西半からN・O区にかけて、表土直下から地表下約170cmまで、厚さ1~1.5mにおよぶ膨大な廃棄物の埋め立て層が検出された。この廃棄物は、昭和9

第3章 発掘調査の概要

(1934)年9月20・21日の室戸台風による水害に伴って発生し、処理のために当時軍用地であった本地点に埋め立てられたものである。その存在は、既に第二次確認調査のT50・57・58において知られていたが、今回の検出でその広がりがさらに明確となった。検出地点を基に埋め立て範囲を復元すると、体育館調査区西端から硬式野球場南側のT58にいたる、現在の総合グラウンド南端に沿った最大幅200m以上の広範囲におよぶことがわかる。

この層が室戸台風時の廃棄物層であることは、これまで第二次確認調査時の地元古老の証言に基づいていたが、今回は新たに当時の新聞『中国民報』（現在の『山陽新聞』の前身）の出土によってその根拠がさらに強固なものとなった。出土した新聞には、昭和7（1932）年6月22日から昭和9年6月3日付までのものが確認され、洪水以後のものが認められないことから、廃棄物の発生時期をほぼ正確に絞り込むことができたのである。また、当時の被害状況をまとめた『岡山風水害史』（小林健二著、中國聯盟出版部、1934）にも、陸軍が水害後の復旧活動に従事し、廃棄物を練兵場内に埋め立て処理したとの記録があり、まさに今回の状況と一致するといえる。

廃棄物層は汚泥・廃材を主体とし、その内部に当時のガラス瓶・陶磁器・看板・家財道具などを大量に包含していた。本来的には表上の一部とみなされるため重機掘削の対象となったが、掘削時に立会を行い資料の採集に努めた結果、400点を超える資料が収集・保存された。ガラス瓶や瑤瑯看板には商店名や企業名、商標名が書かれたものが多く認められ、当時の都市住民の食生活・商業活動などの一端がうかがわれた。

以上のように、この廃棄物層は台風による水害と復旧作業の実態、特に軍が廃棄物処理に大きく関わった事実や、当時の市民生活を知るうえで貴重な資料となったといえる。

出上した資料は、通常の埋蔵文化財としての扱いは困難ではあったが、貴重な民俗資料であるとの観点からその恒久保存の方途が協議された結果、岡山県立博物館への収蔵が決定し、平成15年度中に同館への移管が完了した。

（岡本）

第4章 まとめ

第1節 発掘調査の成果

弥生時代前期 確認調査においてその存在が明らかになっていた水田を、調査区域の東側で検出した。水田に伴う畦畔はE～G・I・L・M区の各調査区で見つかり、北東―南西の方向とそれと直交する方向で検出され、平成11・12年度に調査した陸上競技場調査区で検出した水田と同様に方形または長方形に区画されたものであったことが想定され、検出された溝は水田に伴う水路であると考えられる。前期水田層と考えられる黒色土は色調から2層に分層できる部分があり、これは陸上競技場調査区の成果などから新旧の時期差であることが考えられる。調査区域の西側で北西から南東へ流れる幅約25～30mの河道を検出し、水田から低位部への転換部分に河道が南流し、この河道をはさんで西岸に低位部、東岸に水田という様相を呈している。水田層からは少量ではあるが弥生時代前期後葉の土器が出土しており、陸上競技場調査区で検出された水田と同時期のものであるといえる。低位部層で出土した土器は前期前葉の時期のものが多く、出土状況は平成14年度に再調査した南池地点のT6で検出した前期低位部から出土した前期前葉の土器と同じく接合のできない小破片の状況で散漫に出土しており、南池地点同様に付近に微高地の存在が想定される。この低位部層から出土した前期前葉の土器に炭化物が付着していたものを、放射性炭素年代測定法による測定を依頼した結果、平成15年に国立歴史民俗博物館が発表した弥生時代開始の年代観に近い、従来よりも古い測定結果が出ている。詳細は第4章第4節および自然科学的分野における分析・鑑定の際の章にある。

弥生時代中期 中葉から後葉にかけての集落が検出された。特に中葉の遺構は津島遺跡内の今までの調査では第二次確認調査のT57の1か所でのみ検出されており、実態については不明な点が多かった。しかし今回の調査では竪穴住居、土壇などが比較的まとまって検出されている。津島遺跡では中期に入ると堆積作用が進んで微高地化が進むことがわかっているが、今回の調査でも前期から引き続いて同じ流路をとる河道（河道2）が土層断面から中期前葉の段階で完全に埋没し、その後に40cm以上の微砂質土が堆積した面において、中期中葉の遺構（土壇12や22など）が検出されており、微高地化が進むことで、中期中葉には集落としての利用が始まるようである。特に遺構は南側の調査区で検出されているものが多く、集落の中心は南側であったことがわかる。O区では、検出された竪穴住居4軒の他にも、周辺で検出されている焼土と柱穴の配置から、さらに5軒の竪穴住居の存在が考えられる。O区で検出された土壇2・7・18などは規模が大きく、炭を多く含む層が面的に検出されている点など、南方遺跡で検出された灰穴と報告されている土壇と類似している。この土壇の性格は不明であるが近年、墓である可能性も指摘されている。土壇12は完形の土器が入れ子にされ、かつ埋設された出土状況が特異である。また遺物で注目されるものには、口縁部の形態や胎土などが北部九州系のものと類似する壺（181）が包含層から出土している。

弥生時代後期 この時期の遺構密度は希薄であるが、土器棺墓1の北側で平成14年度に調査したT63内においても、同様に弥生時代後期の土器棺墓が検出されており、周辺には墓域が存在したと考えら

第4章 まとめ

れる。津島遺跡では、昭和35～38年に行われた南池の調査でも後期の土器棺が検出されているが、やはり同時期の土壙墓は検出されていない。

古墳時代 集落の一部と後期の水田を確認している。調査区域の北～東側においては、土層断面で海拔高約230cmの高さにおいて灰色がかかった粘質土層を検出し、これは古墳時代後期の水田層と想定されるものである。この水田は、調査区域の東側半分以上の広範囲に広がっている。調査区域の南西にあたる部分では、竪穴住居や井戸、土壙などが検出されていることなどから、集落が広がっていたものと推定される。廃棄物層によって大きく削平を受けているO区の南側やKN区（西）などの、古墳時代の遺構がほとんど検出されていない部分においても、本来は集落が広がっていたことは十分に考えられる。出土遺物では、井戸1・2から出土した甕の頸部に蔓状のものが残存しているものが3個体（244・257・260）あり、釣瓶として利用されていたことも考えられ、注目される。

古代・中世 遺構密度は希薄であるが、掘立柱建物が調査区域西側のO区で検出していることから集落域は西側に広がっていることも考えられ、またO区の南側は廃棄物層の削平を受けているため、本来ならこの部分でも遺構が存在した可能性もある。しかし、遺物の出土量は少ないことは否めない。調査区域東側では、北東から南西方向に流路をとる比較的規模の大きい溝36・37があり、常時水が流れていた溝であったことが埋土の状況から想定される。自然地形を利用したこのような溝は陸上競技場調査区1区でも見られる。古代の条里溝を踏襲したと考えられる溝39（T47でも検出）は近世に掘削され直したと考えられ、このことから条里溝の南北方向のものは近世まで踏襲し、確認調査のT11・13や陸上競技場調査区1区で検出した東西方向の条里溝は中世段階で埋没していると考えられる。また溝36・37は現在、総合グラウンド南側を流れる用水路がKS区（西）の南側で折れ曲がる地点と総合グラウンド正門から北東へ延びる道を繋いだ直線上に延びる溝であることから、中世以降の溝36・37が埋没した以降に用水路が現在のように東へと付け替えられ、正門から北東へ延びる部分は埋没した後に道になってその痕跡を今に留めている可能性が考えられる。

近世～現代 近世の遺構は、条里溝が踏襲された溝39が検出されたのみであり、土層断面の観察から全域が水田であったようである。近代以降になると、1907（明治40）年以降に津島グラウンドのある一帯が陸軍関係の施設である練兵場として使用された。今回の調査で1910（明治43）年に建てられた陸軍将校の社交場であった偕行社の基礎跡が見つかった。偕行社は調査の直前に移築をされて現存しており1968（昭和43）年にも移築されたことがわかっている。廃棄物層は、第二次確認調査などでも、その存在は知られており、1934（昭和9）年の室戸台風時のゴミであることは聞き取り調査からも想定されていたことだが、今回の調査で日付の判読できる新聞の存在によって、その根拠が明確になった。またこの廃棄物層の資料は、県立博物館に収蔵されている。

以上のように、確認調査が終了した段階ではこのように多くの遺構を検出することは想定しえなかった。しかし、弥生時代前期の低位部層から多くの前葉の土器が出土し、津島遺跡では今まで実態のよくわからなかった弥生時代中期中葉の集落の一部が確認されるなど、確認調査の結果以上の成果があったといえるであろう。

（團）

参考資料

「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告137・151・160・173・181」『津島遺跡』1～5 岡山県教育委員会 1999・2000・2001・2003・2004

『津島遺跡 発掘調査・40年のあゆみ』 岡山県教育委員会 2004年

『南方（国立病院）遺跡発掘調査報告』 岡山市教育委員会・岡山市遺跡調査会 1981年

第2節 津島遺跡をとりまく自然環境と集落の変遷

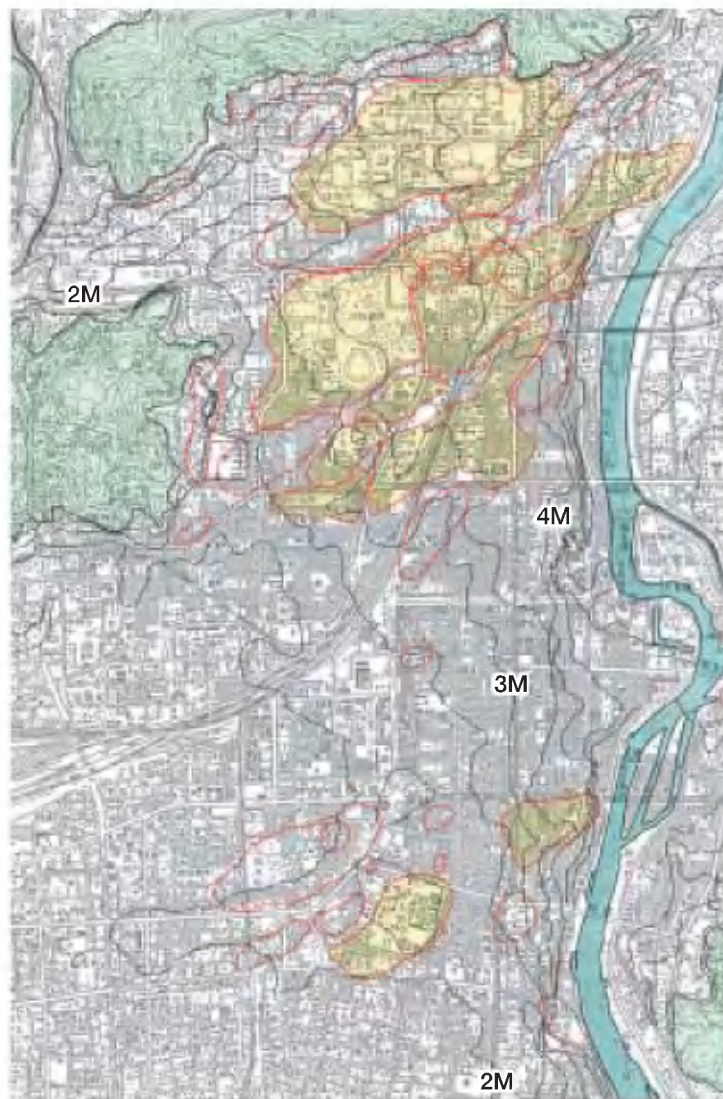
1 はじめに

気候の変動と共に旭川がその下流域に形成した岡山平野は、縄文時代から今日に至る時代の経過のなかで多くの人々に活動の舞台を提供してきた。最も早くその舞台となったのが半田山麓にある縄文時代前期の朝寝鼻貝塚（註1）であり、平野の形成はその後も下流域への進展をみせる。こうした岡山平野形成過程の中で津島遺跡の様子はどうかであったのか、周辺に所在する多くの遺跡の在り方、調査時の科学的な分析（註2）の結果得られた成果等によって各時代の集落の変遷を概観してみたい。

2 津島遺跡の立地環境

今日岡山平野西岸の地形からは、いくつかの土地造成の痕跡が看取される。旭川沿いに形成された自然堤防上に存在する堤防と明治40年の旧日本陸軍による第17師団用地の造成である。現在の岡山大学・県総合グラウンドが師団司令部および兵舎・練兵場等であり、岡山大学構内には顕著に造成による地形の変化を認めることができる。一方、北東から南西方向に緩やかに下がる自然地形とその中において等高線の在り方からは、北東から南西方向に旧河道が3～5条存在することも理解される。これは津島岡大遺跡、津島遺跡等の調査によって判明した旧河道の在り方（註3）ともおおむね一致する。

岡山平野のほぼ中央部に所在する津島遺跡では、これまでの調査により海拔1.5～2.0mと陸化がある程度進行した段階、縄文時代晩期になってようやく安定し、生活痕跡が一部で認められる。その後、遺跡は沖積化の進行により弥生時代前期から古墳時代、さらには近世・近代を通して生活・生産の中心舞台となった。



第152図 旭川右岸微地形および遺跡位置図 (1/35,000)

3 土地の改変

津島遺跡の調査で判明した多くの事象の一つに、土地の削平痕跡の確認があげられる。これは、規模の大・小、地点の違いはあるものの、弥生時代前期以降中・近世までの集落の消長を考えるうえで重要な要素の一つといえる。津島遺跡では、これまでに弥生時代前期・中期、古墳時代後期、中世の4段階でその痕跡が確認されている。

弥生時代前期は、武道館当初予定地の西側に近接するT23で検出された水田層の微高地端部での在り方（註4）である。津島遺跡で検出された多くの前期水田は、下層に黒色土、上層に灰色土の2層がセットでみられる。ところがT23では、下層に存在する黒色土の上半部が一律削平されその上に水田層が認められる、異質な土層の堆積によってその境が明瞭に認められたのである。これは、武道館当初予定地から西側へ延びる緩傾斜面を掘開・削平し、水田として耕地化した痕跡と考えられ、微高地の一部を地下げして水田を造っていたことを傍証する一つの事象と理解された。

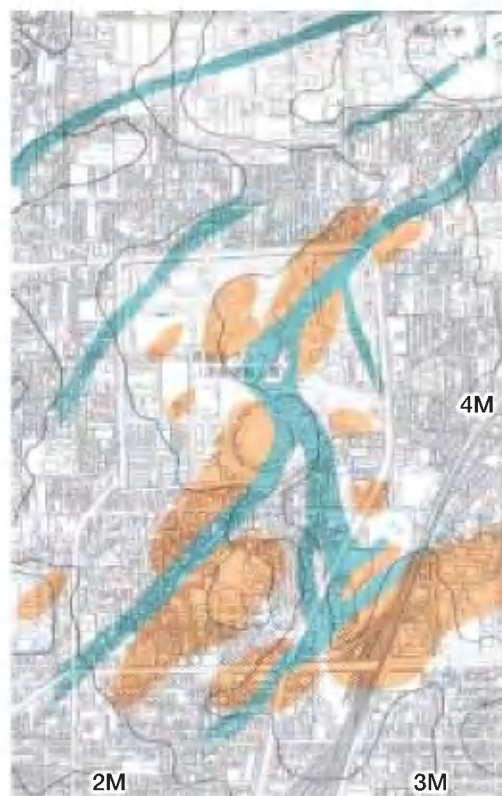
弥生時代中期は、新体育館調査区において検出された竪穴住居・土壙墓等の在り方に認められた。竪穴住居7・8は床面までの深さ10～20cmときわめて遺存状態が悪く、埋没後これを切って掘られた土壙墓5・8等は平均の深さ35cmと残りが良い。この両者の在り方の違いから中葉段階に竪穴住居段階の生活面が削平されたものと推測される。また、調査区東側において広く検出された前期水田層と考えられる黒色土の多くは上部を削平によって消滅されたものが目立ち、一部で畦畔を認めるものの他方東側G区等ではその痕跡のみの検出という状況からも、この段階に比較的広範な範囲での削平が行われたことを推測させる。

古墳時代後期は、T14および新体育館調査区において確認された水田の在り方である。弥生時代が自然地形に沿った畦畔等の在り方をみせるものであったのに対して、直線的で広範に深く開田されている状況が認められた。

中世は、陸上競技場調査区において鎌倉時代の溝が海拔2.5m前後で一律広範囲に削平され、その面から新たな溝が掘開されていた（註5）。この掘削は、弥生時代後期・古墳時代の生活面にまで深く及んでおり、竪穴住居等の遺存度から考えて、本来の弥生時代・古墳時代の生活面はもう少し高い位置にあったと推測される。なお、この時期の削平は、新体育館調査区を含めグラウンド全域で確認されている。

4 集落の変遷

こうした一連の土地の削平は、周辺に所在する遺跡についても同様で、調査の結果検出された竪穴住居等の在り方のみから集落の規模・内容等性格の判断は困難と考える。ここでは、以上の要素も含めたうえでその変遷を概観してみる。



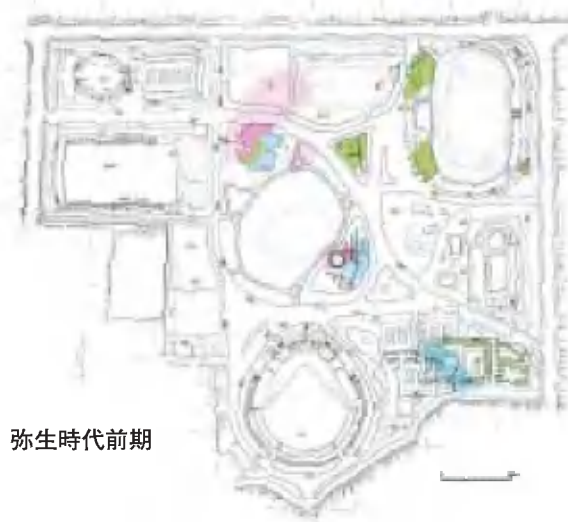
第153図 津島遺跡周辺弥生時代地形推定図
(1/20,000)

縄文時代

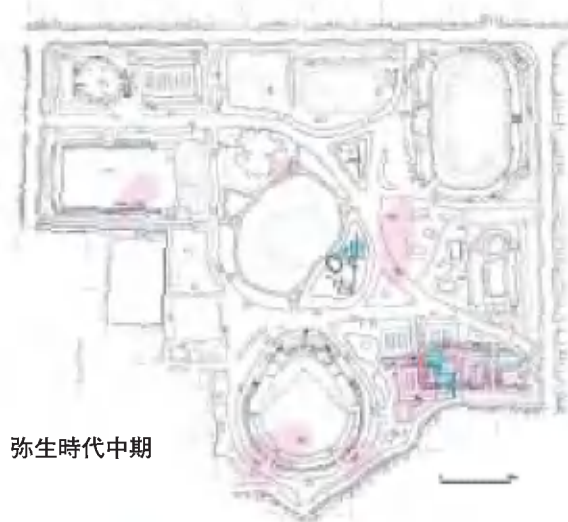
海拔2.0mがT16での晩期の遺構検出最高面である。この頃、津島遺跡の北東方向には約1mの比高差をもって津島岡大遺跡・津島江道遺跡（註6）等が所在し、集落・水田等の存在が知られる。この時期津島遺跡では、すでに微高地が形成され、T16からは小土壙が、南池のT12・57からは晩期後半の土器が僅かながら確認されている。さらに、陸上競技場近くのT3・T12では遺物の供伴をみないものの前期以前と考える黒色の土層からイネのプラントオパールを低率ながら検出している。現段階ではまだ人の定住を窺わせる遺構の存在は確認されていないものの、微高地にはススキ属が、低位部にはヨシ属等の繁茂する植生が復原されるなか、この頃すでに小規模に限定的な範囲でイネが栽培されていた可能性は否定できない。

弥生時代前期

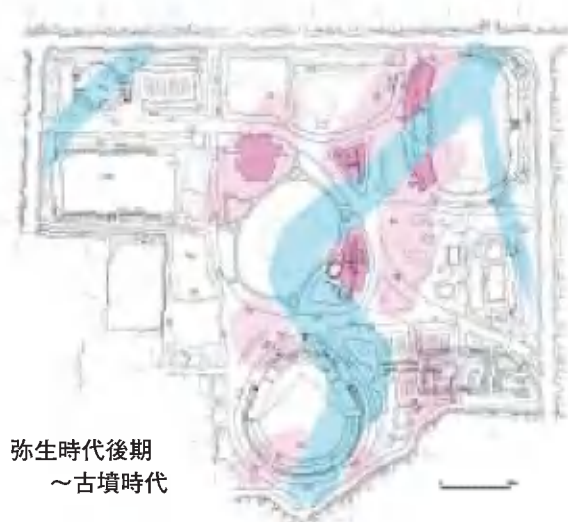
津島遺跡において弥生時代前期の存在は、鍵層である黒色土の有無によって認識される。さらに海拔高・土質・厚さ等の諸状況がその場所が微高地であるのか低位部であるかの判断材料となる。海拔が高い前者の場合には集落がのる可能性が高い。海拔2.3mを測る武道館当初予定地（註7）はその一例である。一方、後者は、1.2~1.8mと地点による高低差はあるが全体に低く、畦畔の存在と相俟ってプラントオパールの検出状況等により、水田として利用されていたことが知られる。この他、武道館当初予定地の北東側と南池の東側には湿地が、さらに、新体育館予定地の西側に北西から南東にかけ



弥生時代前期



弥生時代中期



弥生時代後期
～古墳時代

集落 水田 旧河道

第154図 時代別集落変遷図 (1/10,000)

第4章 まとめ

て幅約30mの河道の存在が認められている。斜面からは、廃棄された状況で前期前半段階の土器が出土することから、近辺には集落の存在を窺わせる。こうした黒色土の存在は、現在までのところ津島遺跡の周辺部、津島岡大遺跡・津島江道遺跡・北方遺跡（註8）から津島遺跡へとつながるおよそ東西1.5km、南北1.5kmの範囲に知られる。

この時期の環境については、珪藻・プラントオパール等土壌分析によって植生は安定した堆積環境とされ、周辺の山々にはシイ・カシ類の常緑広葉樹林が広がり、平野部微高地にはススキ属の繁茂が、低位部の湿地にはヨシ属の群落が形成されていたと復原されている。

弥生時代中期

旭川右岸に所在する中期の遺跡には、前葉～中葉段階の南方遺跡（註9）、後半段階の上伊福九坪遺跡（註10）があり、時代を前後しながらそれぞれが拠点的な集落としての推移を見せる。これに近接する津島遺跡において中期の集落は、これまでに陸上競技場の南側と補助陸上競技場、さらに武道館当初予定地等において竪穴住居・掘立柱建物・土壙等が小規模に後半段階の集落の様相を呈していた。ところが、新体育館の調査によって南方遺跡・上伊福九坪遺跡等との関連性が確認されたといえる。すなわち、調査はトレンチ調査とあって限定的なものであったが、時期的に南方遺跡と同じく中葉を中心とする集落の一端が検出されたのである。残念ながら遺構の遺存状況が悪く、生活面を残す状況ではなかったが、検出された遺構には土壙墓が存在することから、性格として南方遺跡の在り方に類似するといえる。また、同じく検出された中葉の灰穴および出土遺物であるガラス滓の存在は、上伊福九坪遺跡との関係を示唆させる。

弥生時代後期～古墳時代

津島遺跡において最も集落の規模が拡大するのは弥生時代後期になってである。およそ陸上競技場を北東から南西方向に流れる幅約50mの河道が出現する段階である。近辺の遺跡を含め河道に沿って形成された微高地を立地基盤とする集落の存在が知られる。ただし、当該期の主要な生産基盤である水田の存在については、旭川左岸百間川遺跡群に見られるようなものは現在までのところ確認されてはいない。一方、出土した遺物の中には集落にあっては希有な特殊器台・壺を彷彿とさせる器台と壺の存在が、しかも複数で認められたことから、集落の性格が農耕祭祀の中心的な存在であったことを示唆させるものとして注目された。これは、古墳時代の集落に関してもほぼ同様と考える。（島崎）

註

- (1) 「岡山市津島東3丁目 朝寝鼻貝塚発掘調査概報」『加計学園埋蔵文化財調査室発掘調査報告』2 1998
- (2) 津島遺跡第一～三次確認調査、陸上競技場、新体育館調査において珪藻分析・機動細胞珪酸体分析を実施。
- (3) 「津島岡大遺跡6」『岡山大学構内遺跡発掘調査報告』第9冊 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
- (4) 「津島遺跡5」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』181 岡山県教育委員会 2004
- (5) 「津島遺跡4」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』173 岡山県教育委員会 2003
- (6) 「津島江道（岡北中）遺跡」『岡山市埋蔵文化財調査の概要 1996年度』岡山市教育委員会 1998
- (7) 「津島遺跡2」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』151 岡山県教育委員会 2000
- (8) 「北方下沼遺跡・北方横田遺跡・北方中溝遺跡・北方地藏遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』126 岡山県教育委員会 1998
- (9) 「上伊福・南方（済生会）遺跡（南蓮田調査区Ⅰ・Ⅱ）」『岡山市埋蔵文化財調査の概要1994・1995年度』岡山市教育委員会 1996・1997
- (10) 中野雅美・根木修「上伊福九坪遺跡」『岡山県史』考古資料編 岡山県 1986

第3節 弥生時代前期の水田について

(1) 新体育館調査区の前期水田と低位部について

新体育館調査区では、北西から南東に流下する河道の両岸部において、弥生時代前期の黒色土層が広範囲にわたって検出された。本文中でも触れたように、その様相は東岸と西岸とで大きく異なり、東岸部では上面に畦畔を伴う水田層、西岸部では具体的な性格は不明だが水田よりもやや標高の低い低位部と解釈できるもので、前期段階での地形や土地利用に関して興味深い知見が得られたといえる。以下、本文との重複も多いが各層の特徴について概観する。

津島遺跡の水田層は、大きくは灰褐色を呈する上層、黒褐色を呈する下層の2時期に細分可能な例が多い。本地点ではA・E・F・J・P区でその状況が確認された一方、他の調査区では攪乱等の影響もあるのか、上層水田は明確に捉えられなかった。水田畦畔も、色調が濃く識別の容易な下層側においてのみ検出されたが、他地点での状況を勘案すれば本来は上層水田にも伴うとみて差し支えないであろう。畦畔の方向は、北東-南西およびそれに直交する北東-南西のもの両方があり、田面の区画は陸上競技場調査区（以下、陸競調査区と略）と同様に長方形をなすと思われるが、調査範囲の制約もあり断定は難しい。また、主に水田層を除去した段階で、北西→南東ないし北東→南西に走る溝状遺構が複数検出された。埋土は水田層とほぼ同質であり、畦畔と同一の方向性を有する点などからも、用・排水路など水田との密接な関連性が想定される。

検出された水田は、上質や検出状況の点からは周辺遺跡の前期水田と同じく、地下水位の低いいわゆる「乾田」と評価されるものである。ところが、一般的な乾田の指標とされる水田層下部への鉄分やマンガン集積は顕著ではなく、調査区東部のF・G・H区周辺で水田直下の黄褐色上層にマンガン粒がやや多くみられた程度であった。この傾向は津島遺跡内の他調査区とも共通であり、鉄分などの分離凝集が生じる条件、つまり滞水と落水を長期間繰り返す耕作条件を想定することは困難である。

さらに、水田における稲作の有無を検証するため、J区の前期水田に該当する第77・78・80層の3サンプルおよび上下の層を対象に植物珪酸体分析を行った。うち第77層ではイネの珪酸体が2,800個/gの密度で検出され、一般的な指標よりは低いものの（註1）、直上の75層が800個/gと低密度で上層からの混入は考えにくいことなどから、稲作の存在はほぼ間違いないといえる。ところが、同じく前期水田とした第78・80層ではイネが検出されていない。津島遺跡においては全体的に、弥生前期水田層内のイネ珪酸体密度が低い傾向があり、これも当時の稲作形態を反映する結果と考えられる。

水田の時期は、出土遺物が少なく特定が難しいが、陸競調査区などと同じく前期後葉の土器片が出土することから、最終的に機能していた時期は前期後葉にほぼ絞られる。一方、開田の時期については、陸競調査区では前期中葉ないしそれ以降と間接的に推測されているものの（註2）、本地点では前期のどの段階に置くべきか判然としない。

以上の水田に対し、河道東岸に分布する低位部状の黒色土層は、一見すると水田に類似した外観を呈するが、上面の傾斜が水田に比べかなり急なこと、畦畔が全く認められないこと、比較的多量の遺物を包含すること等から、東岸部の水田とは性格を異にするとみられる。他地点に類例を求めれば、堆積状況や出土遺物の点で南池地点の低位部層に最も類似するといえる。N・O区にて植物珪酸体分

析を行った結果、N区の第2層でイネを3,500個/gとやや高密度に検出したため、しいて推測すれば武道館当初予定地で検出例のある「湿田」のような状態にあったとも考えられる。一方で、前期前葉～後葉の遺物が多く出土した点は近辺に集落の存在を示唆するようでもある。不確定要素が多いが、武道館当初予定地や南池地点と同じく、集落が立地する微高地周辺の低位部堆積土で、その一部は稲作に利用された可能性を残すものとしたい。

西岸の低位部と東岸の水田の関係については、両者間を河道が隔てていることもあり直接の結びつきは考えにくい。ただ、低位部層出土遺物の一部に中～後葉の土器が含まれているので、前期の後半期において両者が併存する時期があったものと推測できる。西岸部の黒色土層については、何らかの理由により畦畔による長方形区画水田の造成対象とならなかったようである。

(2) 津島遺跡の弥生前期水田について

津島遺跡における弥生前期水田は、総合グラウンドのほぼ全域にわたって分布する黒色土層、およびその直上に堆積する灰褐色土層の上面に造成され、畦畔や小規模な水路を伴う例もみられる。これらの前期層は、津島遺跡はもとより津島岡大遺跡・北方遺跡群など周辺の弥生前期遺跡では普遍的に検出されるもので、当時期の鍵層としても重要な位置を占めている。ここでは、水田層を含む黒色土層の成因や堆積時期、次いで前期水田の性格について前稿（註3）への補足的見解を記しておきたい。

1 黒色土の成因と形成時期

前期黒色土層は、『津島遺跡5』で指摘したように水田・微高地・低位部の3種に分類することができるが、厳密な区分は困難で、本来は連続的な性質のものと考えられる。低位部層は顕著なグライ化や未分解植物質の存在などが特徴といえるが、水田層と微高地層は類似性が強く、現場での両者の区別は、標高差や畦畔の有無、若干の土質の違いなどに頼らざるをえない（註4）。自然科学分析によれば、水田・微高地の黒色土層は、陸生珪藻化石が包含されることや、花粉化石の残りが悪いことなどから好氣的条件下にあり、「離水し土壌発達が行われるような時期を挟在する氾濫原の堆積環境下」で形成された層とされている（註5）。大局的には同一条件下での堆積であり、水田域についても幾分低位にあるとはいえ、水の影響を常時、直接に受ける状態にはなかったと推測できよう。

黒色土層の堆積開始時期は、武道館当初予定地や南池地点の微高地上で前期前半の遺構が本層上に築かれることから、前期前葉以前と見積られる。また水田層は第二次確認調査のT57で検出された縄文晩期土器包含層（第19～21層）とその土質などが酷似しており、両者が一連のものとするれば上限は出土土器の示す縄文晩期末（弥生早期）、あるいはそれを若干遡る可能性が高い（註6）。

この黒色土上での稲作は、前期前葉にはほぼ確実に存在したといえるが（註7）、それ以前の状況は根拠とすべき遺構・遺物を欠き判断が難しい。ただ、近在の津島江道遺跡での早期水田の検出例もあり（註8）、明確な遺構は未検出ないし検出困難にせよ、津島遺跡でも稲作の開始が晩期末まで遡るとの推測も可能であろう。T57第19層で、イネの珪酸体が前期水田層と同等ないしそれ以上の密度で検出されたことも、時期の特定に不確定性は残るもののこの推測を補強する一材料となりうる。状況証拠のみに基づく憶測の域を出ないが、この推測が正しければ、少なくとも一部の地点では、黒色土の堆積開始後さほど間を置かずに最初の稲作が始まった可能性が考えられるのである。

いずれにせよ、津島遺跡周辺に広く分布するこの黒色土層は、その成因、形成期間等に検討の余地を多く残しており、稲作の有無のみならず、岡山平野の古地形変遷史の中に位置付けての解明が必要

と思われる。

2 弥生前期水田の性格

平成9年度以降の調査で検出された津島遺跡の「弥生前期水田」に関しては、『津島遺跡5』において、(1) 水田域が集落域に比較して広大で(註9)、(2) 一部の調査区を除き、水田層下面への鉄分・マンガンの沈着が明確でなく、(3) 水田層内のイネ珪酸体密度が、一般的な指標よりもかなり低い、の3点に基づき、その性格はいわゆる「天水田」に近く、作付けと休耕を繰り返しながら耕作地を移動する農法が採用されていたものと推測した。

こうした稲作形態を肯定する根拠として、時期は降るが陸競調査区の土壌10(弥生後期)出土炭化米に熱帯ジャポニカが混在するとの結果がDNA分析によって判明している(註10)。近年、各地の遺跡から検出例の増加しつつある熱帯ジャポニカは、いわゆる水稲である温帯ジャポニカとは異なり、焼畑のような粗放な栽培環境によく適合する「水陸未分化」のイネであり、弥生時代以降も広く栽培され、古代～中世まで根強く残存したとされる(註11)。弥生前期の津島遺跡やその周辺でも、水稲のほかこうした畑作性に近いイネが存在し、各品種の有する特性と地点ごとの環境に応じた、複数の稲作形態が存在したと推測できるのである。

次に、前期段階での多様な稲作の実態を、実際の遺構検出状況に即してみていきたい。

津島遺跡での前期水田遺構には、広く検出される黒色土上の水田と、武道館当初予定地で検出された低湿地の水田の2種類がある。黒色土上の水田は、前述のように低湿地ではなくやや高燥な条件の場所に占地し、立地条件の点では乾田と呼べる特徴を示す。これに対して武道館当初予定地の水田は、前期微高地縁辺の低湿地に幅数mの帯状をなして形成されたもので、いわゆる湿田と評価され(註12)、他地点の水田とは大きく異なる特異な存在である。

前稿(『津島遺跡5』)では、この両者が併存したか否かは資料不足のため不明とし、その後も結論を下せるだけの根拠が得られたわけではない。しかし、T57の状況が示すように黒色土上の稲作開始がより古く遡るとすれば、前期前半の段階で両者が同時に経営された可能性は高いと考えられる。

いま一つその可能性を示唆するのが、武道館当初予定地の水田層を対象に行われた種実同定の結果である。イネや水田雑草の検出は周知であるが、同定結果をみると田畑共通および畑(人里)雑草が種類・検出数とも水田雑草を凌駕している(註13)。これらの雑草種実は、周辺の微高地上から水田に落ち込んだものとされ、報告では水田稲作のほか畑作の存在も主張されている。これらの「畑」では、狭義の畑作物のほか、水陸未分化の粗放な稲作も同時に行われたのではなからうか。というのも、近年のDNA分析の成果は、弥生時代における熱帯ジャポニカ種の普遍的な存在を明らかにしつつあり、津島遺跡での稲作をあえて湿田に限定する理由は考えにくいからである。

このような、黒色土上の「乾田」と低湿地の「湿田」の同時経営は、気候条件の変動によりいずれかの水田が打撃を被っても、他方の水田が実りを結ぶことで最悪の結果を回避する意味を持っていたと思われる。こうした複数種の水田による危機回避策は、水稲農耕出現期から機能していたと考えられており(註14)、津島遺跡でも「乾田」の時期特定に問題は残るとしても、前期前半の段階から採用されていた可能性は高いのである。

以上、弥生前期水田の性格についてみてきたが、特に前期前半段階では明確な遺構・遺物も少なく、イネや水田上層に関する理解も不十分な中で、各種自然科学分析の成果を未消化のまま援用し、憶測を重ねる結果となった。天水田説の妥当性も含め、これまで「水田」と一括されてきた黒色土層に再

検討が加えられ、当時期の稲作の実態がさらに明らかにされることを期待したい。(岡本)

註

- (1) 杉山信二「植物珪酸体(プラント・オパール)」『考古学と植物学』同成社 2000。同書によれば、イネ珪酸体の密度が5,000個/g以上の場合、少なくとも数十年にわたって安定した稲作が行われた指標になるという。
- (2) 高畑知功「弥生時代前期の水田遺構」 「津島遺跡4」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』173 岡山県教育委員会 2003
- (3) 岡本泰典「弥生時代前期の水田について」 「津島遺跡5」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』181 岡山県教育委員会 2004
なお、上記の考察を執筆するにあたり以下の文献を参考にした。
 - (a) 高橋護「縄文時代中期稲作の探求」『堅田直先生古稀記念論文集』同論文集刊行会 1997
 - (b) 岩崎志保・山本悦世「耕地の問題」 「岡山大学構内遺跡発掘調査報告」第16冊『津島岡大遺跡11』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター 2003
 - (c) 大橋雅也「弥生時代前期の稲作跡について」 「服部遺跡・北溝手遺跡・窪木遺跡・高松田中遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』162 岡山県教育委員会 2002
- (4) 現地での観察によれば、微高地の黒色土は水田層に比べてやや色調が明るく、砂や小礫の夾雑率が高い傾向がみられた。これらの肉眼的な相違点を検証するための土壌学的分析が望まれるところである。
- (5) パリノ・サーヴェイ株式会社「津島遺跡における弥生時代の古環境解析」 「津島遺跡5」 2003
- (6) 実際には、弥生前期土器がわずかに出土したため、「津島遺跡5」では「縄文晩期～弥生前期包含層」と呼称した。しかし、T57での晩期土器の出土量と集中度は際立っており、弥生前期層への混入と断ずるのは躊躇される。したがってここでは、黒色土の形成開始は縄文晩期末まで遡る可能性が高いと考えた。
- (7) 株式会社古環境研究所「津島遺跡第三次確認調査の自然科学分析」 「津島遺跡5」 2004。南池地点の弥生前期低位部層の分析結果による。
- (8) 神谷正義「最古の水田」『吉備の考古学的研究 上巻』山陽新聞社 1992
- (9) 弥生前期集落は、既往の調査地外に存在する可能性は残るが、周辺遺跡で普遍的に検出される弥生後期集落などと比較すると依然としてその希薄さは明白であろう。
- (10) 佐藤洋一郎「津島遺跡出土炭化米のDNA分析」 「津島遺跡4」 2003
- (11) 佐藤洋一郎『稲の日本史』角川書店 2002
- (12) 「津島遺跡2」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』151 岡山県教育委員会 2000
- (13) 笠原安夫・武田満子「岡山県津島遺跡の出土種実の種類同定の研究」『農学研究』第58巻第3・4号 岡山大学農業生物研究所 1979
例えば前期水田とされる「IX C M53」層では、分析土壌4,000g中に水田雑草6種33点、田畑共通雑草12種43点、畑(人里)雑草37種269点であり(種数には科レベルの同定や不明確なものも含めた)、水田雑草よりも畑・田畑共通雑草のほうが多い。また畑作物の可能性のある植物としてアズキ・シソ・マクワウリが報告されている。実際には、畑(人里)雑草には畑だけでなく居住地周辺や路傍など人為的に改変された場所に広く生育する種もあるため、この結果がそのまま畑作比率の高さを意味するわけではない。とはいえ、調査地周辺がこれらの雑草が生育する環境下にあったことは疑いなく、少量ながら作物種子の出土も考え併せると、低湿地での水田稲作とともに周辺での畑作が存在した可能性は高い。
- (14) 根木修「水田造成の歴史と新田の開発」『田園の発見とその再生』晃洋書房 1999

第4節 弥生時代前期試料の放射性炭素年代測定について

平成15年、AMS法による放射性炭素年代測定に基づき、弥生時代の開始年代を大幅に遡らせる研究成果が国立歴史民俗博物館より発表された（註1）。これを受け、津島遺跡の弥生前期黒色土中から出土した土器片にも炭化物の付着する個体がみられたため、同様の測定を実施した。結果自体は巻末に掲載しているが、本節では試料の出土状態や取り扱いなどの情報を開示し、測定結果を解釈する一助としたい。なお津島遺跡では、陸上競技場改修に伴う調査と第三次確認調査で出土した前期の炭化物についても、同じくAMS法による年代測定を実施し、『津島遺跡4・5』に結果を掲載している。

前期黒色土は、調査区西端部に広く分布する、水田層に似た低位部状の粘質土である。試料を採取したO区では、色調から2～3層程度に細分可能であり、各層とも前期土器片を含む。上層よりも下層からの出土量が多いが、測定試料の厳密な出土層位・位置は特定できていない。当該層位出土の土器は前期前葉を中心とし、中葉～後葉のものも一部含まれている（第3章第3節参照）。

現地で炭化物の付着を認めた土器片については、取り上げ後は通常の洗浄を行わずただちにアルミ箔で包装して現代の炭素から遮蔽し、カビ等が発生しないよう室内で徐々に乾燥させた。その中から、口縁部が残存し特徴の捉えやすい破片と、炭化物の付着量が多い破片を計7点抽出し、測定に供した。

測定した7点中、器種が判明するのはNo1～4の口縁部4点である。No1（掲載番号6）は突帯文土器である。No2・3（37・34）は甕で、口縁部直下に段を有し、弥生前期前葉に属す。No4（49）は口縁端部に刻み目が施される甕の小片である。残り3点は甕と思われる小片である（掲載対象外）。いずれも炭化物が外面全体に付着し、黒色を呈していた。炭化物の由来は特定しがたいが、No1の場合は表面に細かい皺のある炭化物がやや厚くこびりつくことから内容物の焦げ付きの可能性がある、それ以外は煤の可能性が高いと思われる。なおNo1～4の試料については、報告書に掲載するため測定終了後に洗浄・写真撮影・実測・拓本を行った。

年代測定は古環境研究所に依頼し、実際の作業（試料調製まで）は米国のベータ・アナリティック社によって行われた。なお、受領した報告による限り、前処理は酸-アルカリ-酸洗浄（AAA処理）ではなく酸洗浄によってなされている。測定結果は報文に記載の通り、補正¹⁴C年代では最も古いNo2が2750±40年BP、最も新しいNo3が2430±30年BPを示した。No2が何らかの理由によって他試料よりも250年程度古い数字を示すが、測定値は概ね2500年BP前後に分布する。INTCAL98による較正年代は、No5が95%の確率でBC805-770に含まれる以外は、BC8～5世紀までの幅をもつものが多い。これは、2500～2400年BP付近の較正曲線が平坦に近く、該当する暦年代の幅が広がらざるを得ないことによる。

以上の測定値は、『津島遺跡4・5』収録の前期層出土試料よりもやや新しいものの、いずれも通説による弥生前期の年代よりも遡り、国立歴史民俗博物館による前期の年代観（BC800～400年頃）に近い数値である。『津島遺跡4・5』における測定は、前期層出土の木炭や植物遺体が対象であり、遺物との同時性という点では今回の試料が優れている。しかしながら、新たな年代観に対しては当然、従来の立場からの反論も多く、議論の決着までにはなお曲折が予想されるので、津島遺跡の少数の測定例を新説の肯定材料とすることは差し控え、事実報告にとどめておきたい。

第4章 まとめ

さて、今回測定した土器付着炭化物は、その性格上土器使用との同時性が確実な物質である一方、いくつかの問題点も指摘できる。

まず、付着炭化物の由来に関する問題である。今回測定した外面付着炭化物は、それが内容物・煤のいずれに由来するものが不明確であった。おそらく大部分は煤と思われるが、その場合は燃料としての古木の使用が見かけ上の年代を遡らせる要因となりうる。また、津島遺跡のような海岸部に位置する遺跡では、煮沸対象物が海産動植物である場合、いわゆる海洋リザーバー効果による年代の繰り上がりに注意する必要がある。ただし今回の測定試料では、 $\delta^{13}\text{C}$ 比は一般的なC3植物の値に該当している。以上を念頭に置いて測定値を見直すと、No2が突出して古い値を示すものの、他の試料の測定値は互いに近似することから、全体としてはほぼ安定した結果が得られたといえる。このような測定値を左右する要因を排除するには、同一遺構・層位から出土し、同時期と判断できる試料を複数測定し、得られた数値を相互比較することが必須であろう。

また、測定後返却された土器片をみると、No2・4では表面を覆っていた炭化物が完全に除去されていた。試料調製に必要な量を確保するために全面採取がなされたようで、作業には細心の注意が払われたと思われるが、土器胎土等の混入も皆無とは言い切れない。また、炭素の含有量が低い試料の場合、調製過程で大部分が溶解し、測定が困難となるケースもありうる。微量の試料でも測定可能なAMS法であるが、上記の諸問題を念頭に置き、より良好な試料の選択が望まれる。(岡本)

註

(1) 国立歴史民俗博物館「弥生時代の開始年代について」国立歴史民俗博物館ホームページ

<http://www.rekihaku.ac.jp/kenkyuu/news/index/htm>. 2003 および同館作成の図録・パンフレットなど

参考までに、『津島遺跡4・5』収録の年代測定結果を以下に再掲しておく。『津島遺跡4』のNo1～4は前期水田面出土の炭化物片、『津島遺跡5』のNo2は前期低位部に堆積した黒色の植物質、No3は前期土器溜まり中の木炭片である。なお、原報に記載されている測定Noは省略した。

試料名	^{14}C 年代 (年B P)	$\delta^{13}\text{C}$ 比 (%)	補正 ^{14}C 年代 (年B P)	暦年代 (西暦)	報告書名
No 1	2,860±60	-20.8	2,930±60	交点: Cal BC1120 1 σ : Cal BC1250~1020 2 σ : Cal BC1300~940	津島遺跡 4
No 2	2,810±60	-20.6	2,880±60	交点: Cal BC1030 1 σ : Cal BC1130~970 2 σ : Cal BC1260~900	
No 3	2,790±50	-17.5	2,910±50	交点: Cal BC1100 1 σ : Cal BC1190~1010 2 σ : Cal BC1270~940	
No 4	2,840±40	-19.7	2,930±50	交点: Cal BC1120 1 σ : Cal BC1210~1030 2 σ : Cal BC1290~990	
No 2	2,670±30	-26.1	2,650±30	交点: Cal BC810 1 σ : Cal BC820~805 2 σ : Cal BC835~795	津島遺跡 5
No 3	2,610±30	-26.2	2,590±30	交点: Cal BC795 1 σ : Cal BC805~785 2 σ : Cal BC810~775	

第5節 弥生土器について

津島遺跡（岡山県総合グラウンド）では、平成9年度以降各種の調査が実施され、過去の調査成果も公表されたことで弥生土器資料の蓄積が進み、時期による出土量の多寡はありつつも、前期初頭から後期末までの流れが一通り把握可能となった。ここでは、『津島遺跡1～6』掲載遺物の中から抽出した資料を用いて、出土土器の点から津島遺跡の変遷について概観してみたい。なお、本稿は土器自体の新たな編年案の提示を意図するものではないので、掲載資料は遺構出土遺物等に限定せず器形の把握しやすい個体を選び、特に後期後半では河道出土土器を多く採用した。

時期区分は、百間川遺跡での区分を参考に、前期をⅠ～Ⅲ、中期をⅠ～Ⅲ、後期をⅠ～Ⅳに区分し、前期の前に早期を設定する。図および文中における土器番号は、便宜的に1からの通し番号とし、図中ではその後に括弧付きで元の掲載番号を記した。例えば5-244は『津島遺跡5』に244として掲載された土器であることを示す。

弥生早期（縄文晩期末）

従来縄文晩期末とされ、近年では早期として弥生時代に含める意見も多い時期である。深鉢は口縁直下に刻み目突帯を有し（1～4）、頸部にヘラ描き文を施すものもみられる（3）。浅鉢には、体部が直線的に開くものと、内傾する頸部に外反気味の口縁端部が取り付けもの（5）とがある。津島遺跡内では散発的に出土し、特にT57の前期水田に類似する黒色土層から多く出土している。

弥・前・Ⅰ期

南池出土資料を標式とする「津島式」の名称で知られる型式である。古相では、壺・甕とも口縁部直下に粘土接合による段の形成が顕著である。壺の胴部にはしばしば木葉文・斜格子文等が施文される（11～14）。甕では、段の上に刻み目が巡る個体も散見される（18・19）。新相になると甕で段が1条沈線に置き換わるものが出現する（20）。また、松菊里型土器の壺（15）が武道館当初予定地から出土している。高杯については確認できない。鉢の形状は様々であるが、甕同様に口縁直下に段をもつものがある（26）。本時期の資料は、武道館建設当初予定地・南池地点・新体育館調査区で見られる。

弥・前・Ⅱ期

Ⅰ期で特徴的な段は減少し、壺肩部には削出突帯が出現する。新相では沈線に置き換えられたものもみられる（33～36）。甕の沈線は時期が下るにしたがい2～3条まで増加する傾向があり、沈線間に文様を施すものもしばしばみられる（43）。高杯の出土は知られていない。前・Ⅱ期の資料は、南池と武道館当初予定地で多く出土し、他地点の水田面からも時折見出される。

弥・前・Ⅲ期

壺は口縁部が逆ハ字状に開き、頸部に多条化した沈線（48）や貼り付け突帯（47）を施すものが現れる。甕では口縁部直下の沈線が多条化する。51・52は口縁部に突帯が貼り付けられ断面がL字状を呈する、いわゆる「瀬戸内型甕」である。現在のところ高杯の出土例は認められない。前・Ⅲ期の資料は少なく、前期水田や低位部から散発的に出土するのみである。

弥・中・Ⅰ期

土器の装飾はヘラ描き沈線文に代わって櫛描き文が主流となる時期である。出土資料は前・Ⅲ期と同

第4章 まとめ

様に極めて少なく、口縁部直下に櫛描き沈線文と列点文を施す甕⁵⁴などがみられるにすぎない。高杯は確認されていない。この時期の資料は新体育館調査区周辺でわずかに検出されている。

弥・中・Ⅱ期

壺は、古相のものでは口縁部および頸部に刻み目突帯が複数巡らされる（54・55）。新相では口縁部が拡張して面を持ち、凹線文や浮文で装飾されるものが現れる（56～59）。甕は胴部最大径が口径を上回るようになり、肩部には刺突文を有する例が多い（60）。新相においては頸部に指頭圧痕文突帯を巡らすものが出現する（63・64）。高杯は杯部が皿状を呈するもの（65～69）と、椀状のもの（70）とがある。前者については、杯部が曲線的に立ち上がるものから直線的なものへと推移すると思われる。端部にはしばしば刻み目が施される。各種の鉢（73～76）、水差形土器（77）、回転台形土器（78）等も伴っている。本時期の資料は、新体育館調査区と硬式野球場南東部のT57でまとまった量が出土した。

弥・中・Ⅲ期

凹線文が盛行し、色調は淡黄褐色を呈し美しく仕上げられた土器が多くみられる。壺・甕とも拡張した口縁端部に凹線文が施され、肩部に刺突文が巡る例が多い。高杯の口縁部は直立し、外面に凹線文が巡るもの（88）と無文のもの（89）があり、後者が新相である。脚部は緩やかな裾広がりとなり、ヘラ描き沈線や透かし孔で装飾されている。鉢では、口縁部が玉縁状に折り返されるものが認められる（93）。出土量は中・Ⅱに比べて増加し、武道館当初予定地・蹴球場・児童遊園地周辺・陸上競技場調査区において確認される。特に武道館当初予定地の南東隅からは各器種を含む一括資料が得られている。

弥・後・Ⅰ期






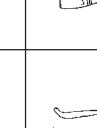







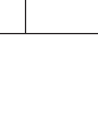






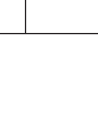





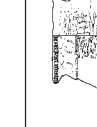




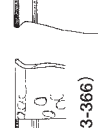




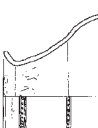
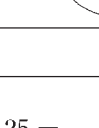



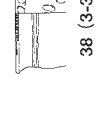
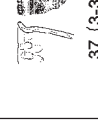
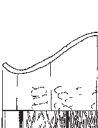

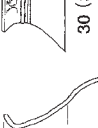




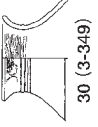
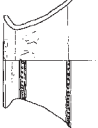
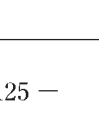


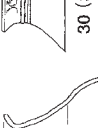

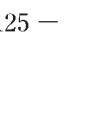
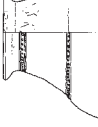
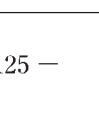














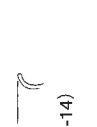



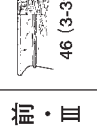












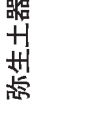










壺・甕の内面は口縁部直下までヘラケズリが及ぶ。壺では、頸部に凹線文を施す長頸壺が出現する（97）。甕は器形に中期的な様相を残しながらも、胎土や色調に明瞭な変化がみられる。高杯は口縁端部の拡張がみられ、脚部の沈線文は櫛描きで施されるようになる（102）。後・Ⅰ期の資料は少なく、明確な遺構に伴うものは陸上競技場調査区内にほぼ限定される。

弥・後・Ⅱ期

長頸壺が定着し、筒状の頸部に沈線を巡らすもの（107）、無文のもの（108・109）がある。甕の文様は消失し、口縁端部はやや肥厚するものと丸くおさめるもの（116）がある。高杯は長い脚柱部と外反する口縁端部を有するものが多くみられる。117は古相を示す。その他の器種として器台・脚付直口壺などがある。後・Ⅰ期に比べて遺構・遺物は増加するが、次の後・Ⅲ期よりはかなり少なく、陸上競技場・南池・新体育館調査区で認められる。

弥・後・Ⅲ期

長頸壺・短頸壺とも器形は変化に富み、一部のみ図示する。長頸壺の頸部は八字状に裾広がりとなり、口縁端部は上方への拡張傾向が著しく、擬凹線文を施す例が多い。多数の沈線文や刺突文で飾るもの（129）、無文のもの（130）など幾つものバリエーションが認められる。甕の口縁端部には、上方への拡張傾向にあるものが増加していく。高杯は小形化と脚部の短縮化が進行する。一部に大形のもの（144・146）、口縁端部が直立するもの（145・146）もみられる。鉢は各種あり、前時期から継承される器形のほか浅い皿状のもの（149）も増加する。その他の器種として、脚付直口壺（151～153）や「特殊な壺・器台」（155）などがある。後・Ⅲ期の資料は、陸上競技場調査区のほか北・

早期	壺	甕	鉢	蓋	
<p>1 (5-244)</p> 	<p>2 (5-245)</p>  <p>3 (5-6)</p>  <p>4 (5-7)</p>  <p>5 (5-251)</p> 	<p>6 (3-181)</p>  <p>7 (5-354)</p>  <p>8 (3-237)</p>  <p>9 (3-288)</p>  <p>10 (3-394)</p>  <p>11 (2-253)</p>  <p>12 (3-227)</p>  <p>13 (2-65)</p>  <p>14 (3-416)</p>  <p>15 (2-283)</p> 	<p>16 (6-29)</p>  <p>17 (5-400)</p>  <p>18 (5-472)</p>  <p>19 (2-303)</p>  <p>20 (5-367)</p>  <p>21 (2-284)</p>  <p>22 (5-401)</p> 	<p>23 (3-252)</p>  <p>24 (6-65)</p>  <p>25 (3-231)</p>  <p>26 (3-228)</p> 	<p>27 (2-312・313)</p>  <p>28 (3-454)</p> 
<p>前・I</p>	<p>29 (3-348)</p>  <p>30 (3-349)</p>  <p>31 (5-436)</p>  <p>32 (5-45)</p>  <p>33 (2-359)</p>  <p>34 (5-353)</p>  <p>35 (2-28)</p>  <p>36 (3-333)</p>  <p>37 (3-316)</p>  <p>38 (3-366)</p>  <p>39 (3-296)</p>  <p>40 (2-329)</p> <p>41 (2-357)</p> <p>42 (2-539)</p> <p>43 (3-243)</p> <p>44 (5-58)</p> <p>45 (5-59)</p>	<p>46 (3-397)</p>  <p>47 (6-15)</p>  <p>48 (6-14)</p>  <p>49 (5-403)</p>  <p>50 (4-12)</p>  <p>51 (4-16)</p>  <p>52 (6-2)</p>  <p>53 (5-107)</p> 	<p>54 (3-397)</p>  <p>55 (6-15)</p>  <p>56 (6-14)</p>  <p>57 (5-403)</p>  <p>58 (4-12)</p>  <p>59 (4-16)</p>  <p>60 (6-2)</p> 	<p>61 (5-403)</p>  <p>62 (4-12)</p>  <p>63 (4-16)</p>  <p>64 (6-2)</p> 	<p>65 (5-403)</p>  <p>66 (4-12)</p>  <p>67 (4-16)</p> 
<p>前・II</p>	<p>68 (3-397)</p>  <p>69 (6-15)</p>  <p>70 (6-14)</p>  <p>71 (5-403)</p>  <p>72 (4-12)</p>  <p>73 (4-16)</p>  <p>74 (6-2)</p> 	<p>75 (5-403)</p>  <p>76 (4-12)</p>  <p>77 (4-16)</p>  <p>78 (6-2)</p> 	<p>79 (5-403)</p>  <p>80 (4-12)</p>  <p>81 (4-16)</p>  <p>82 (6-2)</p> 	<p>83 (5-403)</p>  <p>84 (4-12)</p>  <p>85 (4-16)</p>  <p>86 (6-2)</p> 	<p>87 (5-403)</p>  <p>88 (4-12)</p>  <p>89 (4-16)</p> 
<p>中・I</p>	<p>90 (5-403)</p>  <p>91 (4-12)</p>  <p>92 (4-16)</p>  <p>93 (6-2)</p> 	<p>94 (5-403)</p>  <p>95 (4-12)</p>  <p>96 (4-16)</p>  <p>97 (6-2)</p> 	<p>98 (5-403)</p>  <p>99 (4-12)</p>  <p>100 (4-16)</p>  <p>101 (6-2)</p> 	<p>102 (5-403)</p>  <p>103 (4-12)</p>  <p>104 (4-16)</p>  <p>105 (6-2)</p> 	<p>106 (5-403)</p>  <p>107 (4-12)</p>  <p>108 (4-16)</p> 

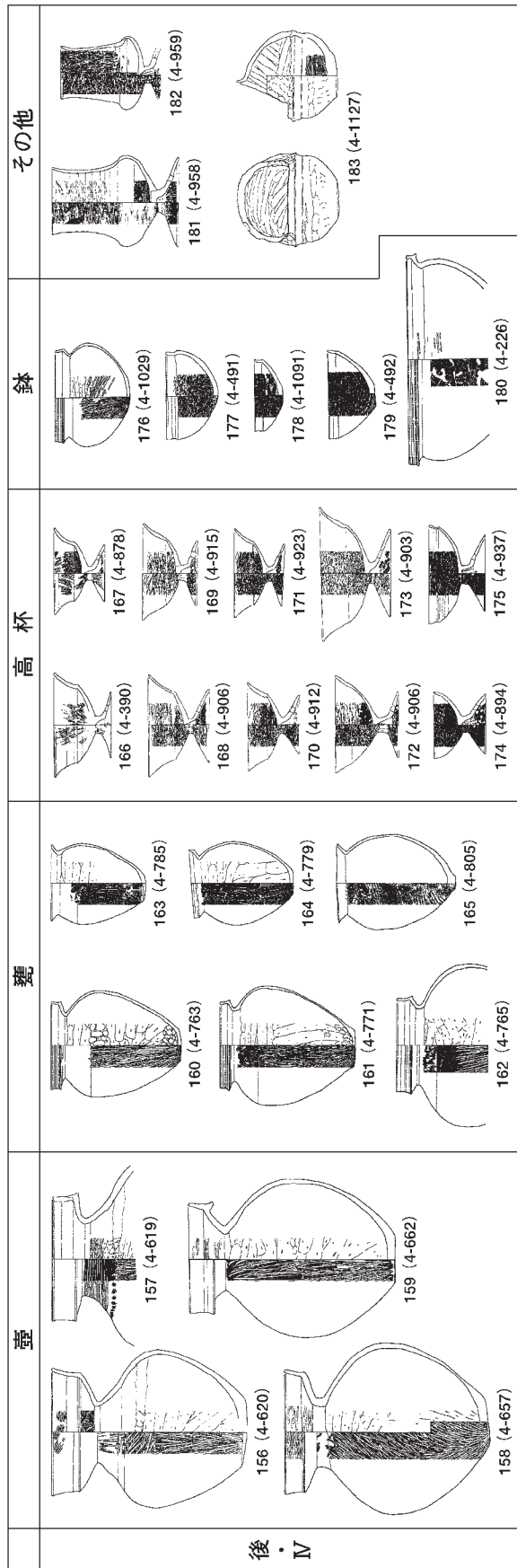
第155図 弥生上器の変遷① (1/12)

	壺	甕	高杯	鉢	その他
中・II	<p>54 (6-165) 55 (6-91) 56 (6-163) 57 (5-281)</p>	<p>60 (6-148) 61 (6-125) 62 (6-116) 63 (5-275) 64 (6-121)</p>	<p>65 (6-194) 66 (6-189) 67 (6-191) 68 (6-195) 69 (6-196) 70 (6-129) 71 (6-106) 72 (6-106)</p>	<p>73 (6-120) 74 (6-202) 75 (6-203) 76 (6-158)</p>	<p>77 (6-118) 78 (6-207)</p>
中・III	<p>79 (2-584) 80 (4-73) 81 (3-546) 82 (6-補1)</p>	<p>83 (4-58) 84 (4-30) 85 (6-補6) 86 (4-82) 87 (5-296)</p>	<p>88 (4-88) 89 (2-585) 90 (4-95) 91 (5-23)</p>	<p>92 (3-555) 93 (5-221) 94 (5-27)</p>	<p>95 (5-223) 96 (2-611)</p>
後・I	<p>97 (4-167) 98 (4-169) 99 (4-168)</p>	<p>100 (4-175) 101 (4-178)</p>	<p>102 (4-179) 103 (4-185) 104 (4-251)</p>	<p>105 (4-183)</p>	<p>106 (4-189)</p>

第156図 弥生土器の変遷② (1/12)

	壺	甕	高杯	鉢	その他
後・II	<p>107 (3-99) 108 (5-492) 109 (3-102) 110 (3-107) 111 (4-248)</p>	<p>112 (3-110) 113 (3-112) 114 (3-116) 115 (3-113) 116 (3-67)</p>	<p>117 (3-170) 118 (3-121) 119 (1-92) 120 (3-91) 121 (3-132) 122 (3-124)</p>	<p>123 (1-87) 124 (3-122) 125 (6-227)</p>	<p>126 (4-1125) 127 (6-231) 128 (5-496)</p>
後・III	<p>129 (4-570) 130 (4-598) 131 (4-644) 132 (4-677)</p>	<p>133 (4-732) 134 (4-739) 135 (4-749) 136 (4-753)</p>	<p>137 (4-828) 138 (4-831) 139 (4-261) 140 (4-280) 141 (3-38) 142 (4-872) 143 (4-873) 144 (4-839) 145 (4-852) 146 (4-858)</p>	<p>147 (4-989) 148 (4-1020) 149 (4-1082) 150 (4-995)</p>	<p>151 (4-938) 152 (4-950) 153 (4-964) 154 (5-153) 155 (4-1189)</p>

第157図 弥生土器の変遷③ (1/12)



第158図 弥生土器の変遷④ (1/12)

南池、児童遊園地付近、硬式野球場付近の調査区で認められ、出土量は後・Ⅱ期に比べ激増する。

弥・後・Ⅳ期

壺では、長頸壺が消滅し、口縁部は上方へ直立する例が多い。一部にⅢ期までの特徴をとどめる個体もみられる(157)。甕では、直立した口縁部に凹線文が施されるものが特徴的である(160~162)。165など搬入品と思われる個体も散見される。高杯は、後・Ⅲに比べて端部の伸長が著しく、杯部の深さが増す傾向にある。内外面のヘラミガキは新相では全面的に横方向となる例が多い。鉢は、Ⅲ期と同じく変化に富み、甕と同じく口縁端部が直立するもの(176)、高杯と同じく横方向のヘラミガキで仕上げられる小形のもの(177~179)等がある。他に、脚付直口壺・手焙り形土器などがみられる。本時期の資料も豊富に出土しており、出土地点はⅢ期とほぼ共通である。(岡本)

図出典(本書以外)

「津島遺跡1~5」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』137・151・160・173・181 岡山県教育委員会 1999・2000・2001・2003・2004

主要参考文献

江見正己「時期区分について」『百間川原尾島遺跡1』『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』39 岡山県教育委員会ほか 1980
 高橋護「入門講座弥生土器 山陽」ニュー・サイエンス社 1980
 高橋護「上東式土器の細分編年基準」『岡山県立博物館研究報告』第7号 岡山県立博物館1986
 高橋護「弥生時代終末期の土器編年」『岡山県立博物館研究報告』第9号 岡山県立博物館 1988
 平井勝「弥生時代への移行」『吉備の考古学的研究』上巻 山陽新聞社 1992
 平井典子「備前・備中」『YAY!』 弥生土器を語る会 1996
 正岡睦夫「備前地域」『弥生土器の様式と編年 山陽・山陰編』木耳社 1992
 渡邊恵里子「岡山県南部地域における遠賀川系土器の様相」『突帯文と遠賀川』 土器持寄会 1999

第6節 古墳時代の土器について

古墳時代、津島遺跡では弥生時代に引き続いて広範囲に広がる集落が確認されている。竪穴住居や井戸、土壇などの遺構を多く検出しており、それらの遺構からは一括性が高いと考えられる土器が多く出土している。そこで、遺構単位で出土した土器を並べて津島遺跡内での土器変遷を呈示し、個々の遺構の出土状況および土器についての概要を述べたのちに、若干の検討をしたい。

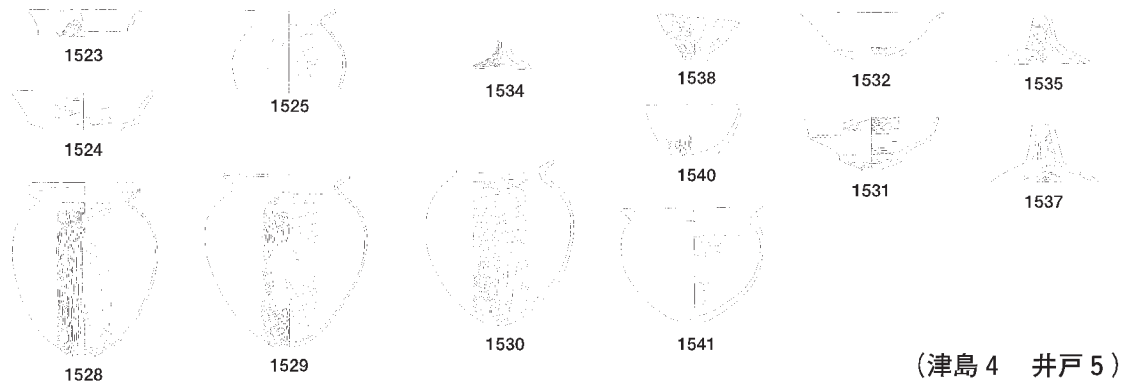
掲載した土器について、例えば「津島遺跡4」で報告されている遺構については「津4」というように表記し、図面・文章の中で土器に付した番号は、それぞれの報告書の掲載番号である。

(津4－井戸5) 出土状況は、下層に1530が、上層で1528・1535・1537が出土しているが、同一の第一層で出土しており、土層断面の状況からこの第一層は井戸の廃棄時に一時に埋め戻された状況であることから、一括性の高いものと考えられる。壺は口縁部のみの出土であるが、二重口縁壺1523・1524がある。甕は吉備型甕1528・1529の外面には、ミガキが密に施されている。また、1530は口縁部の形態が不明であるが、吉備型甕とは外面の調整が異なりハケメで、頸部内面の調整もハケメである。小型精製器種には小型有孔器台1534があり、外面全体に精緻なミガキを施している。高杯は杯部が「ハ」の字に大きく開く1532と、有段高杯1531がある。脚部外面にはミガキを施すものがある。脚部は中空のもの、接合部分の器壁の厚い1536がある。鉢は「く」の字口縁の1541がある。時期は高橋編年の10－a期に併行すると考える。

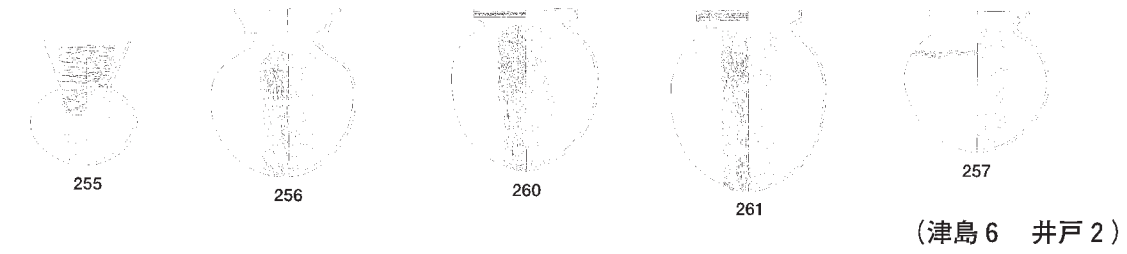
(津6－井戸2) 出土状況は、下層の6・7層でまとまって出土し、完形品が多い。井戸の廃棄時の祭祀に伴うものと考えられ、完形品が多く、一括性は高い。壺は直口壺255の外面の調整は体部上半から口縁部にかけて、丁寧な横方向のミガキを、下半にケズリを施している。二重口縁壺256の調整は、吉備型甕と同様である。甕は吉備型甕の外見の調整はミガキが疎らになるが、体部外面全体に施される。肩部が張る260と、体部下半の形状が丸みを帯びる261がある。甕257は口縁部が「く」の字で肩部に波状文を施すもので、布留系甕である。時期は高橋編年の10－b～c期に併行すると考えられる。

(津6－井戸3) 出土状況は中層以下でまとまって出土しており、甕など型式差がみられるが、外来系の土器および多様な器種が出土しているため取り上げた。ほとんどが破片での出土である。壺は二重口縁と「く」の字にひらくものがあり、273・276は畿内系であると考えられる。甕には讃岐系301、山陰系303、布留系299、庄内系298、東海系296・334、島嶼部のものと考えられる304などが出土している。鉢は二重口縁を持つ大型の330と、小型の332・333があり、332のように器壁が厚く、口縁部の稜がにぶいものは山間部のものである可能性もある。高杯は、杯部が「ハ」の字に開くもの、碗状を呈するもの、段を持つものがあり、調整は横方向の比較的密なミガキを施しているものが多い。316・317は庄内系の高杯である。小型精製器種の小型器台は無孔の341・342と有孔の343がある。小型丸底壺は外面の調整がミガキであるものと、ケズリのものがある。鉢には大型で二重口縁を持つ330・332・333がある。時期は、高橋編年の10－c～d期に併行すると考えられる。

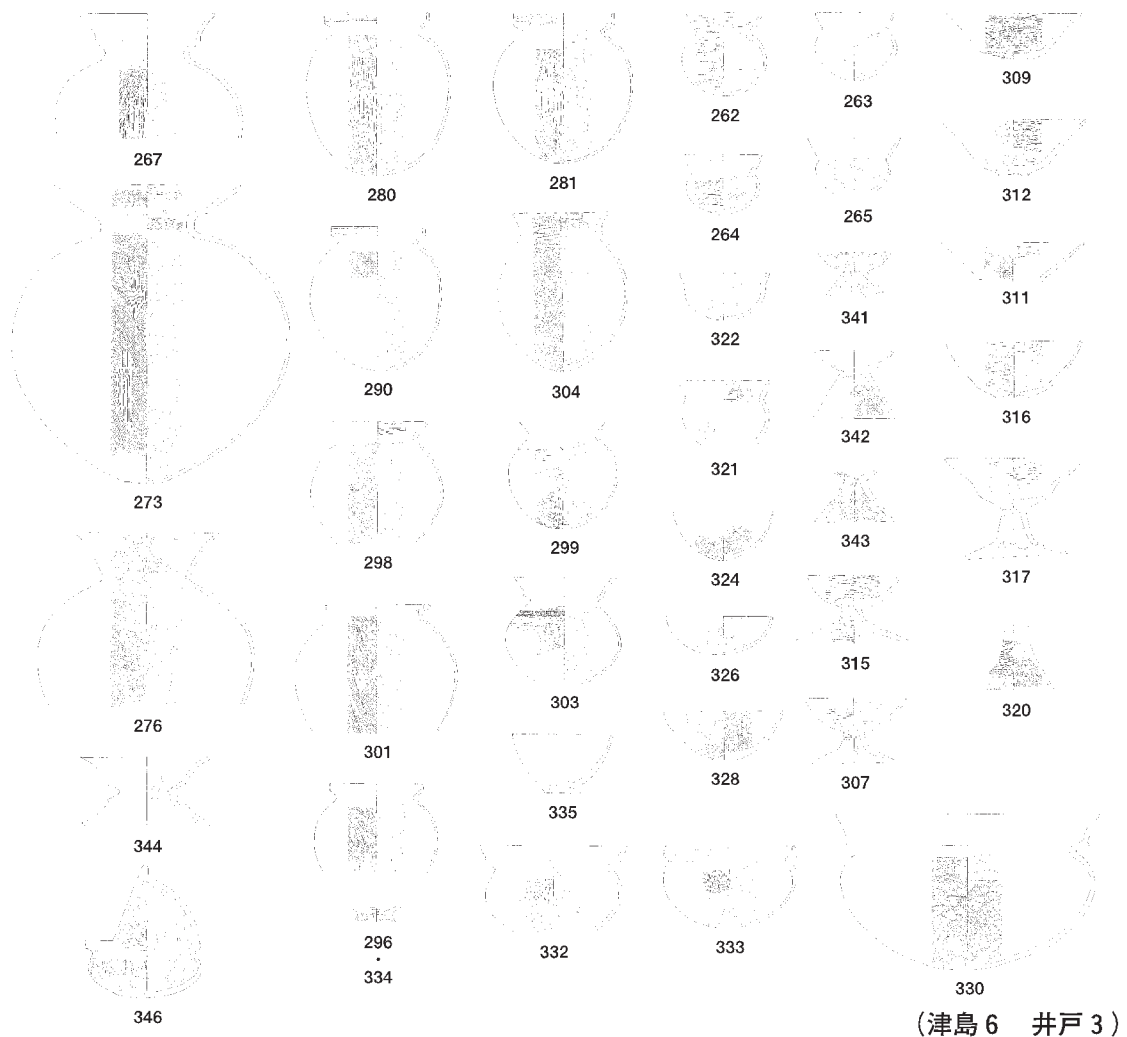
(津4－竪穴住居37) 1390のみが庄面出土である。甕1390は吉備型甕と考えられ、体部が卵倒形を呈している。小型精製器種には、小型丸底壺と小型器台、小型有段鉢がある。小型丸底壺には体部が深い1393と、浅い鉢状の1394がある。有段鉢1395が出土しており、有段鉢の出土数は、小型丸底壺



(津島 4 井戸 5)

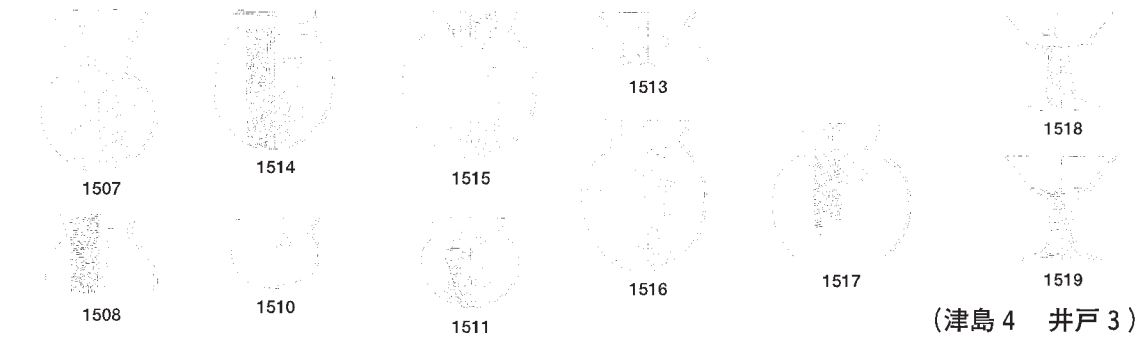
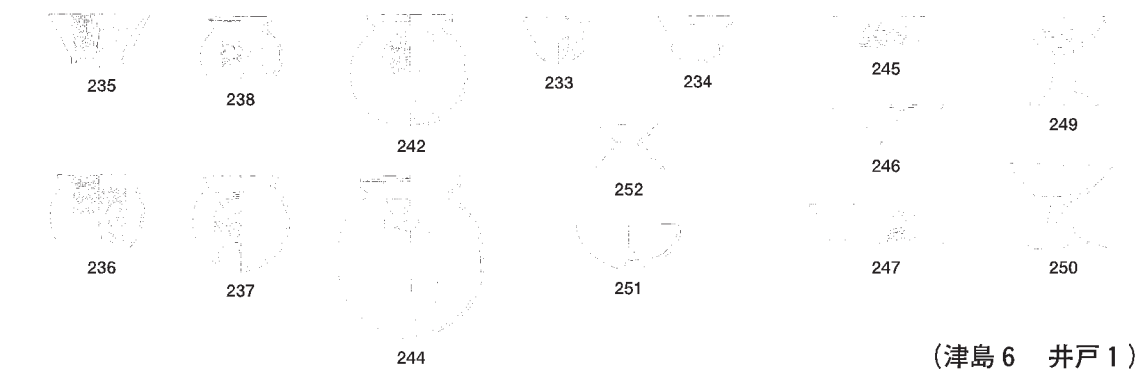
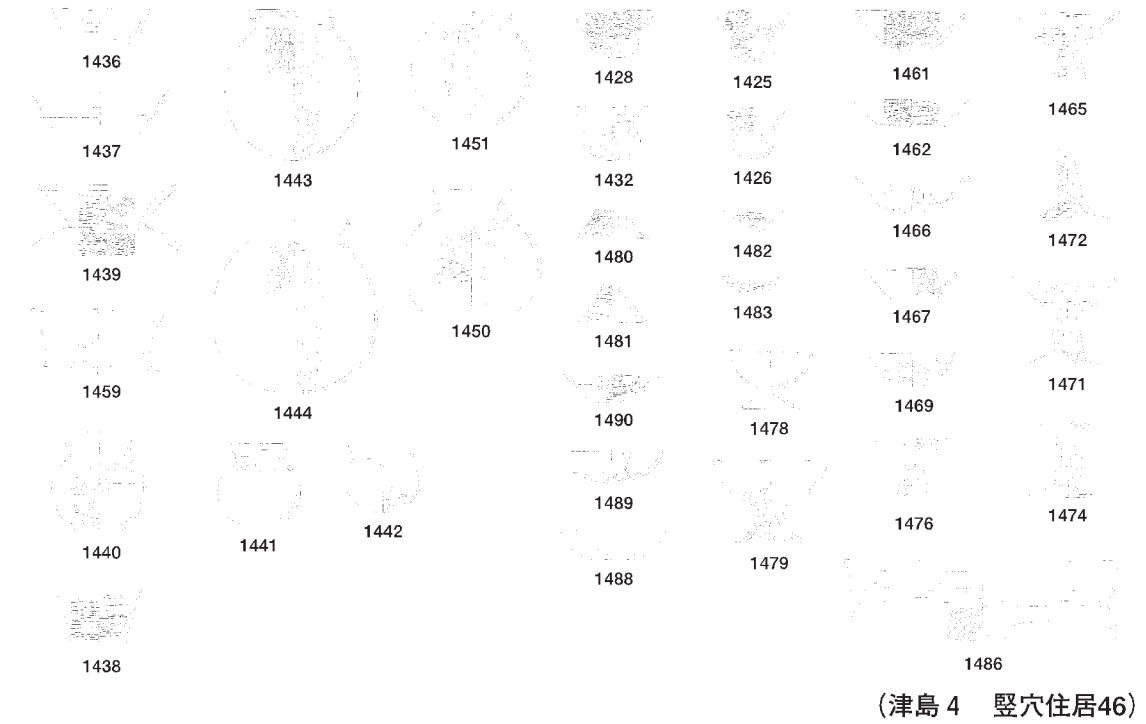


(津島 6 井戸 2)



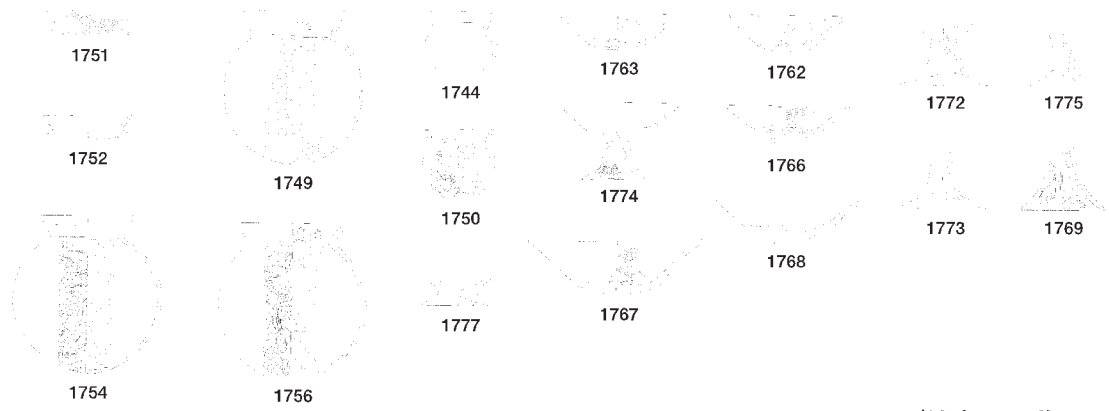
(津島 6 井戸 3)

第159図 古墳時代の土器① (1/10)

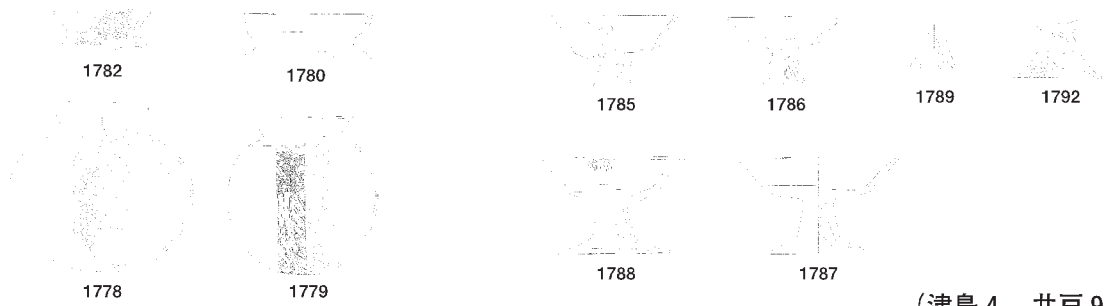


第160図 古墳時代の土器② (1/10)

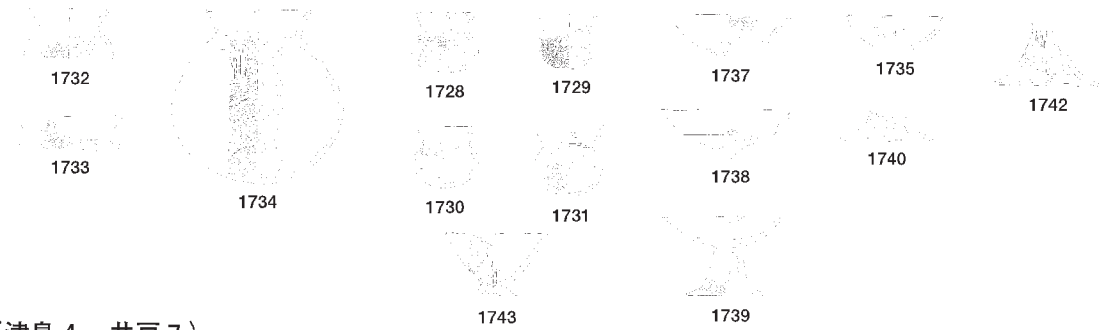
第4章 まとめ



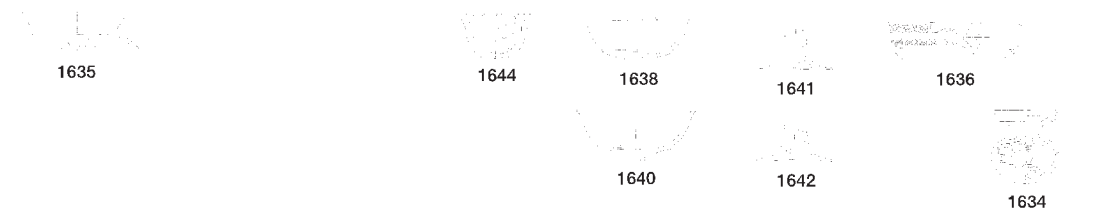
(津島4 井戸8)



(津島4 井戸9)



(津島4 井戸7)

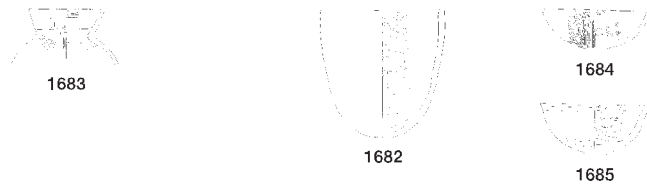


(津島4 竪穴住居58)

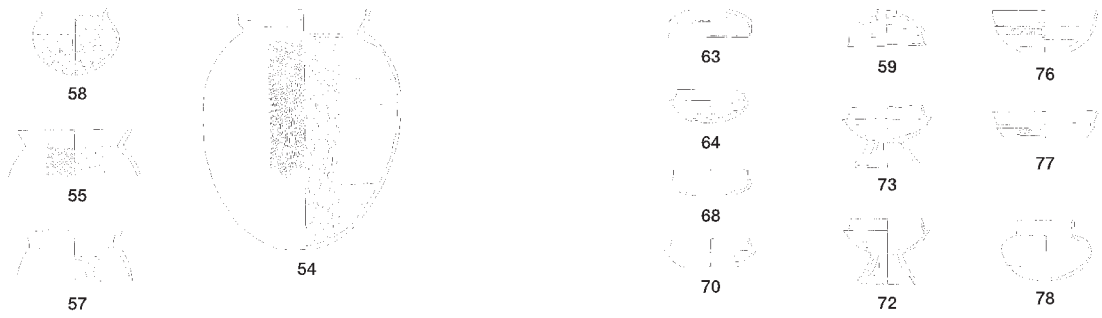


(津島4 竪穴住居55)

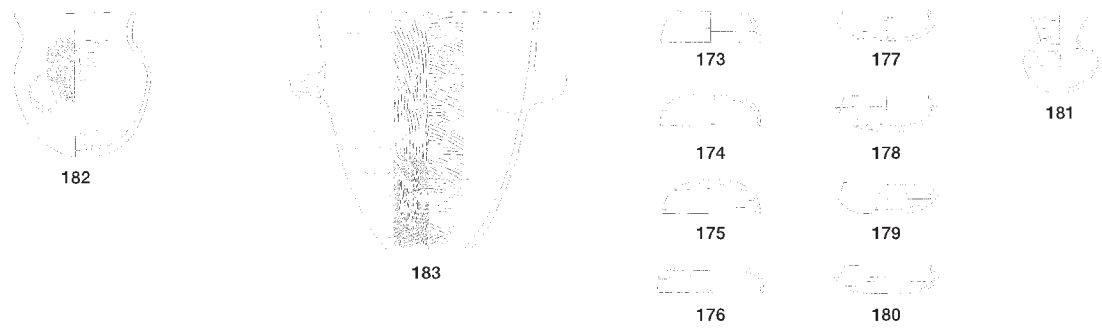
第161図 古墳時代の土器③ (1/10)



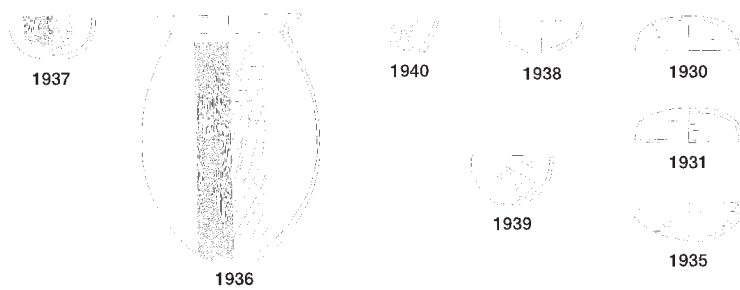
(津島4 竪穴住居67カマド)



(津島1 竪穴住居3)



(津島5 土壙40)



(津島4 竪穴住居75)



(津島4 竪穴住居77カマド)

第162図 古墳時代の土器④ (1/10)

や小型器台と比較して少ない。時期は高橋編年の10-d～e期に併行すると考えられる。

(津4-堅穴住居46) 出土状況は床面直上のものと覆土中のものがあり、甕の型式差から一括性は低いように報告されている資料である。高杯の内面調整にケズリがあるものがあり、これからも一括性には疑問が残るが小型精製器種が多く出土しており、その様相には時期差がさほど認められないようであるので、取り上げた。壺は二重口縁壺1436・1437のほか、畿内系の1439がある。甕は吉備型甕のほかに「く」の字口縁を持つものがある。小型精製器種は、小型丸底壺はミガキを密に施している。口縁部が大きく開き、体部の小さな1425・1426がある。有段鉢の外面の調整はミガキである。小型器台1480～1483は有孔で外面にミガキを施す。高杯はミガキを密に施すものとハケメの調整のものがある。時期は高橋編年の10-d期～11-a期であると考えられる。

(津6-井戸1) 出土状況は底面に吉備型甕が3個体、完形で出土しており、井戸の廃棄に伴う祭祀であるものと考えられ、またその他の土器も底面近くの下層で出土していることから、一括性は高いと考えられる。直口壺235の口縁部の外面調整にミガキがなくなり、ハケメが施される。甕には吉備型甕242・244のほかに「く」の字口縁の236・237があり、これは外面をタタキ調整している。小型精製器種には有孔の小型器台252があり、外面の調整はナデである。「く」の字状器台と呼ばれるものである。小型丸底壺233・234は外面にミガキを施さず、体部よりも口縁部が大きく開く、定型化したものである。高杯は脚部が中実の249と中空の250がある。杯部の外面には依然としてミガキを施す。時期は高橋編年の10-e期に併行する。

(津4-井戸3) 出土状況は甕1514が第1層から、その他が第2層から出土しており、完形品で出土しているものが多く、一括性の高い資料であるといえる。直口壺1507の外面調整はナデと変化する。甕は、口縁の形態が「く」の字のものが主流になる。そのなか1個体、吉備型甕1514が出土しており、外面の調整は体部外面下半をナデ消さずにハケメが残っているものである。高杯の脚が長脚化しており、内面の調整がユビオサエである。杯部外面にはミガキが施される。小型精製器種は出土していない。高橋編年の11-a期に併行するものと考えられる。

(津4-井戸8) 掘り返しが行われている井戸であるため、一括性にはやや欠けるものの、遺物の型式からはそれほどの差は認められない。甕はすべて「く」の字口縁である。高杯の杯部にミガキが施されなくなる。脚部の内面調整にはケズリが施されるものがでてくるが、シボリの痕跡の残る1774も存在している。脚裾部の屈曲がない1769などがある。小型丸底壺1744・1750は口縁部が短くなり、外面にハケメが残るなど粗雑なものとなる。時期は、高橋編年の11-b期に併行するものと考えられる。

(津4-井戸9) 出土状況は上層の第1層に多く含まれるものの、掘り返しである可能性も考えられるが、上層で出土の甕と下層出土の1779に型式差があまりないことから、一括資料として扱うこととする。甕は布留系の1779がある。甕1778の形態が初期須恵器の影響を受けていると考えられる。高杯は脚部内面の調整がすべてケズリになり、脚に孔を穿っている1789は、3か所の穿孔であると考えられるものである。脚部内面はシボリの痕跡を残すものとケズリを施すものがある。1788・1787の形態は前後に系譜が追えず、初期須恵器の影響を受けている可能性も考えられる。高橋編年の11-b期に併行すると考えられる。

(津島4-井戸7) 掘り直された上層断面ではないため、埋土全体から上器が出上しているものの一括性があるものとする。甕1734の胴部最大径は下方に下がり、内面の調整は以前とケズリが見

られるが粗雑であり、器壁も厚い。小型壺**1728**～**1731**は体部外面下半にケズリを施す**1730**があるが、ハケメであるものが多くなり、器壁も厚くなる。高橋編年の12-a期に併行すると考えられる。

(津島4-豎穴住居**58**) 一部覆土から出土しているが、床面直上で出土しているものも多い。須恵器を模倣した土師器が出土しているため、取り上げた。須恵器の高杯、甗を模倣したと考えられる土師質の高杯**1636**、甗**1634**が出土している。高杯は杯部の形状は内湾して端部を外へつまみ上げる**1638**・**1640**で、立ち上がり部分の稜が明瞭である。脚部は**1641**や**1632**のように脚裾全体が接地するようになる。脚部の穿孔は脚裾との境部分に3か所存在する。時期は、高橋編年の12-b期に併行すると考えられる。

(津島4-豎穴住居**55**カマド) 遺物はカマドおよび煙道部分から出土している。「L」字形カマドを持つ豎穴住居からの出土資料であることから取り上げた。土師質の甗**1624**が出土している。高杯の杯部は深い碗状を呈する。甗**1626**があり、取っ手の位置は体部半ばで取っ手自体に丁寧な面取りが施され、形状も凹みを持つ。遺構のカマド自体は前段階から検出されている。須恵器は出土していない。時期は高橋編年の12-b期に併行すると考えられる。

(津島4-豎穴住居**67**カマド) 豎穴住居の切り合いがあり、遺物の一括性には欠ける。しかし、「L」字形カマドを持つ豎穴住居からの出土資料であることから取り上げた。甗**1683**の内面にはケズリが施される。甗**1682**は小型である。高杯は杯部の形状が碗状の**1684**と屈曲を持ち、器壁の厚い**1685**がある。須恵器は出土していない。高橋編年の12-b期に併行すると考えられる。

(津島1-豎穴住居**3**) 床面出土のもと、覆土からの出土のものがある。甗**54**・**58**が床面直上で検出されているが、大半は覆土からの出土であると考えられる。甗の内面調整がケズリではなく、ユビナデおよびユビオサエを施すものが主流となる。甗**54**は内面の調整がユビナデおよびユビオサエで、肩部に最大径を持ち、体部は卵倒形で長胴化の傾向がうかがえる。**55**・**58**も内面調整がユビオサエ・ユビナデであるが、**57**のように依然ケズリ調整のものもある。須恵器が多く出土しており、これから時期はTK47型式併行期と考えられる。津島遺跡内で、須恵器が普遍的に出土するようになるのがこの時期である。

(津島5-土壇**40**) 底面からは浮いているが、まとまって出土している。甗**182**は内面の調整がナデである。甗**183**の内面調整はハケメで、取っ手の位置は体部の上半で、形状は簡略化している。須恵器から、TK10型式併行期と考えられる。

(津島4-豎穴住居**75**) 豎穴住居の床面直上で**1930**・**1931**・**1937**・**1940**が、床下で**1938**・**1939**、カマドの覆土から**1935**・**1939**が出上している。これらの出上状況から、床下から検出されたもの以外は、豎穴住居が廃棄された同時期に使用していたものであると考えられる。小型の甗**1937**の内面調整はナデである。長胴甗**1936**は胴部最大径が下半にあり、内面の調整はナデで、指でなでた痕跡が明瞭である。甗**1940**の内面調整はケズリとなる。土師質の高杯は床下からの出上であるが、小型で浅い碗状の杯部を持つ。須恵器からTK43型式併行期と考えられる。

(津4-豎穴住居**77**カマド) カマドの覆土から出上しているため、一括性があると考えた。甗**1946**は長胴甗であり、調整はナデで器壁は厚い。小型の甗**1945**にはタタキが施される。甗**1947**の内面調整は(津4-豎穴住居**75**出土の**1940**)と同様にケズリが施されている。時期は須恵器からTK209型式併行期と考えられる。

以上、個々の遺構出土の土器についてその概要を述べた。以下、若干の検討をしておく。

第4章 まとめ

前期の様相としては、まず外来系の土器の出土が挙げられるが、出土量自体は少ないと言える。津島遺跡で出土している外来系の土器としては、津島遺跡4・6の報告書では図化できるものは、報告書にほぼ掲載しており、山陰系・畿内系・讃岐系・東海系のものなどがある。そのなかでも特に畿内系の土器が比較的多く、庄内系甕・布留系甕が出土していることは注目される。また小型精製器種も多く出土していることから、畿内との併行関係を考えることができる。吉備型甕については、従来通りの変遷が見られるが、一括性の高い遺構である（津4-井戸3）において、口縁が「く」の字の甕が主流になるなかで、体部下半のハケメを消さない吉備型甕が出土しており、「く」の字口縁を持つ甕が主流になっても、依然として吉備型甕が使用される状況がうかがえる。

中期の様相では、甕の内面調整については、中期になると内面の調整がケズリからナデ調整に変化するとされているが、津島遺跡出土の甕は一概にそういえず、中期後半の（津1-竪穴住居3）になってようやく内面の調整がナデに変化し、一部の甕には内面のケズリ調整が残るようである。陸上競技場調査区では「L」字形カマドを持つ竪穴住居が3軒検出されていることから、渡来系の人々との関連が示唆されるが、同様に関連付けられる須恵器模倣の土師器も出土している。初期須恵器の出土はないものの、これを模倣したと考えられる甕（津島-井戸9出土の1778）や甕（津島4-竪穴住居58出土の1634、津島4-竪穴住居55出土の1624）などがある。この（津4-井戸9）出土の須恵器を模倣したと考えられる甕の存在などから、津島遺跡では高橋編年の11-b期の併行期にはすでに初期須恵器が存在するものと考え、この遺構は古墳時代中期の範疇に入ると考えられる。

後期は遺構・遺物自体少ない。須恵器の杯によって時期を決定している状況であり、土師質の土器については不明な点も多い。

一括性の高い資料として取り上げた遺構のなかにも、土器には型式差が認められるものもある。しかしこれは、実際の土器の使用状況を反映しているのものであると考えられる。（圖）

図出典（本書以外）

『津島遺跡1・4～6』「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告137・173・181・190」 1998・2003・2004・2005 岡山県教育委員会

参考文献

高畑知功・平井泰男・柴田英樹「集成11 土師器」『吉備の考古学的研究』（下）山陽新聞社 1992

『古墳時代出現期の土師器と実年代』シンポジウム資料集 2003 （財）大阪府文化財センター

高橋護「3 中国・四国」『古墳時代の研究』第6巻土師器と須恵器 雄山閣 1991

高橋護「弥生時代終末期の土器編年」『研究報告』9 岡山県立博物館 1988

亀山行雄「岡山県津寺遺跡の庄内式併行期の土器について」『庄内式土器研究XI』庄内式土器研究会 1996

草原孝典「吉備における庄内併行の土器」『庄内式土器研究XI』庄内式土器研究会 1995

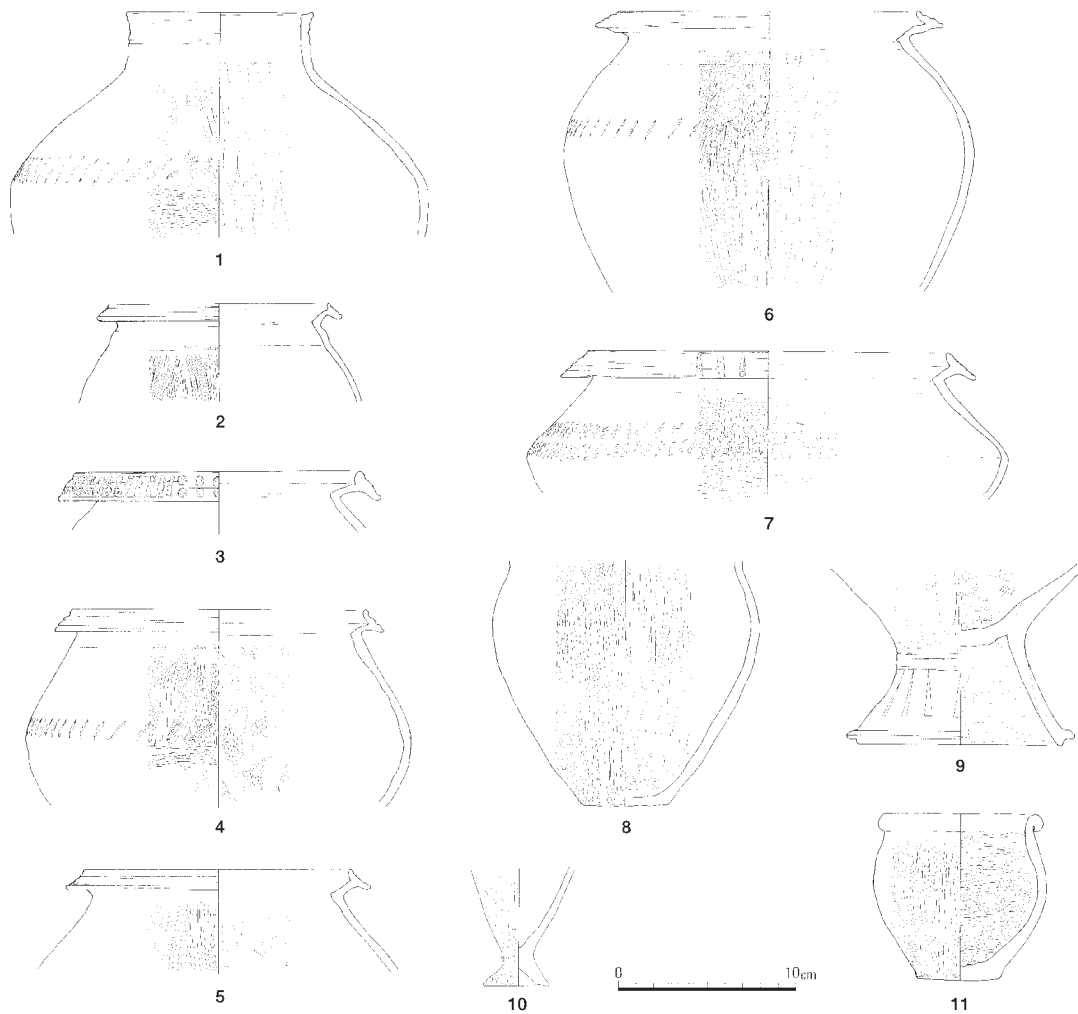
柳瀬昭彦「川入・上東遺跡の弥生式土器及び古式土師器について」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告16 川入・上東』岡山県教育委員会 1977

第5章 補遺編

1 武道館建設当初予定地出土の弥生中期土器

ここに掲載する遺物は、昭和43年度に、武道館建設当初予定地の発掘調査で出土した弥生時代中期末の土器類である。本来は『津島遺跡2』（岡山県教委、2000）に掲載されるべき遺物であるが、報告書作成時点では所在が把握できず、刊行後の平成14年度に至って県文化財センター収蔵庫内に保管されていることが判明した。

土器片はコンテナに2箱分あり、注記には「SE区 TIV 東壁攪乱 68.11.11」と「S20~26、E12~13 攪乱 68.9.14」の2種類が認められる。注記内容から判断して、出土地点は当時A区と呼ばれた調査区南東部であり、溝7と称する遺構の南側に存在する中期包含層から、壁面の崩落に伴って出土した土器群の一部と特定できる。その際の出上土器は『津島遺跡2』の第96・97図に掲載され



第163図 武道館建設当初予定地出土の弥生中期土器（1/4）

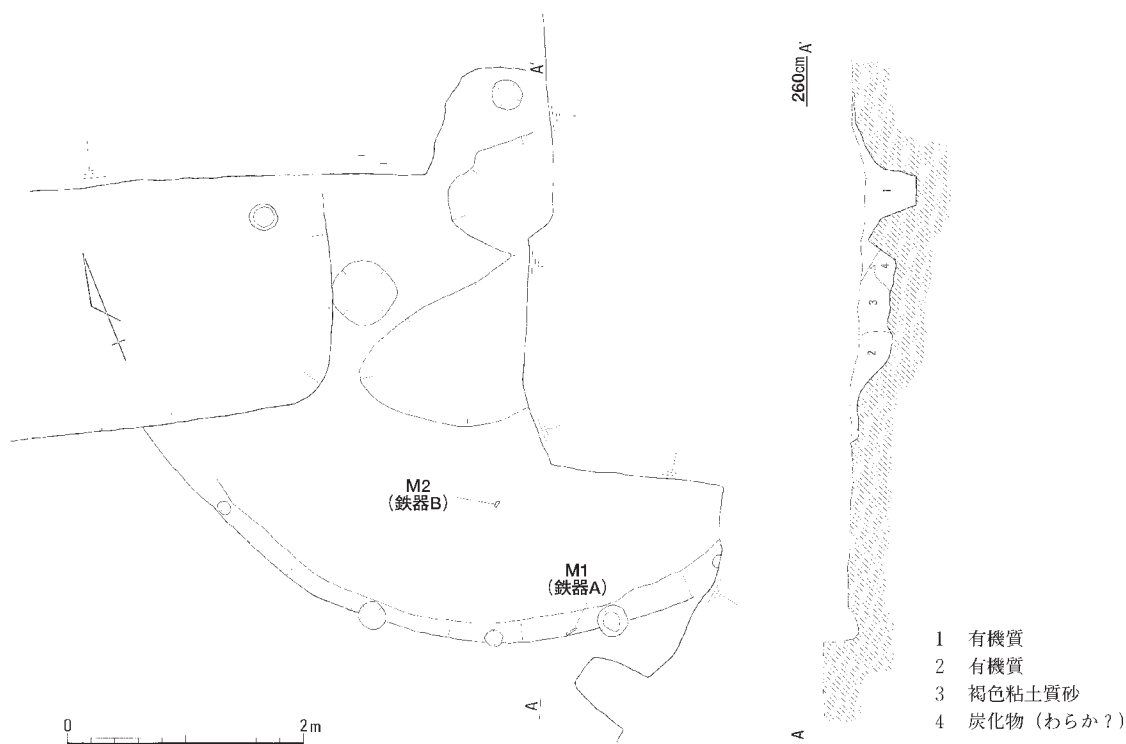
ており、器台と高杯を中心とする「中期末の仁伍式と呼ばれる土器の一括資料」であるが伴出したはずの壺・甕類が十分に確認できない旨が記されている。

今回所在の判明した土器類は、『津島遺跡2』掲載分とは対照的に壺・甕・鉢などが主体を占めている。1は直口壺で、短い頸部には凹線文、肩部には刺突文が巡る。2～6・8は甕で、いずれも拡張した口縁端部に凹線文を施し、3では円形のスタンプ文と棒状浮文が付される。8は小型の甕である。7は甕に類似するが、肩の張りが強く、器形の点から鉢と判断される。口縁部や肩部の装飾は甕と共通する。9は台付鉢で、脚部には三角形の透かし孔が切られる。10は粗製の台付鉢、11は口縁部が玉縁状をなす鉢で、ともに中期末に特徴的な形態である。

以上の土器は、その特徴から『津島遺跡2』掲載の土器と同じく中期末の仁伍式に属し、注記内容からも同一地点出土であることは疑いない。壺・甕を中心とするこれらの土器類は、器台・高杯に偏っていた既報告分を補完し、当該時期の一括資料としての価値をさらに高めるものである。なお、この新規発見分を加えても、器種組成の点で高杯・器台の比率は依然として高く、特に器台は完形に近いものが3個体含まれるなど、祭祀的な色彩の濃厚な遺物群であるといえる。

2 南池地点出土の鉄器

昭和36・37年度に実施された南池地点の発掘調査において、弥生時代後期末に比定される竪穴住居6（調査時の名称は第9住居）から2点の鉄器が出土し、鉄器A・Bとの名称が付されていた。この竪穴住居の出土遺物は岡山大学考古学研究室において保管されていたが、当該調査の成果をまとめた『津島遺跡3』（岡山県教委、2001）の編集段階では所在が確認されず、掲載できていない。その後、平成14年2月に岡山大学の新納泉氏より北池・南池の遺物が新たに見つかったとの連絡を受け、実見



第164図 南池 竪穴住居6 (1/60) (『津島遺跡3』第59図を一部改変)

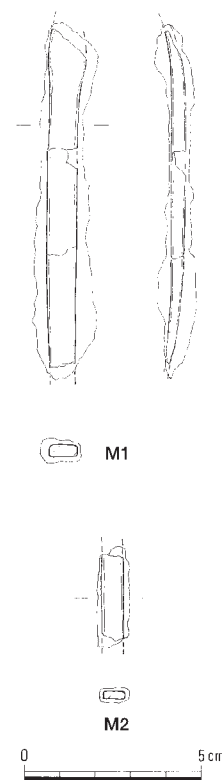
したところこの2点が含まれていることが判明したため一括して借り受け、整理・実測を行った。鉄器以外の遺物については、出土地点の不明確な土器小片が多く実測対象とはならなかった。なお、この2点は他の遺物ともに、本書の刊行に先立ち、平成15年度中に岡山大学へ返却されている。当時の実測図（『津島遺跡3』第59図）によると、竪穴住居6は当時のD区で南西部のみが検出された円形の住居で、鉄器Aは住居の壁面付近、鉄器Bは壁面から1mほど内側から出土したように見受けられる。出土遺物には土器片のほか鉄器と土錘各1点があり、これらは同書第60図に掲載されている。

M1（鉄器A）は、錆膨れが著しいが断面は扁平な長方形を呈し、X線写真では先端部と思われる部分がやや幅広くなっているなど形態上の特徴から、確証はないものの両端部を欠損したヤリガンナと推定される。全体が緩い弓なりに変形しており、残存長は9.0cmを測る。これが実際にヤリガンナとすれば、弥生時代のものとしては総合グラウンド内の調査区では唯一の例となる。M2（鉄器B）は小片であるが、断面は長方形を呈し、不確実であるがヤリガンナないし刀子の柄である可能性を考えている。

最後になりましたが、新納泉氏には遺物の所在を御教示いただいたほか、実測および補遺への掲載についても御快諾を賜りました。厚く感謝申し上げます。（岡本）

参考文献

- 「津島遺跡2」 『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』151 岡山県教育委員会 2000
「津島遺跡3」 『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』160 岡山県教育委員会 2001



第165図
南池 竪穴住居6
出土鉄器 (1/2)

自然科学的分野における分析・鑑定

津島遺跡の自然科学分析

株式会社 古環境研究所

津島遺跡出土試料の放射性炭素年代測定

株式会社 古環境研究所

津島遺跡井戸内埋積物中の種実の種類

パリノ・サーヴェイ株式会社

津島遺跡出土土器の胎土分析

岡山理科大学自然科学研究所 白石 純

津島遺跡出土のガラス滓の分析

株式会社ニコン 木戸 一博

津島遺跡の自然科学分析

株式会社 古環境研究所

1. はじめに

津島遺跡は、岡山平野中央部の岡山市いずみ町に所在し、弥生時代前期の集落と水田跡の検出で著名な遺跡である。これまでの調査において、縄文時代晩期から近世に至る遺構が検出されている。

今回、県立体育館建設予定地において発掘調査が実施され、ここでも弥生時代前期の水田跡が検出された。また、古墳時代後期の水田跡の包蔵も推定された。

ここでは、プラント・オパール分析から水田層における稲作の検証およびその他の層における稲作の可能性について検討し、さらに珪藻分析から、各層の堆積環境について検討を行う。

2. 試料

試料は、J区、N区、O区の3地点より採取された。各地点における分析試料は以下のとおりである。

1) J区

上位より灰黄褐色粘質土（65層）、灰褐色粘質土（66層）、暗灰黄色粘質土（69層）、褐色粘質土（70層）、オリーブ褐色粘質土（72層）、暗褐色粘質土（75層）、黒褐色粘質土（77層）、黒褐色粘質土（78層）、黒褐色粘質土（80層）、オリーブ褐色粘質土（82層）、緑灰色粘質土（83層）、灰色粘性砂質土（84層）、オリーブ黒色粘質土（85層）の13点である。このうち、77層、78層、80層はいずれも弥生時代前期の水田層であり、65層と66層は古墳時代後期の水田層と考えられている。プラント・オパール分析はすべての試料を対象とし、珪藻分析は72層～85層について行う。

2) N区

上位より灰色粘質土（1層）、灰色粘質土（2層）、黒褐色粘質土（3層）、黒色粘質土（4層）、灰オリーブ色粘質土（5層）、緑灰色粘質土（6層）の6点である。このうち、2層～4層は弥生時代前期の低位部とされている。すべての試料について、プラント・オパール分析と珪藻分析を行う。

3) O区

上位より黄灰色粘質土（1層）、褐灰色粘質土（2層）、黒褐色粘質土（3層）、黒色粘質土（4層）、緑灰色粘質土（5層）、灰色微砂質土（6層）の6点である。2層～5層は弥生時代前期の低位部とされている。いずれもプラント・オパール分析のみを行う。

3. 方法

(1) プラント・オパール分析

植物珪酸体は、植物の細胞内にガラスの主成分である珪酸（ SiO_2 ）が蓄積したものであり、植物が枯れたあとも微化石（プラント・オパール）となって土壤中に半永久的に残っている。プラント・オパール分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出して同定・定量する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている（杉山, 2000）。また、

イネの消長を検討することで埋蔵水田跡の検証や探査も可能である（藤原・杉山，1984）。

プラント・オパール抽出と定量は、プラント・オパール定量分析法（藤原，1976）に従い、次の手順で行った。

- 1) 試料を105°Cで24時間乾燥する。
- 2) 試料約1 gを秤量し、直径およそ40 μ mのガラスビーズを約0.02 g添加する（電子分析天秤により0.1mgの精度で秤量）。
- 3) 電気炉灰化法（550°C・6時間）により脱有機物処理を行う。
- 4) 超音波水中照射（300W・42KHz・10分間）により試料を分散する。
- 5) 沈底法により20 μ m以下の微粒子を除去する。
- 6) 乾燥後、封入剤（オイキット）中に分散してプレパラートを作成する。

検鏡は、おもにイネ科植物の機動細胞（葉身にのみ形成される）に由来するプラント・オパールを同定の対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。検鏡結果は、計数値を試料1 g中のプラント・オパール個数（試料1 gあたりのガラスビーズ個数に、計数されたプラント・オパールとガラスビーズの個数の比率を乗じて求める）に換算して示した。また、おもな分類群については、この値に試料の仮比重（1.0と仮定）と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重，単位： 10^{-5} g）を乗じて、単位面積で層厚1 cmあたりの植物体生産量を算出した。イネ（赤米）の換算係数は2.94（種実重は1.03）、ヨシ属（ヨシ）は6.31、ススキ属（ススキ）は1.24、ネザサ節は0.48、クマガサ属（チシマザサ節・チマキササ節）は0.75である。

（2）珪藻分析

珪藻は、珪酸質の被殻を有する単細胞植物であり、海水域や淡水域などの水域をはじめ、湿った土壌、岩石、コケの表面にまで生息している。珪藻の各分類群は、塩分濃度、酸性度、流水性などの環境要因に応じて、それぞれ特定の生息場所を持っている。珪藻化石群集の組成は、当時の堆積環境を反映していることから、水域を主とする古環境復原の指標として利用されている。

珪藻化石の分離・抽出は、定法にしたがい以下のように行った。

- 1) 試料から乾燥重量1 gを秤量する。
- 2) 10%過酸化水素水を加え、加温しながら1晩放置する。
- 3) 上澄みを捨て細粒のコロイドと薬品を水洗後、水を加え1.5時間静置後上澄みを除去する。
この操作を5、6回繰り返す。
- 4) 残渣をマイクロピペットでカバーガラスに滴下して乾燥する。
- 5) マウントメディアによって封入し、プレパラートを作成する。

検鏡は、生物顕微鏡によって600~1000倍で行った。計数は珪藻被殻が100個体以上になるまで行い、少ない試料についてはプレパラート全面について精査を行った。

4. 結果

（1）プラント・オパール分析

分析試料から検出されたプラント・オパールは、イネ、ヨシ属、ススキ属型、タケ亜科（ネザサ節

型、クマザサ属型、その他) および未分類である。これらの分類群について定量を行い、その結果を表1, 2に示した。主要な分類群については顕微鏡写真を示す。以下に各地点の検出状況を示す。

1) J区

イネは上位より65層~77層で検出されている。65層、66層、69層、77層では比較的高い密度である。ヨシ属は65層、75層、77層、80層、82層、84層および85層で検出されている。80層と84層では比較的高い密度である。ススキ属型は66層、69層、72層、77層、80層、83層、84層および85層で検出されている。69層以外は低い密度である。ネザサ節型はすべての層から、クマザサ属型は65層~70層、75層、78層、82層、84層および85層から検出されているが、いずれもやや低い密度である。

2) N区

イネは1~5層で検出されている。2層でやや高い以外は低い密度である。ヨシ属は2層、4層、5層で検出されている。2層では比較的高い密度である。ススキ属型は1層~5層で検出されている。2層では比較的高い密度である。ネザサ節型はすべての層で、クマザサ属型は1層、2層、4層および5層で検出されているが、いずれも低い密度である。

3) O区

イネは1層~4層で、ヨシ属は1層~3層と6層で、ススキ属型は1層~5層で、ネザサ節型は1層~4層と6層で、クマザサ属型は1層、3層、4層および6層で検出されているが、いずれの分類群もやや低いか低い密度である。

(2) 珪藻分析

1) 分類群

分析試料から出現した珪藻は、真一中塩性種(海一汽水生種)12分類群、貧塩性種(淡水生種)65分類群である。計数された珪藻の学名と個数を表3に示す。また、珪藻総数を基数として百分率を算定したダイアグラムを図4、5に示す。以下に産出した主要な分類群を記す。

[真一中塩性種]

・ J区

Achnanthes brevipes, *Caloneis permagna*, *Coscinodiscus asteromphalus*, *Diploneis smithii*, *Navicula marina*, *Navicula peregrina*, *Navicula* sp., *Nitzschia cocconeiformis*, *Nitzschia compressa*, *Nitzschia constricta*, *Nitzschia granulata*

・ N区

Achnanthes brevipes

[貧塩性種]

・ J区

Amphora sp., *Cocconeis placentula*, *Cyclotella bodanica*, *Cyclotella* sp., *Cymbella tumida*, *Gomphonema clevei*, *Hantzschia amphioxys*, *Rhoicosphenia abbreviata*, *Rhopalodia gibberula*

・ N区

Amphora copulata, *Aulacoseira* sp., *Cocconeis placentula*, *Cyclotella bodanica*, *Cymbella silesiaca*, *Cymbella tumida*, *Cymbella turgidula*, *Eunotia pectinalis*, *Eunotia praerupta*, *Hantzschia amphioxys*, *Navicula meniscus*, *Navicula mutica*, *Navicula tokyoensis*, *Pinnularia acrosphaeria*, *Pinnularia gibba*,

Pinnularia schroederii、*Pinnularia viridis*、*Rhopalodia gibberula*、*Synedra ulna*

2) 珪藻群集の特徴

・ J区

珪藻構成と珪藻組成の変化から、下位より2帯の分帯を行った。

I帯 (85層)

I帯では、*Nitzschia granulata*、*Diploneis smithii*を主とした海一中塩性種（海水—汽水生種）の海水泥質干潟環境指標種群の占める割合が高く、海水砂質干潟指標種の*Achnanthes brevipes*などが伴われる。

II帯 (84層～72層)

II帯では、珪藻の殻数密度は非常に低く、貧塩性種の*Cocconeis placentula*、*Cyclotella bodanica*、*Cyclotella* sp.、中塩性種（汽水生種）で海水砂質干潟指標種の*Achnanthes brevipes*、真塩性種（海水生種）の*Coscinodiscus asteromphalus*、真—中塩性種（海水—汽水生種）の*Nitzschia granulata*などが出現している。

・ N区

珪藻構成と珪藻組成の変化から、下位より4つの分帯を設定した。

I帯 (6層・5層)

I帯では珪藻の殻数密度は非常に低く、貧塩性種の*Cocconeis placentula*、*Cyclotella bodanica*、*Cymbella silesiaca*、*Navicula meniscus*、*Rhopalodia gibberula*、止水性種の*Amphora copulata*、陸生の*Hantzschia amphioxys*、真—中塩性種（海水—汽水生種）の*Achnanthes brevipes*がわずかに出現している。

II帯 (4層)

II帯では流水性不定性種の*Amphora* sp.、*Navicula meniscus*が高率で出現し、好塩性種の*Rhopalodia gibberula*、止水性種の*Navicula tokyoensis*、*Aulacoseira* sp.、沼沢湿地付着生環境指標種群の*Pinnularia viridis*などが伴われる。

III帯 (3層・2層)

III帯では止水性種の*Aulacoseira* sp.が増加し、流水性不定性種の*Amphora* sp.、*Navicula meniscus*は減少する。*Pinnularia viridis*などの沼沢湿地付着生環境指標種群、*Hantzschia amphioxys*などの陸生珪藻が比較的多く伴われる。

IV帯 (1層)

IV帯では止水性種の*Aulacoseira* sp.が優占する。

5. 津島遺跡における稲作

(1) J区

本調査区では、65層～77層においてイネのプラント・オパールが検出されている。このうち、弥生時代前期の水田層とされた77層では、プラント・オパール密度は2,800個/gと稲作跡の検証や探査を行う際の基準値である5,000個/gには達していない。ただし、畦畔が検出されていること、直上の75層が800個/gと低密度であり、上層から後代のプラント・オパールが混入した危険性が考えにくいことなどから、当該層で稲作が行われていたことはほぼ間違いなからう。同じく弥生時代前期の水田層

とされた78層と80層からは、イネのプラント・オパールは検出されなかった。したがって、両層についてはプラント・オパール分析では稲作の行われた痕跡を認めることはできない。一方、古墳時代後期の水田層とされた65層と66層では、66層で密度が4,000個/gと比較的高く、なおかつピークとなっている。したがって、当該層についても稲作跡であると判断される。65層に関しては、密度が2,600個/gとやや低い値であることから、分析的には水田耕作層であることを積極的に肯定することはできない。仮に稲作が行われていたとするならば、プラント・オパール密度が低いことの原因としては、①稲作の行われていた期間が短かった、②稲藁の多くが水田外に持ち出されていた、③イネの生産性が低かった、④土層の堆積速度が非常に速かった、などが考えられる。なお、69層では密度が3,700個/gと比較的高い値であることから、調査地あるいは近傍で稲作が行われていた可能性が考えられる。70層、72層および75層については低密度であることから、他所からの混入とみなされる。

(2) N区

ここでは1層～5層でイネのプラント・オパールが検出されている。このうち、2層ではプラント・オパール密度が3,500個/gと比較的高い値であり、ピークとなっている。したがって、当該層では調査地もしくは近傍において稲作が行われていたと考えられる。1層については密度が2,000個/gとやや低いことから、稲作跡である可能性が考えられるものの、他所からプラント・オパールが混入した危険性も否定できない。3層、4層、5層に関しては、低密度であるため他所からの混入とみられる。

(3) O区

ここでは1層～4層でイネのプラント・オパールが検出されている。1層と2層ではプラント・オパール密度がそれぞれ2,700個/g、2,200個/gとやや低い値である。したがって、両層において稲作が行われていた可能性は考えられるものの、ここで検出されたプラント・オパールは他所から混入したものであるかもしれない。3層と4層は低密度であることから、これらについては他所からの混入とみなされる。

6. 津島遺跡における堆積環境

(1) J区

a) I帯(85層)の時期

海水泥質干潟環境指標種群の占める割合が高く、海水砂質干潟指標種が伴われる。こうしたことから、泥質干潟が主要となるやや塩分濃度の高い干潟の環境が示唆される。

b) II帯(84層～72層)の時期

貧塩性種(淡水生種)、真塩性種(海水生種)、真一中塩性種(海水-汽水生種)が混在して出現するが、珪藻密度は低い。したがって、水没しない汀線よりやや上部の概ね乾燥した堆積環境が想定される。なお、84層や80層ではヨシ属がやや高い密度であることから、両層については湿地的環境であったと推定される。

(2) N区

a) I帯(5層・6層)の時期

珪藻の殻数密度が非常に低いことから、珪藻の生育しにくい比較的乾燥した環境あるいは不安定な堆積環境が推定される。

b) II帯(4層)の時期

流水性不定性種が多く、止水性種、沼沢湿地付着生環境指標種群が伴われる。こうしたことから、不安定に滞水した止水域の環境で、水生植物の生育が示唆される。

c) III帯(2層・3層)の時期

止水性種がやや優占し、沼沢湿地付着生環境指標種群、陸生珪藻が比較的多く伴われる。こうしたことから、両層は安定して滞水した止水域の環境であり、水生植物も生育していたと推定される。なお、2層ではヨシ属とススキ属型が比較的高い密度で検出されている。ススキ属は一般に乾いた環境を好むが、例外として湿地に生育するオギがある。こうしたことから、2層はヨシやオギの生育する湿地もしくはそれに近い環境であったと推定される。

d) IV帯(1層)の時期

止水性種の優占から、安定した止水域が示唆される。

7. まとめ

津島遺跡(県立体育館予定地)においてプラント・オパール分析と珪藻分析を行い、稲作の可能性と堆積環境について検討した。その結果、弥生時代前期の水田層とされたJ区の77層、78層、80層では、77層のみで水田跡の可能性が認められた。他の78層と80層に関しては稲作の行われた痕跡は認められなかった。また、古墳時代後期の水田層とされたJ区の66層も稲作跡であると判断された。ただし、同じく水田層とされていた65層については、その可能性を積極的に肯定することはできなかった。これら以外では、J区の69層とN区の2層で調査地周辺で稲作の行われていた可能性が示唆された。

J区の最下部の85層(I帯)の時期は、泥質干潟の環境が示唆され、上部の84～72層(II帯)の時期は、珪藻の生育しにくい比較的乾燥した堆積環境が推定された。N区では下位より、5層・6層(I帯)の時期は珪藻の生育しにくい比較的乾燥した環境かあるいは不安定な堆積環境、4層(II帯)の時期は水生植物の生育する不安定に滞水した止水域の環境、2層・3層(III帯)の時期は水生植物の生育する安定して滞水した止水域の環境、1層(IV帯)の時期は安定した止水域の環境がそれぞれ示唆された。

文献

- 杉山真二(1987) タケ亜科植物の機動細胞珪酸体. 富士竹類植物園報告, 第31号, p.70-83.
杉山真二.(2000) 植物珪酸体(プラント・オパール). 考古学と植物学. 同成社, p.189-213.
藤原宏志(1976) プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)―数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法―. 考古学と自然科学, 9, p.15-29.
藤原宏志・杉山真二.(1984) プラント・オパール分析法の基礎的研究(5)―プラント・オパール分析による水田址の探査―. 考古学と自然科学, 17, p.73-85.

Hustedt, F. (1937-1938) Systematische und ologische Untersuchungen über die Diatomeenflora von Java, Bali und Sumatra nach dem Material der Deutschen Limnologischen Sunda-Expedition. Arch. Hydrobiol., Suppl. 15, p. 131-506.

Patrick, R. Eimer, C. W. (1966) The diatom of the United States, vol. 1. Monographs of Natural Sciences of Philadelphia, No. 13, The Academy of Natural Sciences of Philadelphia, 644p.

Lowe, R. L. (1974) Environmental Requirements and pollution tolerance of fresh-water diatoms. 333p., National Environmental Research Center.

Patrick, R. Eimer, C. W. (1975) The diatom of the United States, vol. 2. Monographs of Natural Sciences of Philadelphia, No. 13, The Academy of Natural Sciences of Philadelphia, 213p.

Asai, K. & Watanabe, T. (1995) Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution (2) Saprophytic and saproxenous taxa. Diatom, 10, p. 35-47.

安藤一男 (1990) 淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用. 東北地理, 42, p. 73-88.

伊藤良永・堀内誠示 (1991) 陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用. 珪藻学会誌, 6, p. 23-45.

小杉正人 (1986) 陸生珪藻による古環境解析とその意義—わが国への導入とその展望—, 植生史研究, 第1号, 植生史研究会, p. 29-44.

小杉正人 (1988) 珪藻の環境指標種群の設定と古環境復元への応用. 第四紀研究, 27, p. 1-20.

金原正明 (1993) 花粉分析法による古環境復元. 新版古代の日本第10巻古代資料研究の方法, 角川書店, p. 248-262.

表 1 岡山県、津島遺跡のプラント・オパール分析結果 (1)

検出密度 (単位: ×100個/g)

分類群 (和名・学名) \ 試料	J区												
	65	66	69	70	72	75	77	78	80	82	83	84	85
イネ科 Gramineae (Grasses)													
イネ <i>Oryza sativa</i> (domestic rice)	26	40	37	7	7	8	28						
ヨシ属 <i>Phragmites</i> (reed)	7					8	5		26	10		25	5
ススキ属型 <i>Miscanthus</i> type		13	29		13		9		13		7	12	15
タケ亜科 Bambusoideae (Bamboo)													
ネザサ節型 <i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nezasa</i> type	92	46	15	28	39	38	47	40	45	41	26	86	5
クマザサ属型 <i>Sasa</i> (except <i>Miyakozasa</i>) type	59	20	44	14		15		7		20		61	5
その他 Others	13	7	22		7	15		7	6		7		
未分類等 Unknown	165	159	132	99	79	107	114	74	121	91	59	196	85
プラント・オパール総数	363	285	279	148	145	190	204	128	210	162	99	380	115

おもな分類群の推定生産量 (単位: kg/m²・cm)

イネ <i>Oryza sativa</i> (domestic rice)	0.78	1.17	1.08	0.21	0.19	0.23	0.84						
ヨシ属 <i>Phragmites</i> (reed)	0.42					0.48	0.30		1.61	0.64		1.55	0.31
ススキ属型 <i>Miscanthus</i> type		0.16	0.36		0.16		0.12		0.16		0.08	0.15	0.19
ネザサ節型 <i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nezasa</i> type	0.44	0.22	0.07	0.14	0.19	0.18	0.23	0.19	0.21	0.20	0.13	0.41	0.02
クマザサ属型 <i>Sasa</i> (except <i>Miyakozasa</i>) type	0.45	0.15	0.33	0.11		0.11		0.05		0.15		0.46	0.04

※試料の仮比重を1.0と仮定して算出

表2 岡山県、津島遺跡のプラント・オパール分析結果(2)

検出密度 (単位: ×100個/g)

分類群(和名・学名) \ 試料	N区						O区					
	1	2	3	4	5	6	1	2	3	4	5	6
イネ科 Gramineae (Grasses)												
イネ <i>Oryza sativa</i> (domestic rice)	20	35	5	5	6		27	22	6	13		
ヨシ属 <i>Phragmites</i> (reed)			30	10	11		5	7	6			15
ススキ属型 <i>Miscanthus</i> type	10	44	22	5	6		16	22	6	26	84	
タケ亜科 Bambusoideae (Bamboo)												
ネザサ節型 <i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nezasa</i> type	40	35	27	10	33	8	27	58	12	26		38
クマガサ節型 <i>Sasa</i> (except <i>Miyakozasa</i>) type	40	9		15	11		16		17	6		8
その他 Others	10	4					5	7	12	6		8
未分類等 Unknown	116	152	119	84	83	68	135	181	134	123	145	98
プラント・オパール総数	236	309	173	129	150	76	232	297	193	200	229	167

おもな分類群の推定生産量 (単位: kg/m²・cm)

イネ <i>Oryza sativa</i> (domestic rice)	0.59	1.02	0.16	0.15	0.16		0.80	0.64	0.17	0.38		
ヨシ属 <i>Phragmites</i> (reed)			1.92	0.62	0.70		0.34	0.46	0.37			0.95
ススキ属型 <i>Miscanthus</i> type	0.12	0.54	0.27	0.06	0.07		0.20	0.27	0.07	0.32	1.05	
ネザサ節型 <i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nezasa</i> type	0.19	0.17	0.13	0.05	0.16	0.04	0.13	0.28	0.06	0.12		0.18
クマガサ節型 <i>Sasa</i> (except <i>Miyakozasa</i>) type	0.30	0.07		0.11	0.08		0.12		0.13	0.05		0.06

※試料の仮比重を1.0と仮定して算出

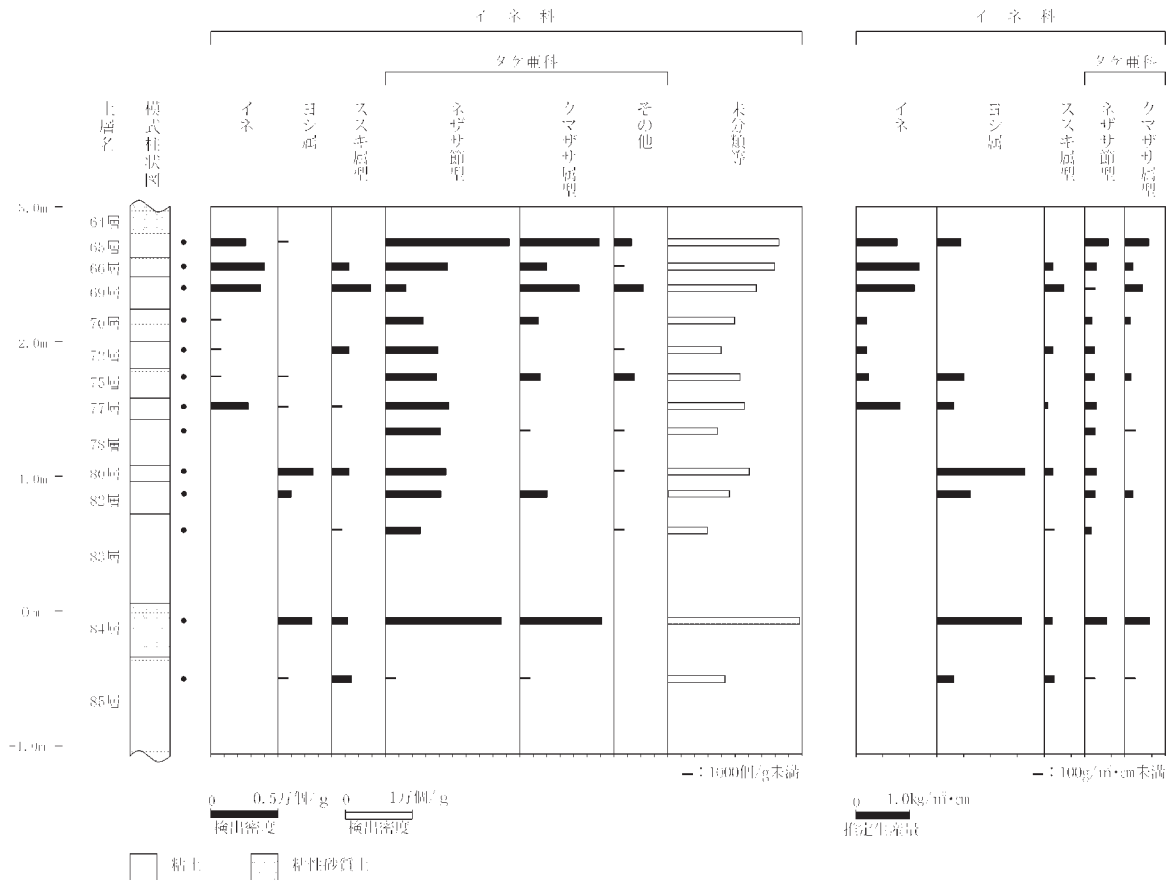


図1 J区地点におけるプラント・オパール分析結果

表3 津島遺跡における珪藻分析結果

分類群	J区							N区							
	7	8	9	10	11	12	13	14	15	2	3	4	5	6	7
貧塩性種 (淡水生種)															
<i>Achnanthes inflata</i>										3			1		
<i>Amphora copulata</i>									5	1	3	8	12		
<i>Amphora</i> sp.												4	2		
<i>Aulacoseira ambigua</i>										62	45	14	6	1	
<i>Aulacoseira</i> sp.										2					
<i>Caloneis hyalina</i>									1						
<i>Caloneis lauta</i>									1						
<i>Caloneis</i> sp.										18	4	5	1	1	
<i>Coconeis placentula</i>						1				12	7	3	2	4	
<i>Cyclotella bodanica</i>						5									
<i>Cyclotella</i> sp.															
										2					
<i>Cymbella cuspidata</i>											2				
<i>Cymbella naviculiformis</i>										1	1				
<i>Cymbella silestaca</i>										4	2	2	1	1	
<i>Cymbella sinuata</i>										1	1				
<i>Cymbella</i> sp.												1	2		
<i>Cymbella tumida</i>									1	15	2	3			
<i>Cymbella turgidula</i>										7	1	1			
<i>Diploneis finnica</i>										1	2				
<i>Diploneis ovalis</i>									1						
<i>Diploneis subovalis</i>											2	1	4		
<i>Eunotia minor</i>										3			2		
<i>Eunotia pectinalis</i>											4	4	4		
<i>Eunotia praerupta</i>										4	1	3	5		
<i>Eunotia soleirolii</i>													1		
<i>Fragilaria lapponica</i>									1						
<i>Gomphonema acuminatum</i>											1				
<i>Gomphonema angur</i>											1				
<i>Gomphonema clevei</i>									2		2	1			
<i>Gomphonema gracile</i>										1	1	1	3	1	
<i>Gomphonema parvulum</i>											4				
<i>Gomphonema sphaerophorum</i>											1				
<i>Gomphonema truncatum</i>												2			
<i>Hantzschia amphioxys</i>									2	6	19	8	5	1	
<i>Meridion circulare v. constrictum</i>										1					
<i>Navicula americana</i>										1	3				
<i>Navicula confervacea</i>												1			
<i>Navicula contenta</i>												1			
<i>Navicula cuspidata</i>										1					
<i>Navicula elginensis</i>											2				
<i>Navicula laevissima</i>											2				
<i>Navicula mentiscus</i>											3	2	11	1	

分類群	J区										N区						
	7	8	9	10	11	12	13	14	15	2	3	4	5	6	7		
<i>Navicula mitigata</i>									1						1		
<i>Navicula mutica</i>															5		
<i>Navicula pupula</i>															1		
<i>Navicula tokyoensis</i>															3		
<i>Neidium ampliaticum</i>															7		
<i>Nitzschia romana</i>									1								
<i>Nitzschia terrestris</i>															1		
<i>Pinnularia acrosphaeria</i>														2	3		
<i>Pinnularia brevicostata</i>														1	4		
<i>Pinnularia gibba</i>														1	1		
<i>Pinnularia interrupta</i>														1	1		
<i>Pinnularia major</i>														1	3		
<i>Pinnularia microstauron</i>														1	5		
<i>Pinnularia nodosa</i>														1	1		
<i>Pinnularia schroederii</i>														4	6		
<i>Pinnularia viridis</i>														2	20		
<i>Rhoicosphenia abbreviata</i>								2						3	1		
<i>Rhopalodia gibba</i>														1	1		
<i>Rhopalodia gibberula</i>								6						1	8		
<i>Stauroneis anceps</i>														4	1		
<i>Stauroneis nobilis</i>														1	1		
<i>Stauroneis phoenicenteron</i>														1	1		
<i>Synedra ulna</i>									1					8	1		
真-中塩性種 (海-汽水生種)																	
<i>Achnanthes brevipes</i>											2			5	1		
<i>Actinocyclus ehrenbergii</i>														2	1		
<i>Caloneis permagna</i>														5	1		
<i>Coscinodiscus asteromphalus</i>								2						1	2		
<i>Diploneis smithii</i>														22	2		
<i>Navicula marina</i>														9	1		
<i>Navicula peregrina</i>														1	1		
<i>Navicula</i> sp.														5	1		
<i>Nitzschia cocconeiformis</i>														1	1		
<i>Nitzschia compressa</i>														7	7		
<i>Nitzschia constricta</i>														1	1		
<i>Nitzschia granulata</i>								2						55	1		
合計	2	0	0	0	0	0	0	8	8	8	8	163	191	194	110		
未同定	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0	25	16	27	18		
破片	6	0	1	2	1	0	6	8	100	150	126	164	188	16	8		
試料 1 cm ³ 中の殻数密度	8.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	3.6	3.2	4.0	1.3	2.5	8.2	6.7	2.1	0.0		
	$\times 10^2$						$\times 10^3$	$\times 10^3$	$\times 10^5$	$\times 10^6$	$\times 10^6$	$\times 10^5$	$\times 10^5$	$\times 10^4$			
完形殻保存率 (%)	25.0	-	-	-	-	-	60.0	50.0	65.3	58.0	63.7	43.8	37.3	44.8	-		

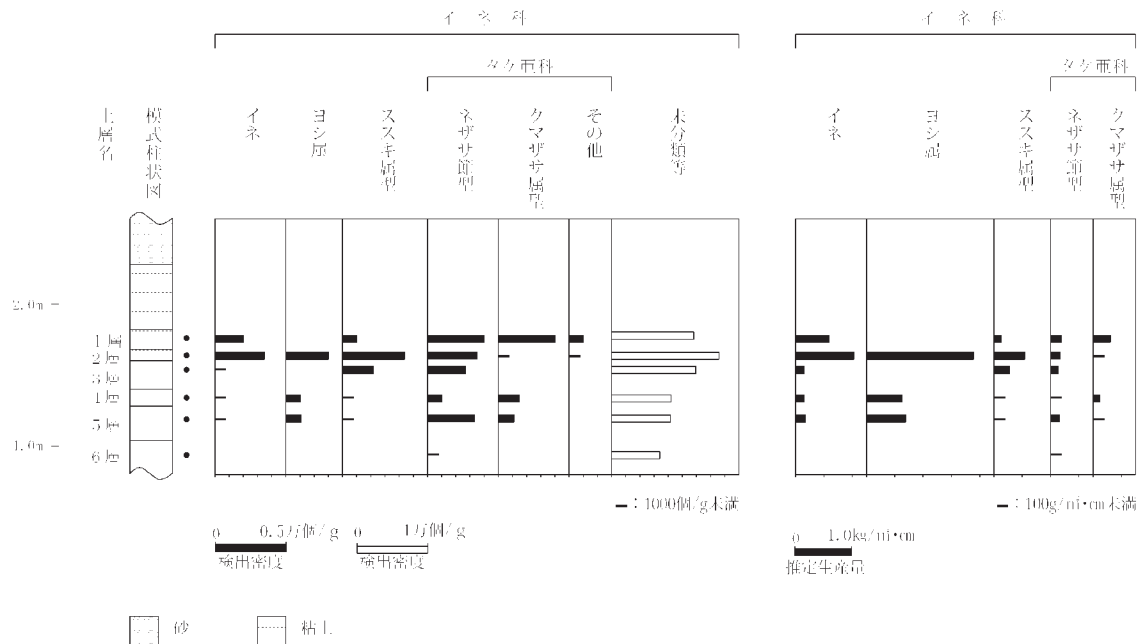


図2 N区地点におけるプラント・オパール分析結果

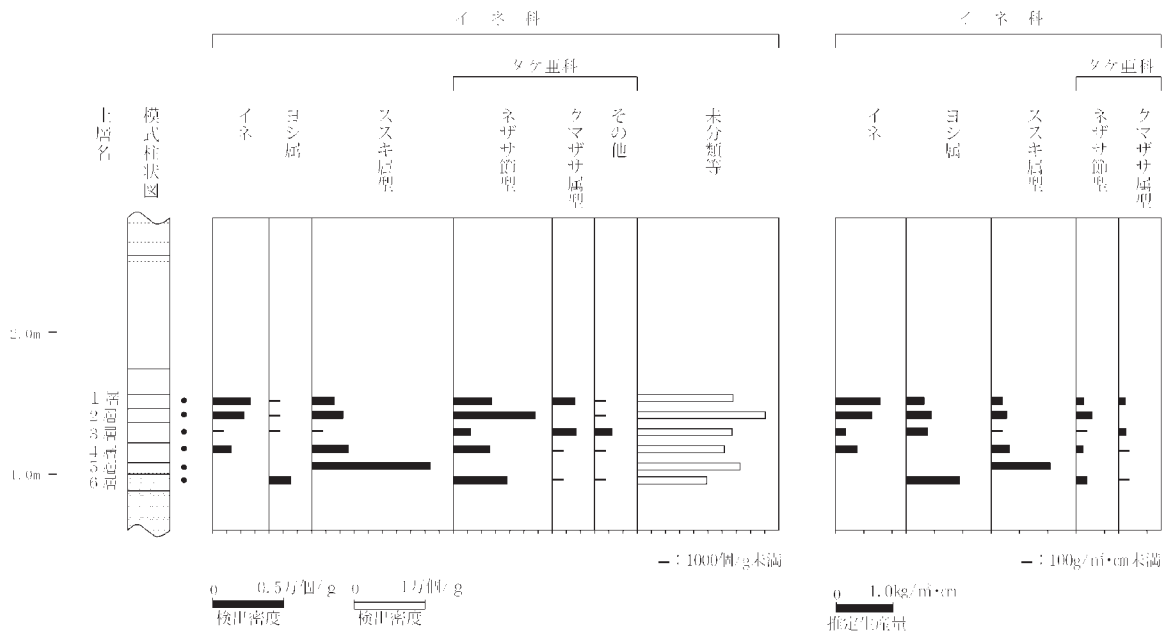


図3 O区地点におけるプラント・オパール分析結果

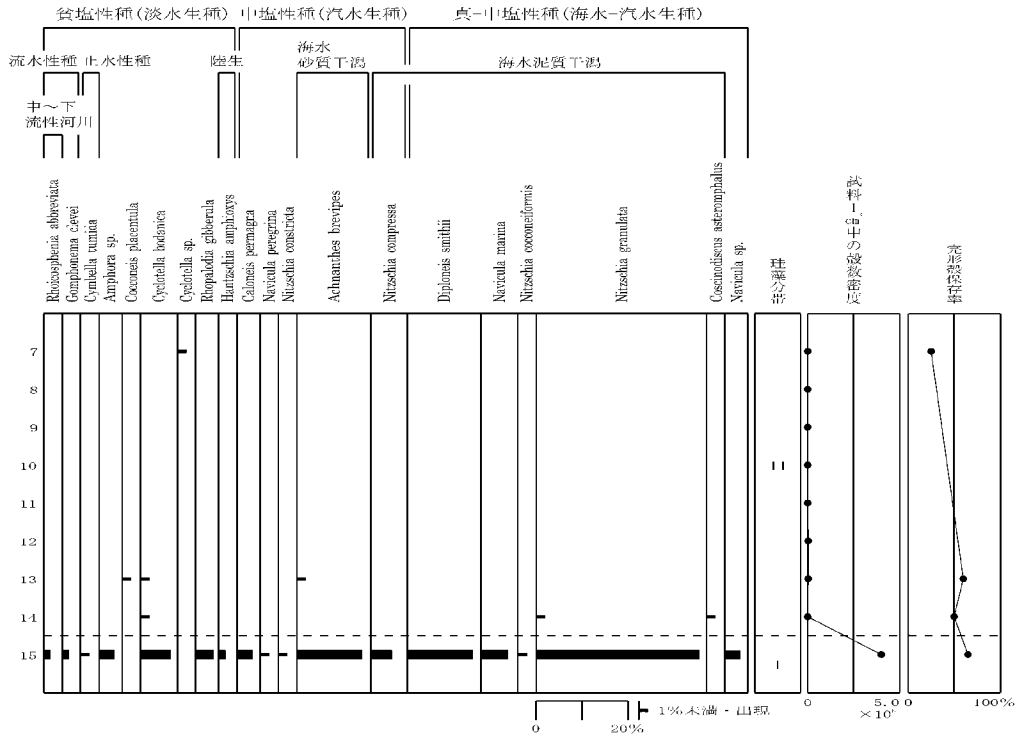


図4 津島遺跡，J区における主要珪藻ダイアグラム

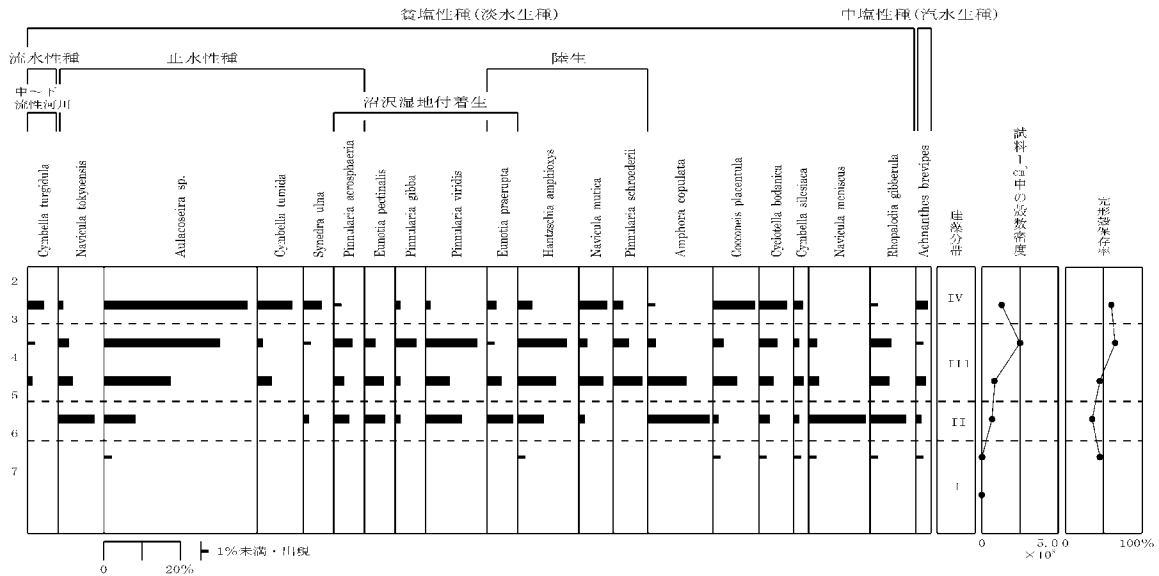
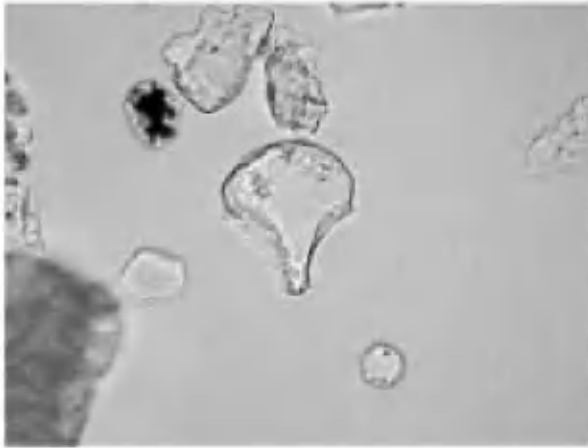
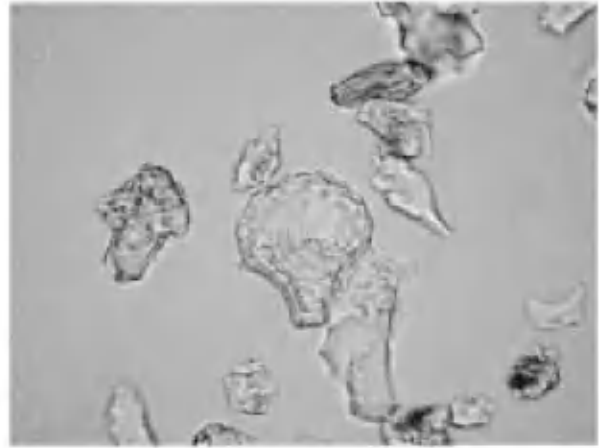


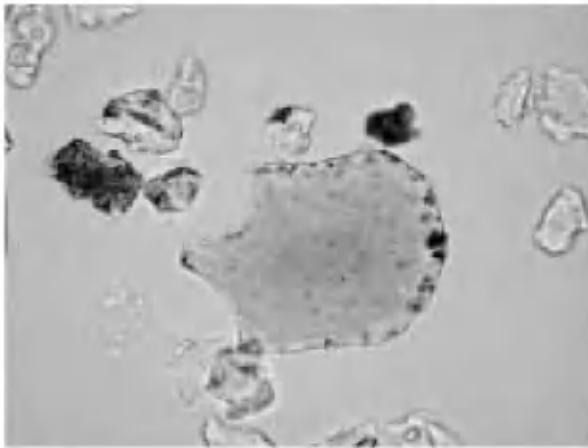
図5 津島遺跡，N区における主要珪藻ダイアグラム



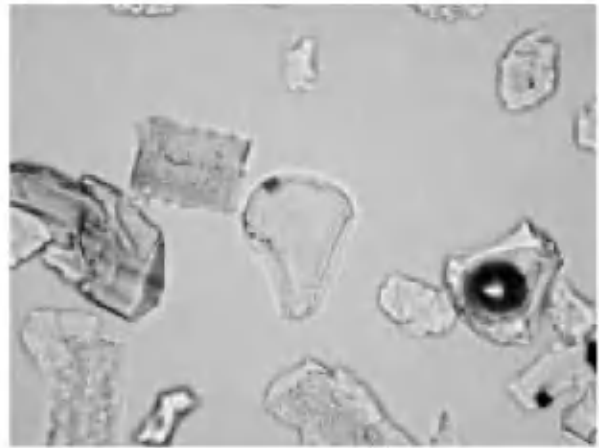
イネ



イネ



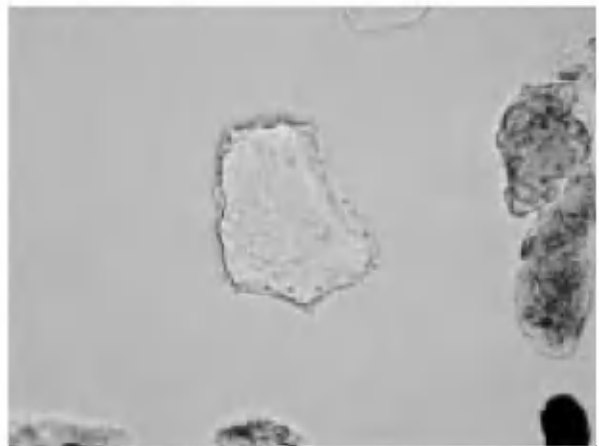
ヨシ属



ススキ属型

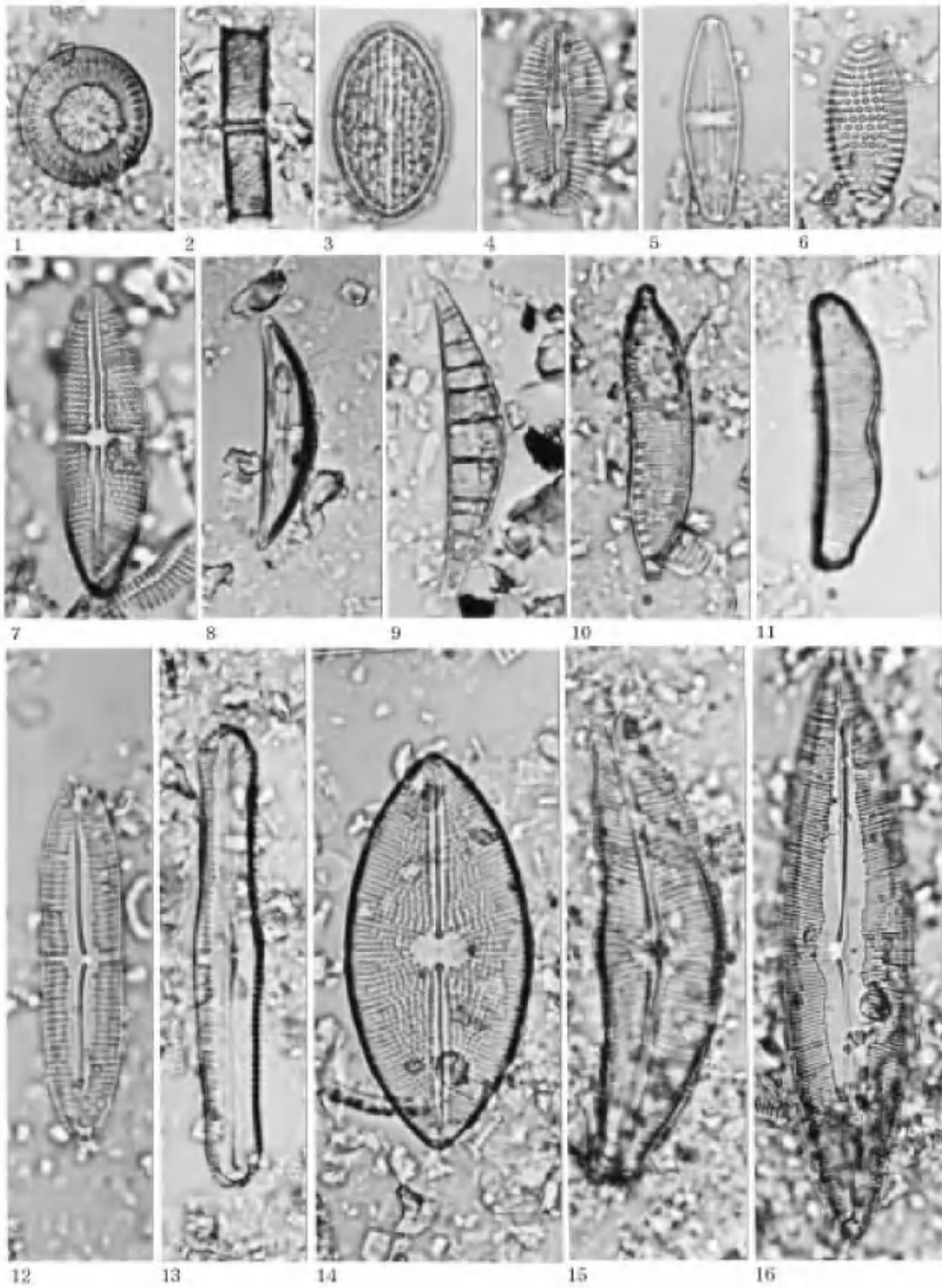


ネザサ節型



クマザサ属型

プラント・オパールの顕微鏡写真 ————— 50 μm



1-15 ——— 10 μ m 16 ——— 10 μ m

1. *Cyclotella bodanica* 2. *Anlaxoseira* sp. 3. *Cocconeis placenticula* 4. *Diploneis smithii* 5. *Navicula mutica*
 6. *Nitzschia granulata* 7. *Achnanthes brevipes* 8. *Amphora copulata* 9. *Rhopalodia gibberula* 10. *Hantzschia amphioxys*
 11. *Exoniopsis praerupta* 12. *Pinnularia viridis* 13. *Pinnularia acrosphaera* 14. *Navicula marina* 15. *Cymbella tumida*
 16. *Caloneis permagna*

津島遺跡出土試料の放射性炭素年代測定

株式会社 古環境研究所

1. 試料と方法

試料	掲載番号	採取地点	種類	前処理	測定法
No 1	6	O区黒色土層	土器付着炭化物	酸洗浄	加速器質量分析 (AMS) 法
No 2	37	O区黒色土層	土器付着炭化物	酸洗浄	加速器質量分析 (AMS) 法
No 3	34	O区黒色土層	土器付着炭化物	酸洗浄	加速器質量分析 (AMS) 法
No 4	49	O区黒色土層	土器付着炭化物	酸洗浄	加速器質量分析 (AMS) 法
No 5	なし	O区黒色土層	土器付着炭化物	酸洗浄	加速器質量分析 (AMS) 法
No 6	なし	O区黒色土層	土器付着炭化物	酸洗浄	加速器質量分析 (AMS) 法
No 7	なし	O区黒色土層	土器付着炭化物	酸洗浄	加速器質量分析 (AMS) 法

2. 測定結果

試料	掲載番号	^{14}C 年代 (年BP)	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	補正 ^{14}C 年代 (年BP)	暦年代 (西暦)	測定No (Beta-)
No 1	6	2520±30	-26.3	2500±30	交点 : cal BC 765, 615, 590 1 σ : cal BC 775 to 750, : cal BC 695 to 540 2 σ : cal BC 785 to 515	180413
No 2	37	2750±40	-25.1	2750±40	交点 : cal BC 895 1 σ : cal BC 920 to 835 2 σ : cal BC 985 to 820	180984
No 3	34	2490±40	-25.7	2480±40	交点 : cal BC 755, 680, 550 1 σ : cal BC 770 to 515 2 σ : cal BC 785 to 410	180985
No 4	49	2510±30	-26.3	2490±30	交点 : cal BC 760, 635, 560 1 σ : cal BC 770 to 740, : cal BC 710 to 535 2 σ : cal BC 785 to 500, : cal BC 465 to 425	180414

No.5	なし	2590±30	-26.0	2570±30	交点：cal BC 790 1 σ ：cal BC 795 to 780 2 σ ：cal BC 805 to 770	180415
No.6	なし	2510±40	-26.0	2490±40	交点：cal BC 760, 635, 560 1 σ ：cal BC 775 to 525 2 σ ：cal BC 790 to 415	180420
No.7	なし	2460±30	-26.6	2430±30	交点：cal BC 500, 465, 425 1 σ ：cal BC 740 to 710, ：cal BC 535 to 410 2 σ ：cal BC 760 to 635, ：cal BC 560 to 405	180421

1) ^{14}C 年代測定値

試料の $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比から、単純に現在（1950年AD）から何年前かを計算した値。 ^{14}C の半減期は、国際慣例に従って5,568年を用いた。

2) $\delta^{13}\text{C}$ 測定値

試料の測定 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比を補正するための炭素安定同位体比（ $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ ）。この値は標準物質（PDB）の同位体比からの千分偏差（‰）で表す。

3) 補正 ^{14}C 年代値

$\delta^{13}\text{C}$ 測定値から試料の炭素の同位体分別を知り、 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ の測定値に補正値を加えた上で算出した年代。

4) 暦年代

過去の宇宙線強度の変動による大気中 ^{14}C 濃度の変動を補正することにより算出した年代（西暦）。補正には、年代既知の樹木年輪の ^{14}C の詳細な測定値、およびサンゴのU-Th年代と ^{14}C 年代の比較により作成された較正曲線を使用した。最新のデータベース（"INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration" Stuiver et al, 1998, Radiocarbon 40(3)）により、約19,000年BPまでの換算が可能となっている。ただし、10,000年BP以前のデータはまだ不完全であり、今後も改善される可能性がある。

暦年代の交点とは、補正 ^{14}C 年代値と暦年代較正曲線との交点の暦年代値を意味する。1 σ （68%確率）・2 σ （95%確率）は、補正 ^{14}C 年代値の偏差の幅を較正曲線に投影した暦年代の幅を示す。したがって、複数の交点が表記される場合や、複数の1 σ ・2 σ 値が表記される場合もある。

津島遺跡井戸内埋積物中の種実の種類

パリノ・サーヴェイ 株式会社

はじめに

津島遺跡は、旭川西岸の微高地上に立地する複合遺跡である。これまでの調査により、縄文時代、弥生時代、古墳時代、古代、中近世の遺構、遺物が確認されており、本遺跡における人間活動の状況が明らかにされつつある。

今回の調査区内では、古墳時代前期前半の井戸跡が数基確認されている。この井戸内埋積物中には、ウリ？の果皮とされる、当時の人間が利用したと考えられる植物遺体が含まれている。本報告では、井戸内埋積物の水洗選別によって得られた種実遺体の種類構成から、当時利用されていた植物の種類および周辺の植物相について検討を行う。

1. 試料

N区の井戸2第6層下部（土器群の間）と、O区の井戸1第8層より採取された土壌2点（各3000cc程度）について、種実分析を行う。N区井戸2には、現地調査にて拾い上げられたウリ？の果皮とされる植物遺体1点を含む。

2. 分析方法

200cc土壌試料を水に一晩液浸し、試料の泥化を促す。0.5mmの篩を通して水洗し残渣を集め、双眼実体顕微鏡下で観察し、同定可能な種実遺体等を抽出する。その形態的特徴を、現生標本および原色日本植物種子写真図鑑（石川，1994）、日本植物種子図鑑（中山ほか，2000）等と比較し、種類を同定・計数した。また、両試料とも別に2000ccを2.0mmの篩を通して水洗・観察し、200ccから得られなかった種類を拾い上げ、計数した。なお、200ccでも確認された種類は表中に＋（プラス）で示した。同定後の種実遺体等は、種類毎にビンに入れ、50％程度のエタノール溶液による液浸保存処理を施した。

3. 結果

結果を表1に示す。木本10種類、草本22種類の種実の他、不明種実、木の芽、樹皮、炭化材、不明炭化物（木材組織が認められない、種類・部位ともに不明である炭化物）、昆虫遺骸の破片や土器片などが検出された。検出された種実の種類構成は、N区は木本3種類、草本10種類に対し、O区は木本9種類、草本19種類と、種類数・個体数ともに多く検出された。

検出された種実の種類は、木本10種類（クリ、ケヤキ、カジノキ属、モモ、キイチゴ属、カラスザンショウ、アカメガシワ、ブドウ属、クマノミズキ、ニワトコ）は全て落葉広葉樹で針葉樹や常緑広葉樹を含まない。草本は、単子葉類5種類（イネ、アワーヒエ、エノコログサ属、イネ科、イボクサ）と、双子葉類17種類（カナムグラ、アサ、ギシギシ属、タデ属、アカザ科、ナデシコ科、キジムシロ属ーヘビイチゴ属ーオランダイチゴ属、カタバミ属、コミカンソウ属、ヒシ属、ヤブジラミ、メハジ

キ属、イヌコウジュ属、ナス科、メロン類、ヒョウタン類、タカサブロウ) が同定された。栽培植物は、モモ、イネ、アワ、アサ、メロン類、ヒョウタン類である。以下に、同定された種実遺体の形態的特徴等を、木本、草本の順に記す。

<木本>

- ・クリ (*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.) ブナ科クリ属

果実の破片が検出された。黒褐色。完形ならば三角状広卵形で、一側面は偏平で反対面はわずかに丸みがある。破片の大きさは15mm程度。果皮表面は平滑で、ごく浅く微細な縦筋がある。内面には内果皮(いわゆる渋皮)がある。着点は灰褐色で基部の全面を占め、ざらつく。基部に着点の一部が残る点を同定根拠とした。

- ・ケヤキ (*Zelkova serrata* (Thunb.) Makino) ニレ科ケヤキ属

果実が検出された。黒褐色、歪んだ心臓形で背面方向に湾曲する。径4mm程度。花柱が嘴状突起状に残る。基部に円形の臍があり、褐色の繊維が放射状に発達する。

- ・カジノキ属 (*Broussonetia*) クワ科

種子が検出された。黄～茶褐色、長方形状楕円形。一側面は狭倒卵形で、他方は稜になって薄い。長さ2.5mm、幅2mm程度。基部の突起を欠損する。表面には疣状の微細な隆起が散在する。

- ・モモ (*Prunus persica* Batsch) バラ科サクラ属

核(内果皮)の完形、破片が検出された。黒褐色、広楕円形でやや偏平。先端部はやや尖り、基部は切形で中央部に湾入した臍がある。長さ24mm、幅18mm、厚さ14.5mm程度。一方の側面に縫合線が発達し、縫合線に沿って半分に分かれた個体がみられる。内果皮は厚く硬く、表面は縦に流れる不規則な線状の窪みがあり、全体として粗いしわ状に見える。

- ・キイチゴ属 (*Rubus*) バラ科

核(内果皮)が検出された。淡黄褐色、半月形～三日月形。長さ1.5mm、幅1mm程度。腹面方向にやや湾曲する。表面には大きな凹みが分布し網目模様をなす。

- ・カラスザンショウ (*Fagara ailanthoides* (Sieb. et Zucc.) Engler) ミカン科イヌザンショウ属

核(内果皮)が検出された。黒褐色、非対称広倒卵形でやや偏平。長さ3.5mm、幅4.3mm程度。片方の側面に核の長さの半分以上に達する深く広い臍がある。内果皮は厚く硬く、表面にやや深く大きな網目模様がある。

- ・アカメガシワ (*Mallotus japonicus* (Thunb.) Mueller-Arg.) トウダイグサ科アカメガシワ属

種子の破片が検出された。黒色、完形ならば歪な球形で径4mm程度か。基部にはY字形の稜があり、稜に沿って割れた1/3部分である。種皮は硬く、表面に瘤状突起を密布しゴツゴツしている。

- ・ブドウ属 (*Vitis*) ブドウ科

種子が検出された。灰褐色、広倒卵形、側面観は半広倒卵形。基部の臍の方に向かって細くなり、嘴状に尖る。長さ3.5mm、径3mm程度。背面にさじ状の凹みがある。腹面には中央に縦筋が走り、その両脇には楕円形の深く窪んだ孔が存在する。種皮は柵状で薄く硬い。

- ・クマノミズキ (*Cornus macrophylla* Wallich) ミズキ科ミズキ属

核(内果皮)が検出された。淡褐色、偏球形で径3mm程度。基部に小さく浅い凹みがあり、表面には一周する1本のやや幅広く浅い縦溝と、細く浅い縦溝数本が走る。

- ・ニワトコ (*Sambucus racemosa* L. subsp. *Sieboldiana* (Miq.) Hara) スイカズラ科ニワトコ属

核（内果皮）が検出された。淡～黄褐色、広倒卵形で偏平。基部はやや尖る。長さ2.5mm、幅1.5mm程度。背面は丸みがあり、腹面の中央は縦方向の鈍稜をなす。腹面下端には小さな孔がある。内果皮はやや硬く、表面には横皺状模様が発達する。

<草本>

・イネ (*Oryza sativa* L.) イネ科イネ属

果実（稲穂）と炭化した胚乳が同定された。果実は淡～茶褐色、長楕円形でやや偏平。長さ6～8mm、幅3～4mm、厚さ2mm程度。基部に果実序柄がある。表面は、特徴的な顆粒状突起が規則的に縦列する。胚乳は黒色、長楕円形でやや偏平。長さ4～5.5mm、幅2.5mm、厚さ1.5mm程度。一端に胚が脱落した凹部があり、両面はやや平滑で2～3本の縦溝がある。胚乳表面に穎が付着している個体が見られる。

・アワーヒエ (*Setaria itarica* Beauv. – *Echinochloa crus-galli* Beauv.) イネ科

炭化した胚乳が検出された。焼け膨れており遺存状態が悪い。黒色、広楕円形でやや偏平。長さ1.5mm、幅1mm程度。背面は丸みがあり、腹面は平らで基部に胚の凹みがある。表面には一部果実（穎）が残存する。

・エノコログサ属 (*Setaria*) イネ科

果実が検出された。淡褐色、半偏球形で長さ2.5mm、径1.5mm程度。穎は薄く柔らかくて弾力があり、表面には横方向に長い細胞が密に配列する。

・イネ科 (Gramineae)

果実と炭化した胚乳が検出された。果実は淡褐色、狭卵形でやや偏平。長さ2～3mm、幅0.8mm程度。穎は薄く柔らかくて弾力がある。表面には微細な網目模様が縦列する。胚乳は焼け膨れており遺存状態が悪い。黒色、広楕円形でやや偏平。径1mm程度。背面は丸みがあり、腹面は平らで基部に胚の凹みがある。上述のアワーヒエに似るが、遺存状態が悪いためイネ科にとどめた。

・イボクサ (*Aneilema keisak* Hassk.) ツユクサ科イボクサ属

種子が検出された。赤みがかかった灰褐色で半横長楕円形。径2.5mm程度。背面は丸みがあり、腹面は平らである。臍は線形で腹面の正中線上にあり、胚は一側面の浅い円形の凹みに存在する。種皮は柔らかく、表面は円形の小孔が多数存在する。

・カナムグラ (*Humulus japonicus* Sieb. et Zucc.) クワ科カラハナソウ属

種子が検出された。灰～黒褐色で側面観は円形、上面観は両凸レンズ形。径4mm、厚さ1mm程度。頂部はやや尖り、基部には淡黄褐色でハート形の臍点がある。縦方向に一周する稜に沿って半分に割れている個体が見られる。種皮は薄く、表面はざらつく。

・アサ (*Cannabis sativa* L.) クワ科アサ属

種子が検出された。灰褐色、三角状広倒卵状楕円形。長さ4.5mm、幅3mm、厚さ2.5mm程度。基部には大きな楕円形の臍点がある。縦方向に一周する稜に沿って半分に割れている個体が見られる。種皮表面には葉脈状網目模様がある。

・ギシギシ属 (*Rumex*) タデ科

果実が検出された。暗褐色、果実は卵状三稜形。径2.5mm程度。両端は急に尖り、稜は鋭い。果実を覆う花被は心円形で径5mm程度。大きな網目模様の脈があり、縁に歯牙がある。脈の基部には楕円体のコブ状突起がつく。

・タデ属 (*Polygonum*) タデ科

果実が検出された。黒色、広卵状円形で偏平。径2mm程度。先端はやや尖る。表面には微細な網目模様が発達する。

・アカザ科 (*Chenopodiaceae*)

種子が検出された。黒色、円盤状でやや偏平。径1mm程度。基部は凹み、臍がある。種皮表面には臍を取り囲むように微細な網目模様が同心円状に配列し、光沢が強い。

・ナデシコ科 (*Caryophyllaceae*)

種子が検出された。茶褐色、腎臓状円形でやや偏平。径1mm程度。基部は凹み、臍がある。種皮は薄く柔らかい。種皮表面には、臍を取り囲むように瘤状突起が同心円状に配列する。

・キジムシロ属—ヘビイチゴ属—オランダイチゴ属 (*Potentilla—Duchesnea—Fragaria*) パラ科

核(内果皮)が検出された。淡灰褐色、腎形でやや偏平。長さ0.9mm、幅0.5mm程度。内果皮は厚く硬く、表面は微細な網目模様がありざらつく。

・カタバミ属 (*Oxalis*) カタバミ科

種子が検出された。黒灰色、卵形で偏平。長さ1.5mm、幅1.2mm程度。先端は尖る。種皮は薄く柔らかく、縦方向に裂けやすい。表面には4~7列の肋骨状横隆条が並び、わらじ状にみえる。

・コミカンソウ属 (*Phyllanthus*) トウダイグサ科

種子が検出された。淡~茶褐色、半広卵状円形。径1mm程度。背面は丸みを帯び、腹面の正中線は稜状。正中線の一端に臍がある。

・ヒシ属 (*Trapa*) ヒシ科

果実の破片が検出された。茶褐色。完形ならば倒三角形でやや偏平。中央部には円柱状の子房突起が突出し、その中心に短い刺がある。両肩の刺からは基部まで延びる翼状隆条がある。破片の大きさ20mm程度と比較的大型であるため、小型のヒメビシ (*Trapa incisa* Sieb. et Zucc.) とは区別される。果皮は厚く木質。二刺性または四刺性の区別が不可能であるため、ヒシ属とするにとどめた。

・ヤブジラミ (*Torilis japonica* (Houtt) DC.) セリ科ヤブジラミ属

果実が検出された。灰褐色、狭卵形でやや偏平。長さ3.5mm、幅2mm程度。先端は尖る。背面に3個の隆条が配列し、それらの間に油管が配列する。表面には鉤状の剛毛が密生する。

・メハジキ属 (*Leonurus japonicus* Houtt.) シソ科

果実が検出された。淡灰褐色で広倒被針状六稜形。長さ2mm、幅1mm程度。背面は丸みがあり、腹面の正中線上と左右の縁は稜をなす。

・イヌコウジュ属 (*Mosla*) シソ科

果実が検出された。茶褐色、卵円形。径1.2mm程度。下端は舌状にわずかに突出する。果皮はやや厚く硬く、表面には大きく不規則な網目模様がある。

・ナス科 (*Solanaceae*)

種子が検出された。淡褐色、歪な腎臓形で偏平。径1.5mm程度。種皮は薄く柔らかい。側面のくびれた部分に臍があり、表面は臍を中心として同心円状に星型網目模様が発達する。網目模様は微細で網目を構成する壁の幅は太くしっかりしている。

・メロン類 (*Cucumis melo* L.) ウリ科キュウリ属

種子が検出された。淡灰褐色、狭倒皮針形で偏平。長さ7~8.5mm、幅3~4mm程度。基部に倒

「ハ」の字形の凹みがある。表面は比較的平滑で、縦長の細胞が密に配列する。藤下（1984）の基準によると、検出されたメロン類には、中粒のマクワ・シロウリ型（長さ6.1～8.0mm）や、大粒のモルディカメロン型（長さ8.1mm以上）などが混在する。

・ヒョウタン類 (*Lagenaria siceraria* Standl.) ウリ科ヒョウタン属

果実の破片が検出された。果実表面は茶褐色、平滑で光沢があり、内面は淡褐色、スポンジ状で光沢はない。径10cm以上か。果皮の厚さは4.5mm、最大破片の大きさ40mmで、径10mm程度の円形の臍と発芽孔がみられる。

・タカサブロウ (*Eclipta prostrata* (L.) L.) キク科

果実が検出された。灰～茶褐色、倒三角形でやや扁平。長さ2.5mm、幅1.5mm程度。両端は切形、両側は翼状。背腹両面は瘤状突起が分布する。

4. 考察

(1) 植物利用状況

種実分析の結果、有用植物が検出された。有用植物には、大陸などから持ち込まれた栽培植物と、自生していたと考えられる種類とがある。渡来した栽培植物では、モモ、イネ、アワ、アサ、メロン類、ヒョウタン類が挙げられる。モモは、中国からの渡来種とされ、観賞用の他、果実や核の中にある仁（種子）などが食用、薬用等に広く利用される。穀類のイネ、アワーヒエは、稲粃を除いて完全に炭化した状態であったため、何らかの理由により火の影響を受けたものと考えられる。アサは繊維が衣料や縄用に、果実が食用や油料に利用可能である。メロン類は果実が食用に、ヒョウタン類は果実が容器や食用に利用される。これらの栽培植物が破片や炭化の状態で見つかった状況を考慮すると、古墳時代前期前半の津島遺跡近辺で栽培もしくは持ち込まれ利用されており、それらが生活残渣として井戸に投棄されていたことなどが考えられる。

自生していたと考えられる種類で有用な種実では、クリは子葉が生食・長期保存が可能で収量も多いことから、古くから里山で保護されてきた種類である。カジノキ属、ブドウ属、ニワトコは、果実が多汁で生食が可能である。ヒシ属は、子葉が食用可能である。さらに、種実以外の部位の利用として、カジノキ属の樹皮は紙や布に利用可能である。アカザ科、ナス科、キク科などの一部には、野生品の採取、在来種の栽培、渡来種の栽培などの利用形態が考えられるが（青葉，1991）、今後種類の細分化が可能になれば、詳細な検討が可能となる。

本遺跡では、陸上競技場調査区1区の見取図の古墳時代中期の井戸6下層からモモ、アサ、メロン類、ヒョウタン類が確認されており（古環境研究所，2003）、これら栽培植物の果実等が古墳時代前期前半から中期にかけて利用されていたことが窺える。今回検出された種実の種類とも調和的である。

(2) 周辺植生

検出された種実の種類構成をみると、調査区内および近辺の植生環境は、草本類を主体とした景観が推測される。種実遺体から推定される当時の植物相は、イネ科（エノコログサ属など）、カナムグサ属、ギシギシ属、タデ属、アカザ科、ナデシコ科、キジムシロ属—ヘビイチゴ属—オランダイチゴ属、カタバミ属、コミカンソウ属、ヤブジラミ、メハジキ属、イヌコウジュ属が挙げられる。これらの多くは人里近くに開けた草地を形成するいわゆる人里植物に属する種類で、調査区付近に生育していたものとみられる。また、イボクサ、ヒシ属、タカサブロウなどの湿生植物は、水田やそれに伴う水湿

地に普通にみられる水田雑草である。稲朶が多く検出されていることから、当時の遺跡周辺で行われていたとみられる水田からもたらされたものの可能性がある。次に木本植物について見てみると、落葉高木のケヤキは、河畔林を構成する要素である。また落葉高木のクリ、カジノキ属、アカメガシワ、クマノミズキ、落葉低木のキイチゴ属、カラスザンショウ、ニワトコ、落葉籐本のブドウ属は、山野に普通に認められる種類であり、伐採跡地に先駆的に生育する二次林要素の植物である。これらのことから、本遺跡の立地を考慮すると、これらの樹木が本遺跡などの人里近くに生育していたものと思われる。

引用文献

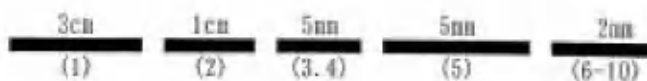
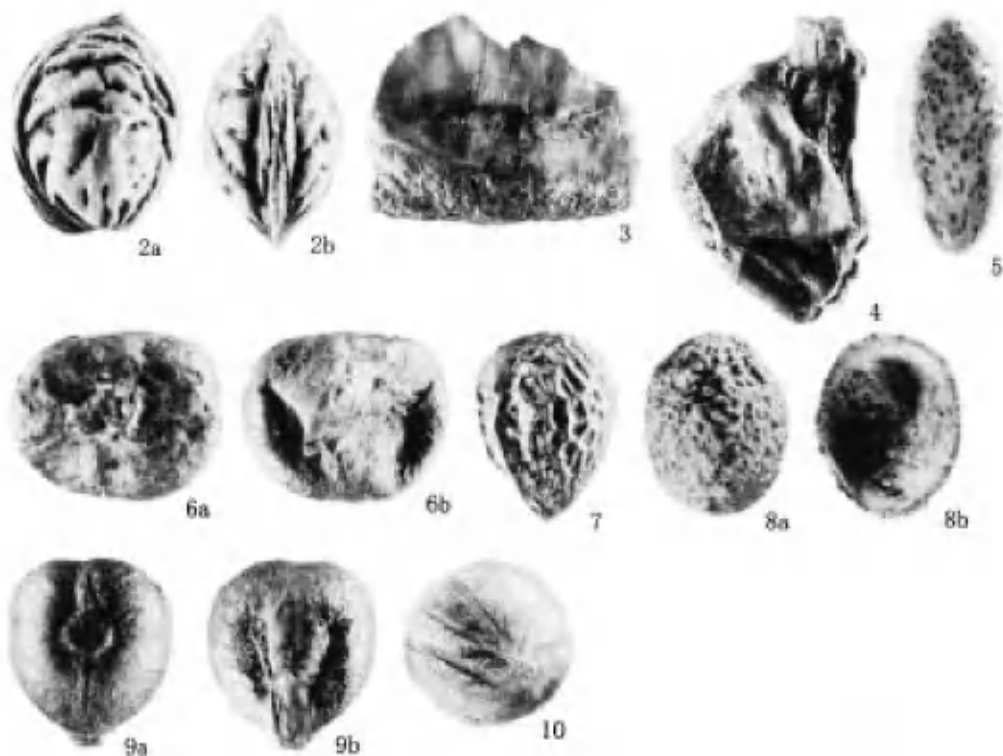
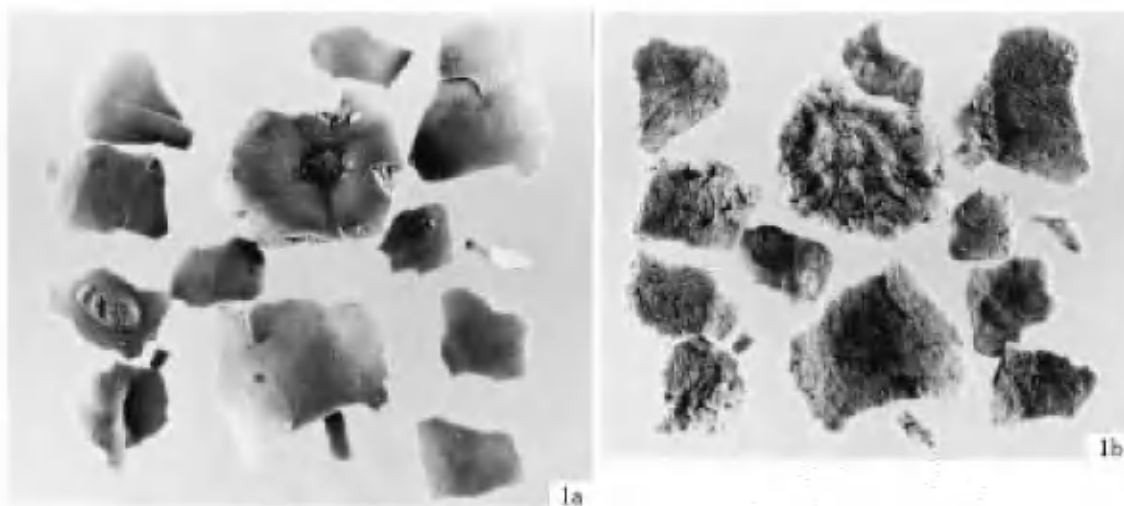
- 青葉 高（1991）野菜の日本史. 317p, 八坂書房.
- 藤下典之（1984）出土遺体よりみたウリ科植物の種類と変遷とその利用法. 「古文化財の自然科学的研究」, 古文化財編集委員会編, p.638-654. 同朋舎.
- 石川茂雄（1994）原色日本植物種子写真図鑑, 328p., 石川茂雄図鑑刊行委員会.
- 古環境研究所（2003）津島遺跡出土の種実同定. 「津島遺跡4 岡山県陸上競技場改修に伴う発掘調査, 岡山県埋蔵文化財発掘調査報告173」, 岡山県古代吉備文化財センター編, 岡山県教育委員会, p.549-552.
- 中山至大・井之口希秀・南谷忠志（2000）日本植物種子図鑑, 642p., 東北大学出版会.

表 1 井戸内埋積物の種実分析結果

分類名	学名	部位	状態	試料名		N区		0区	
				土壌分析量	篩目径	井戸2	第6層下部	井戸1	第8層
木		果実							
ケヤキ	<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc.	果実							
カジノキ属	<i>Zolchora serrata</i> (Thunb.) Makino	種子							
モモ	<i>Broussonetia</i>	核	壳形 破片						
	<i>Prunus patsica</i> Batsch								
キイチゴ属	<i>Rubus</i>								
カラスガシヨウ	<i>Fagaria ailanthoides</i> (Sieb. et Zucc.) Engler	種子							
アカメガシワ	<i>Mallotus japonicus</i> (Thunb.) Muelller-Arg.	種子							
アトウ属	<i>Vitis</i>	種子							
クマノミズキ	<i>Cornus macrophylla</i> Wallich	種子							
ニワトコ	<i>Sambucus racemosa</i> L. subsp. Sieboldiana (Miq.) Hara	核							
草本									
イネ	<i>Oryza sativa</i> L.	果実		56					多量
アワ-ヒエ	<i>Setaria itarica</i> Beauv. - <i>Echinochloa crus-galli</i> Beauv.	胚乳	炭化						1
エノコログサ属	<i>Setaria</i>	胚乳	炭化						1
イネ科	<i>Gramineae</i>	果実		1					17
		果実		2					62
イボクサ	<i>Aneilema keisak</i> Hassk.	胚乳	炭化						1
カナムグラ	<i>Humulus japonicus</i> Sieb et zucc.	種子							1
アサ	<i>Cannabis sativa</i> L.	種子							1
キンギン属	<i>Rumex</i>	種子							3
タデ属	<i>Polygonum</i>	果実		1					3
アカサ科	<i>Chenopodiaceae</i>	果実		34					171
ナデシコ科	<i>Caryophyllaceae</i>	種子		2					10
キジムシロ属	<i>Potentilla -Duchesnea -Fragaria</i>	核							4
カタバミ属	<i>Oxalis</i>	種子							8
コムカシソウ属	<i>Phyllanthus</i>	種子							29
ヒシ属	<i>Trapa</i>	果実							4
ヤブジラミ	<i>Toriiis japonica</i> (Houtt.) DC.	果実							2
メハシキ属	<i>Leonurus japonicus</i> Houtt.	果実							18
イヌコウジュ属	<i>Mosla</i>	果実							3
ナス科	<i>Solanaceae</i>	種子							3
メロン類	<i>Cucumis melo</i> L.	種子							1
ヒヨウタン類	<i>Lagenaria siceraria</i> Standl.	種子							1
タカサブロウ	<i>Eclipta prostrata</i> (L.) L.	果実		1					1
不明種実				4					8
木の芽									2
樹皮									1
炭化材									破片
不明炭化物									破片
昆虫遺骸									破片
土器片				2					11

表中の数字は、堆積物200ccに含まれる種類の個体数と、堆積物2000ccでは200ccで確認されない種類の個体数を示す。「+」は200ccでも確認された種類を示す。「多」は200個以上の検出を示し、「破片」は破片を含み個体数推定が困難である種類を示す。

図版1 種実遺体(1)



- | | |
|------------------------|-----------------------|
| 1 ヒョウタン類 果実破片 (N区 井戸2) | 2 モモ 核 (O区 井戸1) |
| 3 クリ 果実破片 (O区 井戸1) | 4 ヒシ属 果実破片 (O区 井戸1) |
| 5 メロン類 種子 (O区 井戸1) | 6 ケヤキ 果実 (O区 井戸1) |
| 7 カラスザンショウ 核 (O区 井戸1) | 8 アカメガシワ 種子 (O区 井戸1) |
| 9 ブドウ属 種子 (O区 井戸1) | 10 クマノミズキ 種子 (O区 井戸1) |

図版1 種実遺体 (2)



- | | | |
|--------------------------------------|----------------------|----------------------|
| 11 イネ 果実 (O区 井戸1) | 12 イネ 胚乳 (O区 井戸1) | 13 カナムグラ 種子 (O区 井戸1) |
| 14 アサ 種子 (O区 井戸1) | 15 ギンギシ属 果実 (O区 井戸1) | 16 カジノキ属 種子 (O区 井戸1) |
| 17 キイチゴ属 核 (O区 井戸1) | 18 ニワトコ 核 (O区 井戸1) | 19 アワーヒエ 胚乳 (O区 井戸1) |
| 20 エノコログサ属 果実 (O区 井戸1) | 21 イネ科 果実 (O区 井戸1) | 22 イネ科 胚乳 (N区 井戸2) |
| 23 イネ科 胚乳 (N区 井戸2) | 24 イボクサ 種子 (O区 井戸1) | 25 ギンギシ属 果実 (O区 井戸1) |
| 26 タデ属 果実 (N区 井戸2) | 27 アカザ科 種子 (O区 井戸1) | 28 ナデシコ科 種子 (O区 井戸1) |
| 29 キジムシロ属-ヘビイチゴ属-オランダイチゴ属 核 (O区 井戸1) | 31 カタバミ属 種子 (O区 井戸1) | 32 ヤブジラミ 果実 (O区 井戸1) |
| 30 コミカンソウ属 種子 (O区 井戸1) | 34 メハジキ属 果実 (O区 井戸1) | 35 ナス科 種子 (O区 井戸1) |
| 33 イヌコウジュ属 果実 (N区 井戸2) | | |
| 36 タカサブロウ 果実 (O区 井戸1) | | |

津島遺跡出土土器の胎土分析

岡山理科大学自然科学研究所 白石 純

1. 分析目的

これまでの津島遺跡出土土器の胎土分析では、以下のことが明らかになった。

- (1) 武道館建設当初予定地と北池・南池地点(1)の弥生時代前期の「松菊型土器」が遺跡周辺の粘土と類似していた。また突帯文土器には複数の胎土があること。
- (2) 陸上競技場改修に伴う調査地区の河道1(弥生時代後期～古墳時代前期)(2)出土土器の分析では、これらの土器も遺跡周辺で制作されたことが推定された。
- (3) 南池T2土器溜まり、T57の26層などから出土した縄文時代晩期から弥生時代前期(3)の胎土分析では、時期が新しくなると胎土にまとまりがあることが推測された。

以上のように、津島遺跡内出土の上器は、遺跡周辺の粘土を使用し制作され、縄文晩期から弥生前期の胎土には、ばらつきがあるが弥生中期から古墳前期の土器は胎土的にまとまる傾向がみられることなどが明らかになった。

今回の分析では、同遺跡が立地する旭川下流域以外のほかの流域に立地する遺跡と比較し、各流域、地域で違いがあるかどうか検討した。比較した各地の土器は、足守川下流域の、窪木薬師遺跡、津寺遺跡、足守加茂A・B遺跡、矢部南向遺跡と旭川下流域の百間川原尾島遺跡である。

分析方法は、蛍光X線分析法により胎土中の成分(元素)の量を測定し、胎土の差異について検討した。

2. 分析結果

今回分析した土器は、表1～2に示した体育館調査区から出土した弥生時代前期から古墳時代前期にかけての壺・甕・高杯の合計123点である。

【蛍光X線分析法による胎土分析】

この分析で測定した元素は、主要元素であるSi、Ti、Al、Fe、Mn、Mg、Ca、Na、K、Pと微量元素のRb、Sr、Zrの13元素である。このうち、現在までの分析で胎土に違いがみられる元素としてSi、Ti、Al、Fe、Ca、K、Rb、Srなどの元素が挙げられる。ここでは、今回違いがみられたK、Caの元素を用いてX-Y散布図を作成し検討した。

その結果、第1図K-Ca散布図では、弥生時代前期・中期・後期、古墳時代前期と時期別の胎土の違いについて検討した。すると、弥生時代前期・中期・後期と古墳時代前期の一部が分布範囲が重なり胎土が同じであった。第2図K-Ca散布図では、古墳時代前期の吉備型甕と、その他の壺、高杯および搬入土器の胎土を比較した。すると、吉備型甕は、二つの胎土に分類でき、搬入土器のうち、10の四国? (讃岐系)の土器のみが異なり、61、62、67も讃岐系土器の分布範囲に分布した。そして、これらの土器は現在までの分析データで検討すると、讃岐地方の下川津B類土器の胎土に類似している。

第3図K-Ca散布図では、足守川下流域の窪木薬師遺跡、津寺遺跡、足守川加茂A遺跡、矢部南向

遺跡と百間川原尾島遺跡から出土した弥生時代後期から古墳時代前期の土器と津島遺跡とを比較した。その結果、足守川と旭川流域の遺跡出土土器のあいだで、胎土に違いがあるかどうかでは、水系ごとで胎土にほとんど違いはみられなかった。ただ、津島遺跡、百間川原尾島遺跡の土器は、Ca量が約1.8%以下に分布する傾向がみられた。

第4図K-Ca散布図では、各遺跡出の吉備型甕の胎土を比較した。比較した遺跡は窪木薬師、津寺遺跡、矢部南向遺跡、と津島遺跡、百間川原尾島遺跡である。その結果、足守川下流域の遺跡出土の吉備型甕はほぼ一つにまとまるが、津島および原尾島遺跡の土器は、2種類の胎土に分類できた。

3. まとめ

これまでに津島遺跡の北池・南池、河道1などから出土した縄文晩期から弥生後期までの土器について胎土分析を実施してきたが、今回の分析では、今までに分析した津島遺跡出土の土器を総合的に分析、解析することで、以下のことがわかり、また今後の課題および問題点なども明らかになってきた。以下、現在までの分析データから推定されたことについて述べ、まとめとしたい。

- (1) 縄文時代晩期から弥生時代、古墳時代の津島遺跡出土土器を分析した結果、縄文晩期の土器胎土にはバラツキがみられたが、弥生時代～古墳時代の土器にはバラツキが少なく、胎土的にまとまる傾向にあった。また、これらの土器は、津島遺跡周辺で採取した粘土と比較したところ、分析値、胎土中の砂粒観察などから、遺跡周辺で制作されていることが推定された。
- (2) 足守川下流域および旭川下流域の弥生・古墳時代の土器を比較したが、各遺跡・流域で胎土が異なることはなかった。ただ、足守川流域の土器にはCa量が多く含まれ、逆に旭川下流域の土器はCa量が少ない傾向がみられた。
- (3) 古墳時代前期の吉備型甕の胎土分析では、足守川下流域（窪木薬師・津寺・加茂A）の遺跡で出土する甕は、Ca量が約1.5%～3.0%付近に分布するが、旭川下流域（津島・原尾島）の甕は、Ca量が約1.5%以下、K量が約2.0%以上に分布するものがあり、吉備型甕に2種類の胎土があることが推定された。この吉備型甕には、砂粒に角閃石が含まれており、特徴がみられる胎土である。しかし、前述したCa量が少ない甕には角閃石がみられず、胎土が異なっていた。以上のことから、津島・原尾島遺跡から出土する吉備型甕には複数の胎土がある。なお、角閃石を含む甕は、現在までの各遺跡の分析データから検討すると足守川下流域の弥生後期の土器にも多く観察されることから、同流域で生産されたことが推測される。

このように、継続的に津島遺跡の縄文晩期から古墳時代前期にかけての土器を分析させて頂いたが、まだまだ不明な点が多く、課題ばかりである。今後も試料の蓄積を行うことで、新たな結果が得られると考えられる。

この分析を実施する機会を与えていただいた、島崎 東、岡本泰典、團 奈歩の各氏および岡山県古代吉備文化財センターの職員に方々にはいろいろお世話になった。木筆ではありますが記して感謝致します。

註)

- (1)白石 純「武道館建設当初予定地と北池・南池地点出土土器の胎土分析」『津島遺跡3 北池・南池地点の発掘調査』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告160 岡山県教育委員会 2001

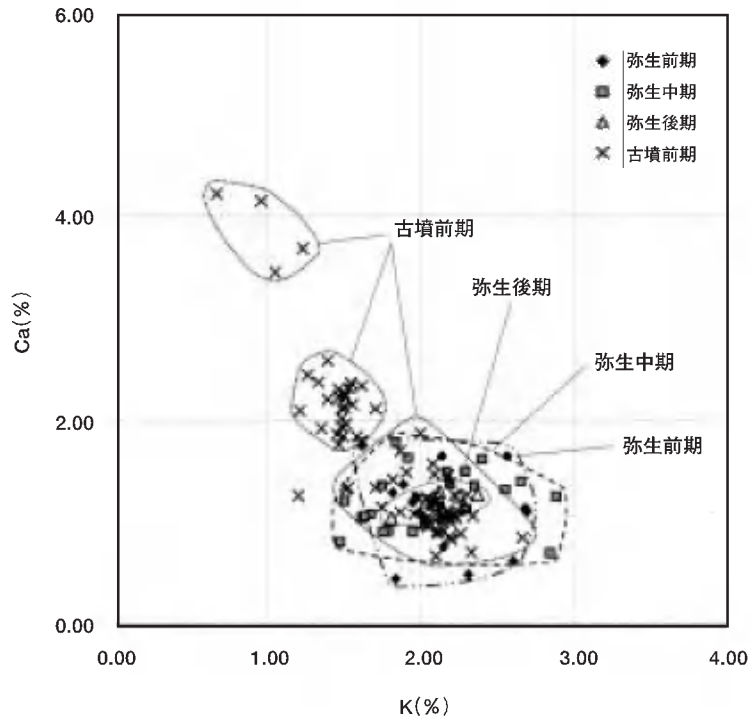
(2)白石 純「津島遺跡出土土器の胎土分析 ―文様のある特殊な壺、器台の分析―」『津島遺跡4 岡山県陸上競技場改修に伴う発掘調査』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告173 岡山県教育委員会 2003

(3)白石 純「津島遺跡出土土器の胎土分析 ―時期・地点別による胎土の比較―」『津島遺跡5 岡山県総合グランド第二次・第三次確認調査』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告181 岡山県教育委員会 2004

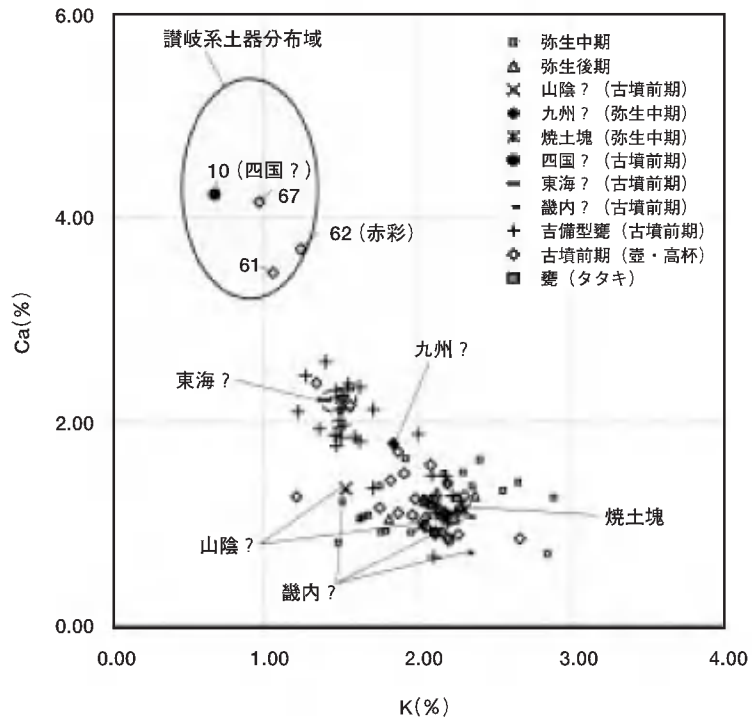
第1表 津島遺跡体育館調査区胎土分析一覧表(%) ただし、Rb・Sr・Zrはppm

番 号	掲載 番号	器種	時期	出土地点	Si	Ti	Al	Fe	Mn	Mg	Ca	Na	K	P	Rb	Sr	Zr	備考
1	181	壺	弥生中期	O区 包含層 1.9~2.0m	67.81	0.75	17.99	4.05	0.08	1.79	1.79	3.15	1.84	0.57	148	249	241	九州?
2	159	甕	弥生中期	K S区(西) 溝11	65.04	0.61	20.49	3.93	0.09	1.63	1.51	1.73	2.29	2.29	279	286	289	
3	197	高杯	弥生中期	O区 包含層 1.9~2.0m	65.10	0.78	18.96	4.41	0.07	2.33	0.92	4.50	1.95	0.61	205	192	222	
4	93	壺	弥生中期	O区 土壌7	64.34	0.50	19.90	4.87	0.14	1.67	1.37	2.68	2.35	1.75	183	311	423	
5	165	壺	弥生中期	O区 中央部 1.7~1.8m	63.32	0.72	19.18	6.60	0.15	1.84	1.63	1.87	2.40	1.94	226	258	262	
6	95	壺	弥生中期	O区 土壌7	65.06	0.53	18.24	7.52	0.12	1.66	0.71	2.14	2.84	0.91	384	172	268	
7	116	甕	弥生中期	M区西W 土壌12	66.92	1.05	17.56	7.54	0.12	1.79	0.93	1.73	1.79	0.36	165	178	310	
8	344	鼓形器台	古墳前期	K S区(西) 井戸3	67.11	0.71	18.02	5.37	0.17	1.75	1.00	2.10	2.02	1.41	184	236	319	山陰?
9	303	甕	古墳前期	K S区(西) 井戸3	65.85	0.88	19.00	5.02	0.14	1.70	1.35	1.87	1.53	2.37	155	285	314	山陰?
10	300	甕	古墳前期	K S区(西) 井戸3	53.59	1.50	21.30	13.26	0.30	2.52	4.22	1.60	0.68	0.86	72	281	130	四国?
11		甕	古墳前期	K S区(西) 井戸3	63.59	0.81	20.59	3.93	0.17	1.89	2.12	2.92	1.71	1.88	137	493	270	ポウフラ甕
12		甕	古墳前期	K S区(西) 井戸3	61.99	0.94	21.24	7.03	0.14	1.97	1.93	2.56	1.36	0.66	107	354	270	ポウフラ甕
13		甕	古墳前期	K S区(西) 井戸3	60.97	0.79	20.90	5.96	0.20	1.92	2.37	2.51	1.55	2.30	151	470	277	ポウフラ甕
14	267	壺	古墳前期	K S区(西) 井戸3 土器1	61.45	0.80	21.28	6.39	0.18	2.03	2.38	2.26	1.34	1.55	110	447	230	
15			弥生前期	O区北端部 前期黒色土	70.14	0.88	17.85	2.26	0.05	1.79	1.11	2.11	2.69	0.91	265	154	385	
16			弥生前期	O区北端部 前期黒色土	68.73	0.69	19.53	4.10	0.04	1.76	0.50	2.09	2.31	0.04	244	109	345	
17			弥生前期	O区北端部 前期黒色土	63.84	0.76	17.59	7.84	0.11	1.85	1.30	2.93	1.82	1.78	168	242	325	
18			弥生前期	O区北端部 前期黒色土	71.60	0.87	17.10	4.08	0.04	1.68	0.46	1.92	1.84	0.09	135	112	550	
19			弥生前期	O区北端部 前期黒色土	64.05	1.59	18.46	7.10	0.10	1.90	1.66	1.86	2.14	0.88	155	233	262	
20			弥生前期	O区北端部 前期黒色土	64.65	0.77	18.51	7.70	0.11	1.79	1.76	2.03	1.62	0.90	133	218	297	
21			弥生前期	O区北端部 前期黒色土	70.40	0.64	16.72	3.16	0.06	1.73	0.77	2.59	2.15	1.56	159	128	314	
22			弥生前期	O区北端部 前期黒色土	70.65	0.60	18.05	2.51	0.02	1.80	0.63	2.87	2.60	0.08	255	109	346	
23			弥生前期	O区北端部 前期黒色土	68.84	0.80	16.91	4.14	0.07	1.82	1.11	2.41	1.99	1.54	191	209	506	
24			弥生前期	O区北端部 前期黒色土	62.22	0.60	19.63	8.51	0.13	1.93	1.26	2.12	1.97	1.39	222	215	319	
25		壺	弥生前期	O区北端部 前期黒色土	70.42	0.82	15.98	5.19	0.07	1.67	1.03	1.91	2.12	0.56	187	227	458	
26		壺	弥生前期	O区北端部 前期黒色土	70.12	0.88	16.29	3.90	0.07	1.78	1.38	2.37	1.89	1.05	130	249	479	
27		甕	弥生前期	O区北端部 前期黒色土	66.97	0.68	18.99	2.75	0.07	1.89	1.66	2.58	2.56	1.53	185	353	311	
28			弥生前期	O区北端部 前期黒色土	66.49	0.70	20.19	3.93	0.07	1.82	1.05	2.56	2.03	0.85	248	141	325	
29		壺	弥生前期	O区北端部 前期黒色土	65.37	0.98	19.15	6.29	0.17	1.96	1.21	2.68	1.95	0.05	204	208	313	
30			弥生前期	O区北端部 前期黒色土	68.42	0.79	18.73	2.68	0.06	1.80	1.15	1.87	2.68	1.60	251	164	427	
31		甕	弥生中期	O区 土壌7	62.03	0.65	18.06	8.28	0.17	1.92	1.64	2.15	1.92	2.63	148	412	389	
32		壺	弥生中期	O区 土壌7	64.89	0.95	19.88	4.76	0.10	1.85	1.09	2.53	1.68	2.02	153	277	316	
33			弥生中期	O区 土壌7	66.59	0.52	18.74	3.78	0.06	1.68	1.33	2.53	2.55	1.70	227	309	319	
34		甕	弥生中期	O区 土壌7	65.55	0.51	18.29	5.59	0.13	1.82	1.50	1.73	2.17	2.20	187	381	248	
35			弥生中期	O区 土壌7	65.89	0.51	19.06	3.14	0.10	1.83	1.26	2.85	2.88	2.04	410	293	306	
36		甕	弥生中期	O区 土壌7	67.14	0.58	19.50	2.33	0.11	1.80	1.41	2.09	2.65	1.92	290	313	297	
37		甕	弥生中期	O区 土壌7	64.87	0.98	18.62	4.73	0.15	1.80	1.39	2.76	2.19	2.23	225	304	255	
38		甕	弥生中期	K S区(西) 土壌14	65.04	0.70	20.20	4.44	0.09	1.85	1.37	2.17	1.75	2.09	157	272	630	
39			弥生中期	K S区(西) 土壌14	64.97	0.95	18.01	5.33	0.05	2.34	0.92	4.20	1.76	1.30	142	198	290	
40		甕	弥生中期	K S区(西) 土壌14	66.59	0.88	17.79	5.76	0.08	1.93	1.22	2.21	1.51	1.73	156	255	363	
41			弥生中期	K S区(西) 土壌14	66.80	0.66	19.65	3.26	0.06	1.78	0.99	2.50	2.03	2.04	301	195	256	
42		高杯	弥生中期	K S区(西) 土壌14	64.82	0.92	16.08	8.22	0.13	1.78	1.07	2.65	1.64	2.37	140	270	307	
43		甕	弥生中期	K S区(西) 土壌14	68.12	1.13	16.19	6.57	0.09	1.80	1.05	1.66	1.62	1.49	146	283	330	
44		焼土塊	弥生中期	K S区(西) 土壌14	62.04	0.99	18.82	9.18	0.22	2.00	1.14	2.13	2.30	0.87	214	231	303	
45		甕	弥生後期	L区西 土器溜まり1 P-31	66.95	0.88	18.03	6.53	0.08	1.90	1.27	1.41	2.25	0.47	223	222	293	
46			弥生後期	L区西 土器溜まり1 P-32	67.88	1.08	19.47	2.69	0.05	1.97	1.28	2.43	2.37	0.57	200	214	305	
47			弥生後期	L区西 土器溜まり1 P-33	64.71	1.02	18.89	5.60	0.07	1.98	1.25	3.57	2.08	0.63	204	213	282	
48			弥生後期	L区西 土器溜まり1 P-34	65.73	0.90	17.73	7.17	0.12	1.95	1.26	2.54	2.11	0.29	230	218	257	
49	212		弥生後期	L区西 土器溜まり1 P-36	63.85	1.02	18.87	7.09	0.11	2.09	1.19	2.87	2.08	0.64	197	224	274	
50	230	甕	弥生後期	L区西 土器溜まり1 P-37	65.10	1.15	20.22	5.05	0.05	1.77	1.05	2.68	1.81	0.96	108	199	327	
51		壺	弥生後期	L区西 土器溜まり1 P-38	64.44	1.00	19.12	6.17	0.07	1.94	1.15	2.92	2.14	0.85	214	221	282	
52			弥生後期	L区西 土器溜まり1 P-39	65.42	1.03	19.01	5.70	0.07	1.94	1.18	2.52	2.28	0.65	191	218	270	

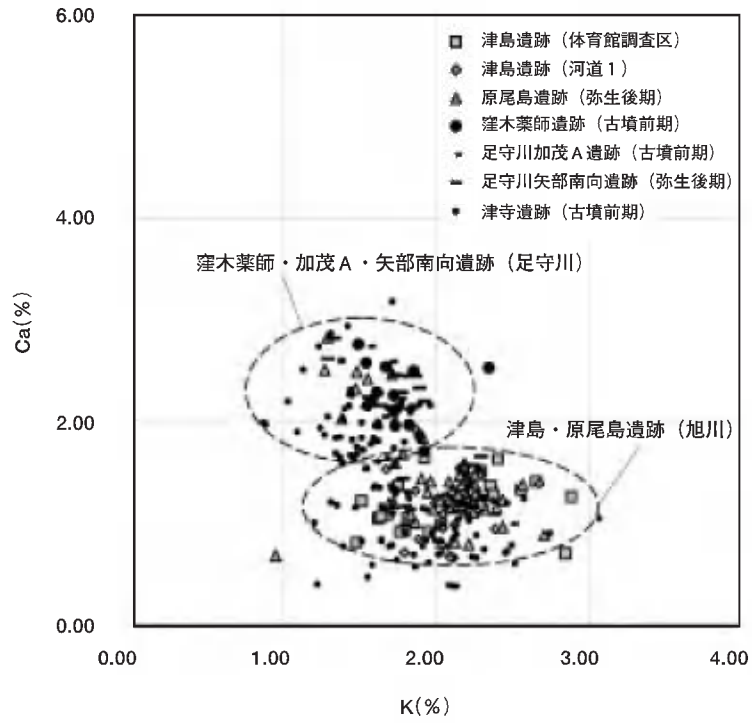
番 号	掲載 番号	器 種	時 期	出土地点	Si	Ti	Al	Fe	Mn	Mg	Ca	Na	K	P	Rb	Sr	Zr	備考
53		甕	弥生後期	L区西 土器溜まり1 P-40	67.20	0.93	17.47	5.29	0.11	1.95	1.31	2.90	2.12	0.53	212	231	252	
54		甕	弥生後期	L区西 土器溜まり1 P-41	65.22	0.84	18.60	7.07	0.09	2.03	1.20	2.27	2.09	0.34	237	214	304	
55		甕	弥生後期	L区西 土器溜まり1 P-42	63.30	0.89	18.37	6.44	0.08	2.49	1.22	4.61	2.04	0.36	227	207	277	
56	296	甕	古墳前期	K S区(西) 井戸3	61.28	0.93	21.00	6.38	0.15	1.97	2.21	2.42	1.40	2.06	138	540	311	東海?
57	304	甕	古墳前期	K S区(西) 井戸3	66.61	0.65	18.44	4.52	0.14	1.77	1.05	2.29	2.23	2.04	247	207	225	たたき甕
58	298	甕	古墳前期	K S区(西) 井戸3	61.27	0.74	19.45	7.87	0.20	2.00	1.33	2.21	1.52	3.06	153	333	208	畿内?
59		壺	古墳前期	K S区(西) 井戸3	68.29	0.72	18.95	4.36	0.06	1.76	0.72	2.34	2.33	0.24	216	124	278	畿内?
60		壺	古墳前期	K S区(西) 井戸3	66.27	0.67	17.82	5.24	0.13	1.83	1.07	2.16	2.34	2.22	276	245	296	畿内?
61	301	壺	古墳前期	K S区(西) 井戸3	59.77	1.49	19.70	7.15	0.19	2.30	3.46	2.84	1.06	1.80	100	296	300	
62		壺	古墳前期	K S区(西) 井戸3	59.87	0.87	18.95	8.38	0.18	2.28	3.69	2.07	1.24	2.17	131	390	197	赤彩
63	178	壺?	古墳前期	K S区(西) 溝29	57.65	0.94	23.19	9.49	0.11	2.11	0.82	2.42	1.48	1.54	123	163	444	雲母多量
64		壺	古墳前期	K S区(西) 井戸3	64.55	0.88	17.52	6.41	0.19	1.92	1.58	2.65	2.08	1.93	188	362	260	
65		壺	古墳前期	K S区(西) 井戸3	59.21	0.79	20.94	7.83	0.17	2.00	2.23	2.37	1.51	2.54	153	367	246	
66		壺	古墳前期	K S区(西) 井戸3	61.55	0.91	20.31	7.61	0.19	1.87	2.16	2.11	1.56	1.48	156	355	276	
67		壺	古墳前期	K S区(西) 井戸3	57.21	0.77	19.75	10.15	0.27	2.51	4.15	1.92	0.97	2.02	59	420	160	
69		甕	古墳前期	K S区(西) 井戸3	62.23	0.83	20.32	6.54	0.12	2.18	2.24	2.69	1.47	1.21	125	374	232	
70		甕	古墳前期	K S区(西) 井戸3	63.29	0.75	19.31	6.76	0.19	1.95	1.85	1.99	1.59	2.12	142	408	284	
71		甕	古墳前期	K S区(西) 井戸3	62.04	0.83	19.16	8.16	0.18	1.90	2.31	2.02	1.47	1.59	131	387	292	
72		甕	古墳前期	K S区(西) 井戸3	64.19	0.86	18.38	4.93	0.12	1.80	1.88	2.68	2.00	2.75	162	449	310	
73		甕	古墳前期	K S区(西) 井戸3	64.78	0.71	19.82	5.74	0.07	1.89	1.35	3.67	1.71	0.05	191	323	292	
74		甕	古墳前期	K S区(西) 井戸3	61.56	0.83	18.57	7.81	0.20	1.96	2.34	2.77	1.62	2.06	136	391	281	
75		甕	古墳前期	K S区(西) 井戸3	66.62	0.83	17.35	6.35	0.09	1.89	1.02	3.23	2.19	0.27	202	209	272	
76		甕	古墳前期	K S区(西) 井戸3	66.41	0.79	17.20	6.77	0.08	2.04	1.06	2.64	2.19	0.58	213	235	250	
77		甕	古墳前期	K S区(西) 井戸3	60.56	0.72	19.47	8.56	0.17	2.06	1.85	2.78	1.50	1.60	160	302	272	
78		甕	古墳前期	K S区(西) 井戸3	63.63	0.83	19.11	6.21	0.14	1.86	1.81	2.09	1.62	2.35	129	429	280	
79		甕	古墳前期	K S区(西) 井戸3	65.49	0.79	17.21	6.59	0.24	1.91	1.47	2.32	2.18	1.40	170	345	258	
80		甕	古墳前期	K S区(西) 井戸3	61.81	0.79	20.86	6.41	0.15	2.03	1.97	2.53	1.52	1.62	144	504	294	
81		甕	古墳前期	K S区(西) 井戸3	62.06	0.75	21.65	7.14	0.09	2.06	1.87	2.06	1.46	0.55	151	254	220	
82		甕	古墳前期	K S区(西) 井戸3	63.86	0.73	17.45	7.46	0.14	2.01	1.48	2.55	2.09	1.79	214	284	307	
83		甕	古墳前期	K S区(西) 井戸3	62.72	0.85	20.99	7.11	0.10	1.98	1.77	2.45	1.47	0.42	143	227	239	
84		甕	古墳前期	K S区(西) 井戸3	60.30	0.84	20.66	7.12	0.23	1.98	2.32	2.49	1.54	2.13	113	432	234	
85		甕	古墳前期	K S区(西) 井戸3	62.70	0.86	20.75	4.68	0.15	2.00	2.26	2.03	1.51	2.62	159	527	268	
86		甕	古墳前期	K S区(西) 井戸3	66.74	0.87	18.04	4.90	0.13	1.96	1.28	2.67	2.22	0.82	195	263	289	
87		甕	古墳前期	K S区(西) 井戸3	68.16	0.65	18.78	4.31	0.07	1.90	0.68	2.92	2.10	0.24	209	118	274	
88		甕	古墳前期	K S区(西) 井戸3	63.00	0.89	20.56	6.52	0.17	1.90	2.10	2.16	1.22	1.29	121	496	260	
89		甕	古墳前期	K S区(西) 井戸3	61.86	0.90	19.98	7.50	0.11	2.08	1.95	2.57	1.49	1.29	121	318	289	
90		甕	古墳前期	K S区(西) 井戸3	62.67	0.86	19.38	7.44	0.17	2.11	2.12	2.83	1.49	0.64	147	320	271	
91		甕	古墳前期	K S区(西) 井戸3	59.93	0.85	21.53	7.27	0.19	2.09	2.13	2.69	1.51	1.50	139	308	209	
92		甕	古墳前期	K S区(西) 井戸3	66.50	0.85	17.46	6.98	0.14	1.99	1.12	1.93	2.24	0.60	210	240	282	
93		甕	古墳前期	K S区(西) 井戸3	60.45	0.73	21.04	6.78	0.16	1.89	2.59	2.31	1.40	2.28	125	451	245	
94		甕	古墳前期	K S区(西) 井戸3	60.67	0.87	21.23	6.27	0.22	1.89	2.45	3.00	1.27	1.91	126	604	264	
95		甕	古墳前期	K S区(西) 井戸3	66.54	0.73	18.73	4.69	0.09	1.94	1.10	2.56	2.11	1.25	221	233	271	
96		甕	古墳前期	K S区(西) 井戸3	65.80	0.82	17.57	7.66	0.12	1.81	1.05	2.41	2.17	0.42	220	217	273	
97		甕	古墳前期	K S区(西) 井戸3	59.84	0.80	19.26	9.03	0.23	2.03	2.25	2.24	1.51	2.48	137	365	300	
98		甕	古墳前期	K S区(西) 井戸3	62.21	1.00	19.77	6.61	0.15	2.02	2.02	2.44	1.49	2.10	140	489	315	
99		高杯	古墳前期	K S区(西) 井戸3	65.55	0.96	17.69	5.48	0.11	1.99	1.28	3.21	2.30	1.22	216	238	311	
100		高杯	古墳前期	K S区(西) 井戸3	65.25	0.96	18.35	6.53	0.08	2.08	0.87	3.35	2.19	0.16	250	179	306	
101		高杯	古墳前期	K S区(西) 井戸3	64.65	0.92	17.17	7.80	0.14	1.90	1.24	2.72	2.04	1.19	196	249	299	
102		高杯	古墳前期	K S区(西) 井戸3	63.69	0.97	17.61	8.82	0.18	1.86	1.25	2.37	1.98	1.08	201	263	328	
103		高杯	古墳前期	K S区(西) 井戸3	60.47	0.91	18.31	8.11	0.23	2.43	1.43	4.45	1.82	1.53	153	288	272	
104		高杯	古墳前期	K S区(西) 井戸3	64.09	1.01	18.13	8.90	0.14	1.93	0.93	2.26	2.11	0.23	175	166	302	
105		高杯	古墳前期	K S区(西) 井戸3	64.94	0.92	17.92	8.19	0.10	1.98	0.84	2.49	2.20	0.20	237	187	301	
106		高杯	古墳前期	K S区(西) 井戸3	62.39	1.00	17.93	7.56	0.18	1.97	1.50	2.98	1.91	2.32	158	350	312	
107		高杯	古墳前期	K S区(西) 井戸3	67.71	0.98	17.22	5.72	0.09	1.88	1.08	2.82	2.22	0.11	223	186	281	
108		高杯	古墳前期	K S区(西) 井戸3	64.35	1.01	17.84	8.69	0.15	1.81	1.12	1.69	2.17	0.82	235	223	322	
109		高杯	古墳前期	K S区(西) 井戸3	64.52	1.06	19.37	6.76	0.11	2.01	1.06	2.47	2.05	0.39	175	200	313	
110		高杯	古墳前期	K S区(西) 井戸3	64.51	0.98	18.24	9.08	0.12	1.90	0.90	1.85	2.11	0.12	212	189	285	
111		高杯	古墳前期	K S区(西) 井戸3	63.52	0.96	18.25	8.99	0.11	2.03	0.97	2.75	2.05	0.20	199	203	285	
112		高杯	古墳前期	K S区(西) 井戸3	59.72	0.78	17.44	9.52	0.22	2.14	1.71	2.77	1.87	3.14	167	462	300	
113		高杯	古墳前期	K S区(西) 井戸3	64.41	0.92	17.87	7.85	0.12	2.05	0.92	3.22	2.15	0.26	213	207	290	
114		高杯	古墳前期	K S区(西) 井戸3	64.78	0.85	17.72	8.12	0.12	1.90	1.07	2.41	2.16	0.46	235	249	308	
115		高杯	古墳前期	K S区(西) 井戸3	66.13	0.90	17.02	6.26	0.12	1.97	1.19	3.43	2.09	0.67	203	231	297	
116		高杯	古墳前期	K S区(西) 井戸3	64.30	0.96	17.41	8.94	0.13	1.89	1.09	2.65	1.96	0.51	209	238	319	
117		高杯	古墳前期	K S区(西) 井戸3	66.54	0.70	18.51	5.07	0.12	1.88	1.40	1.66	2.19	1.30	236	313	398	
118		高杯	古墳前期	K S区(西) 井戸3	65.19	0.93	17.72	7.67	0.09	2.08	0.90	2.73	2.26	0.24	209	174	270	
119		高杯	古墳前期	K S区(西) 井戸3	62.21	0.71	18.89	7.82	0.13	1.78	1.11	2.77	1.87	2.29	188	265	413	
120		高杯	古墳前期	K S区(西) 井戸3	53.87	1.14	22.08	11.96	0.33	1.90	1.27	2.92	1.21	2.91	189	351	217	
121		高杯	古墳前期	K S区(西) 井戸3	64.74	0.90	17.63	8.08	0.12	1.86	1.09	2.62	2.18	0.62	224	234	299	
122		高杯	古墳前期	K S区(西) 井戸3	64.40	0.69	18.66	6.98	0.11	1.85	0.86	2.75	2.66	0.62	242	204	401	
123		高杯	古墳前期	K S区(西) 井戸3	61.55	0.81	19.89	8.83	0.18	1.95	1.16	1.83	1.75	1.77	240	239	398	



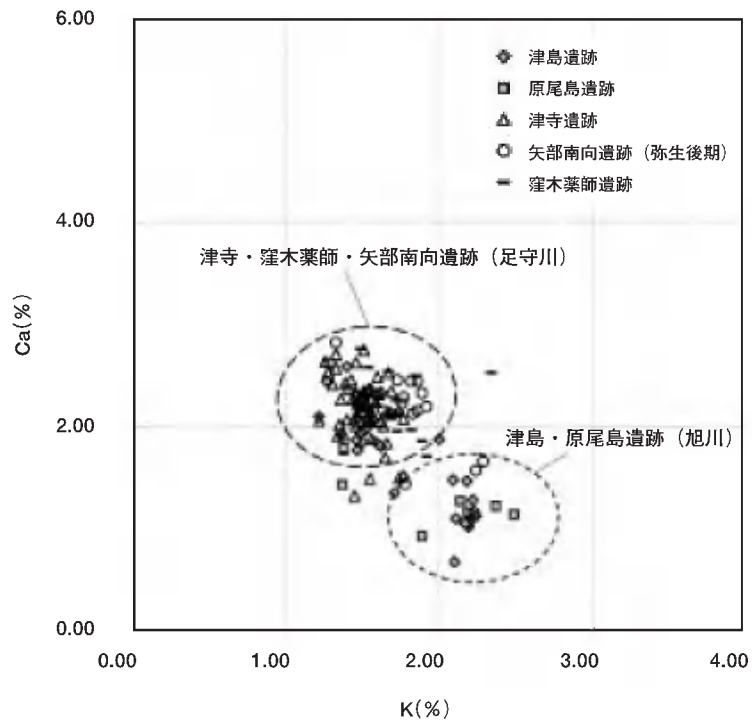
第1図 津島遺跡体育館調査区出土土器の時期別比較 (K-Ca散布図)



第2図 津島遺跡体育館調査区出土時の時期・産地別比較 (K-Ca散布図)



第3図 各水系の遺跡出土土器の比較 (K-Ca散布図)



第4図 各遺跡出土吉備型甕の胎土比較 (K-Ca散布図)

津島遺跡出土ガラス滓の分析

(株)ニコン 木戸 一博

1 資料及び実体顕微鏡観察結果

資料は岡山県津島遺跡の新体育館調査区O区南部、土壌7から出土した遺物である。

資料は、全体に茶褐色の焼結体であるが、内部には気泡を多く含むガラス状部位が認められる。ガラス化した部位は褐色に着色している。また、表面に微小な球状物質が付着している。

ガラス状に観察される部位については、百間川原尾島遺跡出土、百間川今谷遺跡出土、鹿田遺跡出土、津寺遺跡出土及び津島遺跡（W区、井戸）及び津島遺跡（陸上競技場調査区3区土壌10）出土のガラス滓と同類と思われる^{1)~7)}。

2 分析結果

資料をエネルギー分散型X線分析装置（堀場製作所 EMAX-500）により分析した。分析は吉田裕氏及び岩谷博士氏（株式会社ニコン技術工房・分析センター）に依頼した。分析結果を表1に示す。本分析法では、資料表面下数 μm までの組成を半定量分析している。遺物は部位による組成差が大きいいため、ガラス状部分2部位、非ガラス状部分2部位を分析し、それぞれの平均値を示した。

また、走査型電子顕微鏡（日立製作所 S-3000N）を用いた観察も行った。結果は、図1に示すような数 μm の球状部位を確認した。そこで、球状部位についてもエネルギー分散型X線分析装置（堀場製作所 EMAX-500）を用いた分析を行った。分析結果は、表1に記載している。

表1 津島遺跡出土遺物の表面組成分析結果

分析部位	ガラス状部位	非ガラス状部位	球状部位	
組成 (重量%)	SiO ₂	58.0	39.1	60.7
	Na ₂ O	1.8	0.0	0.3
	K ₂ O	1.5	0.2	0.7
	MgO	0.8	1.3	2.7
	CaO	4.5	3.3	7.9
	Al ₂ O ₃	25.6	53.4	27.7
	TiO ₂	1.1	0.8	
	Fe ₂ O ₃	6.7	2.0	

3 考察

遺物のガラス状部位の平均組成と百間川原尾島遺跡出土、百間川今谷遺跡出土、鹿田遺跡出土、津寺遺跡出土、津島遺跡（W区、井戸）及び津島遺跡（陸上競技場調査区3区土壌10）出土のガラス滓組成を比較し表2に示す。ガラス滓毎及び部位毎の組成バラツキを考慮すると、他の遺跡出土のガラ

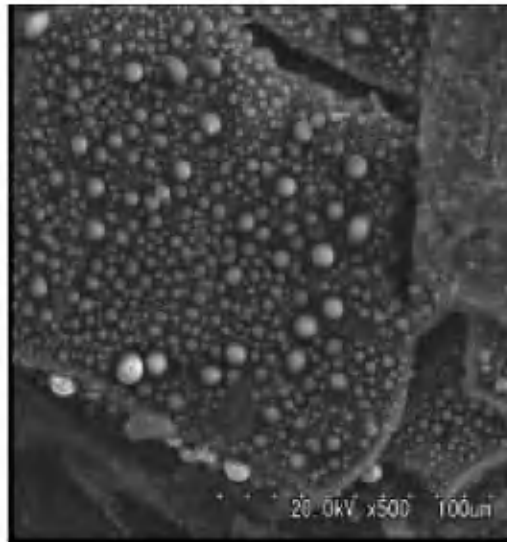


図1 走査型電子顕微鏡観察結果

ス滓と今回分析した遺物のガラス状部位に顕著な差は認められない。各成分とも類似しており、出発物質は土と砂と植物灰等を出発物質としている可能性が高い。

球状部位は、観察結果及びその組成からガラス状と考えられるが、その生成過程を推察することは困難である。しかし、その形状及びアルカリ金属成分含有量が少ないことから、非常に高い温度環境下で熔解して生成したと考える。

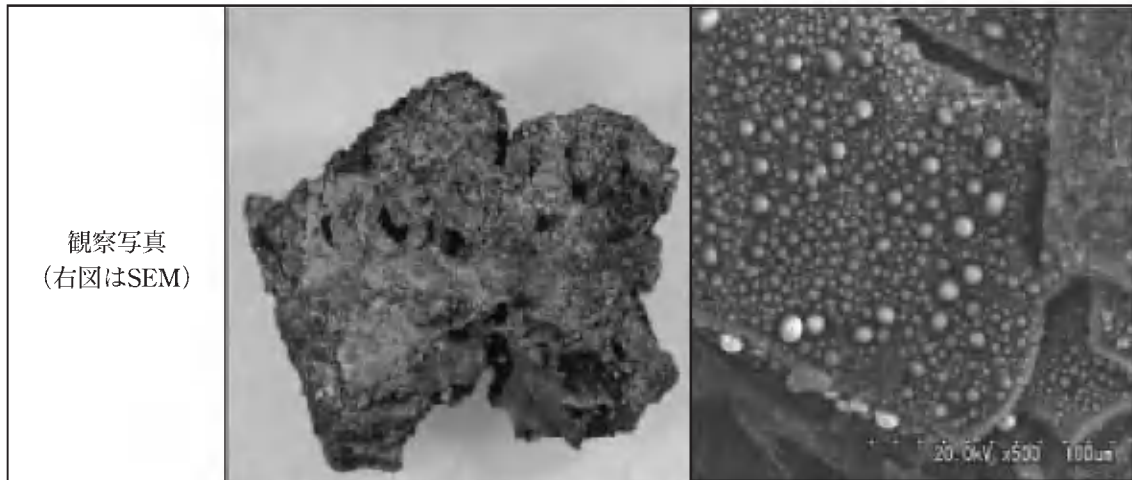
表2 津島遺跡出土の遺物表面組成分析結果と他の遺跡出土ガラス滓平均組成⁷⁾の比較

資料	ガラス状部位の平均組成	百間川原尾島遺跡	鹿田遺跡	百間川今谷遺跡	津寺遺跡	津島遺跡(W区, 井戸)	津島遺跡(陸上競技場調査区3区土城10)	
組成(重量%)	SiO ₂	58.0	50.6	60.7	62.6	54.1	60.0	58.3
	Na ₂ O	1.8	2.5	9.4	11.5	1.9	7.7	6.3
	K ₂ O	1.5	1.5	2.0	1.3	1.9	2.3	1.5
	MgO	0.8	3.3	5.7	4.9	5.2	3.9	3.3
	CaO	4.5	2.3	3.6	2.6	5.3	2.2	3.0
	Al ₂ O ₃	25.6	20.8	9.7	9.5	27.1	12.1	18.9
	TiO ₂	1.1					0.8	0.8
	Fe ₂ O ₃	6.7	14.7	5.1	4.2	5.9	9.7	7.8
	P ₂ O ₅						0.8	0.2
	S						0.5	
	Cl						1.3	
	MnO						0.5	

参考

- 1) 三浦定俊、苜谷道郎 岡山大学構内遺跡発掘報告第3冊 鹿田遺跡Ⅰ、p463
- 2) 苜谷道郎 岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 104 津寺遺跡 3、p301 (1996)
- 3) 苜谷道郎 岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 88 白間川原尾島遺跡 3、p316 (1994)
- 4) 苜谷道郎 岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 97 白間川原尾島遺跡 4、p283 (1995)
- 5) 苜谷道郎 岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 106 白間川原尾島遺跡 5、p238 (1996)
- 6) 苜谷道郎 岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 145 津島遺跡、p19 (1999)
- 7) 木戸一博 岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 173 津島遺跡 4、p637 (2003)

津島遺跡新体育館調査区 O区南部 標高2.0~2.1m ガラス滓



エネルギー分散型X線分析装置 (EMAX-500) による組成分析結果 (カーボンペーストで固定し、カーボンコーティングを施した)

分析部位		ガラス状	ガラス状	非ガラス状	非ガラス状	球状部分
成分 (重量%)	SiO ₂	58.0	58.0	40.3	37.8	60.7
	Na ₂ O	1.8	1.8	0.0	0.0	0.3
	K ₂ O	1.5	1.5	0.3	0.0	0.7
	MgO	0.8	0.8	1.1	1.5	2.7
	CaO	4.4	4.6	2.5	4.1	7.9
	Al ₂ O ₃	25.6	25.6	52.9	53.9	27.7
	TiO ₂	1.1	1.1	0.8	0.8	0.0
	Fe ₂ O ₃	6.8	6.6	2.1	1.9	0.0
	P ₂ O ₅	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	S	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	Cl	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	MnO	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
			平均		標準偏差	
組成 (重量%)	SiO ₂	48.5		11.0		
	Na ₂ O	0.9		1.0		
	K ₂ O	0.8		0.8		
	MgO	1.1		0.3		
	CaO	3.9		1.0		
	Al ₂ O ₃	39.5		16.1		
	TiO ₂	1.0		0.2		
	Fe ₂ O ₃	4.4		2.7		
	P ₂ O ₅	0.0		0.0		
	S	0.0		0.0		
	Cl	0.0		0.0		
	MnO	0.0		0.0		

遺 構 一 覽 表

遺 物 觀 察 表

遺構名称新旧对照表

遺構一覧・遺物観察表凡例

1 遺構一覧表

竪穴住居

- ・平面形は、床面の形状を表す。
- ・規模は、対向する上端間の最大距離を記載する。() は残存長を表す。
- ・主軸は、国土座標の北を基準としたときの竪穴の主軸方位を表示した。
- ・面積は、竪穴底面で囲まれた面積を表示した。少ない残存面積でも推測できるものは () で表す。
- ・主柱B/Aは、住居本来の本数をA、検出した本数をBとして表した。

掘立柱建物

- ・規模は、身舎の桁行と梁間の間数、桁行総長、梁間総長をそれぞれ表す。
- ・柱間は、身舎の桁行と梁間における柱間距離の最大・最小を表す。
- ・面積は、建坪の面積を表す。
- ・棟方向は、身舎の主軸方位を表す。

井戸・土壇墓・土壇・溝

- ・規模は、検出面での長さ・幅・深さを表す。ただし、幅、深さに関しては断面が壁面で観察できるものについては、これを表す。
- ・規模のうち、() は推定値を表す。
- ・標高は、底面最深部の海拔高を表示した。
- ・平面形は、検出面での形状を表す。
- ・断面形は、壁面形態（上部が広がるものをA、筒状をなすものをB、下部が広がるものをC）と底面形態（平らなものをa、窪むものをb、盛り上がるものをc）を組み合わせて表した。

2 遺物観察表

土器・陶磁器

- ・法量のうち () は、残存値を表す。口径項目中の () は、その残存率が1/6以下であることを表す
- ・色調は、「新版標準土色帖」（農林水産省農林水産技術会議事務局監修 財団法人日本色彩研究所色票監修）を使用した。
- ・胎土、含まれる砂粒の粒径が2.0mm以上を砂礫、2.0～1.0mmを細砂、1.0～0.5mmを微砂、0.5mm以下を精良として表す。
- ・胎土に含まれる鉱物は、石英を「英」、長石を「長」、雲母を「雲」、角閃石を「角」、赤色酸化土粒を「赤」、鉱物名不詳の白色砂粒を「白」として表した。

石器・石製品

- ・法量は、長さ・幅・厚さ・孔径の最大値を表す。() は残存値であることを表す。
- ・材質の鑑定は、妹尾 護氏による。

土製品

- ・法量は、長さ・幅・厚さ・孔径の最大値を表す。() は残存値であることを表す。
- ・胎土・色調は、土器に準ずる。

金属製品

- ・法量は、長さ・幅・厚さの最大値を表す。() は残存値であることを表す。
- ・重量のうち () は、残存重量であることを表す。

竪穴住居一覽

遺構名	地区	平面形	長軸 (cm)	短軸 (cm)	床面高 高 (cm)	床面積 (cm)	主柱穴数	中央穴			壁体溝	時期	備考
								形状	長×短 (cm)	深さ (cm)			
竪穴住居 1	O区	円形	430	—	152	(16)	不明	—	—	—	○	弥・中	
竪穴住居 2	O区	円形	(538)	—	154	(23)	不明	—	—	—	○	弥・中	
竪穴住居 3	O区	円形	524	—	180	(23)	不明	—	—	—	○	弥・中	
竪穴住居 4	O区	円形	(657)	—	138	(35)	4 / 5	楕円形	69×46	43	○	弥・中	
竪穴住居 5	KN区 (西)	方形	(198)	—	160	—	不明	—	—	—	○	弥・中	
竪穴住居 6	I区	円形	(359)	—	187	—	2 / 4	楕円形	101	9	○	弥・中	
竪穴住居 7	B区	円形	(70)	—	204	—	不明	—	—	—	○	弥・中	
竪穴住居 8	B区	円形	432	—	202	(16)	2	円形	70×62	42	○	弥・中	
竪穴住居 9	D区	方形	235	203	210	(4.8)	無	—	—	—	×	古墳	

掘立柱建物一覽

遺構名	地区	間数	柱間距離 (cm)		桁行 (cm)	梁 (cm)	面積 (㎡)	棟方向	柱掘り方	時期	備考
			長軸	短軸							
掘立柱建物 1	O区	(2×2)	175~180	181~193	(345)	374	—	N-59°-W	柵円形・隅丸方形	弥・後	

土壇墓一覽

遺構名	地区	平面形	断面形	規模 (cm)			底面海拔高 (cm)	主軸	副葬品	時期	備考
				長軸	短軸	深さ					
土壇墓 1	II区	長方形	A-a	—	71	19	181	N-88°-N	無	弥・中	
土壇墓 2	II区	長方形	A-a	157	68	42	168	N-15°-E	無	弥・中	
土壇墓 3	C区	長方形	A-a	—	73	15	193	N-57°-E	無	弥・中	
土壇墓 4	B区	長方形	A-a	125	46	44	190	N-18°-W	無	弥・中	
土壇墓 5	B区	長方形	A-a	118	73	37	197	N-37°-W	無	弥・中	
土壇墓 6	B区	長方形	A-a	—	75	19	214	N-36°-W	無	弥・中	
土壇墓 7	B区	長方形	A-a	—	—	21	201	N-51°-E	無	弥・中	
土壇墓 8	B区	長方形	A-a	—	—	37	205	N-53°-E	無	弥・中	
土壇墓 9	B区	長方形	A-a	184	75	—	—	N-51°-E	無	弥・中	

土器棺墓一覽

遺構名	地区	平面形	断面形	規模 (cm)			底面海拔高 (cm)	主軸	副葬品	時期	備考
				長軸	短軸	深さ					
土器棺墓 1	M区 (西)	楕円形	A-b	67	44	3	242	N-20°-E	無	弥・後	

井戸一覽

遺構名	地区	平面形	断面形	規模 (cm)			底面海拔高 (cm)	時期	備考
				長軸	短軸	深さ			
井戸 1	O区	楕円形	A-b	200	177	185	35	古・前	
井戸 2	N区	円形	A-b	125	117	200	16	古・前	
井戸 3	KS区 (西)	円形	A-b	210	203	199	46	古・前	

土壙一覽

遺構名	地 区	平面形	断面形	規模 (cm)			底面海拔高 (cm)	時 期	備 考
				長軸	短軸	深さ			
土壙10	N区	不明	A-b	—	—	—	—	弥・中	
土壙11	N区	不明	A-b	—	—	—	—	弥・中	
土壙12	M区	円形	A-b	178	—	26	188	弥・中	
土壙13	KS区(西)	円形	A-a	—	105	22	168	弥・中	個別図なし
土壙14	KS区(西)	不整形円形	A-a	170	—	87	102	弥・中	
土壙15	KS区(西)	円形	A-b	160	—	53	130	弥・中	
土壙16	KS区(西)	楕円形	A-a	95	—	9	197	弥・中	
土壙17	KS区(西)	楕円形	A-a	—	62	18	171	弥・中	
土壙18	KS区(西)	楕円形	A-b	187	61	37	169	弥・中	
土壙19	KS区(西)	方形	A-a	120	—	36	195	弥・中	個別図なし
土壙20	KS区(西)	円形	A-b	—	110	27	195	弥・中	個別図なし
土壙21	KS区(西)	不整形円形	A-a	126	—	13	154	弥・中	
土壙22	KS区(西)	不整形円形	A-a	—	83	26	184	弥・中	
土壙23	KS区(東)	楕円形	A-b	126	55	28	148	弥・中	
土壙24	I区	方形?	A-a	—	—	8	205	弥・中	
土壙25	C区	楕円形	A-b	—	155	83	107	弥・中	
土壙26	C区	楕円形	A-b	—	65	28	180	弥・中	
土壙27	C区	楕円形	A-b	70	50	22	170	弥・中	
土壙28	C区	不整形円形	A-b	60	—	42	180	弥・中	
土壙29	B区	不整形円形	A-b	350	—	79	121	弥・中	
土壙30	B区	方形	A-a	—	51	45	175	弥・中	
土壙31	B区	方形	A-b	—	63	43	192	弥・中	
土壙32	O区	方形	A-b	—	62	8	200	弥・後	
土壙33	O区	不整形円形	A-b	135	94	6	209	弥・後	
土壙34	O区	楕円形	A-b	—	71	18	186	弥・後	
土壙35	O区	円形	A-b	188	160	55	184	古墳	
土壙36	O区	楕円形	A-a	178	—	15	219	古墳	
土壙37	N区	方形	A-a	—	—	6	203	古墳	

溝一覽

遺構名	地 区	断面形	規模 (cm)		方 向	時 期	備 考
			上端幅	深さ			
溝1	L区	A-a	32-40	17-22	北西⇒南東	弥・前	
溝2	KS区(東)	A-b	—	80	北⇒南	弥・前	
溝3	J区	A-b	73-88	11-18	北⇒南	弥・前	
溝4	E区	A-a	90-105	1-3	北西⇒南東	弥・前	
溝5	D区・I区	A-b	25-55	19-24	北東⇒南西	弥・前	
溝6	I区	A-b	25-35	2-9	北西⇒南東	弥・前	
溝7	B区	A-b	140	28-30	北東⇒南西	弥・前	
溝8	N区	A-b	30-35	6-27	南西⇒北東	弥・中	
溝9	M区	A-b	219-245	56-68	北西⇒南東	弥・中	
溝10	M区	A-a	67-77	6-9	北西⇒南東	弥・中	
溝11	KS区(西)	A-b	57-75	32	北西⇒南東	弥・中	
溝12	KS区(西)	A-b	38-52	4-5	北西⇒南東	弥・中	
溝13	KN区(東)	A-b	175-229	46-80	北東⇒南西	弥・中	
溝14	KS区(東)	A-b	97-100	46	北西⇒南東	弥・中	
溝15	KS区(東)	A-a	45-63	32	北西⇒南東	弥・中	
溝16	J区	A-b	72-75	20-32	西⇒東	弥・中	
溝17	I区	A-a	44-45	15-18	北東⇒南西	弥・中	
溝18	I区	A-a	80-82	22-24	北東⇒南西	弥・中	
溝19	C区	A-b	385-412	16-40	北東⇒南西	弥・中	
溝20	F区	A-b	253-285	27-30	北⇒南	弥・中	
溝21	I区	A-b	68-74	18-22	北⇒南	弥・中	
溝22	E区	A-b	78-82	3-5	北⇒南	弥・中	
溝23	B区	A-b	26-30	4-7	北東⇒南西	弥・中	
溝24	B区	A-b	155-188	9-26	北⇒南	弥・中	
溝25	L区・N区・O区	A-b	78-495	34-38	西⇒東	古墳	
溝26	M区	A-b	219-238	46-66	北西⇒南東	古墳	
溝27	L区	A-b	97-120	13-22	北西⇒南東	古墳	
溝28	L区	A-b	20-44	3-7	北西⇒南東	古墳	
溝29	KS区(西)	A-a	150-158	46-54	北⇒南	古墳	
溝30	KS区(西)	A-b	94-117	19-22	北⇒南	古墳	
溝31	KS区(西)	A-b	70-77	17-22	北⇒南	古墳	
溝32	I区	A-b	78-95	22-28	北東⇒南西	古墳	
溝33	I区	A-a	81-88	12-18	北東⇒南西	古墳	
溝34	J区	A-b	74-80	5-20	北東⇒南西	古墳	
溝35	KN区(西)	A-b	35-45	3-11	北西⇒南東	古代・中世	
溝36	G-J・KS区(東)・KN(東)・P区	A-b	(400-640)	85-132	北東⇒南西	古代・中世	
溝37	J区	A-b	(540-740)	88-100	北東⇒南西	古代・中世	
溝38	B区・C区・I区	A-b	15-103	6-21	—	古代・中世	
溝39	L区	A-b	(302-358)	158	北⇒南	近世・近代	条里溝
溝40	KN区(東)	A-b	(220-300)	99	北東⇒南西	近代・現代	

土器観察表

掲載番号	調査区	遺構名	種類	器種	口径 (cm)	器高 (cm)	最大径 (cm)	底径 (cm)	調整・特徴	胎土	色調 (外面)	残存状況	備考
1	M区	水山1	弥生土器	甕	-	-	-	-	口縁部：ヨコナデ 貼付突帯刻目	微砂～砂礫 英・長・赤	淡黄色		
2	J区	水山1	弥生土器	甕	-	-	-	-	口縁部外面：ヨコナデ ヘラ描洗線	微砂～砂礫 英・長	にぶい褐色		
3	O区	低位部層	縄文土器	深鉢	-	-	-	-	剥落のため調整不明瞭	細砂～砂礫 英・長・角	にぶい黄色		
4	O区	低位部層	縄文土器	深鉢	-	-	-	-	口縁部外面：ヨコナデ 貼付突帯刻目	微砂 英・長	淡褐色		
5	O区	低位部層	縄文土器	深鉢	-	-	-	-	口縁部外面：ヘラミガキ	微砂 英・長・雲	にぶい黄褐色		
6	O区	低位部層	縄文土器	深鉢	-	-	-	-	口縁部内面：ユビオサエ後ナデ	微砂～砂礫 英・長	にぶい黄褐色		内面炭化物付着 外面煤付着 年代測定試料①
7	O区	低位部層	縄文土器	深鉢	-	-	-	-	口縁部外面：貼付突帯刻目	英・長	浅黄色		
8	N区	低位部層	弥生土器	壺	15.8	-	-	-	口縁部内面：横方向ヘラミガキ	微砂～砂礫 英・長	明赤褐色		
9	O区	低位部層	弥生土器	壺	-	-	-	-	口縁部外面：ナデ	長・英・赤	浅黄色		
10	O区	低位部層	弥生土器	壺	-	-	-	-	口縁部：ヨコナデ	長・雲	にぶい黄褐色		
11	O区	低位部層	弥生土器	壺	-	-	-	-	口縁部：剥落して調整不明瞭	微砂 長・英・雲	褐色		
12	O区	低位部層	弥生土器	壺	-	-	-	-	口縁部：剥落のため調整不明	微砂～細砂 英・長	浅黄褐色		
13	O区	低位部層	弥生土器	壺	-	-	-	-	体部外面：ナデ後ヘラミガキ	微砂～砂礫 長・英	褐色		
14	O区	低位部層	弥生土器	壺	19.2	-	-	-	口縁部外面：ハケメ後ヘラミガキ ヘラ描洗線	微砂～砂礫 英・長・赤	灰白色		
15	O区	低位部層	弥生土器	壺	13.2	-	-	-	頸部外面：ヘラ洗線 貼付突帯	長・英・雲・赤	浅黄色		
16	O区	低位部層	弥生土器	壺	-	-	-	-	体部外面：ナデ ヘラミガキ	微砂 長・雲	浅黄褐色		
17	O区	低位部層	弥生土器	壺	-	-	-	-	体部内面：ナデ ハケメ	微砂～細砂 長・英	浅黄褐色		
18	N区	低位部層	弥生土器	壺	-	-	-	-	体部外面：木架文 貼付突帯	精良～微砂 長・英	にぶい黄褐色		
19	O区	低位部層	弥生土器	壺	-	-	-	-	胴部外面：線刻	英・長	浅黄褐色		
20	O区	低位部層	弥生土器	壺	-	-	-	-	胴部外面：線刻 ヘラミガキ	英・長・赤	にぶい褐色		
21	O区	低位部層	弥生土器	壺	-	-	-	-	体部外面：線刻 ヘラ描洗線3条	微砂 長・雲	にぶい黄褐色		
22	O区	低位部層	弥生土器	壺	-	-	-	8.4	体部外面：剥落のため調整不明瞭	微砂～砂礫 英・長・角	にぶい黄色		
23	O区	低位部層	弥生土器	壺	-	-	-	7.6	底部：ナデ	砂礫 英・長	にぶい黄褐色		
24	O区	低位部層	弥生土器	壺	-	-	-	8.2	底部外部：ハケメ 器表面剥落 内面：ナデ 底部：ナデ	微砂 長・英・雲	にぶい黄褐色		
25	O区	低位部層	弥生土器	壺	-	-	-	8.8	底部内面：ナデ	微砂・英・長・雲	にぶい黄褐色		
26	O区	低位部層	弥生土器	壺	-	-	-	10.5	体部外面：ヘラミガキ	微砂～砂礫 英・長・角赤	にぶい褐色		
27	O区	低位部層	弥生土器	壺	-	-	-	6.4	底部外面：ヘラミガキ	微砂 英・雲	灰黄褐色		
28	O区	低位部層	弥生土器	壺	-	-	-	12.0	底部外面：部分的にヘラミガキ	微砂～細砂 長	にぶい黄褐色		
29	O区	低位部層	弥生土器	甕	20.8	-	-	-	体部内面：ナデ	英・長	にぶい褐色		内外面煤付着
30	O区	低位部層	弥生土器	甕	21.0	-	-	-	体部外面：ヨコナデ ナデ	長・雲	浅黄褐色		
31	O区	低位部層	弥生土器	甕	-	-	-	-	剥落しているため調整不明瞭	英・雲	にぶい褐色		
32	O区	低位部層	弥生土器	甕	-	-	-	-	口縁部：ヘラミガキ	微砂 長・英	浅黄褐色		
33	O区	低位部層	弥生土器	甕	-	-	-	-	口縁部：ヨコナデ	微砂～砂礫 長・英	灰黄褐色		
34	O区	低位部層	弥生土器	甕	-	-	-	-	口縁部：ナデ ユビオサエ	微砂～砂礫 英・長・角	にぶい黄褐色		外面煤付着 年代測定試料③
35	O区	低位部層	弥生土器	甕	-	-	-	-	口縁部：ヨコナデ	微砂 英・長	褐色		
36	O区	低位部層	弥生土器	甕	-	-	-	-	口縁部：ナデ	砂礫 英・長	浅黄褐色		
37	O区	低位部層	弥生土器	甕	-	-	-	-	口縁部：ヨコナデ ユビオサエ	細砂～砂礫 英・長	浅黄色		内面炭化物付着 年代測定試料②
38	O区	低位部層	弥生土器	甕	-	-	-	-	体部外面：縦方向ナデ (捺痕あり)	微砂～砂礫 長・英・角	灰黄褐色		外面煤付着
39	O区	低位部層	弥生土器	甕	-	-	-	-	体部外面：刻目	英・赤	灰黄褐色		
40	O区	低位部層	弥生土器	甕	-	-	-	-	胴部外面：ヘラミガキ 刻目 ナデ	精良～微砂 英・長・雲	灰黄褐色		
41	O区	低位部層	弥生土器	甕	24.8	-	-	-	口縁部外面：ヨコナデ 刻目	微砂～砂礫 英・長	浅黄褐色		
42	O区	低位部層	弥生土器	甕	16.0	-	-	-	全体的に剥落のため不明瞭	長・英・雲	浅黄褐色		
43	O区	低位部層	弥生土器	甕	-	-	-	-	全体的に剥落のため不明瞭	微砂～砂礫 長・英	にぶい黄褐色		
44	O区	低位部層	弥生土器	甕	-	-	-	-	口縁部：ヨコナデ	微砂～砂礫 長・雲	灰黄褐色		
45	O区	低位部層	弥生土器	甕	-	-	-	-	口縁部外面：ヨコナデ ユビオサエ 刻目	微砂～細砂 英・長・角	にぶい黄褐色		
46	O区	低位部層	弥生土器	甕	-	-	-	-	体部：剥落して不明	微砂～砂礫 長・英	にぶい褐色		外面煤付着
47	O区	低位部層	弥生土器	甕	-	-	-	-	口縁部外面：ヨコナデ ユビオサエ 刻目	微砂～細砂 英・長	にぶい褐色		
48	O区	低位部層	弥生土器	甕	-	-	-	-	体部：ナデ	微砂 長・赤	にぶい褐色		
49	O区	低位部層	弥生土器	甕	-	-	-	-	内面：剥落のため調整不明	微砂～砂礫 英・長	にぶい褐色		外面煤付着 年代測定試料④
50	O区	低位部層	弥生土器	甕	-	-	-	-	口縁部：剥落のため不明瞭	微砂～細砂 長・英	灰黄褐色		外面 煤付着
51	O区	低位部層	弥生土器	甕	-	-	-	-	口縁部：ナデ 刻目 口縁部外面：ヨコナデ	微砂 長・英	にぶい黄褐色		
52	O区	低位部層	弥生土器	甕	-	-	-	-	内面：ヘラミガキ 剥落のため調整不明瞭	長・英・雲 微砂～砂礫 英・長	にぶい黄褐色 灰黄色		
53	O区	低位部層	弥生土器	甕	-	-	-	-					
54	O区	低位部層	弥生土器	甕	-	-	-	-	体部外面：剥落のため調整不明瞭	微砂～細砂 英・長・角白	にぶい黄褐色		
55	O区	低位部層	弥生土器	甕	-	-	-	-	口縁部：ヨコナデ	長・英	浅黄褐色		
56	O区	低位部層	弥生土器	甕	-	-	-	-	体部：ナデ	微砂 長・雲	明黄褐色		外面 粉痕
57	O区	低位部層	弥生土器	甕	-	-	-	8.2	内面：剥落のため不明瞭	微砂 英・長	にぶい黄褐色		
58	O区	低位部層	弥生土器	甕	-	-	-	7.8	底部外面：ヘラミガキ	微砂～砂礫 英・長	褐色		
59	N区	低位部層	弥生土器	甕	-	-	-	8.2	体部外面：ヨコナデ 底部：ナデ	微砂 英・長	にぶい黄褐色		底部に網の痕跡 (1粒)
60	N区	低位部層	弥生土器	甕	-	-	-	7.2	胴部内面：ナデ ユビオサエ	細砂～砂礫 英・長	にぶい赤褐色		
61	O区	低位部層	弥生土器	甕	-	-	-	6.1	底部：ナデ	砂礫	浅黄色		
62	O区	低位部層	弥生土器	甕	-	-	-	7.0	底部外面：ヘラミガキ	微砂～細砂 長・英	浅黄褐色		
63	O区	低位部層	弥生土器	甕	-	-	-	7.6	胴部内面：ヘラミガキ	細砂～砂礫 英・長	浅黄褐色		
64	O区	低位部層	弥生土器	鉢	-	-	-	6.4	体部外面：剥落して調整不明瞭	微砂～細砂 長・英	褐色		底部に異なる粘土を貼り付け
65	O区	低位部層	弥生土器	鉢	19.0	-	-	-	体部：ヘラミガキ	微砂 長・英・赤	浅黄色		
66	O区	低位部層	弥生土器	鉢	-	-	-	-	口縁部：ヘラミガキ	長・英	明黄褐色		

掲載番号	調査区	遺構名	種類	器種	口径 (cm)	器高 (cm)	最大径 (cm)	底径 (cm)	調整・特徴	胎土	色調 (外面)	残存状況	備考
67	O区	河道1	弥生土器	甕	25.4	-	-	-	口縁部外面:ヨコナデ 刻目	細砂～砂礫 英・長・角	灰黄褐色		
68	O区	竪穴住居1~4	弥生土器	甕	-	-	32.0	11.2	体部外面:上半ハケメ 下半ハラミガキ	微砂 英・雲・白?	浅黄褐色		
69	O区	竪穴住居1~4	弥生土器	甕	-	-	-	-	口縁部:ヨコナデ	微砂～砂礫 英・長・赤	浅黄褐色		
70	O区	竪穴住居1~4	弥生土器	高杯	-	-	-	-	口縁部:ヨコナデ	微砂～砂礫 英・長	灰白色		2次焼成か?
71	KN区	竪穴住居5	弥生土器	甕	-	-	-	-	口縁部:ヨコナデ	微砂～細砂 英・長・赤	褐色		
72	KN区	竪穴住居5	弥生土器	甕	-	-	-	6.2	体部外面:縦方向ハラミガキ	微砂～砂礫 英・長・赤	褐色		
73	B区	竪穴住居8	弥生土器	甕	(18.0)	-	-	-	肩部内面:横方向ハラミガキ	微砂～細砂 英・長	浅黄褐色		内面炭化物付着
74	B区	竪穴住居8	弥生土器	甕	-	-	-	(7.8)	底部外面:ナデ	微砂 英・長	にぶい黄褐色		
75	O区	土壇2	弥生土器	甕	-	-	-	-	肩部外面:縦方向ハケメ	微砂～細砂 長・英・雲	にぶい褐色		内面炭化物付着 外面煤付着
76	O区	土壇2	弥生土器	甕	-	-	-	-	肩部外面:剥落のため調整不明	微砂～砂礫 長・英・雲・赤	にぶい黄褐色		
77	O区	土壇3	弥生土器	甕	(24.6)	-	-	-	肩部外面:縦方向ハケメ	微砂～細砂 長・英・雲	褐色		
78	O区	土壇4	弥生土器	甕	-	-	-	-	内面:ナデ	細砂 長・英・赤	浅黄褐色		外面煤付着
79	O区	土壇4	弥生土器	甕	-	-	-	-	口縁部外面:剥落のため調整不明	精良～砂礫 長・英・雲	褐色		
80	O区	土壇4	弥生土器	甕	-	-	-	-	口縁部外面:剥落のため調整不明	精良～砂礫 長・英・雲	褐色		
81	O区	土壇4	弥生土器	甕	-	-	-	-	口縁部:円形浮文	細砂 長・英	にぶい褐色		
82	O区	土壇4	弥生土器	甕	-	-	-	-	口縁部内面:斜格子文	細砂 長・英・赤	明赤褐色		
83	O区	土壇5	弥生土器	甕	10.0	-	-	-	口縁部:ヨコナデ	微砂 長・雲	浅黄褐色		
84	O区	土壇5	弥生土器	甕	10.0	-	-	-	口縁部外面:ハケメ	微砂 長・雲	褐色		
85	O区	土壇5	弥生土器	甕	12.6	-	-	-	口縁部外面:円形浮文	長・雲	浅黄褐色		
86	O区	土壇5	弥生土器	甕	-	-	-	5.6	体部内面:ナデ 底部:ナデ	微砂 長・雲	にぶい黄褐色		内面全体煤付着
87	O区	土壇5	弥生土器	甕	20.2	-	-	-	口縁部:ヨコナデ 肩部:ハケメ	微砂 英	灰白色		外面煤付着
88	O区	土壇6	弥生土器	甕	18.8	-	-	-	口縁部:ヨコナデ	微砂～砂礫 英・長	明赤褐色		内面炭化物付着 外面煤付着
89	O区	土壇6	弥生土器	甕	(12.8)	-	-	-	口縁部:ヨコナデ 頸部外面:ハケメ	微砂～砂礫 英・長・雲	にぶい褐色		外面煤付着
90	O区	土壇6	弥生土器	鉢	-	-	-	8.2	脚部内外面:ナデ	微砂～砂礫 英・長・雲	にぶい褐色		内・外面煤付着
91	O区	土壇7	弥生土器	甕	14.8	26.4	22.0	10.6	口縁部:ヨコナデ	微砂～細砂 長・英・雲	にぶい褐色		金蚕母が非常に多い
92	O区	土壇7	弥生土器	甕	-	-	-	-	口縁部:ヨコナデ 刻目突帯	微砂 英・赤	浅黄褐色		
93	O区	土壇7	弥生土器	甕	22.7	-	-	-	口縁部:円形浮文7ヶ所	微砂 長・赤	浅黄褐色		胎土分析番号④
94	O区	土壇7	弥生土器	甕	19.8	-	-	-	口縁部:円形浮文5ヶ所・2個一対穿孔	微砂 長・赤	灰白色		
95	O区	土壇7	弥生土器	甕	15.2	-	-	-	口縁部:刻目	微砂～砂礫 長・赤	褐色		胎土分析番号⑥
96	O区	土壇7	弥生土器	甕	-	-	-	-	口縁部外面:ハケメ	微砂 英・長	褐色		
97	O区	土壇7	弥生土器	甕	-	-	-	-	頸部:竹管文	微砂～細砂 長・英	灰白色		完形
98	O区	土壇7	弥生土器	甕	-	-	-	19.3	肩部:円形浮文5ヶ所	微砂 英・長	にぶい黄褐色		
99	O区	土壇7	弥生土器	甕	22.8	-	-	-	体部内面:ムビオサエ後ハケメ	微砂～細砂 長・英	暗赤褐色		
100	O区	土壇7	弥生土器	甕	(19.2)	-	-	-	口縁部:刻目	微砂～細砂 長・英	褐色		外面炭化物付着
101	O区	土壇7	弥生土器	高杯	18.8	-	-	-	体部:ハラミガキ(多角形)	微砂 長・角	にぶい黄褐色		
102	O区	土壇7	弥生土器	高杯	19.6	-	-	-	口縁部:穿孔2個一対	微砂 雲・赤・火山ガラス(?)	褐色		
103	O区	土壇7	弥生土器	高杯	20.2	-	-	-	口縁部外面:ヨコナデ 刻目	微砂～細砂 長・英・雲	黒褐色		
104	O区	土壇7	弥生土器	高杯	14.4	-	-	-	口縁部:ヨコナデ	微砂～砂礫 赤・雲	浅黄褐色		
105	O区	土壇7	弥生土器	鉢	15.0	-	-	-	口縁部:ヨコナデ	精良～微砂 長・角・火山ガラス(?)	黄褐色		
106	O区	土壇7	弥生土器	高杯	-	-	-	(10.6)	脚部:8方向スカシ	微砂～砂礫 長・英	にぶい褐色		
107	O区	土壇7	弥生土器	高杯	-	-	-	15.6	5方向スカシ	水澱粉土	浅黄褐色		
108	N区	土壇9	弥生土器	甕	-	-	-	-	口縁部:波状文	微砂～砂礫 英・長	にぶい赤褐色		
109	N区	土壇10	弥生土器	甕	-	-	-	-	口縁部外面:斜格子文	微砂～砂礫 英・長・雲	灰黄褐色		
110	N区	土壇10	弥生土器	甕	-	-	-	-	口縁部:ヨコナデ	細砂～砂礫 英・長・雲	浅黄褐色		
111	N区	土壇10	弥生土器	甕	-	-	-	-	胴部外面:縦方向ハケメ	微砂～砂礫 英・長	赤褐色		
112	N区	土壇10	弥生土器	甕	12.2	-	-	-	口縁部:ヨコナデ	微砂～細砂 英・長・赤	淡褐色		
113	N区	土壇11	弥生土器	甕	-	-	-	18.7	体部上半:不明瞭	細砂～砂礫 長・雲	黄褐色		
114	N区	土壇11	弥生土器	甕	-	-	-	7.0	口縁部:ヨコナデ	微砂～細砂 英・長	にぶい褐色		
115	N区	土壇11	弥生土器	甕	(12.2)	-	-	-	肩部内面:ナデ後横方向ハラミガキ	微砂～細砂 英・長	浅黄色		内外面煤付着 外面炭化物付着
116	M区	土壇12	弥生土器	甕	22.0	41.7	30	8.4	体部外面:ハラミガキ	細砂 英・長・雲・赤	にぶい黄褐色	完形	内外面煤付着 胎土分析番号⑦
117	M区	土壇12	弥生土器	甕	13.7	23.8	-	5.3	胴部外面:タテハラミガキ	微砂～砂礫 英・長・雲・角・赤	にぶい褐色		外面煤全周
118	M区	土壇12	弥生土器	水差し形高杯	7.3	16.5	17.0	7.0	体部外面:ハラミガキ	細砂 英・長・雲・角・赤	浅黄褐色	完形	
119	M区	土壇12	弥生土器	高杯	11.2	17.8	-	9.0	脚部:穿孔(6ヶ所)	砂礫 英・長・雲・赤	にぶい褐色	完形	
120	M区	土壇12	弥生土器	鉢	12.8	18.3	-	11.5	口縁部:2個一対の穿孔	砂礫 英・長・雲・角・赤	灰白色～にぶい黄褐色	完形	
121	KS区	土壇13	弥生土器	甕	(34.0)	-	-	(43.8)	体部外面下半:ナデ	微砂 長・雲	にぶい黄褐色		
122	KS区	土壇13	弥生土器	甕	(22.8)	-	-	-	口縁部:ヨコナデ・刻目	微砂～砂礫 英・長	明赤褐色		外面煤付着
123	KS区	土壇13	弥生土器	器台	-	-	-	(12.8)	外面:ハケメ	微砂～砂礫 英・長	灰黄褐色		
124	KS区	土壇14	弥生土器	甕	-	-	-	30.1	体部内面:ナデ後ハケメ	-	-		
125	KS区	土壇14	弥生土器	甕	(26.8)	-	-	-	肩部外面:縦方向ハケメ	微砂～細砂 英・長・雲・火山ガラス	にぶい黄褐色		内外面煤付着
126	KS区	土壇14	弥生土器	甕	(15.0)	-	-	-	肩部外面:縦方向ハケメ	微砂～砂礫 英・長・赤	浅黄褐色		内面炭化物付着 外面煤付着
127	KS区	土壇14	弥生土器	甕	16.0	-	-	-	内面:ナデ	長・英・角・雲・赤	褐色		
128	KS区	土壇14	弥生土器	高杯	(24.3)	-	-	-	口縁部:ハラミガキ	微砂～細砂 英・長	にぶい褐色		外面煤付着
129	KS区	土壇14	弥生土器	高杯	-	-	-	-	スカシは20ヶ所を想定	微砂 長・雲	褐色		
130	KS区	土壇15	弥生土器	甕	(15.1)	-	-	-	口縁部外面:ナデ・貼付突帯	微砂～砂礫 英・長	黒褐色		
131	KS区	土壇15	弥生土器	高杯	19.1	-	-	-	杯部内外面:ハラミガキ	微砂 長・雲	浅黄褐色		
132	KS区	土壇15	弥生土器	高杯	(18.8)	-	-	-	口縁部:ヨコナデ	微砂～砂礫 英・長・雲	にぶい黄褐色		外面煤付着

掲載番号	調査区	遺構名	種類	密種	口径 (cm)	器高 (cm)	最大径 (cm)	底径 (cm)	調整・特徴	胎土	色調 (外面)	残存状況	備考
133	K S区	土壇16	弥生土器	壺	-	-	-	-	頸部外面：縦方向ハケメ	微砂～細砂 英・長・赤	にぶい黄橙色		
134	K S区	土壇16	弥生土器	甕	-	-	-	-	口縁部：ヨコナデ	微砂～細砂 英・長	灰黄褐色		内外面煤付着
135	K S区	土壇17	弥生土器	壺	16.0	-	-	-	口縁部：円形浮文5ヶ所	微砂 長・赤	浅黄褐色		
136	K S区	土壇17	弥生土器	壺	(28.2)	-	-	-	口縁部：ヨコナデ	微砂～細砂 英・長・赤	淡褐色		
137	K S区	土壇17	弥生土器	高杯	24.8	-	-	-	杯部：ヘラミガキ (多角形)	微砂 長・赤	にぶい黄褐色 (部分的二色)		
138	K S区	土壇18	弥生土器	壺	-	-	-	-	口縁部外面：ヨコナデ ハケメ	微砂～細砂 英・長	灰黄褐色		
139	K S区	土壇18	弥生土器	高杯	-	-	-	-	口縁部：横方向ヘラミガキ	微砂～砂礫 英・長・角	にぶい黄褐色		内外面煤付着
140	K S区	土壇18	弥生土器	高杯	-	-	-	-	外面：ナデ スカシ有	微砂～細砂 英・長	灰黄褐色		
141	K S区	土壇19	弥生土器	壺	-	-	-	-	肩部外面：ナデ後ヘラミガキ	微砂～細砂 英・長・赤	にぶい黄褐色		
142	K S区	土壇20	弥生土器	壺	-	-	-	-	外面：ヘラミガキ	微砂～砂礫 英・長・赤	浅黄褐色		
143	K S区	土壇20	弥生土器	甕	-	-	-	-	口縁部：ヨコナデ	微砂～細砂 英・長	にぶい黄褐色		
144	K S区	土壇22	弥生土器	壺	(17.4)	-	-	-	頸部内外面ナデ	微砂 英・長・赤	橙色		外面煤付着
145	K S区	土壇22	弥生土器	甕	13.6	-	-	-	口縁部：ヨコナデ	微砂～砂礫 英・長・赤	橙色		
146	K S区	土壇22	弥生土器	壺	18.2	-	-	-	口縁部：ヨコナデ	微砂～細砂 英・長・赤	にぶい黄褐色		
147	C区	土壇25	弥生土器	壺	5.6	21.0	19.6	7.3	外面：ヘラミガキ	微砂 長・赤	浅黄褐色	完形	体部に穿孔
148	C区	土壇25	弥生土器	甕	14.7	23.0	17.0	5.1	体部内面：ヘラケズリ後ヘラミガキ	微砂 長・赤	浅黄褐色		
149	C区	土壇25	弥生土器	甕	5.9	6.9	-	3.0	外面：不明瞭	細砂 長・英・赤・角	にぶい褐色	完形	
150	C区	土壇25	弥生土器	甕	(26.2)	-	-	-	取手に2か所の穿孔	微砂～砂礫 英・長・赤	浅黄褐色		
151	B区	土壇26	弥生土器	甕	(15.0)	-	-	-	肩部内面：ヘラミガキ	微砂～砂礫 英・長・赤	浅黄褐色		
152	B区	土壇26	弥生土器	甕	17.8	-	-	-	肩部外面：ハケメ後ヘラミガキ	微砂～細砂 英・長・赤	浅黄褐色		
153	B区	土壇26	弥生土器	ジョッキ形	-	-	-	9.8	体部内外面：ヘラミガキ 脚部：穿孔	微砂～砂礫 英・長・赤	にぶい黄褐色		底部部に穿孔
154	B区	土壇31	弥生土器	甕	14.8	-	-	-	肩部：ハケメ	微砂～細砂 英・長	浅黄褐色		
155	B区	土壇31	弥生土器	高杯	21.6	-	-	-	口縁部：ヨコナデ	微砂～細砂 英・長	灰褐色		
156	N区	溝8	弥生土器	甕	(27.0)	-	-	-	口縁部内面：ハケメ	微砂～砂礫 英・長・赤・赤	褐色		
157	N区	溝8	弥生土器	甕	15.2	-	-	-	体部外面：ナデ	微砂 長・赤	浅黄褐色		
158	N区	溝8	弥生土器	鉢	(20.8)	-	-	-	体部外面：ヘラミガキ	微砂～砂礫 英・長・赤・赤	灰黄色		外面煤付着
159	K S区	溝11	弥生土器	甕	(16.8)	30.7	(20.6)	(6.2)	胴部内外面：ハケメ後ヘラミガキ	微砂～細砂 英・長・赤	にぶい黄褐色		内面炭化物付着 外面煤付着 胎土分析番号②
160	F区	溝21	弥生土器	壺	(9.8)	-	-	-	口縁部：ハケメ	微砂～砂礫 英・長	灰白色		
161	O区	河道2	弥生土器	壺	-	-	-	-	頸部外面：貼り付け突帯	微砂 英・赤	灰黄褐色		
162	O区	河道2	弥生土器	壺	-	-	26.5	-	頸部外面：貼り付け突帯	微砂 長・赤	灰黄褐色		
163	O区	河道2	弥生土器	壺	16.0	27.8	25.9	7.9	底部外面：ナデアゲ	微砂 長	にぶい黄褐色		
164	O区	河道2	弥生土器	壺	26.4	-	-	-	口縁部：円形浮文3ヶ所 体部：円形浮文4ヶ所	微砂～細砂 英・長・赤・赤	灰白色		
165	O区	包含層	弥生土器	壺	6.5	27.1	21.0	5.0	体部外面：上半ハケメ 下半ヘラミガキ	長・英・赤	浅黄褐色	完形	胎土分析番号⑤
166	O区	包含層	弥生土器	壺	13.8	-	-	-	頸部外面：貼り付け突帯	微砂 長・赤	浅黄褐色		
167	O区	包含層	弥生土器	壺	(15.2)	-	-	-	口縁部外面：貼り付け突帯 刻目	微砂～細砂 長・英	灰褐色		
168	O区	包含層	弥生土器	壺	10.5	-	-	-	口縁部：穿孔2個 対	細砂 英・長・赤	にぶい黄褐色		
169	K S区	包含層	弥生土器	壺	12.6	-	-	-	口縁部：ヨコナデ	微砂 長・英・赤	褐色		
170	O区	包含層	弥生土器	壺	25.0	-	-	-	口唇部：棒状浮文	微砂 長・赤	浅黄褐色		
171	O区	包含層	弥生土器	壺	16.2	-	21.6	-	頸部外面：穿孔	微砂 長・赤	灰黄色		
172	O区	包含層	弥生土器	壺	16.8	-	-	-	頸部外面：穿孔3個 対か	微砂～砂礫 長・英・赤	褐色		
173	O区	包含層	弥生土器	壺	16.8	-	-	-	口縁部内面：ヨコナデ	微砂 英	灰白色		内外面煤付着
174	O区	包含層	弥生土器	壺	14.5	-	-	-	頸部外面：指頭片痕文突帯	微砂 英・長・赤	にぶい黄褐色		
175	O区	包含層	弥生土器	壺	16.4	-	-	-	口縁部内面：ヨコナデ	微砂 長・赤	褐色		
176	O区	包含層	弥生土器	壺	(20.3)	-	-	-	口縁部：刻目	精良～砂礫 長・英	暗褐色		
177	O区	包含層	弥生土器	壺	-	-	-	-	頸部外面：ヘラケズリ後ヘラミガキ	微砂 英・赤	灰白色		
178	K S区	包含層	弥生土器	壺	-	-	(20.6)	(8.0)	体部外面：剥落により調整不明	細砂 金・長・英	褐色		
179	O区	包含層	弥生土器	壺	-	-	22.0	-	内面：ハケメ後ナデ	微砂 長・英	にぶい黄褐色		
180	O区	包含層	弥生土器	壺	-	-	16.0	-	体部内面：下ナデ	微砂 長・赤	灰黄褐色		
181	O区	包含層	弥生土器	壺	16.0	-	-	-	体部外面：ハケメ後ヘラミガキ	微砂 英・長・角・赤	浅黄褐色		北部九州系か 胎土分析番号①
182	O区	包含層	弥生土器	甕	16.6	28.8	20.9	5.5	底部：ナデ	精良～微砂 長	にぶい黄褐色	完形	
183	O区	包含層	弥生土器	甕	(17.8)	-	-	-	体部外面：ハケメ後縦方向ヘラミガキ	精良～砂礫 長・英・赤	浅黄褐色		外面煤付着
184	O区	包含層	弥生土器	甕	(18.8)	-	-	-	体部内面：ナデ ユビオサエ	細砂 長・英・赤	褐色		内面炭化物付着
185	O区	包含層	弥生土器	甕	16.2	-	-	-	肩部：ハケメ	微砂 長・英・赤	浅黄褐色		
186	O区	包含層	弥生土器	甕	(11.8)	-	-	-	肩部内面：ユビオサエ後ナデ	微砂 長・英・赤	浅黄褐色		
187	O区	包含層	弥生土器	甕	13.6	-	-	-	口縁部：ヨコナデ	微砂 長・英	灰褐色		
188	O区	包含層	弥生土器	高杯	(33.6)	-	-	-	口縁部：斜格文	精良～砂礫 長・英・角	浅黄褐色		
189	O区	包含層	弥生土器	高杯	20.5	-	-	-	口縁部外面：刻目	微砂～砂礫 長	にぶい黄褐色		
190	O区	包含層	弥生土器	高杯	21.0	-	-	-	口縁部：ヨコナデ	微砂 長・赤	にぶい黄褐色		
191	O区	包含層	弥生土器	高杯	19.4	-	19.6	-	体部内面：ハケメ後ヘラミガキ	微砂～砂礫 英・長	灰黄色		内外面煤付着
192	O区	包含層	弥生土器	高杯	18.6	-	-	-	口縁部：円形浮文	微砂 長	褐色		
193	K S区	包含層	弥生土器	高杯	15.0	-	-	-	口縁部：円形浮文・穿孔	長・英・赤	にぶい黄褐色		
194	O区	包含層	弥生土器	高杯	33.6	14.8	-	12.0	杯部：ヘラミガキ 脚部：ヘラミガキ	微砂 英・長・赤	灰黄褐色		
195	O区	包含層	弥生土器	高杯	16.8	9.3	-	13.0	杯部：ハケメ後ヘラミガキ	微砂 長・赤	浅黄褐色	完形	
196	O区	包含層	弥生土器	高杯	15.5	5.6	-	49.5	脚部外面：ナデ	微砂 長	灰白色		
197	O区	包含層	弥生土器	高杯	-	-	-	11.4	脚部外面：穿孔8ヶ所	微砂 赤	浅黄褐色		胎土分析番号③
198	O区	包含層	弥生土器	高杯	-	-	-	12.2	脚部：スカシ	長・赤	褐色		
199	O区	包含層	弥生土器	高杯	-	-	-	-	内盤充填の痕跡	微砂 長	にぶい黄褐色		

掲載番号	調査区	遺構名	種類	密種	口径 (cm)	器高 (cm)	最大径 (cm)	底径 (cm)	調整・特徴	胎土	色調(外面)	残存状況	備考
200	O区	包含層	弥生土器	鉢	-	-	-	(9.3)	体部内面：ヘラムガキ	微砂～細砂 長・英・赤	橙色		
201	N区	包含層	弥生土器	高杯	-	-	-	8.9	脚柱部外面：ヘラムガキ	微砂～砂礫 長・英・赤	褐色		
202	N区	包含層	弥生土器	ジョッキ形	-	-	-	10.9	底部外面：ヘラムガキ	微砂～細砂 長・英・赤	褐色		
203	O区	包含層	弥生土器	ジョッキ形	11.2	-	-	-	口縁部外面：刻目 体部内面：ナデ	微砂～細砂 長	灰白色		
204	B区	包含層	弥生土器	ジョッキ形	-	-	-	-	剥落のため調整不明	微砂～砂礫 長・英・赤	褐色		
205	O区	包含層	弥生土器	ジョッキ形	(12.8)	-	-	-	体部外面：ハケメ後ナデ	細砂 長・英・赤	褐色		
206	B区	包含層	弥生土器	回転台形	(21.6)	-	-	-	口縁部：剥落のため調整不明	微砂～砂礫 長・英・赤	淡黄色		
207	B区	包含層	弥生土器	回転台形	(19.6)	-	-	-	外面：ナデ	微砂～砂礫 長・英・赤	灰白色		
208	M区	土器精製1	弥生土器	鉢	30.4	-	-	-	体部外面：タタキ後ヘラムガキ	微砂 長・英・赤	浅黄褐色		
209	M区	土器精製1	弥生土器	壺	-	-	37.0	12.8	体部内面：ユビオサエ後ヘラムガキ	細砂～砂礫 長・英・赤	浅黄褐色		体部焼成後穿孔
210	L区	土器溜まり1	弥生土器	壺	12.5	24.2	17.5	8.5	頸部内面：ユビナデ	砂礫 長・英・赤	にぶい橙色	完形	
211	L区	土器溜まり1	弥生土器	壺	17.0	32.0	22.8	7.4	底部外面：ヘラムガキ	微砂 長・英・赤	明黄褐色	完形	
212	L区	土器溜まり1	弥生土器	壺	(16.1)	-	-	-	口縁部：ナデ	細砂～砂礫 長・英・赤	浅黄褐色		胎土分析番号(49)
213	L区	土器溜まり1	弥生土器	壺	8.6	12.5	15.5	-	体部外面：ヘラムガキ	細砂 長・英・赤	にぶい橙色		
214	L区	土器溜まり1	弥生土器	甕	13.4	24.3	17.0	5.4	胴部外面：ハケメ後一部ナデ	砂礫 長・英・赤	にぶい橙色	完形	外面煤化
215	L区	土器溜まり1	弥生土器	甕	14.0	24.2	16.8	5.4	肩部外面：ハケメ上具あたり痕	細砂 長・英・赤	にぶい橙色		内外面煤・炭化物付着
216	L区	土器溜まり1	弥生土器	甕	15.0	12.6	14.4	5.0	肩部外面：ハケメ状工具ナデ	砂礫 長・英・赤	にぶい橙色	完形	内外面煤・炭化物付着
217	L区	土器溜まり1	弥生土器	壺	18.0	32.2	27.1	7.5	胴部外面：ハケメ後ヘラムガキ	微砂～細砂 長・英・赤	浅黄褐色	完形	
218	L区	土器溜まり1	弥生土器	壺	17.3	30.9	26.5	8.6	体部外面：ハケメ後ミガキ	微砂～砂礫 長・英・赤	浅黄褐色	完形	
219	L区	土器溜まり1	弥生土器	甕	15.0	-	17.2	-	体部外面：ハケメ	細砂～砂礫 長・英・赤	灰黄褐色		
220	L区	土器溜まり1	弥生土器	甕	14.7	-	(18.5)	-	口縁部：ヨコナデ	細砂～砂礫 長・英・赤	浅黄褐色		
221	L区	土器溜まり1	弥生土器	高杯	27.5	18.5	-	18.6	外面：ヘラムガキ	長・英・赤	浅黄褐色		
222	L区	土器溜まり1	弥生土器	高杯	25.0	16.9	-	17.4	柱部：ハケメ後ヘラムガキ	砂礫 長・英・赤	褐色	完形	
223	L区	土器溜まり1	弥生土器	高杯	10.6	11.4	-	10.7	杯部・脚部外面：ヘラムガキ	細砂 長・英・赤	にぶい橙色		
224	L区	土器溜まり1	弥生土器	高杯	14.0	7.9	-	-	杯部外面：ハケメ後ヘラムガキ	細砂 長・英・赤	灰黄色		
225	L区	土器溜まり1	弥生土器	鉢	15.6	8.7	-	4.5	体部内外面：ヘラムガキ	細砂 長・英・赤	にぶい橙色		
226	L区	土器溜まり1	弥生土器	鉢	18.5	(8.3)	-	5.0	体部外面：ヘラムガキ	砂礫 長・英・赤	にぶい橙色		
227	L区	土器溜まり1	弥生土器	鉢	31.6	17.2	-	8.5	内面：剥落のため不明	砂礫 長・英・赤	褐色	完形	
228	L区	土器溜まり1	弥生土器	鉢	25.0	-	24.2	-	体部内面：ヘラケズリ後ヘラムガキ	微砂 長・英・赤	浅黄褐色		
229	L区	土器溜まり1	弥生土器	鉢	-	-	-	13.1	体部内面：ヘラケズリ後ミガキ	細砂～砂礫 長・英・赤	明黄褐色		
230	L区	土器溜まり1	弥生土器	器台	17.7	13.1	-	16.3	上段スカシ 方向と円形を交互に配置(計6ヶ所)	砂礫 長・英・赤	にぶい橙色		胎土分析番号(50)
231	L区	土器溜まり1	弥生土器	器台	20.4	19.8	-	21.8	筒部外面：ヘラムガキ	微砂～細砂 長・英・赤	褐色		
232	O区	竪穴住居9	土師器	壺	-	-	-	-	肩部外面：カキメ	精良～砂礫 長・英・赤	灰白色		外面煤付着
233	O区	井戸1	土師器	壺	10.1	6.6	6.6	-	口縁部外面：ナデ	微砂～砂礫 長・英・赤	褐色		
234	O区	井戸1	土師器	壺	10.8	6.7	7.2	-	口縁部外面：横方向ヘラムガキ	微砂～砂礫 長・英・赤	にぶい橙色	完形	
235	O区	井戸1	土師器	壺	14.0	-	-	-	口縁部内面：ハケメ後ナデ	微砂～砂礫 長・英・赤	浅黄褐色		
236	O区	井戸1	土師器	甕	15.6	-	13.3	-	口縁部内面：タタキ 体部外面：タタキ	微砂 長・英・赤	浅黄褐色		外面煤付着
237	O区	井戸1	土師器	甕	10.4	13.6	13.6	-	体部外面：タタキ	微砂～細砂 長・英・赤	にぶい黄褐色		
238	O区	井戸1	土師器	甕	8.8	-	11.5	-	口縁部：沈澱3条	精良～微砂 長・英・赤	灰白色		
239	O区	井戸1	土師器	甕	12.0	-	15.4	-	体部外面：ハケメ	精良～細砂 長・英・赤	明黄褐色		外面煤付着
240	O区	井戸1	土師器	甕	12.2	-	18.2	-	体部内面：ヘラケズリ ユビオサエ ナデアゲ	精良～微砂 長・英・赤	にぶい黄褐色		外面煤付着
241	O区	井戸1	土師器	甕	14.4	-	22.6	-	体部外面：ハケメ ナデ	長・英・赤	浅黄褐色		
242	O区	井戸1	土師器	甕	11.8	16.0	16.5	-	体部外面中位：横方向ハケメ	微砂 長・英・赤	灰黄色		外面下半特に煤付着
243	O区	井戸1	土師器	甕	12.3	20.2	19.1	-	口縁部：ナデ	精良 長・英・赤	黒褐色	完形	外面煤付着
244	O区	井戸1	土師器	甕	14.0	23.0	26.0	-	口縁部外面：ナデ	精良 長・英・赤	黒褐色	完形	外面煤付着 頸部にツタ残存
245	O区	井戸1	土師器	高杯	15.6	-	-	-	口縁部：ヨコナデ	水濃粘土	にぶい黄褐色		
246	O区	井戸1	土師器	高杯	15.7	-	-	-	杯部外面：ナデ後ヘラムガキ	細砂 長・英・赤	褐色		
247	O区	井戸1	土師器	高杯	(21.8)	-	-	-	杯部外面：ヨコナデ後ヘラムガキ	微砂～砂礫 長・英・赤	褐色		
248	O区	井戸1	土師器	高杯	-	-	-	(11.0)	脚柱部外面：ナデ後ヘラムガキ	微砂～細砂 長・英・赤	灰黄色		
249	O区	井戸1	土師器	高杯	12.8	12.6	-	9.7	杯部内外面：ヘラムガキ	微砂 長・英・赤	灰黄色		
250	O区	井戸1	土師器	高杯	15.5	11.9	-	12.1	杯部：剥落しているため調整不明瞭	水濃粘土	褐色		
251	O区	井戸1	土師器	鉢	14.6	6.4	-	-	口縁部：ヨコナデ 底部内面：ヘラムガキ	微砂 長・英・赤	灰黄色	完形	
252	O区	井戸1	土師器	器台	10.0	6.6	-	8.3	受部内面：ヘラムガキ	水濃粘土・赤	浅黄褐色		
253	O区	井戸1	土師器	鉢	-	-	-	4.3	内底面：ハケメ	微砂～砂礫 長・英・赤	赤褐色		製塩土器
254	N区	井戸2	土師器	壺	-	-	12.8	1.5	体部：内面：ハケメ後ナデ後ヘラムガキ	微砂～細砂 長・英・赤	暗灰黄色		内面炭化物付着 外面煤付着
255	N区	井戸2	土師器	壺	12.0	17.6	15.0	-	肩部外面：ヘラケズリ後ヘラムガキ	長・英・赤	褐色	完形	
256	N区	井戸2	土師器	甕	14.8	23.7	20.3	45.0	底部：ヘラムガキ	微砂 長・英・赤	にぶい黄褐色		
257	N区	井戸2	土師器	甕	14.2	19.9	20.4	-	肩部：波状文	微砂 長	黒褐色	完形	外面煤付着 頸部ツタ残存
258	N区	井戸2	土師器	甕	15.3	24.7	21.8	-	体部外面：調整不明瞭	精良～砂礫 長・英・赤	黒褐色		外面全体煤付着
259	N区	井戸2	土師器	甕	15.2	24.9	22.6	-	体部外面：ハケメ 縦方向ヘラムガキ	細砂 長・英・赤	浅黄褐色		外面全体煤付着

掲載 番号	調査区	遺構名	種類	密種	口径 (cm)	器高 (cm)	最大径 (cm)	底径 (cm)	調整・特徴	胎土	色調(外面)	残存 状況	備考
260	N区	井戸2	土師器	甕	14.4	23.0	20.6	-	底部外面:ヘラミガキ	精良 長	灰白色	完形	頭部にツタ残存 外面煤付着
261	N区	井戸2	土師器	甕	14.8	25.6	22.0	6.5	底部外面:ヘラミガキ	精良~微砂 長・雲	浅黄褐色	完形	外面煤付着 2次焼成
262	K S区	井戸3	土師器	壺	10.8	11.7	12.1	-	口縁部:接合痕跡	水漚粘土 微砂~細砂 英・長・赤・雲	淡黄色		
263	K S区	井戸3	土師器	壺	10.9	9.5	11.5	-	体部外面上半:ナデ	水漚粘土	褐色		
264	K S区	井戸3	土師器	壺	10.8	8.5	10.6	-		微砂 長・雲	褐色		
265	K S区	井戸3	土師器	壺	13.0	-	10.4	-	体部外面:ヘラケズリ 内面:ナデ	水漚粘土	淡赤褐色		
266	K S区	井戸3	土師器	壺	18.4	-	-	-	口部:ヨコナデ	微砂~砂礫 英・長・赤	浅黄褐色		
267	K S区	井戸3	土師器	壺	18.6	-	26.1	-	体部外面:ハケメ後ヘラミガキ	微砂 長・赤・雲	浅黄褐色		胎土分析番号 (14)
268	K S区	井戸3	土師器	壺	14.2	-	29.8	-	体部外面:ハケメ ヘラミガキ	微砂~細砂 長・雲・赤	にぶい褐色		
269	K S区	井戸3	土師器	壺	16.2	-	28.4	-	口縁部:ヨコナデ	微砂~細砂 長・雲・赤	にぶい黄褐色		
270	K S区	井戸3	土師器	壺	(15.0)	-	-	-	肩部外面:ハケメ	微砂~細砂 英・長・赤・雲	黄褐色		
271	K S区	井戸3	土師器	壺	16.0	-	-	-	口縁部・頸部:ヨコナデ	微砂 長・雲	浅黄褐色		
272	K S区	井戸3	土師器	壺	-	19.9	15.9	2.7	底面:ナデ	微砂~砂礫 長・英	浅黄褐色	完形	
273	K S区	井戸3	土師器	壺	26.0	42.2	38.1	6.0	底部外面:ハケメ後ナデ	微砂 長・英・石	浅黄褐色	完形	
274	K S区	井戸3	土師器	壺	20.4	-	-	-	口縁部内外面:ハケメ	微砂~細砂 英・長・赤	浅黄色		
275	K S区	井戸3	土師器	壺	19.0	-	-	-	内面:ナデ	微砂~細砂 長	灰白色		
276	K S区	井戸3	土師器	壺	(19.9)	-	-	-	体部外面:タタキ後ハケメ後ヘラミガキ	微砂~砂礫 英・長・赤	浅黄褐色		
277	K S区	井戸3	土師器	壺	-	-	27.8	-	体部外面:タタキ後ハケメ	微砂~細砂 英・長	浅黄褐色		
278	K S区	井戸3	土師器	壺	-	-	17.8	1.6	体部外面:ナデ	微砂~細砂 英・長・赤	淡黄色	完形	
279	K S区	井戸3	土師器	甕	14.2	22.6	19.5	2.6	底部外面:ヘラミガキ	微砂 長	黒色	完形	頭部にツタ残存
280	K S区	井戸3	土師器	甕	14.5	22.9	20.2	4.4	体部外面:ハケメ後ヘラミガキ	微砂 長・雲・赤	褐色		
281	K S区	井戸3	土師器	甕	14.0	21.1	19.7	2.5	底部外面 ヘラミガキ	微砂~細砂 長	黒褐色		
282	K S区	井戸3	土師器	甕	12.8	-	-	-	体部外面:ヘラミガキ ナデ	微砂~砂礫 英・長・赤・雲	灰黄色	完形	外面煤付着
283	K S区	井戸3	土師器	甕	(12.6)	-	-	-	肩部外面:刺突文	微砂~砂礫 英・長・赤・雲	褐色		内面炭化物付着 外面煤付着
284	K S区	井戸3	土師器	甕	(14.8)	-	(21.6)	-	体部内面上半にユビオサエがおよぶ	微砂~細砂 長・雲	浅黄褐色		
285	K S区	井戸3	土師器	甕	(13.4)	(22.1)	(20.0)	2.4		微砂~砂礫 英・長・赤	にぶい黄褐色		内面炭化物付着 外面煤付着
286	K S区	井戸3	土師器	甕	16.7	-	-	-	体部外面:ハケメ ヘラミガキ	微砂~砂礫 英・長	褐色		外面煤付着
287	K S区	井戸3	土師器	甕	13.7	-	(20.3)	-	体部外面:ヘラミガキ	微砂~砂礫 英・長・雲	にぶい黄褐色		内外面煤・炭化物付着
288	K S区	井戸3	土師器	甕	14.5	-	19.4	-	体部外面上半:ハケメ 下半:ヘラミガキ	微砂~細砂 英・長・赤	にぶい褐色		内面炭化物付着 外面煤付着
289	K S区	井戸3	土師器	甕	(12.9)	-	-	-	胴部外面:ヘラミガキ ナデ	微砂~砂礫 英・長・雲	浅黄褐色		内面炭化物付着 外面煤付着
290	K S区	井戸3	土師器	甕	13.0	20.4	18.4	-	体部下半:ナデ	英・長・角	浅黄褐色	完形	外面煤付着
291	K S区	井戸3	土師器	甕	5.4	-	-	-	肩部外面:ハケメ	微砂~砂礫 英・長・赤	浅黄褐色		
292	K S区	井戸3	土師器	甕	11.8	-	14.8	-	体部内面:ヘラケズリ後ナデ	微砂 英・長・雲	灰黄褐色		外面煤付着
293	K S区	井戸3	土師器	甕	(12.8)	-	-	-	肩部外面:ハケメ	微砂~砂礫 英・長・雲・赤	にぶい黄褐色		内面炭化物付着 外面煤付着
294	K S区	井戸3	土師器	甕	19.3	-	-	-	体部外面:刺突文(1個)	微砂~砂礫 英・長・雲・赤	灰白色		内面炭化物付着 外面煤付着
295	K S区	井戸3	土師器	甕	14.3	23.4	21.0	4.9	体部下半:ナデ	微砂~細砂 英・長・赤	淡褐色		内面炭化物付着 外面煤付着
296	K S区	井戸3	土師器	甕	13.0	-	17.3	-	口縁部外面:ナデ	微砂~細砂 長・雲	褐色		334と同一個体 胎土分析番号 (56)
297	K S区	井戸3	土師器	甕	(14.2)	-	-	-	口縁部外面:ユビオサエ 内面:ハケメ	微砂~砂礫 英・長・赤	淡黄色		
298	K S区	井戸3	土師器	甕	13.8	-	-	-	肩部外面:タタキ後ハケメ	微砂~砂礫 英・長・赤・雲	灰白色		胎土分析番号 (58)
299	K S区	井戸3	土師器	甕	12.1	15.1	15.0	-	肩部:刺突文	微砂~砂礫 英・長・赤	灰白色		内外面炭化物付着
300	K S区	井戸3	土師器	甕	15.0	-	-	-	口部:ヨコナデ	微砂 英・雲・赤	褐色		胎土分析番号 (10)
301	K S区	井戸3	土師器	甕	14.6	-	-	-	口縁部:ヨコナデ ユビオサエ	微砂~砂礫 英・長・赤	灰黄色		外面煤付着 内面炭化物付着 胎土分析番号 (61)
302	K S区	井戸3	土師器	甕	10.0	11.4	12.4	-	体部上半:ヘラケズリ後ヘラミガキ	精良~微砂 長・雲	浅黄褐色		内面炭化物付着 外面煤付着
303	K S区	井戸3	土師器	甕	14.3	-	16.2	-	口縁部:ヨコナデ	微砂 英・長・雲	浅黄褐色		胎土分析番号⑨
304	K S区	井戸3	土師器	甕	13.2	22.5	18.4	2.5	体部外面:タタキ後ハケメ	細砂 英・長	灰白色		胎土分析番号 (57)
305	K S区	井戸3	土師器	甕	10.4	10.3	10.5	2.1	体部内外面:ヘラケズリ後ナデ	水漚粘土	にぶい褐色		
306	K S区	井戸3	土師器	甕	-	-	-	3.1	体部内面:工具痕	微砂 長・英・雲・赤	褐色		
307	K S区	井戸3	土師器	高杯	14.0	9.2	-	(11.6)	体部内外面:ヘラミガキ	砂礫 英・長・雲・赤	褐色		
308	K S区	井戸3	土師器	高杯	23.0	-	-	-	杯部内外面:ハケメ後ヘラミガキ	水漚粘土	褐色		
309	K S区	井戸3	土師器	高杯	28.8	-	-	-	杯部外面:ハケメ後ヘラミガキ	水漚粘土	褐色		内外面赤色顔料
310	K S区	井戸3	土師器	高杯	18.8	-	-	-	杯部内底面:ハケメ	水漚粘土	褐色		
311	K S区	井戸3	土師器	高杯	19.9	-	-	-	杯部外面:ハケメ後ヘラミガキ	微砂~細砂 英・長・赤・雲	褐色		
312	K S区	井戸3	土師器	高杯	20.2	-	-	-	内面:ハケメ後ヘラミガキ	水漚粘土	褐色		
313	K S区	井戸3	土師器	高杯	13.2	-	-	-	体部外面下半:ハケメ	微砂 長・雲・赤	褐色		
314	K S区	井戸3	土師器	高杯	12.6	-	-	-	杯部外面:ヘラケズリ	水漚粘土	褐色		
315	K S区	井戸3	土師器	高杯	(12.7)	9.7	-	(16.3)	杯部内外面:ヘラミガキ	微砂~細砂 英・長・赤	褐色		

掲載 番号	調査区	遺構名	種類	密種	口径 (cm)	器高 (cm)	最大径 (cm)	底径 (cm)	調整・特徴	胎土	色調(外面)	残存 状況	備考
316	K S区	井戸3	土師器	高杯	(19.0)	-	-	-	杯部内面：ハケメ後ミガキ	微砂～砂礫 英・ 長・赤	橙色		
317	K S区	井戸3	土師器	高杯	18.8	13.8	-	14.8	体部外面：ヘラケズリ 面取り 柱部外面：面取り・ナデ	長・英・赤	黄橙色	完形	外面煤付着
318	K S区	井戸3	土師器	高杯	-	-	-	13.9	脚部内面：ユビオサエ	微砂～細砂 英・ 長・赤	橙色		
319	K S区	井戸3	土師器	高杯	-	-	-	16.9	脚柱部外面：ヘラミガキ	微砂～細砂 英・長	橙色		脚部内外外面 煤付着
320	K S区	井戸3	土師器	高杯	-	-	-	5.6	脚部外面ヘラケズリ後ヘラミガ キ	微砂～細砂 長・雲	浅黄橙色		
321	K S区	井戸3	土師器	鉢	12.6	-	12.3	-	体部内面：ナデ	精良～微砂 長 雲・赤	浅黄橙色		
322	K S区	井戸3	土師器	鉢	(13.0)	6.7	-	-	口縁部～体部外面上半：ナデ	微砂～細砂 英・ 長・雲	橙色		
323	K S区	井戸3	土師器	鉢	13.0	5.5	-	-	体部外面上半：ナデ	長・雲	にぶい橙色		
324	K S区	井戸3	土師器	鉢	14.0	-	-	-	内外面：ヘラミガキ	微砂 長	にぶい黄橙色		
325	K S区	井戸3	土師器	鉢	12.0	4.8	-	1.8	口縁部：ヨコナデ	長・雲	橙色		
326	K S区	井戸3	土師器	鉢	14.9	5.5	-	-	内面：ハケメ	微砂～砂礫 英・長	橙色		
327	K S区	井戸3	土師器	鉢	(15.0)	-	-	-	体部外面：ヘラケズリ後ハケメ	微砂～砂礫 英・ 長・赤	橙色		
328	K S区	井戸3	土師器	鉢	16.6	6.9	-	4.4	体部外面：タタキ	微砂～砂礫 長・雲	にぶい橙色		
329	K S区	井戸3	土師器	鉢	(15.0)	-	-	-	体部内外面：ユビオサエ後ナデ	微砂～細砂 英・ 長・赤	黄灰色		
330	K S区	井戸3	土師器	鉢	(13.9)	-	-	-	口縁部：ヨコナデ		にぶい橙色		外面炭化物付着
331	K S区	井戸3	土師器	鉢	36.8	22.0	35.9	9.3	体部内面：ハケメ後ユビオサエ	長・角・雲	浅黄橙色		
332	K S区	井戸3	土師器	鉢	(22.4)	-	-	-	外面上半：ハケメ	細砂～砂礫 英・ 長・雲・赤	浅黄橙色		
333	K S区	井戸3	土師器	鉢	18.0	11.6	18.6	-	口縁部：ヨコナデ	微砂～砂礫 英・長	浅黄橙色	完形	内面炭化物付着 外面煤付着 296と同一個体
334	K S区	井戸3	土師器	甕	-	-	-	-	外面：ハケメ	微砂～細砂 英・長	灰褐色		
335	K S区	井戸3	土師器	鉢	14.0	8.3	-	5.4	口縁部：剥落のため不明 体部外面：ナデ	細砂 長・英・赤	黄橙色	完形	
336	K S区	井戸3	土師器	鉢	9.5	5.5	8.1	4.4	体部外面：無調整 内面：ヘラ ミガキ	微砂～細砂 英・ 長・赤	灰褐色		
337	K S区	井戸3	土師器	鉢	16.5	-	-	-		微砂～細砂 英・ 長・赤	橙色		
338	K S区	井戸3	土師器	鉢	-	-	-	-	体部外面：ナデ後ミガキ 内面：タタキ後ナデ後ヘラミガキ	微砂～細砂 英・ 長・赤	にぶい橙色		
339	K S区	井戸3	土師器	手捏ね	(2.3)	3.4	(3.5)	-	内外面：ユビオサエ	微砂～砂礫 英・ 長・雲	にぶい黄橙色		
340	K S区	井戸3	土師器	器台	9.4	-	-	-	杯部内面：ユビオサエ後ナデ	微砂～細砂 英・ 長・赤	橙色	完形	
341	K S区	井戸3	土師器	器台	10.2	-	-	-	脚部外面：面取り	微砂～細砂 英・ 長・赤	橙色		
342	K S区	井戸3	土師器	器台	10.9	9.6	-	11.4	口縁部：ヨコナデ	微砂 長・雲	橙色		
343	K S区	井戸3	土師器	器台	-	-	-	10.8	杯部：剥落しているため調整不 明瞭	微砂 長・赤	橙色		胎土分析番号⑧
344	K S区	井戸3	土師器	器台	18.0	9.8	-	17.0	体部外面：ナデ	微砂 長・英・雲・ 赤	浅黄橙色		
345	K S区	井戸3	土師器	蓋	(14.3)	4.1	-	-	外面：ユビオサエ後ナデ 内面：ハケメ	細砂 英・長・雲・ 赤	浅黄橙色		
346	K S区	井戸3	土師器	手焙形	14.0	18.6	16.1	3.8	体部内面：ユビオサエ後ナデ	細砂～砂礫 英・ 長・赤	浅黄橙色		
347	O区	土壇35	須臾器	蓋	(14.4)	-	-	-	回転ナデ ヘラケズリ	細砂 長	青灰色		
348	O区	土壇35	須臾器	蓋	(10.6)	-	-	-	回転ナデ ヘラケズリ	細砂 長	青灰色		
349	O区	土壇35	土師器	甕	-	-	-	-	ユビオサエ後ハケメ	精良～砂礫 長・英	橙色		外面炭化物付着
350	K S区	溝29	土師器	壺	20.0	-	-	-	口縁部：ヨコナデ	微砂 長・雲	橙色		
351	K S区	溝29	土師器	甕	(12.0)	-	-	-	口縁部：ユビオサエ後ヨコナデ	微砂～砂礫 長・英	にぶい褐色		外面炭化物付着
352	K S区	溝29	土師器	甕	13.0	-	-	-	口縁部：櫛指洗線	微砂 長・雲	にぶい黄橙色		
353	K S区	溝29	土師器	甕	(15.0)	-	-	-	口縁部：櫛指洗線	微砂～砂礫 長・ 英・赤・雲	にぶい褐色		
354	K S区	溝29	土師器	高杯	22.0	-	-	-	杯部：ヘラミガキ	水濁粘土	浅黄橙色		
355	K S区	溝30	土師器	壺	15.0	-	-	-	口縁部：ヨコナデ	長・雲・赤	橙色		
356	K S区	溝30	土師器	壺	(17.8)	-	-	-	口縁部：ヨコナデ	微砂～砂礫 長・ 英・赤	橙色		
357	K S区	溝30	土師器	甕	-	-	-	-	口縁部：櫛指洗線	微砂～砂礫 長・ 英・雲	にぶい黄橙色		外面煤付着
358	K S区	溝30	土師器	甕	-	-	-	-	口縁部：櫛指洗線	微砂～細砂 長・英	褐色		
359	K S区	溝30	土師器	甕	(12.8)	-	-	-	口縁部内面：ハケメ	微砂～砂礫 長・ 英・赤	にぶい黄褐色		
360	K S区	溝30	土師器	高杯	9.0	-	-	-	脚部部：穿孔あり	微砂～細砂 英・ 長・赤・雲	橙色		
361	A区	水山2	須臾器	蓋	(16.0)	-	-	-	外面：回転ヘラケズリ 回転ナ デ	微砂～砂礫 英・長	青灰色		
362	J区		須臾器	蓋	(16.1)	-	-	-	内外面：回転ナデ	微砂～細砂 英・長	灰白色		
363	K S区	包含層	須臾器	杯	17.0	36.5	-	13.5	回転ナデ	微砂～細砂 長・英	灰白色		
364	B区	包含層	土師器	碗	(13.3)	4.5	-	(6.9)	剥落のため調整不明	微砂～砂礫 英・ 長・赤	浅黄橙色		
365	B区	包含層	土師器	碗	-	-	-	(6.8)	剥落のため調整不明	微砂～砂礫 英・ 長・雲赤	橙色		
366	L区	包含層	土師器	碗	-	-	-	5.4	見込み：ナデ	微砂 長	淡橙色		
367	L区	包含層	土師器	碗	-	-	-	8.5	見込み：ヘラミガキ	微砂 長・英・雲	灰白色		
368	L区	包含層	土師器	碗	-	-	-	4.3	見込み：ナデ	微砂～砂礫 長・英	灰白色		
369	L区	包含層	甕	壺	15.4	-	-	-	口縁部：ヨコナデ	微砂～細砂 長・英	にぶい赤褐色		
370	L区	溝39	肥前	皿	-	-	-	3.8	高台：削り出し				17C前半
371	K S区	溝39	肥前	皿	-	-	-	4.4	高台：削り出し				1590年～1610年
372	L区	溝39	肥前	仏花器	-	10.1	-	7.4	耳が3ヶ所				
373	L区	溝39	中国	碗	-	-	-	-					16C末～17C前 半
374	L区	溝39	肥前	皿	(13.7)	2.6	-	(5.9)	離れ砂付着				17C前半
375	L区	溝39	肥前	碗	(11.0)	-	-	-	外面：樹木の文様				17C末～18C前 半
376	L区	溝39	肥前	猪口	7.8	5.9	5.7	-	見込みに図線と簡略化された蚊 型紙刷り			完形	18C末～19C初
377	L区	溝39	瀬戸美濃	鉢	17.4	-	-	-					

石器・石製品観察表

掲載番号	地区	遺構名	時期	種別	型式	材質	長さ (mm)	幅 (mm)	厚み (mm)	重量 (g)	残存率	備考
S 1	B区	溝 7	弥・前	石斧未製品orタタキ石		珒岩	146.5	84.5	64.5	1189.99	?	
S 2	O区	包含層	弥・前	石核orタタキ石(後使用か?)		サヌカイト	73.0	63.5	25.3	145.61		
S 3	O区	竪穴住居 1~4	弥・中	石鏃	凸基Ⅱ式	サヌカイト	31.5	16.8	5.0	2.63	ほぼ完存	
S 4	O区	竪穴住居 1~4	弥・中	石鏃	平基式	サヌカイト	16.0	17.0	33.0	0.79	一部欠損	
S 5	O区	竪穴住居 1~4	弥・中	石鏃	凹基式	サヌカイト	26.5	13.5	2.7	0.92	一部欠損	
S 6	O区	竪穴住居 1~4	弥・中	砥石		流紋岩	49.5	40.0	16.2	46.69		
S 7	O区	竪穴住居 1~4	弥・中	石包丁片(楔に転用か?)		サヌカイト	46.0	40.0	8.5	14.54	欠損	
S 8	B区	竪穴住居 8	弥・中	石鏃	凹基式	サヌカイト	24.5	18.5	2.6	1.03	完存	
S 9	B区	竪穴住居 8	弥・中	石鏃	不明	サヌカイト	16.0	8.0	3.3	0.41	欠損	
S 10	O区	土壇 2	弥・中	楔?		サヌカイト	48.0	60.5	10.4	36.80		
S 11	O区	土壇 6	弥・中	石包丁?(再加工品か?)		サヌカイト	74.0	42.5	12.0	50.45		珪酸付着
S 12	N区	土壇 10	弥・中	楔		サヌカイト	34.0	23.5	8.3	6.95		
S 13	N区	土壇 10	弥・中	楔		サヌカイト	31.5	23.0	8.9	5.97		
S 14	N区	土壇 10	弥・中	楔?		サヌカイト	33.5	21.5	5.7	4.89		
S 15	KS区(西)	土壇 14	弥・中	石鏃	凸基Ⅰ式	サヌカイト	28.3	12.8	4.2	1.46	完存	
S 16	KS区(西)	土壇 14	弥・中	スクレイパー		サヌカイト	45.0	32.3	6.2	9.11		
S 17	KS区(西)	土壇 14	弥・中	スクレイパー		サヌカイト	56.5	62.5	13.3	42.91		
S 18	KS区(西)	土壇 15	弥・中	打製石包丁		サヌカイト	68.0	44.0	14.5	63.70		
S 19	KS区(西)	土壇 15	弥・中	スクレイパー?		サヌカイト	69.2	35.5	10.4	24.54		
S 20	KS区(西)	土壇 15	弥・中	スクレイパー		サヌカイト	103.5	70.5	12.6	132.08	完存	
S 21	KS区(西)	土壇 15	弥・中	磨製石斧		サヌカイト	154.0	61.0	45.5	706.99	ほぼ完存	
S 22	KS区(西)	溝 11	弥・中	石鏃	凸基Ⅰ式	サヌカイト	17.0	13.0	2.5	0.50	完存	
S 23	KS区(西)	溝 11	弥・中	石鏃	平基式	サヌカイト	25.0	15.5	4.5	1.29	完存	
S 24	KS区(西)	溝 11	弥・中	石包丁		サヌカイト	123.0	47.5	14.5	89.08	完存	
S 25	O区	包含層	弥・中	磨製石包丁		白岩	109.0	48.5	93.0	65.37	一部欠損	
S 26	KN区(西)	包含層	弥・中	磨製石包丁		粘板岩	73.5	56.5	12.7	55.61	欠損	
S 27	KS区(西)	包含層	弥・中	石包丁		サヌカイト	54.0	42.0	10.2	28.85	欠損	
S 28	KS区(西)	包含層	弥・中	打製石包丁		サヌカイト	133.0	59.5	11.9	93.67	完存	
S 29	O区	包含層	弥・中	石包丁		サヌカイト	104.0	36.0	97.0	47.83	完存	
S 30	KS区(西)	包含層	弥・中	打製石包丁		サヌカイト	110.0	47.0	13.0	68.39	ほぼ完存	
S 31	KS区と KN区の間	包含層	弥・中	石包丁		サヌカイト	99.0	45.5	12.2	61.27	一部欠損	
S 32	KS区(西)	包含層	弥・中	磨製石包丁		サヌカイト	130.0	55.0	8.5	74.84	完存	珪酸付着
S 33	O区	包含層	弥・中	石包丁?		サヌカイト	113.5	50.5	11.5	72.72	ほぼ完存	
S 34	KS区(西)	包含層	弥・中	打製石包丁		サヌカイト	44.0	46.5	8.5	14.89		珪酸付着
S 35	O区	包含層	弥・中	石包丁片(後使用か?)		サヌカイト	48.5	43.0	11.9	16.95	破片	
S 36	O区	包含層	弥・中	石包丁?		サヌカイト	67.5	49.5	15.2	57.31		
S 37	N区	包含層	弥・中	石包丁		サヌカイト	119.0	46.5	12.5	66.92	完存	珪酸付着
S 38	KS区(西)	包含層	弥・中	石包丁		サヌカイト	106.5	46.5	17.4	90.40	完存	珪酸付着
S 39	O区	包含層	弥・中	石包丁		サヌカイト	74.5	52.0	13.2	56.54	1/2?	
S 40	N区	包含層	弥・中	石包丁片?		サヌカイト	40.0	33.0	8.5	11.83		珪酸付着
S 41	O区	包含層	弥・中	打製石包丁片		サヌカイト	44.0	32.5	8.0	9.56		珪酸付着
S 42	O区	包含層	弥・中	石鏃	凹基式	サヌカイト	16.5	12.9	3.2	0.61	ほぼ完存	
S 43	O区	包含層	弥・中	石鏃	平基式	サヌカイト	31.0	17.0	3.6	1.60	完存	
S 44	KN区	包含層	弥・中	石鏃	凹基式	サヌカイト	20.0	16.5	3.5	0.67	欠損	
S 45	O区	包含層	弥・中	石鏃	平基式	サヌカイト	28.5	14.0	3.6	1.49	ほぼ完存	
S 46	O区	包含層	弥・中	石鏃	不明	サヌカイト	20.0	12.5	3.1	0.72	一部欠損	
S 47	O区	包含層	弥・中	石鏃	平基式	サヌカイト	25.0	18.5	3.6	1.44	欠損	
S 48	B区	包含層	弥・中	石鏃	凸基Ⅱ式	サヌカイト	19.0	12.3	4.0	1.32	一部欠損	
S 49	KS区	包含層	弥・中	石鏃	平基式	サヌカイト	49.0	27.0	6.2	8.12	一部欠損	
S 50	O区	包含層	弥・中	石鏃		サヌカイト	42.0	17.0	7.0	3.14		
S 51	O区	包含層	弥・中	打製石剣		サヌカイト	133.0	32.0	10.2	53.75	ほぼ完存	
S 52	O区	包含層	弥・中	打製石剣		サヌカイト	127.0	34.0	10.0	52.97	欠損	
S 53	O区	包含層	弥・中	柱状片刃石斧		チャートの一種	128.5	30.5	40.5	295.93	完存	
S 54	C区	包含層	弥・中	大型片刃石斧			67.8	43.0	30.7	135.41		
S 55	O区	包含層	弥・中	砥石		細粒砂岩	103.0	125.0	106.0	1351.79		
S 56	O区	包含層	弥・中	砥石		細粒花崗岩	165.5	101.0	40.5	797.67	欠損	
S 57	N区	包含層	弥・中	砥石		細粒砂岩	107.0	127.0	39.0	539.67		
S 58	O区	包含層	弥・中	砥石		細粒砂岩	99.5	70.0	30.5	348.67	欠損	
S 59	O区	包含層	弥・中	凹石		花崗閃緑岩	89.0	87.0	37.0	430.04	完存	
S 60	O区	包含層	弥・中	石鏃		角閃石斑輝岩	70.5	52.0	36.0	228.27	完存	
S 61	N区	包含層	弥・中	石核? タタキ石?		サヌカイト	142.0	80.0	53.5	725.28		
S 62	O区	包含層	弥・中	タタキ石		珒岩(灰黒色ガラス質)	152.2	40.5	37.0	372.92	完存	
S 63	KS区(西)	包含層	弥・中	石核? or木製品?		サヌカイト	128.0	68.0	23.5	264.84	2/3	
S 64	O区	包含層	弥・中	石鏃?		サヌカイト	74.5	35.5	11.4	33.14		
S 65	B区	包含層	弥・中	スクレイパー		サヌカイト	31.0	35.5	9.0	8.54		
S 66	O区	包含層	弥・中	スクレイパー(鋸刃状)		サヌカイト	53.0	29.5	5.1	8.90	完存	
S 67	O区	包含層	弥・中	スクレイパー?		サヌカイト	76.5	45.5	11.9	61.24		
S 68	O区	包含層	弥・中	スクレイパー		サヌカイト	43.0	39.0	14.0	24.42		
S 69	O区	包含層	弥・中	石包丁 転用スクレイパー?		サヌカイト	32.5	39.0	7.0	13.49		珪酸付着
S 70	O区	包含層	弥・中	スクレイパー		サヌカイト	44.5	31.9	10.2	14.39		
S 71	O区	包含層	弥・中	スクレイパー		サヌカイト	60.5	32.5	9.0	22.02		
S 72	O区	包含層	弥・中	スクレイパー		サヌカイト	58.5	53.0	13.5	38.79	欠損	
S 73	O区	包含層	弥・中	スクレイパー?		サヌカイト	83.0	41.5	15.0	49.97		
S 74	O区	包含層	弥・中	スクレイパー		サヌカイト	68.5	46.0	7.0	24.15		
S 75	O区	包含層	弥・中	楔		サヌカイト	73.0	40.0	10.5	29.78		
S 76	I区	包含層	弥・中	楔		サヌカイト	72.5	60.0	18.5	70.67	完存	
S 77	O区	包含層	弥・中	楔		サヌカイト	27.5	21.0	7.0	4.97		
S 78	O区	包含層	弥・中	楔		サヌカイト	50.0	35.0	11.6	22.46		
S 79	O区	包含層	弥・中	石包丁 転用楔		サヌカイト	45.0	40.0	8.5	13.77	完存?	珪酸付着
S 80	N区	包含層	弥・中	楔		サヌカイト	53.5	60.5	12.2	45.51		
S 81	O区	包含層	弥・中	楔?		サヌカイト	45.5	42.0	12.4	26.17		
S 82	O区	包含層	弥・中	楔		サヌカイト	47.5	41.0	12.5	17.21		
S 83	KS区(西)	包含層	弥・中	楔?		サヌカイト	46.5	45.5	7.4	15.25		
S 84	O区	包含層	弥・中	楔		サヌカイト	45.5	40.0	8.5	19.82		
S 85	O区	包含層	弥・中	楔?		サヌカイト	46.0	31.5	5.5	9.61		
S 86	KS区(西)	包含層	弥・中	楔		サヌカイト	45.5	58.0	11.8	30.70	完存	
S 87	O区	包含層	弥・中	楔		サヌカイト	27.0	29.5	8.4	7.52		
S 88	O区	包含層	弥・中	楔		サヌカイト	40.0	33.5	73.0	10.17	欠損	
S 89	O区	竪穴住居 9	古・後	砥石		細粒砂岩	108.5	109.5	64.5	1271.50		
S 90	KS区(西)	井戸 3	古・前	浮子?		軽石	87.0	81.0	46.5	53.38		

金属器観察表

掲載番号	器種	材質	出土地区	遺構名	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	時期	備考
M 1	方形板刃先	鉄	O区	井戸1	(96)	38	3	古・前	
M 2	鋤先	鉄	O区	井戸1	43	-	2	古・前	
M 3	鉄斧	鉄	A区	木田2	(72)	42	3.5	古・後	
M 4	耳環	銅芯	K S区 (西)	柱穴1	26	26	6	古・後	

土製品観察表

掲載番号	出土地区	遺構名	時期	器種	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	残存率	備考
C1	O区	低位部層	弥・前	紡錘車	47	-	17	43.27	完存	
C2	O区	低位部層	弥・前	紡錘車未製品	47	-	8	16.25		
C3	O区	低位部層	弥・前	紡錘車	40	-	13.5	22.78	ほぼ完存	
C4	O区	低位部層	弥・前	紡錘車	44.5	-	10.5	24.55	完存	
C5	O区	低位部層	弥・前	紡錘車	37	-	13	19.97	完存	
C6	K N区 (西)	竪穴住居 5	弥・中	分銅形土製品	(58)	(58.5)	8	25.54		
C7	O区	土蔵?	弥・中	分銅形土製品	(41)	103	10	84.2		
C8	O区	包含層	弥・中	円盤	52	-	8.5	26.11	完存	
C9	O区	包含層	弥・中	紡錘車	37	-	5	5.50		
C10	O区	包含層	弥・中	紡錘車	52	-	8	22.55	完存	
C11	O区	竪穴住居 9	古・後	円盤	44	42	9	13.86		
C12	O区	竪穴住居 9	古・後	円盤	45	-	12	27.62	完存	
C13	O区	包含層	古代	土鐘	33	10.5	10	3.41		

木製品観察表

掲載番号	出土地区	遺構名	器種	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	木取り	備考
W 1	O区	井戸1	木鎌	134	80.5	75	心持削出し	
W 2	O区	井戸1	建築部材	748	135	52	板目材	
W 3	N区	井戸2	横礎	232	64.5	55.5	心持削出し	

補遺編 土器観察表

掲載番号	調査区	遺構名	種類	器種	口径 (cm)	器高 (cm)	最大径 (cm)	底径 (cm)	調整・特徴	胎土	色調(外面)	焼成	残存状況	備考
1	武道館当初予定地 A区	包含層	弥生土器	壺	10.6	-	23.8	-	口縁部 体部内面：ナデ	微砂 英・長・雲	浅黄橙色			
2	武道館当初予定地 A区	包含層	弥生土器	甕	12.4	-	-	-	口縁部：凹線文 口縁部：ヨコナデ 胴部：ナデ	微砂～細砂 長・雲	にぶい黄褐色			
3	武道館当初予定地 A区	包含層	弥生土器	甕	16	-	-	-	口縁部：棒状浮文と刺突文 口縁部：ヨコナデ	長・雲・赤	浅黄橙色			
4	武道館当初予定地 A区	包含層	弥生土器	甕	17	-	23.3	-	体部内面上半：ユビオサエ後ナデ	微砂 英・火山ガラスか？	浅黄橙色			
5	武道館当初予定地 A区	包含層	弥生土器	甕	16.6	-	21.8	-	体部外面上半：ハケメ 下半：ヘラミガキ	微砂 長・雲	浅黄褐色			
6	武道館当初予定地 A区	包含層	弥生土器	甕	15	-	-	-	口縁部：凹線文 口縁部：ヨコナデ 胴部：ナデアケ	微砂 英・長	浅黄褐色			
7	武道館当初予定地 A区	包含層	弥生土器	甕	10.4	-	27.4	-	体部内面：接合部にユビオサエ	微砂 英・長・雲	浅黄橙色			
8	武道館当初予定地 A区	包含層	弥生土器	甕	-	-	15.1	4.8	体部外面：ハケメ後ヘラミガキ	微砂 長・雲	浅黄褐色			
9	武道館当初予定地 A区	包含層	弥生土器	鉢	-	-	-	13	体部外面：ナデ	微砂～細砂 長・雲	淡褐色			
10	武道館当初予定地 A区	包含層	弥生土器	鉢	-	-	-	3.8	体部内面：ナデ	微砂～細砂 英・長・赤	浅黄褐色			
11	武道館当初予定地 A区	包含層	弥生土器	鉢	8.6	9.5	9.8	8.5	底部外面：ヘラミガキ 口縁部：ヨコナデ	微砂 長・雲・角	褐色			

補遺編 金属器観察表

掲載番号	器種	材質	出土地区	遺構名	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	時期	備考
M 1	ヤリガンナ	鉄	南池地点	竪穴住居 6	(90)	9.5	4	弥・後	
M 2	ヤリガンナ又は刀子	鉄	南池地点	竪穴住居 6	(23)	6	2.5	弥・後	

遺構名称新旧対照表

新遺構名	地区	旧遺構名	時期	新遺構名	地区	旧遺構名	時期
竪穴住居1	O区	No23住居	弥生中期	溝1	M区 (T63)・L区 (西)	なし	弥生前期
竪穴住居2	O区	No23住居	弥生中期	溝2	K S区 (東)	前期溝?	弥生前期
竪穴住居3	O区	No23住居	弥生中期	溝3	J区	No6溝	弥生前期
竪穴住居4	O区	No23住居	弥生中期	溝4	E区	西端畦と溝	弥生前期
竪穴住居5	KN区 (西)	No3住居	弥生中期	溝5	I区 D区	No12溝 No1溝	弥生前期
竪穴住居6	I区	No4住居	弥生中期	溝6	I区	No6溝	弥生前期
竪穴住居7	B区	No25住居	弥生中期	溝7	B区	No12溝	弥生前期
竪穴住居8	B区	No10住居	弥生中期	溝8	N区南拡張部	No1溝	弥生中期
竪穴住居9	O区	No2住居	古墳後期	溝9	M区	なし	弥生中期
孤立柱建物1	O区	No9建物	古代	溝10	M区	なし	弥生中期
井戸1	O区	No1井戸	古墳前期	溝11	K S区 (西)	No14溝	弥生中期
井戸2	N区	No4井戸	古墳前期	溝12	K S区 (西)	No16溝	弥生中期
井戸3	K S区 (西)	No6井戸	古墳前期	溝13	KN区 (東)	なし	弥生中期
土壇墓1	I区	No3土壇	弥生中期	溝14	K S区 (東)	なし	弥生中期
土壇墓2	I区	No5土壇墓	弥生中期	溝15	K S区 (東)	No3溝	弥生中期
土壇墓3	C区	No6墓	弥生中期	溝16	J区南拡張部	なし	弥生中期
土壇墓4	B区	No6土壇	弥生中期	溝17	I区	なし	弥生中期
土壇墓5	B区	No5墓	弥生中期	溝18	I区	なし	弥生中期
土壇墓6	B区	No4墓	弥生中期	溝19	G区	なし	弥生中期
土壇墓7	B区	No18墓	弥生中期	溝20	E区	No3溝	弥生中期
土壇墓8	B区	No17土壇墓	弥生中期	溝20	F区	なし	弥生中期
土壇墓9	B区	No19土壇墓	弥生中期	溝21	E区	No2溝	弥生中期
土器棺葬1	M区	土器棺	弥生後期	溝21	F区	なし	弥生中期
土壇1	O区	No14土壇	弥生中期	溝22	E区	No1溝	弥生中期
土壇2	O区	No11土壇	弥生中期	溝23	B区	なし	弥生中期
土壇3	O区	No15土壇	弥生中期	溝24	B区	No11溝	弥生中期
土壇4	O区	No18土壇	弥生中期	溝25	L区	なし	古墳
土壇5	O区	No22土壇	弥生中期	溝25	N区	No1溝	古墳
土壇6	O区	No25土壇	弥生中期	溝25	O区	No17溝	古墳
土壇7	O区	No12土壇	弥生中期	溝26	M区	古墳溝	古墳
土壇8	O区	No16土壇	弥生中期	溝27	L区 (西)	古墳溝	古墳
土壇9	N区	No3土壇	弥生中期	溝28	I区 (西)	古墳溝	古墳
土壇10	N区	なし	弥生中期	溝29	K S区 (西)	No4・10溝	古墳
土壇11	N区	No5土壇	弥生中期	溝30	K S区 (西)	No8溝	古墳
土壇12	M区	弥生土壇	弥生中期	溝31	K S区 (西)	No7溝	古墳
土壇13	K S区 (西)	No17土壇	弥生中期	溝32	I区	No9溝	古墳
土壇14	K S区 (西)	No18土壇	弥生中期	溝33	I区	No10溝	古墳
土壇15	K S区 (西)	No15土壇	弥生中期	溝34	J区	なし	古墳
土壇16	K S区 (西)	No11土壇	弥生中期	溝35	KN区 (東)	なし	古代又は中世
土壇17	K S区 (西)	No13土壇	弥生中期	溝36	G・I・J・KN (東) ・K S (東)・P区	中世溝	古代～中世
土壇18	K S区 (西)	No12土壇	弥生中期	溝37	G・I・J・KN (東) ・K S (東)・P区	中世溝	古代～中世
土壇19	K S区 (西)	No2土壇	弥生中期	溝38	B・C・I区	なし	古代又は中世
土壇20	K S区 (西)	No1土壇	弥生中期	溝39	M・L・KN (東) ・K S (東)区	なし	近世
土壇21	K S区 (西)	No3土壇	弥生中期	溝40	KN (東)・K S (東)区	なし	近代・現代
土壇22	K S区 (西)	No4土壇	弥生中期	土器溜まり1	L区 (西)	土器溜まり	弥生後期
土壇23	K S区 (東)	No8土壇	弥生中期	土器溜まり2	B区	土器溜まり	古墳後期
土壇24	I区	No8土壇	弥生中期	河道1	K S区・KN区・L～O区	なし	弥生前期
土壇25	C区	No7土壇	弥生中期	河道2	K S区・KN区・L～O区	なし	弥生中期
土壇26	C区	No2土壇	弥生中期	焼土面1	O区	No4焼土面	弥生中期
土壇27	C区	No8土壇墓	弥生中期	焼土面2	O区	No5焼土面	弥生中期
土壇28	C区	No7・13・14 井戸状遺構	弥生中期	焼土面3	O区	No8焼土面	弥生中期
土壇29	B区	No20土壇	弥生中期	焼土面4	O区	No7焼土面	弥生中期
土壇30	B区	No2土壇	弥生中期	焼土面5	O区	No6焼土面	弥生中期
土壇31	B区	No20土壇	弥生後期	水山1	A～M区・P区	前期水山	弥生前期
土壇32	O区	No21土壇	弥生後期	水山2	A～M区・P区	古墳水山	古墳後期
土壇33	O区	No19土壇	弥生後期	低位部層	O・N区・KN区 (西) ・K S区 (西)	低位部	弥生前期
土壇34	O区	No3土壇	古墳	水田天地返し跡	B区～D区・I区	天地返し跡	近代
土壇35	O区	No13土壇	古墳	備行社基礎	B区・D区・I区・J区	基礎	近代
土壇36	O区	No6土壇	古墳	廃棄物層	O・N区・KN区 (西) ・K S区 (西)	ゴミ層	近代
土壇37	N区	No6土壇	古墳				



1 A区 完掘状況 (南東から)



2 B区
弥生時代中期の遺構
(西から)



3 B区 土壙墓5・6 (北西から)

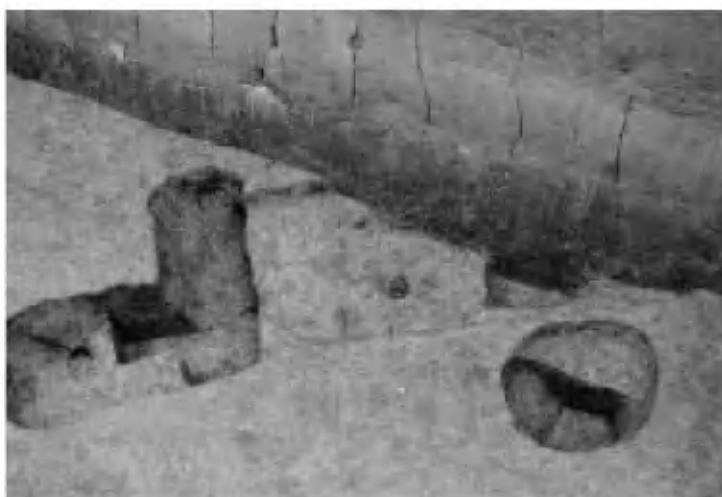


4 B区 土壙墓5 木棺痕跡 (北東から)

図版 2



1 C区 土壇25 (北西から)



2 C区 土壇墓3 (南東から)



3 C区 北壁土層断面 (南西から)



4 C区
弥生時代中期の遺構
(西から)



1 D区 北壁土層断面 (南西から)



3 E区 水田1畦畔 (西から)



2 D区 溝5 (西から)



4 F区 完掘状況 (西から)

図版 4



1 G区
水田1畦畔痕跡
(西から)



2 G区
北壁土層断面
(南から)



3 H区 完掘状況
(西から)



1 I区 溝36・37 (南東から)



4 I区 水田1 (南から)



2 I区 竪穴住居6 (南西から)



3 I区 土墳墓1 (南東から)

図版 6



2 I区 西壁土層断面 (南東から)



1 I区 溝38 (南から)



3 J区 溝3 (北から)



4 J区 溝36・37 (南から)

1 K S区 (西)
完掘状況
(西から)



2 K S区 (西)
井戸 3
(南から)



3 K S区 (西)
古墳時代の遺構
(南西から)



図版 8



1 K S区 (西)
北壁土層断面
(南西から)



2 K S区 (東)
土壙23
(東から)



3 K S区 (東)
溝36・37土層
断面
(南東から)

1 K S区 (東)
北壁土層断面
(南西から)



2 KN区 (東)
完掘状況 (西から)



3 KN区 (西)
弥生時代前期
および中期の遺構
(北西から)



図版10



1 KN区(西)
竪穴住居5
(北西から)



2 KN区(西)
竪穴住居5
遺物出土状況
(南から)



3 KN区(西)
北壁土層断面
(南西から)



4 L区(東) 水田1
(東から)



1 L区(西) 溝1(北から)



2 L区(西) 土器溜まり1(西から)



3 L区(西) 溝25(北から)

図版12



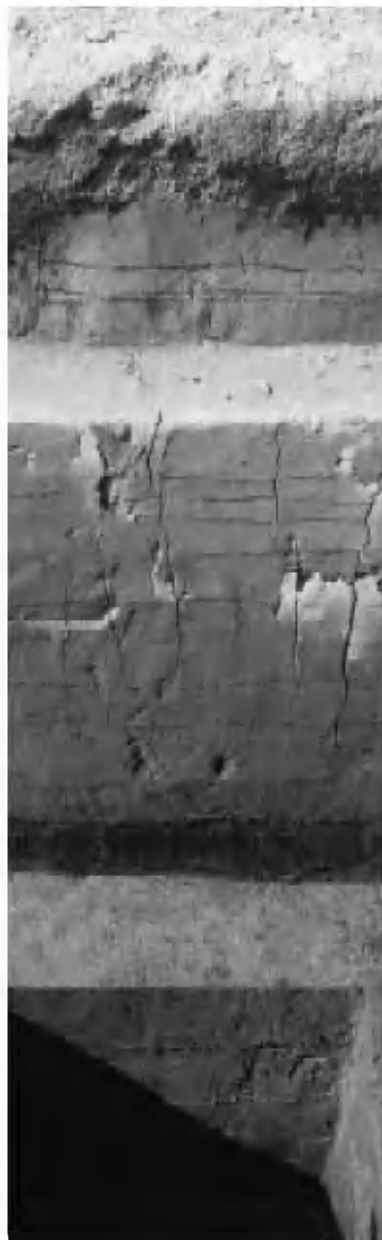
2 M区 水田1 (北西から)



3 M区 土器棺墓1 (西から)



4 M区 土壙12土器出土状況 (北西から)



1 L区 北壁土層断面
(南から)

1 M区
北壁土層断面
(南西から)



2 N区 井戸2
(東から)



3 N区南拡張部
(南から)



図版14



1 N区
西壁土層断面
(南東から)



2 O区 弥生時代中期の遺構 (南西から)

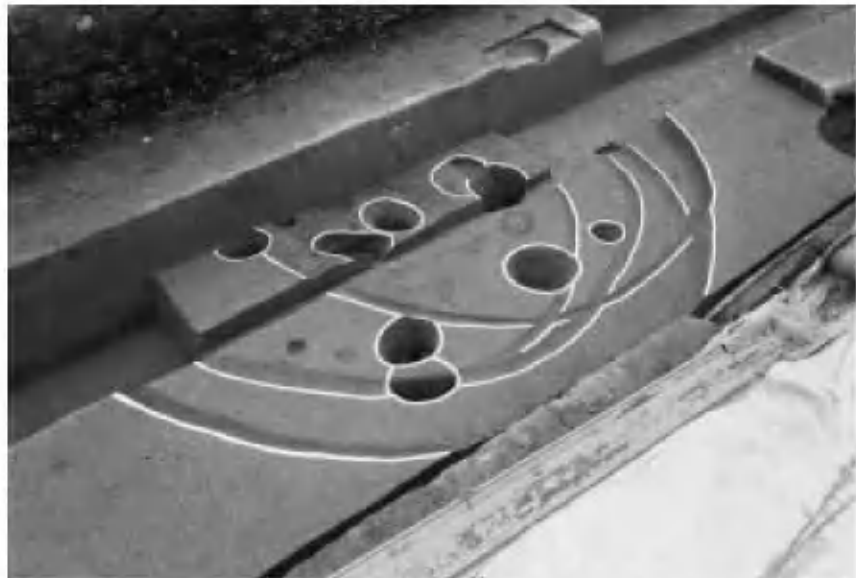


3 N区 完掘状況 (北から)

1 O区
掘立柱建物1
(南東から)



2 O区
竪穴住居1~4
(南東から)



3 O区 土壇7
(南西から)



図版16



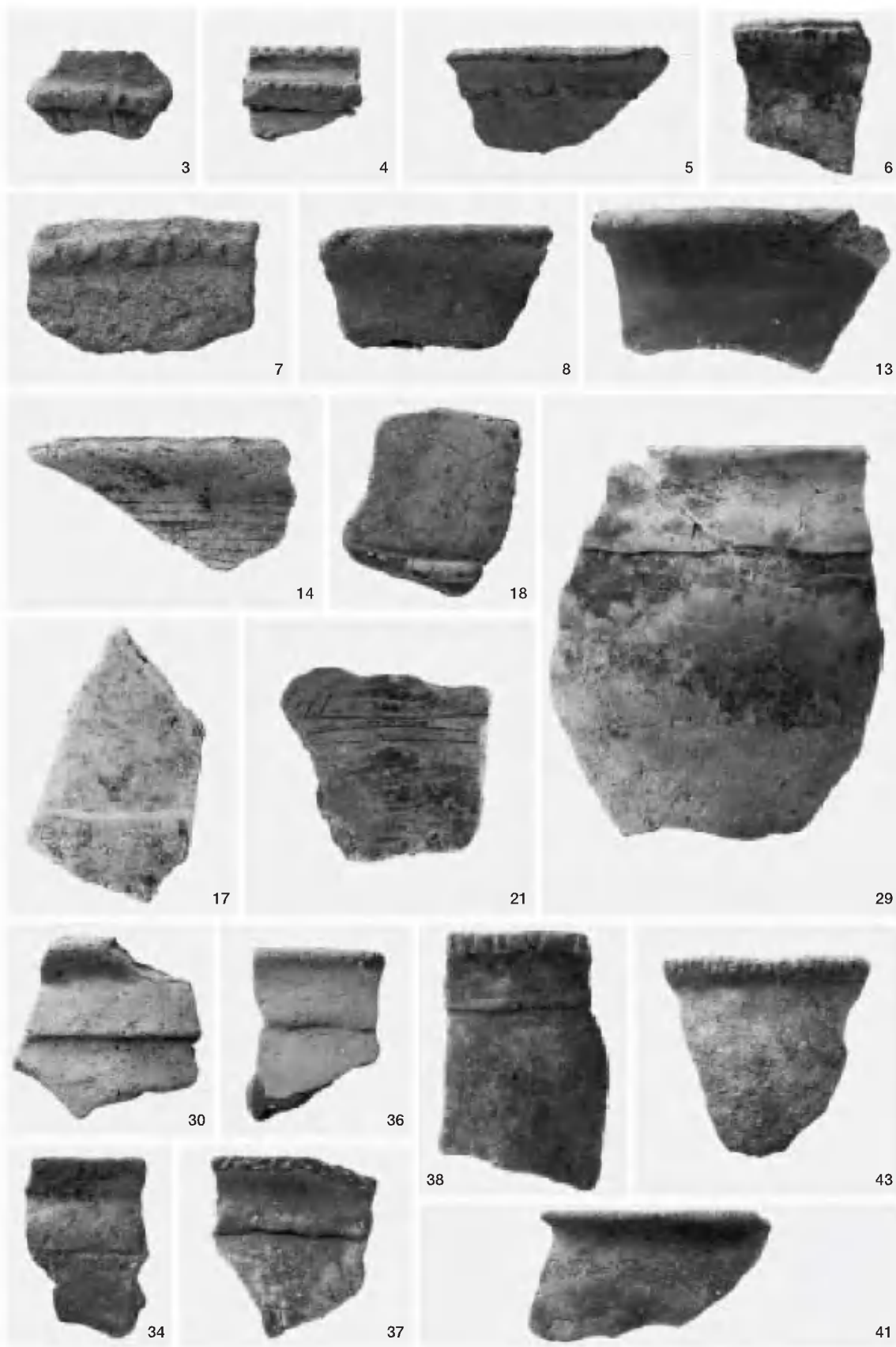
1 O区 溝25
(北から)



2 P区
弥生時代中期の
遺構
(西から)



3 P区
西壁土層断面
(南東から)



低位部層出土遺物

図版18



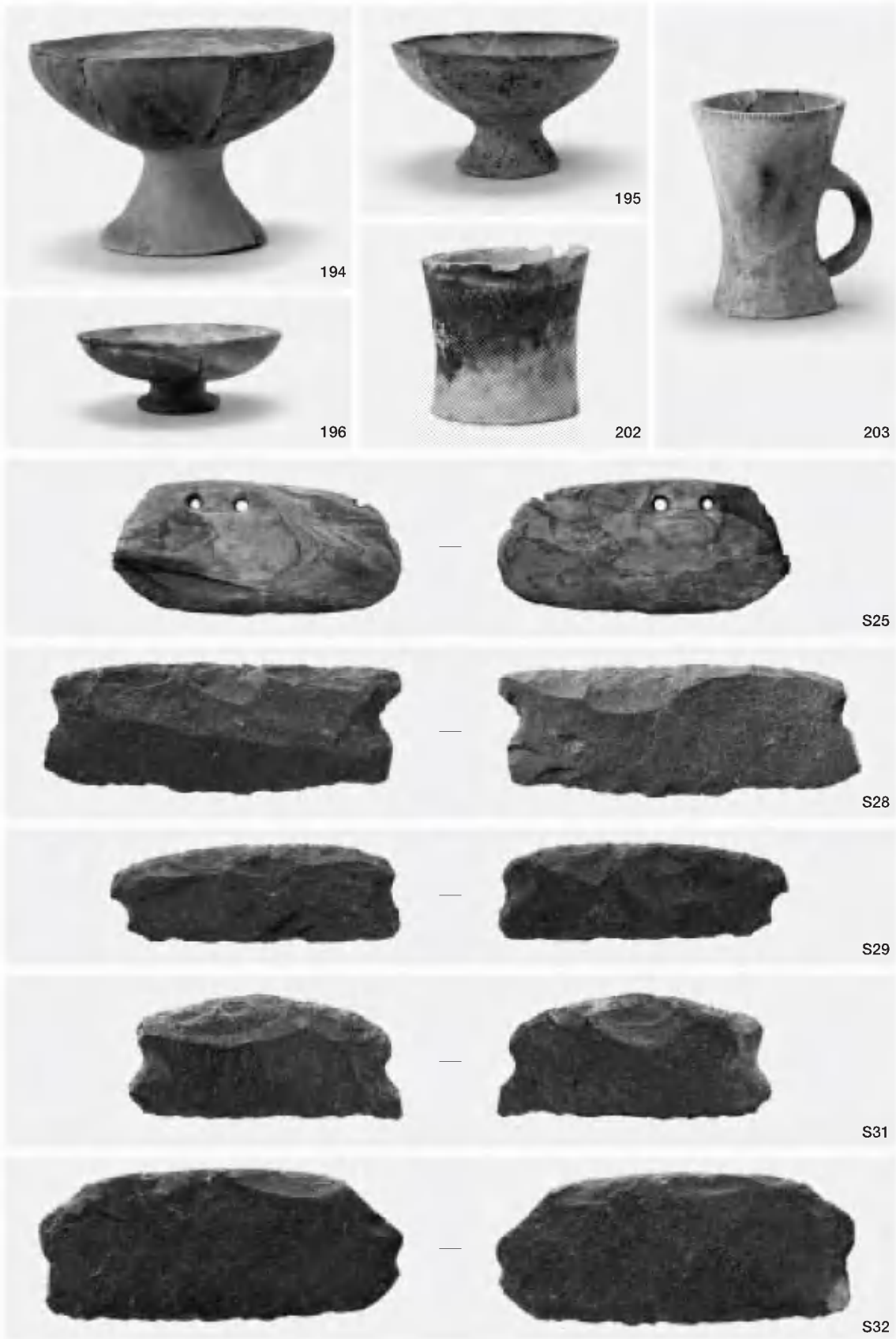
図版18 低位部層出土遺物・遺構に伴わない遺物
 竪穴住居1～4・5・8・土壙7・14出土遺物



土壙12·15·25·溝11出土遺物

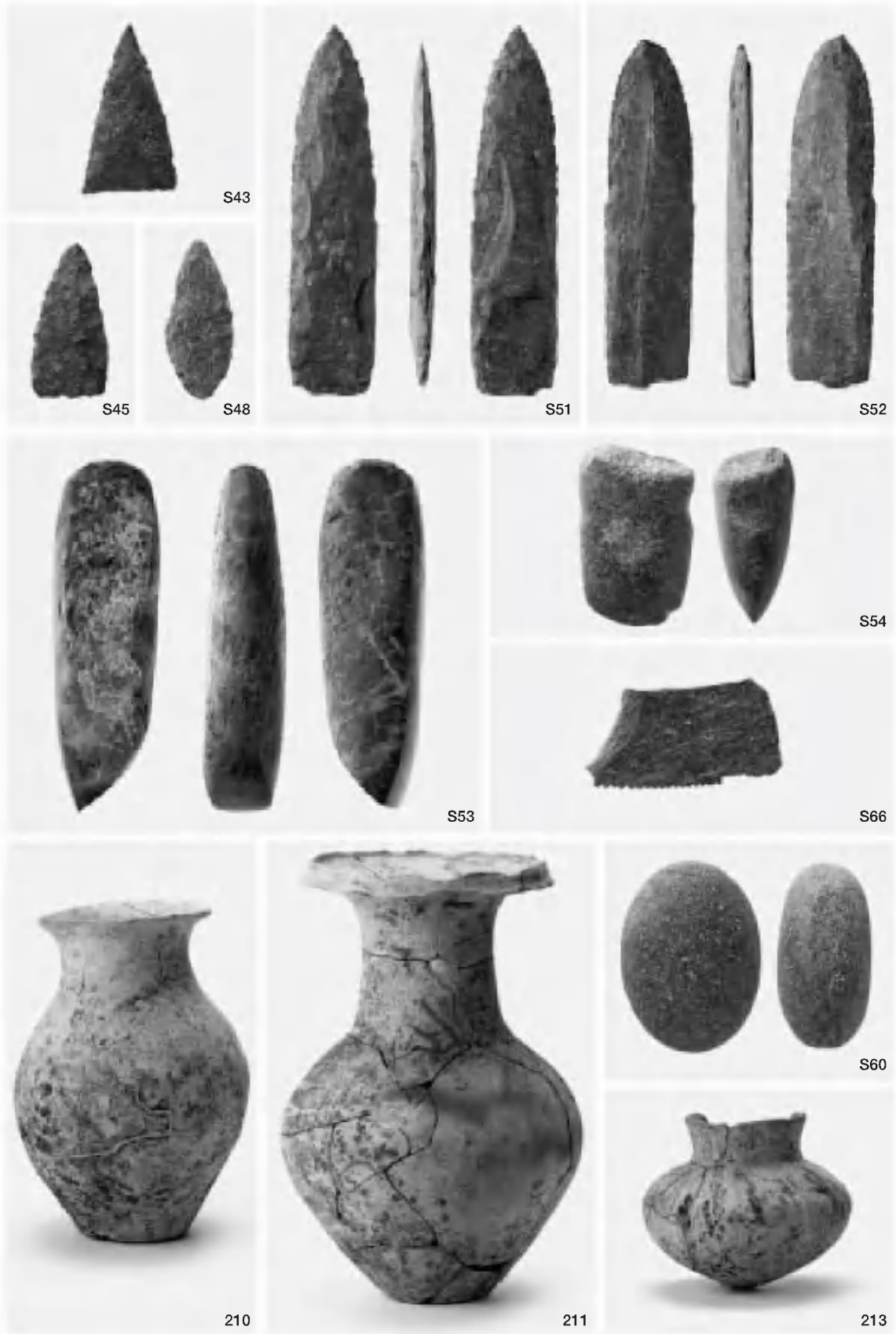


河道2 出土遺物・遺構に伴わない遺物



遺構に伴わない遺物

図版22



遺構に伴わない遺物・土器溜まり1出土遺物



土器溜まり1 出土遺物

図版24



井戸1・2出土遺物



井戸 2・3 出土遺物



井戸3・柱穴1出土遺物

報告書抄録

ふりがな	つしまいせき							
書名	津島遺跡6							
副書名	岡山県総合グラウンド新体育館建設工事に伴う発掘調査							
巻次								
シリーズ名	岡山県埋蔵文化財発掘調査報告							
シリーズ番号	190							
編著者名	島崎東・光永真・亀山行雄・澤山孝之・尾崎光徳・物部茂樹・岡本泰典・團奈歩 白石純・木戸一博							
編集機関	岡山県古代吉備文化財センター							
所在地	〒701-0136 岡山県岡山市西花尻1325-3 TEL086-293-3211							
発行機関	岡山県教育委員会							
所在地	〒700-8570 岡山県岡山市内山下2-4-6 TEL086-224-2111							
発行年月日	2005年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
つしまいせき 津島遺跡	おかやまけんおかやまし 岡山県岡山市 いずみ町	33201	遺跡番号	34° 40′ 55″	133° 55′ 22″	2003.2.3 ～2003.8.11	2,635㎡	岡山県総合 グラウンド 新体育館建 設工事に伴 う発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
津島遺跡	集落・水田	弥生時代	竪穴住居 土壇 溝 水田 河道	弥生土器 石器 土製品	低位部層から前期前半 の上器が出土 中期中葉の土器が多数 出土			
		古墳時代	竪穴住居 井戸 土壇 溝	土師器 須恵器				
		古代～近代	掘立柱建物 土壇 溝	土師器 須恵器 陶磁器	旧陸軍「偕行社」の基 礎を検出			

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告190

津島遺跡 6

岡山県総合グラウンド新体育館建設工事に伴う発掘調査

平成17年2月28日 印刷

平成17年2月28日 発行

編 集 岡山県古代吉備文化財センター

岡山市西花尻1325-3

発 行 岡山県教育委員会

岡山市内山下2-4-6

印 刷 サンコー印刷株式会社

総社市真壁871-2



古紙製5年100%再生紙を使用(JIS-F4)